

国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第 33 号(通巻 66 号)

令和元年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

——2020——

国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第 33 号(通巻 66 号)

令和元年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

——2020——

巻頭言

令和元年度の精神保健研究の業績年報をお届け致します。どうかお目通しの上、皆様からの忌憚のないご指導をお願い申し上げます。

精神保健研究所の使命は時代のニーズに合わせて柔軟に変遷を遂げていますが、大きく分けると、実際に暮らす人々に寄り添って暮らしを支える研究と、精神疾患の本態を解明する脳神経科学の研究とに分けられます。このふたつのタイプの研究がバランス良く組み合わせられることによって、効果的な精神保健医療が可能になると考えられています。いずれの研究も、厳密な方法論に基づいて、その成果を学術論文の形で提出するとともに、その成果を社会に普及、実装するための啓発活動が求められております。精神保健研究所の学術業績は近年、順調に発展しており、今年度は172編の原著論文（昨年度は137編）、75編の総説を出版致しました。また若手を中心に6件の学会賞を受賞しております。普及と実装につきましては活発な研修活動を行っており、令和元年度は15本の研修を主催し、676名の精神保健医療関係者が受講されました。それ以外にも研究者が全国各地に赴いて活発な講演、研修を行っております。

精神保健研究所の活動は、ほぼ精神医療の全ての分野を網羅し、多岐にわたっておりますが、あえてその一部に言及致します。

知的・発達障害研究部では発達障害診療初診待機に関する実態調査を実施し、2017年より初診待機期間が全国的にやや短縮しており、初診対象者の選択、診療時間・診療継続期間の適正化、コメディカルスタッフの関与などの工夫がなされていることを明らかにしました。地域・司法精神医療研究部では、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」構築にあたり重要とされる多機関連携を促進するため、インテンシブ・ケースマネジメントの効果検証を行い、診療報酬化に貢献しました。行動医学研究部では、トラウマの治療ならびに基礎研究と合わせて、摂食障害基幹センターとして全国の摂食障害治療の医療水準の向上に取り組んでおります。睡眠・覚醒障害研究部は、厚生労働科学研究事業において、国内多数の主要研究施設との共同研究である、健康維持に資する「睡眠の質」評価指標および睡眠健康増進法開発プロジェクトを取りまとめ、これに関する国民への情報発信を行っております。

これ以外にも多くの意欲的な研究、活動が行われております。社会の役に立つ十分な成果を挙げるためにも、どうか皆様のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

2020年3月

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所 所長 金 吉晴

目 次

I. 精神保健研究所の概要	1
1. 創立の趣旨及び沿革	1
2. 内部組織改正の経緯	9
3. 国立精神・神経医療研究センター組織図	11
4. 職員配置	12
5. 精神保健研究所構成員	13
II. 研究活動状況	16
1. 今年度の活動概要	16
2. 精神医療政策研究部	17
3. 薬物依存研究部	25
4. 行動医学研究部	58
5. 児童・予防医学研究部	77
6. 精神薬理研究部	92
7. 精神疾患病態研究部	104
8. 睡眠・覚醒障害研究部	123
9. 知的・発達障害研究部	134
10. 地域・司法精神医療研究部	144
11. 自殺総合対策推進センター	165
12. ストレス・災害時こころの情報支援センター	174
III. 研修実績	179
IV. 令和元年度委託および受託研究課題	202

I. 精神保健研究所の概要

1. 創立の趣旨及び沿革

I. 創立の趣旨

本研究所は、精神衛生に関する諸問題について、精神医学、心理学、社会学、社会福祉学、保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的、包括的な研究を行うとともに、国、地方公共団体、病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識、技術に関する研修を行い、その資質の向上を図ることを目的として、昭和27年1月、アメリカのNIMHをモデルに厚生省の付属機関として設立された。

II. 精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際、国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された。これを踏まえ、厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され、昭和27年1月、千葉県市川市に国立精神衛生研究所が設置された。

研究所の規模について、当初、厚生省は、1課8部60名程度の組織を構想していたが、財政事情等により、総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した。また、附属病院をもつことの重要性は、当時から認識されていたが、病院の新設は困難な情勢であったため、隣接する国立国府台病院と連携、協力することとされた。

その後、知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け、昭和35年10月1日、新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた。この結果、研究所の組織は、総務課、精神衛生部、児童精神衛生部、社会精神衛生部、精神身体病理部、精神薄弱部及び優生部の1課6部となった。

昭和36年には、国立精神衛生研究所組織細則が制定され、部課長のもとに心理研究室、生理研究室、精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた。それとともに、昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり、研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることとなった。

昭和40年には、地域精神医療、社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い、社会復帰部が新設されるとともに、新たに精神発達研究室及び主任研究官(3名)が置かれた。また、昭和46年6月には、社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された。さらに、昭和48年には、人口の高齢化に伴って、痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に、老人精神衛生部が、翌昭和49年には、同部に老化度研究室が新設された。

昭和50年には、精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから、社会復帰部を社会復帰相談部に改組、精神衛生相談室を同部に移管した。また、昭和53年12月には、社会復帰相談庁舎が完成し、精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された。昭和54年には、研修各科の名称が医学課程、心理学課程、社会福祉学課程及び精神衛生

指導課程に改称されるとともに、新たに精神科デイ・ケア課程が新設された。翌昭和55年には、研修庁舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた。

Ⅲ. 国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は、このような着実な歩みをたどった後、昭和61年10月、国立武蔵療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された。ここに、国立精神・神経センター精神保健研究所は、国立高度専門医療センターの一研究部門として、精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった。その際組織改正により、総務課が庶務課とされ、精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか、精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された。その結果、統合前の1課8部8室は、1課9部19室となり、研究・研修機能の強化が図られた。

半年後の昭和62年4月には、国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され、二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した。これに伴い、庶務課は廃止され、精神・神経センター運営部（国府台地区）に研究所の事務部門（主幹、研究所事務係）が置かれた。また、同年10月には、心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ、平成元年10月には、社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された。

さらに、平成11年4月には、精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに、薬物依存研究部が組織改正により、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成となった。

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎え、創立50周年パーティの開催、記念誌の発行、公開市民シンポジウムを行った。

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され、3室体制で、研究員の増員も認められ、研究所の組織は、11部27室体制（精神保健研修室を含む）となった。

平成17年4月には精神保健研究所は小平（武蔵）地区に移転し研究活動を開始した。

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により、自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と、成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた。

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され、また10月に精神生理部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり、研究所の組織は11部33室（精神保健研修室含）となった。

Ⅳ. 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し、調査、研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行う独立行政法人の名称、目的、業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした、「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により、それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された。

我が国立精神・神経センターは「精神疾患、神経疾患、筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり、精神保健研究所も内部の組織が改正された。

自殺予防総合対策センターは、自殺実態分析室、適応障害研究室、自殺予防対策支援研究室の3室編成。

精神保健計画部は、精神保健計画研究部へ名称変更され、統計解析研究室、システム開発研究室の2室編成。

薬物依存研究部は、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成。

心身医学研究部は、ストレス研究室、心身症研究室の2室編成。

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され、精神発達研究室、児童期精神保健研究室、思春期精神保健研究室の3室編成。

成人精神保健部は、成人精神保健研究部へ名称変更され、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、犯罪被害者等支援研究室、災害等支援研究室の5室編成。

老人精神保健部は、精神薬理研究部へ名称変更され、精神薬理研究室、気分障害研究室の2室編成。

社会精神保健部は、社会精神保健研究部へ名称変更され、社会福祉研究室、社会文化研究室、家族・地域研究室の3室編成。

精神生理部は、精神生理研究部へ名称変更され、精神生理機能研究室、臨床病態生理研究室の2室編成。

知的障害部は、知的障害研究部へ名称変更され、診断研究室、治療研究室、発達障害支援研究室の3室編成。

社会復帰相談部は、社会復帰研究部へ名称変更され、精神保健相談研究室、援助技術研究室の2室編成。

司法精神医学研究部は、制度運用研究室、専門医療・社会復帰研究室、精神鑑定研究室の3室編成。

以上、自殺予防総合対策センター及び11部、計33室となった。

また、研究所の事務部門は、主幹が研究所事務室長となり、研究所事務係とともに、研究所の所属となった。

平成23年4月、事務部門の組織変更が行われ、研究所事務室は総務部の所属となった。

平成23年12月には災害時こころの情報支援センターの新設により、情報支援研究室の1室が認められた。

以上、自殺予防総合対策センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計34室となった。

平成24年1月、千葉縣市川市の地に国立精神衛生研究所が設置されてから、創立60周年を迎え、記念祝賀会を開催し、創立60周年記念誌を発行した。

平成27年4月1日、独立行政法人から国立研究開発法人へ改組。

V. 国立研究開発法人後の編成等

平成28年4月1日、自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設、自殺実態・統計分析室、自殺総合対策研究室、自殺未遂者・遺族支援等推進室、地域連携推進室の4室編成。

以上、自殺総合対策推進センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計35室となった。

平成29年10月1日、社会精神保健研究部（1部3室）を廃止し、その機能の一部を精神保健計画研究部へ移管（1室）、併せて精神疾患病態研究部（1部2室）を増設。

平成30年4月1日、精神保健研究所の組織改編を行った。

社会復帰研究部（1部2室）と司法精神医学研究室（1部3室）を地域・司法精神医療研究部として統合、臨床援助技術研究室、精神保健サービス評価研究室、司法精神保健研究室、制度運用研究部の3室編成。

心身医学研究部（1部2室）と成人精神保健研究部（1部5室）を行動医学研究部として統合、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、災害等支援研究室、ストレス研究室、心身症研究部の6室編成。

災害時こころの情報支援センター（1室）をストレス・災害時こころの情報支援センターへ改名、情報支援研究室、犯罪被害者等支援研究部の2室編成。

精神保健計画研究室（1部3室）を精神医療政策研究部へ改名、保健福祉連携研究室、政策評価研究室、精神医療体制研究室、NDB集計企画担当室の4室編成。

児童・思春期精神保健研究部（1部3室）を児童・予防精神医学研究部へ改名、児童・青年期保健研究室、精神疾患早期支援・予防研究部の2室編成。

精神薬理研究部（1部2室）2室を改名、分子精神薬理研究室、向精神薬研究開発室の2室編成。

知的障害研究部（1部3室）を知的・発達障害研究部へ改名、発達機能研究室、知的障害研究部の2室編成。

精神生理研究部（1部2室）を睡眠・覚醒障害研究部へ改名。

以上、自殺総合対策推進センター、ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部、計33室となった。

沿革

事項 年次	所 長	組 織 等 経 過
昭和25年5月		精神衛生法国会通過（精神衛生研究所設置の附帯決議採択）
26年3月		厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月	黒沢 良臣 （国立国府台 病院長兼任）	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として、千葉県市川市に国立精神衛生研究所設置総務課，心理学部，生理学形態学部，優生学部，児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始
35年10月		心理学部を精神衛生部に，社会学部を社会精神衛生部に，生理学形態学部を精神身体病理部に，優生学部を優生部に名称変更し，精神薄弱部を新設
36年4月		精神衛生研修室，心理研究室，精神衛生相談室及び生理研究室を新設
36年6月		厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され，医学科，心理学科，社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
36年10月	内村 祐之	
37年4月	尾村 偉久 （公衆衛生局長 が所長事務取 扱）	
38年7月	若松 栄一 （公衆衛生局長 が所長事務取 扱）	
39年4月	村松 常雄	主任研究官を置く
40年7月		社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成（5カ年計画）
44年4月		総務課長補佐を置く
46年4月	笠松 章	
46年6月		社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設

49年7月		老人精神衛生部に老化度研究室を新設
50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加藤 正明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成（2カ年計画）
54年4月		研修課程の名称を医学課程，心理学課程，社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に名称変更し，精神科デイ・ケア課程を新設
55年4月		研修庁舎完成（講義室・図書室・研修生宿舎）
58年1月	土居 健郎	
58年10月		老人精神衛生部に老人保健研究室を新設
60年4月	高臣 武史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により，国立高度専門医療センターの設置を決定
61年9月		厚生省組織令の一部改正により，国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定
61年10月		国立高度専門医療センターの一つとして，国立武蔵療養所，同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し，国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組，精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか，精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設，1課9部19室となる
62年4月	島藺 安雄 （総長が所長事務取扱）	厚生省組織規程の一部改正により，国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し，2病院，2研究所となる 庶務課廃止，研究所に主幹を置く
62年6月	藤縄 昭	
62年10月		心身医学研究部（ストレス研究室，心身症研究室）と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設
6年4月	大塚 俊男	
9年4月	吉川 武彦	
11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり，心理社会研究室と依存性薬物研究室となり，診断治療開発研究室を新設

		精神薄弱部を知的障害部に名称変更
13年1月	堺 宣道	
14年1月		精神保健研究所創立50周年
14年6月	高橋 清久 (総長が所長事務取扱)	
14年8月	今田 寛睦	
15年10月		司法精神医学研究部を新設（制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室）
16年4月	金澤 一郎 (総長が所長事務取扱)	
16年7月	上田 茂	
17年4月		市川市（国府台）から小平市（武蔵地区）に移転
17年8月	北井 暁子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設（自殺実態分析室，適応障害研究室，自殺予防対策支援研究室），成人精神保健部の増設（犯罪被害者等支援研究室，災害時等支援研究室）
19年6月	加我 牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年4月		独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所となる 8つの研究部の名称を変更（精神保健計画研究部，児童・思春期精神保健研究部，成人精神保健研究部，精神薬理研究部，社会精神保健研究部，精神生理研究部，知的障害研究部，社会復帰研究部）し，知的障害研究部に発達障害支援研究室を新設，11部33室（室長定数29）となる 所長補佐及び自殺予防総合対策センター副センター長を置く
23年12月		災害時こころの情報支援センターの新設（情報支援研究室）
25年4月	野田 広	
25年7月	福田 祐典	

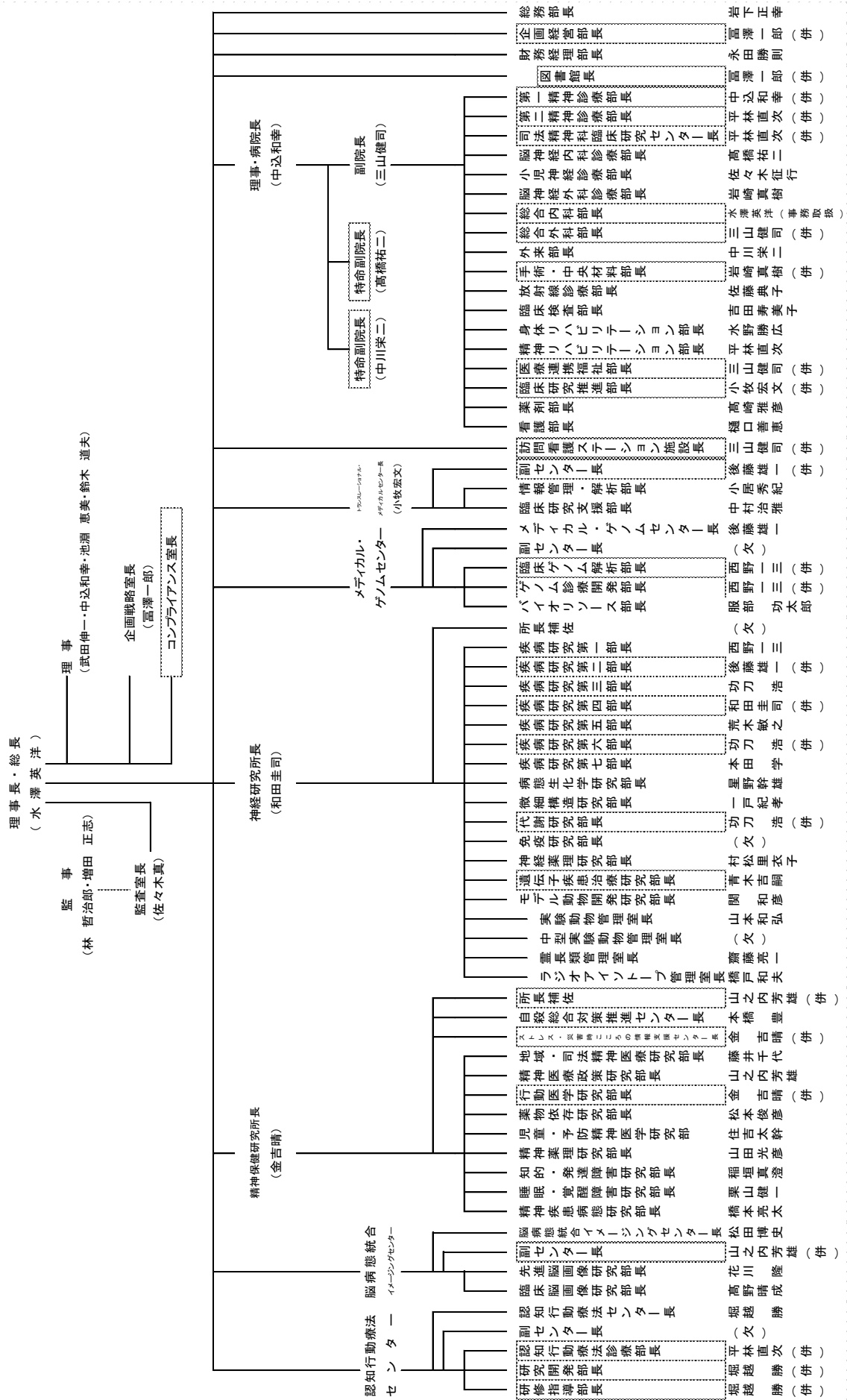
27年4月		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所となる
27年9月	富澤 一郎	
27年12月	中込 和幸	
28年4月		自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設（自殺実態・統計分析室，自殺総合対策研究室，自殺未遂者・遺族支援等推進室，地域連携推進室）
29年10月		社会精神保健研究部を廃止 精神疾患病態研究部を新設（基盤整備研究室，病態解析研究室），精神保健計画研究部精神医療体制研究室を増設
30年4月		4つの部を2つの部へ統合，また部名及び室名変更等再編し結果，2センター，11部35室から9部33室となる
31年1月	金 吉晴	

2. 内部組織改正の経緯

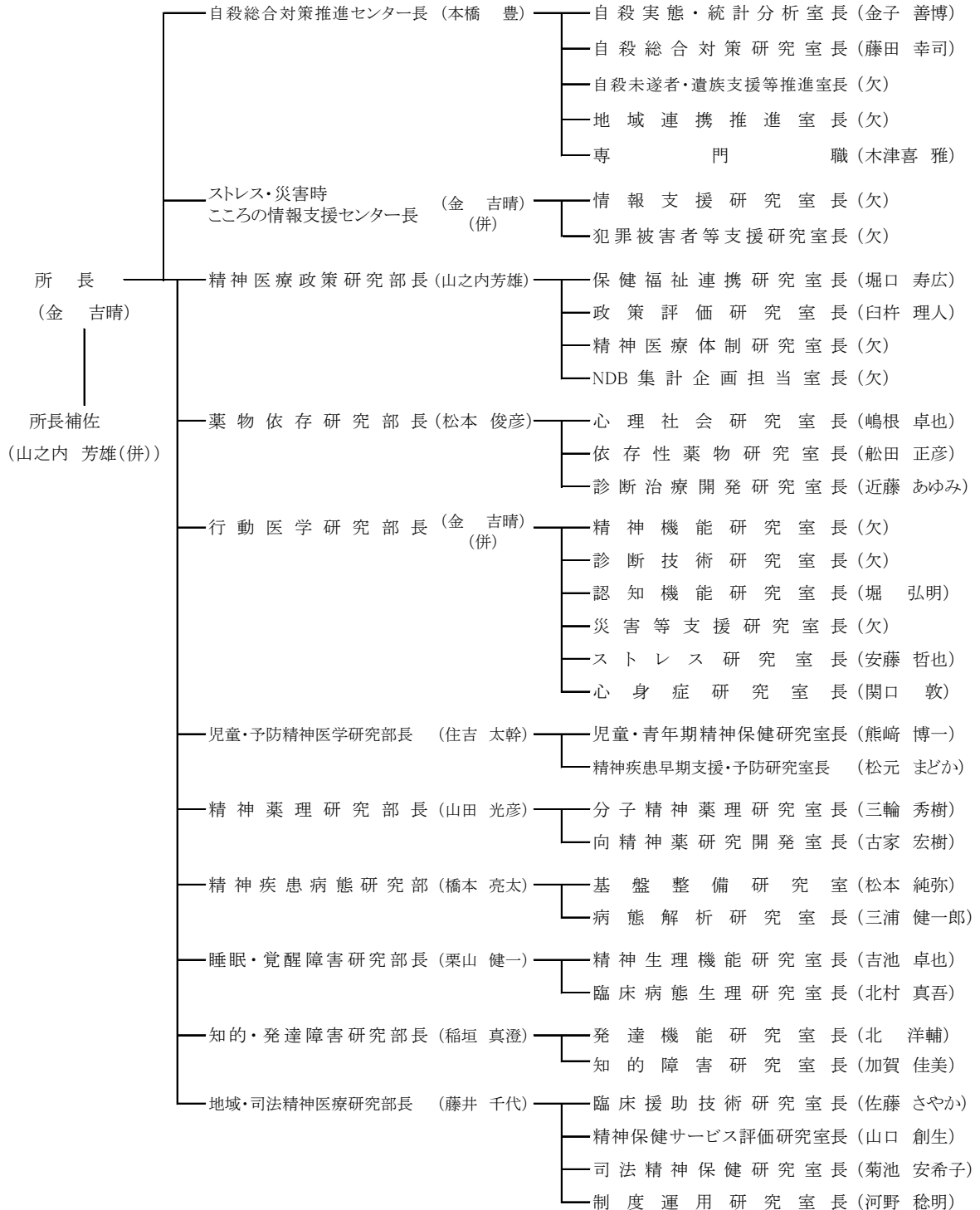
国立精神衛生研究所										国立精神・神経センター精神保健研究所										独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所									
創立昭和27年1月										元年10月										平成22年4月		平成23年12月		平成27年4月		平成28年4月		平成29年10月		平成30年4月	
組	総務課	→ 総務課 精神衛生研修室 (6月)								総務課 精神衛生研修室	庶務課 精神衛生研修室	運営部庶務第二課 精神保健研修室	運営部庶務第二課 運営部企画室 精神保健研修室			運営部政策医療 企画課 精神保健研修室		運営局 政策医療企画課 精神保健研修室	運営局 政策医療企画課 精神保健研修室 庶務課 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係					
																		自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室		自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室							
																				災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室	災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室				ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室						
										精神保健計画部 統計解析研究室		精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室			精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室		精神保健計画研究室 統計解析研究室 システム開発研究室		精神保健計画研究室 統計解析研究室 システム開発研究室		精神保健計画研究室 統計解析研究室 システム開発研究室 精神医療体制研究室	精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室									
										薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室									
	心理学部	精神衛生部	精神衛生部 心理研究室 精神衛生相談室 (4月)					精神衛生部 心理研究室		精神衛生部 心理研究室			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室						
						老人精神衛生部 老化研究室	老人精神衛生部 老化研究室		老人精神衛生部 老化研究室 老人保健研究室	老人精神衛生部 老化研究室 老人保健研究室 診断技術研究室 心理研究室	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室		成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室			成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室									
										老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室		老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室			老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室			精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室 向精神薬研究開発室									
	児童精神衛生部	→ 児童精神衛生部 精神発達研究室	→ 児童精神衛生部 精神発達研究室						児童精神衛生部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室			児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童・青年期精神保健研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童・青年期精神保健研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童・青年期精神保健研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童・青年期精神保健研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室									
	織	社会学部	社会精神衛生部			社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室				社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室			社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室							
生理学形態学部		精神身体病理部	精神身体病理部 生理研究室 (4月)						精神身体病理部 生理研究室 (4月)	精神生理部 精神機能研究室		精神生理部 精神機能研究室			精神生理部 精神機能研究室		精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室									
養生学部		養生学部							養生部																						
		精神薄弱部							精神薄弱部	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室										
					社会復帰部			社会復帰相談部 精神衛生相談室		社会復帰相談部 精神衛生相談室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室		社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室			社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室									
																司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室									
																							精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室								
																								精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室							

3. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター組織図
(令和2年3月31日)

は併任ポスト



4. 職員配置(令和2年3月31日現在)



I 精神保健研究所の概要

5. 精神保健研究所構成員（令和元年度）

所属		研究班				客員研究員：伊藤弘人 研究生：大塚豪志								
		梶 和紀		奥村 和香子										
部長	副部長	委員長 ○専門職	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科研究員 ○科研究員補助員 △科研究員補助員	科研究員補助助手 ○科研究員補助助手	コリャ-研究員補助員 ○コリャ-研究員補助員	コリャ-事務助手	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	外来事務助手	研究生 ○実習生
自然総合対策推進センター	本橋 豊	金子 幸司 藤田 幸司 ○大津喜 雅	森口 和		松本 博子 田中 元基 朴 眞藤 吉野 さやか 青木 みあ	科研究員補助員 ○科研究員補助員 △科研究員補助員	清水 佑子 原田 かおる	○堀口 泰代 ○武内 紗由美 ○大友 真弓 ○経部 結花 (～1.7.19) ○木船 紗子 ○櫻井 まり (～1.7.31) ○原田 礼乃 (31.4.16～) ○風間 紀子 (1.9.1～) ○牛野 万由子 (1.11.1～)	土屋 美保	堀口 敬 篠崎 康子 (～1.9.30)	藤原 佳典 武勇 井岡 正徳 大塚 耕太郎 尾崎 健一 猪飼 周平			研究生 ○実習生
マストレス・支援塾 こころの情報支援センター	(併任) 金 吉晴					岡崎 結美 岡山 達志 本園敷 美奈 (～1.10.31) 橋本 崇 赤羽 華義 ○大塚 悠志 ○駒志田 由美子			大久保 亮 本園敷 美奈 (1.11.1～)	前田 正治 高橋 晶 宮本 有紀 種村 康太郎 秋山 剛 富田 博秋			松本 悠貴 深澤 舞子	
精神医療政策研究部	山之内 芳雄	堀口 麻広 白杵 理人	羽建 恵 臼田 謙太郎	月江 ゆかり 古野 考志 大久保 亮 (～1.7.31)		米澤 雅一 富山 健一 熊倉 隼介 菊池 美名子 古田島 浩子 北澤 孝 佐々木 真知子 新田 隆一郎 大宮 宗一郎 (～1.8.31) 喜多村 真紀 ○佐司 康子 ○齋藤 実穂子 ○榎田 百合子 ○三輪 奈都子 ○松本 裕美		中野 真紀	今村 扶美 船田 大輔 宇佐美 真志 村地 花 川地 祐 山田 裕彰 神田 貴司 (1.8.15～)	尾崎 茂 浅沼 幹人 宮本 耕 和田 清 森田 廣彰 谷津 由那子 野村 和彦 池田 和彦 大嶋 淳子 本田 海子 高野 歩 成瀬 暢也 三島 健一 境 泉洋 山田 朋広 池田 美満 高岸 百合子 新木 秀人 奥村 泰之 (1.6.1～)	引土 絵米		青尾 直也 今井 軌平 加藤 重敏 橋本 永成 田中 紀子 花岡 貴子 田中 全雄 大塚 悠志 林 俊吉 基本 のり子 理沙 山本 泰輔 青木 彩香 (1.9.10～) ○筒井 寿穂 (～1.12.31) ○石川 泰幹 (1.10.21) ○大塚 修吾 (1.10.21) ○菅沼 佳樹 (1.10.21)	
行動医学研究部	金 吉晴(兼任)	堀 弘明 安藤 哲也 関口 敬 篠崎 (～1.9.30)	伊藤 真利子 大沼 麻衣	重子 河西 ひとみ 小原 千帆 大滝 涼子 中島 美穂 (～1.7.31)	菅原 彩子 船場 英佑子 伊藤(丹羽) まどか (1.5.1～1.6.30) 高村 恒人 (2.1.1～) ○國重 夏子 ○秀 美保	科研究員補助員 ○科研究員補助員 △科研究員補助員	石塚 帆子 宮田 ともみ (1.11.1～) ○水野 恵子 ○吉武 美喜 (2.1.1～)	神谷 裕子	水野 恵子 吉武 美喜 (～1.12.31)	有賀 元 富田 吉敏 (31.4.23～31.4.30)	小西 泰志子 加茂 光恵 水谷 敦明 堀地 節 堀地 成和 松本 由紀子 中島 聡美 近頃 ふじ子 児玉 直樹 西園 有伸 堀井 裕 菊池 裕俊 守口 善也 田中 或三郎 宮本 純子 (～31.4.30)	林 明明 伊藤(丹羽) まどか (1.7.1～)		研究生 ○実習生

部署名	部長	委員 ○専門職	研究員	流動研究員	非常勤研究員	研究費研究員 ○科研究費補助員 □科研究費心理療法士 △科研究費看護士	科研究費補助員 ○科研究費補助員 ○科研究費補助員	セブ・事務助手 セブ・研究補助員	兼任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	外来客員助手	研究生 ○実習生	
行動医学研究部														
児童・予防精神医学研究部	住吉 太幹	松元 まどか・ 熊崎 博一	藤里 敏子 白間 綾 飯島 和樹 (1.5.1～)			Andrew Mark Stickley 齋藤 彩 末吉 一貴 原口 英之 (1.6.1～) 堀野 太一 (1.8.1～) ○山野 真由子 ○生田目 光 □長谷川 由美	岩瀬 寿子 ○本郷 浩子		立森 久照	神尾 陽子 高橋 秀俊 池澤 聡 中村 佳奈子 上野 佳奈子 敷井 初光 青木 保典 石井 良平 住吉 孝方 山崎 実弘 松口 悠子			井野 敬子 須賀 楓介 (1.5.1～) 大塚 豪士 (1.5.1～) 大滝 涼子 (1.8.1～) 今井 理紗 (1.1.1～) ○村 寛治 (1.5.1～1.10.31) ○小島 玲里 (1.5.1～)	
精神医学研究部	山田 光彦	古家 安樹 三輪 秀樹	瀧石 洋 小林 樹子			山田 美佐 中武 優子 (1.11.1～) ○松谷 真由美 ○村松 浩美			野田 隆政	細田 正俊 岡田 重信 神庭 修一郎 白川 円 高原 智史 中嶋 壽亮 古川 一巳 吉澤 直裕 米本 直徳 西川 徹 川島 義高 澤 幸佑 (1.9.1～)			神岡 正敏 渡藤 泰 大堀 友子 川島 玲央 早田 曉伸 西岡 玄太郎 渡邊 恭江 中武 優子 (～1.10.31) 重島 修平 寺尾 真美 (1.10.1～)	
精神疾患病態研究部	橋本 亮太	松本 純弥 三浦 雄一郎 ○野 蒼太 (～1.7.31) ○本村 哲也 (1.7.1～) ○高村 晶子 (1.11.1～)	長谷川 尚美			○山縣 麗美子 ○村上 珠佳 (～1.7.31) ○本村 哲也 (1.7.1～) ○高村 晶子 (1.11.1～)	梅田 佳子		九保田 智香 三浦 拓人 (1.8.1～) 佐藤 英樹 (1.9.1～) 宮川 希 (2.2.1～)	尾崎 紀志 原野 俊明 小林 智生 中村 元昭 新田 海美 吉川 武男 新井 博秋 富田 明弘 中谷 均 橋本 敦信 中澤 敏一郎 藤田 哲也 下川 高 大井 雅彦 堀水 清貴 堀野 陽生 渡邊 年史 牧之段 学 中島 振一郎 伊賀 淳一 松尾 幸治 高橋 努 宮田 寛	吉村 玲児 森本 明貴 貴俊 正田 貴 山崎 亮 安田 由華 沼田 周助 中川 伸 久住 一郎 池田 学 小澤 健太郎 市橋 杏代 高江洲 義和 山田 恒 堀 寛 松本 新一郎 松本 正典 藤田 健 大石 智 橋本 保彦 菊地 正隆 橋本 直樹 近江 翼 宇野 洋太 (1.6.1～)	高村 晶子 (1.7.29～1.10.31)		若林 正敏 岩田 未実男 岡田 雄一 飯崎 隆志 美金 彰 松井 美智子 藤本 裕紀 能地 裕紀 小川 朝明 工藤 紀子 岡田 直大 村田 薫信 小笠原 一能 椎野 晋子 山行 昌彦 (1.1.1～) ○小宮 優吹 (1.5.1～) ○高瀬 雄介 (2.2.10～2.3.6) ○坂元 竜馬 (2.3.1～)
睡眠・覚醒障害研究部	栗山 健一	肥田 昌子 (～1.5.31) 北村 真吾 吉池 卓也 (1.6.1～)	渡部 直子 吉村 道孝			○源島 希美 ○瀬間 由美子 (1.10.1～)	柳原 朱 (1.7.1～) 長谷川 祥代 (1.7.18～) ○阿部 郁子 (1.7.1～)		郡留 あゆみ 松井 健太郎 (1.5.1～)	内山 寛 兼坂 佳孝 大川 匡子 井上 雄一 上野 真 上田 泰三 池田 正明 山寺 夏 守口 善也 阿部 高志 福水 道郎 橋本 みのり 有竹 清夏 亀井 雄一 渡辺 和人			大湯 健太郎 寺澤 悠理 太田 英伸 中嶋 恭子 石津 幸美 大月 裕美 大月 雄樹 堀川 裕生 村上 裕樹 長尾 寛太郎 (1.5.1～) 柴崎 佳奈 (1.5.1～) 國枝 泰希 (1.5.1～) 大沢 知集	

[illegible]

Ⅱ．研究活動状況

1. 今年度の活動概要

I. 概要

1) 人事

令和元年度の精神保健研究所所長は前年度に引き続き金吉晴が所長を務めた（行動医学研究部長、ストレス・災害時こころの情報支援センター長を併任）。

本年度の常勤研究員人事は、下記のとおりである。

4月1日に、精神医療政策研究部 NDB 集計企画担当研究員 臼田謙太郎、児童・予防精神医学研究部児童・青年期精神保健研究室長 熊崎博一、精神疾患病態研究部基盤整備研究室長 松本純弥、同研究部病態解析研究室長 三浦健一郎が採用された。6月1日には、睡眠・覚醒障害研究部精神生理機能研究室長 吉池卓也が採用となった。

元年度退職者は、睡眠・覚醒障害研究部精神生理機能研究室長 肥田昌子（5月31日付）、行動医学研究部診断技術研究室長 篠崎康子（9月30日付）、精神疾患病態研究部専門職 宇野洋太（7月31日付）、自殺総合対策推進センター長 本橋豊（3月31日付）、同センター自殺実態・統計分析室長 金子善博（3月31日付）、同センター自殺総合対策研究室長 藤田幸司（3月31日付）、同センター専門職 木津喜雅（3月31日付）、同センター研究員 森口和（3月31日付）、精神医療政策研究部政策評価研究室長 臼杵理人（3月31日付）、知的・発達障害研究部長 稲垣真澄（3月31日付）、同研究部知的障害研究室長 加賀佳美（3月31日付）、地域・司法精神医療研究部制度運用研究室長 河野稔明（3月31日付）、同研究部研究員 大隅尚弘（3月31日付）であった。

2) 概況

精神保健研究所は、患者さんやご家族、国民に役立つ研究を実践し、国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を担う一方で、研究発表分野でも精力的な活動を行っている。令和元年度には英文原著 139 編、和文原著 33 編、英文総説 7 編、和文総説 68 編、英文著書 12 編、和文著書 44 編を報告した（分担執筆含む）。また、学会発表としては国際学会で 46 件、国内学会で 262 件の発表を果たした。主要学会等では、若手研究者が筆頭著者として優秀賞や奨励賞等を受賞した。詳細は各研究部の活動状況を参照されたい。令和2年3月2日に開催予定だった第31回精神保健研究所研究報告会は、新型コロナウイルス感染拡大予防のため延期とした。

精神保健研究所は、専門家を対象とした各分野の研修（精神保健福祉、薬物依存、心身医学、自殺対策、司法精神医学、発達障害、精神医療均てん化等）を行っている。令和元年度には 15 課程を実施し合計 676 名が受講した。詳細は後述した。

2. 精神医療政策研究部

Ⅰ. 研究部の概要

精神医療政策研究部の前身となる精神保健計画部は精神保健に関する計画の調査及び研究を行うため昭和 61 年に設置された。現研究部の英語標記である **Mental Health Policy** が示すように、わが国の精神保健医療の政策について研究し、その評価を行うことを主たるミッションとしている。

医療計画・障害福祉計画・介護保険事業計画が平成 30 年度に同時に改訂され、自治体・医療関係機関等がその着実な策定と確かなモニタリングに関する方策を提示した。当部では今年度も引き続きモニタリングを研究活動の主軸におき、厚生労働省内「これからの精神保健医療福祉に関する検討会」での、新たな地域精神保健医療体制のあり方の構築に関する議論と連携して、地域で効果的に展開するための具体的かつ実現可能な方法を提示する方策を構築するとともに、レセプト・特定健診等データベース（NDB）の活用と、全国の精神医療関係行政および機関を対象とした悉皆調査（いわゆる 630 調査）等を通じて、時代に即したデータの提供に取り組んでいる。

モニタリング研究の礎となるべく、良質な精神科医療の提供を目指した重症度指標など医療の質指標の開発に関する研究、向精神薬の適切な使用実態に関するデータベース研究など精神疾患の予防に着目した研究活動を行っている。これらの活動は、部内のみならず他研究部、センター病院、全国の精神病床をもつ医療機関、全国の精神科関連医療団体、厚生労働省、行政機関等と幅広く協調することで、政策系の研究部としてのミッションを達成していくものと考えている。

部長：山之内芳雄，室長：堀口寿広，臼杵理人，研究員：羽澄 恵，臼田謙太郎 客員研究員：西 大輔，三宅美智，末安民生，目黒克己，竹島 正，野口正行，高橋邦彦，安西信雄，鈴木友理子，今井健二郎，杉山雄大，東 尚弘，長瀬幸弘（1/1～），併任研究員：大久保 亮（8/1～3/31），本屋敷美奈（11/1～3/31），流動研究員：月江ゆかり，古野考志，大久保 亮（～7/31）科研費研究員：岡山達志，本屋敷美奈（～10/31），橋本 塁，岡崎絵美，赤羽華珠，研究生：深澤舞子，松本悠貴，科研費研究補助員：穴澤恵美子，鴨志田由美子，科研費研究助手：清水悦子，原田かおる

Ⅱ. 研究活動

1) 医療計画、障害福祉計画の効果的なモニタリング体制構築のための研究

厚生労働行政推進調査事業「医療計画、障害福祉計画の効果的なモニタリング体制構築のための研究」において、精神医療関係団体・厚生労働省と連携をとり、自治体・医療関係機関等が、平成 30 年度に同時に改訂された医療計画・障害福祉計画・介護保険事業計画に対応できるよう、地域で効果的に展開するための具体的かつ実現可能なモニタリング方法を提示する方策を構築した。

昨年度に引き続き第 7 次医療計画が策定した指標に基づき、NDB、630 調査をもとに全都道府県 2 次医療圏ごとの診療実績を公表した。これは、多様な精神疾患に対応した、地域包括ケアシステム構築に向けて、15 疾患等領域における圏域毎の医療機関数をストラクチャ、患者数をプロセス、病期別の入院需要と、地域移行を受け入れる地域基盤必要量をアウトカム指標としている。これらの指標値を各年の精神保健福祉資料として、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部のホームページ (<https://www.ncnp.go.jp/nimh/seisaku/>) に公表している。

また、同厚生労働行政推進調査事業による研究班では、第 7 次医療計画における精神疾患の指標に関する検討、『Regional Mental Health Resources Analyzing Database』（ReHMRAD）による効果的でわかりやすい精神保健福祉資料の作成（吉田分担班：東洋大学）、精神病床における隔離・身体的拘束に関する実態調査、届け出病床ごとの客観的で検証可能な重症度等の把握に関する研究（米田分担班：大阪医科大学）も行った。

630 調査に関しては、NDB を補完すべく新しい調査票と様式を作成し、令和元年度調査を実施した。（山

之内、臼杵、臼田、古野、岡山、赤羽、岡崎)

第7次医療計画に係る精神疾患の指標に関する検討は、第7次医療計画中間見直しへの提言を取りまとめ、第8次医療計画に向けて、予防・治療・地域支援の三つのステージから成る、指標例素案を作成した。(山之内、臼杵、臼田)

効果的でわかりやすい精神保健福祉資料の作成については、精神保健福祉資料等のデータ連携を進め、統合型マップデータベースである ReMHRAD の改訂に貢献した。(山之内、臼杵、臼田)

精神病床における隔離・身体的拘束に関する実態調査については、令和元年11月より調査を実施し、令和2年3月までに全国313医療機関から回答を得た。厚生労働科学研究報告書として結果を報告する予定である。(山之内、臼田、月江、三宅、古野)

届け出病棟ごとの客観的で検証可能な重症度等の把握に関する研究については有識者からの提言を取りまとめ、一般科における重症度・医療・看護必要度をふまえたうえで精神科独自の重症度指標案の策定に取り組んだ。(山之内、岡山、橋本、古野、赤羽)

2) 医療の質指標の開発に向けた精神科医療の見える化プロジェクト (PECO)

精神科入院医療環境の変化に伴い、わが国でも医療の質を考える際に外形的なものからプロセスやアウトカムを求められるようになってきた。そこで、各病院の提供している医療が「見える」化するシステムを作成し、PECO-Psychiatric Electronic Clinical Observation - システムとして運用を継続している。

PECO では参加病院への集計結果のフィードバックのほか、国際比較も行っており、昨年度よりシンガポールに加えて韓国も参加することになった。国際比較においては、各国の医療システムや運用、考え方の違いがあり、指標を統一するための議論の重要性が分かってきた。現在は平均在院日数と3カ月後の再入院率の2つの指標の比較にとどまっているが、今後も引き続き議論し、比較できる指標を増やしていきたいと考えている。

今後はさらにPECOが臨床で有用なシステムとして活用されるよう、情報を過不足なく取得できるようなシステムづくりを推進していく。その一つとして、レセプトではわからない医療の中身に重点をおいた精神疾患のレジストリ構築と連携していく。

現段階では「退院時サマリ」に着目し、患者のプロブレムリストや自殺企図の有無などを中心に電子カルテより診療データを取得していく。

これらのデータをPECOへ連携することにより、実際の診療上で使用したデータを反映した新たな指標を作成することができるようになる。また、PECOと同時に精神疾患レジストリでも共通の項目を電子カルテから連携していることにより、両者を比較あるいは統合した形でのデータ解析などが可能となる。(山之内、三宅、月江、古野)

3) 精神医療政策への萌芽的取組と行政効果検証に関する研究 (精神・神経疾患研究開発費)

行政研究の入口として、課題1においてレセプト病名と治療内容記録から、実際の主病名を推測する技術の開発、課題2において電子カルテ記録から精神疾患重症度やDPC適応可能な医療項目を推測する技術の開発を行い実効性・妥当性を検証した。また、出口として、課題3は平成30年度まで行われた厚生労働科学研究において開発した精神保健指定医の新しい研修の仕組みの実効性を検証し、新たな研修による精神保健指定医の意識等の変化や、精神医療における変化を検証した。(山之内、堀口、臼杵、羽澄、橋本)

4) 向精神薬の適切な継続・減量・中止等の精神科薬物療法の出口戦略の実践に資する研究

我が国における抗精神病薬の多剤大量処方の安全で効果的な是正の方法について、平成22-24年度厚生労働科学研究費補助金「抗精神病薬の多剤大量処方の安全で効果的な是正に関する臨床研究」(研究代表者 岩田仲生 藤田保健衛生大学教授)班は、1つずつ、ごく少しずつ、休んでも戻しても可とした減量方法(SCAP法)で、2剤以上CP(クロルプロマジン換算)500~1,500mg/dの入院・外来の統合失調症患者(55施設、163名)の臨床試験を実施し、SCAP法は忍容性に優れ安全性と効果は、減量してもしなくて

も変わらない結果を見いだした。この知見に関して、当事者・家族、医師等への広報活動を行った。（山之内）

5) 医療的ケア児のインクルーシブ保育を実施

人工呼吸器や胃ろう等により医療的なケアを必要とする児童いわゆる「医療的ケア児」をもつ家族のレスパイト（休息）を確保しワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）を実現する目的で、東京都三鷹市および武蔵野市の参加を得て設置された協議会に参加して、身近な地域の医療機関が中心となり子どもの状態をよく知る職員が付き添い一般の保育所を利用する「インクルーシブ保育」の実施に協力した。（堀口）

6) 成人吃音者の受療行動を研究

日本医療研究開発機構研究費「発達性吃音の最新治療法の開発と実践に基づいたガイドライン作成」（研究代表者 森 浩一 国立障害者リハビリテーションセンター学院長）に参加し国立障害者リハビリテーションセンター病院におけるカルテ調査から成人吃音者の医療の利用状況と就労状況の関係を調査した。（堀口）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 小平市役所 定例健康相談（岡山）

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 藤田保健衛生大学 医学部客員准教授（山之内）
- ・ 全国精神保健連絡協議会 副会長（山之内）
- ・ 武蔵野大学 非常勤講師（臼田）
- ・ 立教大学 非常勤講師（羽澄）
- ・ 晴和病院 臨床心理学的研究および実践指導（羽澄）
- ・ 斉藤病院 看護研究指導（月江）
- ・ 目白大学 人間学部 心理カウンセリング学科 助教（橋本）

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 「精神保健福祉資料の見方と使い方」第 56 回精神保健指導課程研修，2019.7.8.（山之内）
- ・ 「医療の高度化を地域包括ケアで考える」第 56 回精神保健指導課程研修，2019.7.8.（山之内）
- ・ 「精神保健福祉資料の構造」第 56 回精神保健指導課程研修，2019.7.8.（臼田）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・ 厚生労働省 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築支援事業 広域アドバイザー（山之内）
- ・ 厚生労働省 障害福祉データベース検討会 構成員（山之内）
- ・ 厚生労働省 健康増進総合支援システム（e-ヘルスネット） 情報専門評価委員（山之内）
- ・ 公益社団法人 日本精神神経学会 広報委員会 2019 年度委員（山之内）
- ・ 公益社団法人 日本精神科病院協会 精神科版二次医療圏データベース部会（山之内）
- ・ 厚生科学審議会 健康日本 21（第二次）推進専門委員会（山之内）
- ・ 研究統括・データベース・データツールの作成，需給予測，厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））「医療計画，障害福祉計画の効果的なモニタリング体制構築のための研究」（山之内）
- ・ 評価ツール開発，厚生労働行政推進調査事業費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）「健康日本 21（第二次）の総合的評価と次期健康づくり運動に向けた研究」（山之内）

- ・ 抗精神病薬の多剤是正方策 向精神薬の全国的処方動向集計の考察. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「向精神薬の適切な継続・減量・中止等の精神科薬物療法の出口戦略の実践に資する研究」（山之内）
- ・ ガイドライン検討. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「てんかんの地域診療連携体制の推進のためのてんかん診療拠点病院運用ガイドラインに関する研究」.（山之内）
- ・ 国土交通省 総合政策局 安心生活政策課：移動円滑化のために必要な旅客施設又は車両等の構造及び整備に関する基準等検討会 構成員（堀口）
- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））「眠気に伴う精神的苦痛が中枢性過眠症の治療経過に与える影響」する政策研究」（羽澄）
- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究補助金（研究活動スタート支援））「ナルコレプシー患者における精神健康の不良に関わる疾患特有の心理社会的問題の解明」（羽澄）
- ・ 平成30年度がんサバイバーシップ研究助成金「必須脂肪酸・腸内細菌叢バランスとがん再発恐怖の関連：探索的横断研究」（大久保）
- ・ 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）「がん再発不安に対するオメガ3系脂肪酸・プロバイオティクスの有効性の検討」（大久保）
- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））「都市型順限界集落ソーシャルキャピタルとセルフケア能力向上プログラムの開発と評価」内「メンタルヘルス部門・啓発担当」（竹島）

(5) センター内における臨床的活動

NCNP 病院の行動制限最小化委員会（毎月第4水曜）において、PECO で得られたデータ集計をもとに、NCNP 病院での医療の質向上に向けた取り組みを行った。（山之内、月江）

(6) その他

IV. 研究業績

(1) 原著論文

- 1) Matsui K, Tokumasu T, Takekita Y, Inada K, Kanazawa T, Kishimoto T, Takasu S, Tani H, Tarutani S, Hashimoto N, Yamada H, Yamanouchi Y, Takeuchi H: Switching to antipsychotic monotherapy vs. staying on antipsychotic polypharmacy in schizophrenia: a systematic review and meta-analysis. Schizophr Res 209:50-57. 2019.
- 2) Wong MM, Castle D, Organ B, Li J, Ma L, Chui E, Ho K, Hung SF, Lo TL, Szeto WL, Yeung WS, Ahmed AI, Desai N, Thirthalli J, Yamanouchi Y, Hwang TY, Lee MS, Lai TJ, Yang YK, Karamustafalioglu O: Present and future of severe mental illness (SMI) policies: reflections from an Asia-Pacific Expert Forum series. Psychiatry Clin Neurosci 74(2):156. 2020.
- 3) Horiguchi T: Feasibility of a cost-effectiveness analysis examining interventions for abused persons with intellectual disabilities. Journal of Intellectual Disability Diagnosis and Treatment 8(1): 1-8, 2020.
- 4) Okubo R, Matsuoka YJ, Sawada N, Mimura M, Kurotani K, Nozaki S, Shikimoto R, Tsugane S: Diet quality and depression risk in a Japanese population: the Japan Public Health Center (JPHC)-based Prospective Study. Scientific Reports 9: 7150, 2019.
- 5) Okubo R, Wada S, Shimizu Y, Tsuji K, Hanai A, Imai K, Uchitomi Y, Fujiwara Y, Tsugane S, Matsuoka YJ: Expectations and recommendations for cancer survivorship guideline in Japan: a literature review of guidelines for cancer survivorship. Japanese Journal of Clinical Oncology 49(9): 812-822, 2019.

- 6) Noguchi H, Okubo R, Hamazaki K, Yamashita A, Narisawa T, Matsuoka YJ: Serum polyunsaturated fatty acids and risk of psychiatric disorder at 6 months after acute coronary syndrome: a prospective cohort study. Prostaglandins, Leukotrienes and Essential Fatty Acids 149: 18-23, 2019.
- 7) Horigome A, Okubo R, Hamazaki K, Kinoshita T, Katsumata N, Uezono Y, Xiao JZ, Matsuoka YJ: Association between blood omega-3 polyunsaturated fatty acids and the gut microbiota among breast cancer survivors. Beneficial Microbes 10(7): 1-8 2019.
- 8) Matsuoka YJ, Okubo R, Shimizu Y, Tsuji K, Narisawa T, Sasaki J, Sasai H, Akashi-Tanaka S, Hamaguchi T, Iwasa T, Iwata S, Kato T, Kurotani K, Maruyama D, Mori A, Ogawa A, Sakurai N, Shimazu T, Shimizu C, Tabuchi T, Takahashi M, Takano T, Tatematsu N, Uchitomi Y, Watanabe C, Fukui T: Developing the structure of Japan's cancer survivorship guidelines using an expert panel and modified Delphi method. J Cancer Survivorship, 2019.
- 9) Tsuji K, Ochi E, Okubo R, Shimizu Y, Kuchiba A, Ueno T, Shimazu T, Kinoshita T, Sakurai N, Matsuoka YJ: Effect of home-based high-intensity interval training and behavioural modification using information and communication technology on cardiorespiratory fitness and exercise habits among sedentary breast cancer survivors: habit-B study protocol for a random. BMJ Open 9(8): e030911, 2019.

(2) 総説

- 1) 山之内芳雄: 電子カルテへの AI の活用. 精神科 35(1) : 105-108, 2019.
- 2) 山之内芳雄: 地域定着を促すためのデータ活用と医療資源シフトの必要性. PPTS Bulletin 23(1) : 3-9, 2019.
- 3) 山之内芳雄: NDB の理解と活用. 日本社会精神医学会雑誌 28(4) : 398-402, 2019.
- 4) 山之内芳雄: Clozapine 導入促進と日本の精神保健福祉政策. 臨床精神薬理 23 : 3-14, 2020.
- 5) 臼杵理人: 可逆性後頭葉白質脳症 (PRES) の精神神経症状と鑑別. 精神科治療学 34(11) : 1247-1251, 2019.
- 6) 羽澄 恵: ナルコレプシーの心理学的評価. 睡眠医療 13 : 431-435, 2019.
- 7) 大久保 亮: 不安症と栄養. 臨床精神薬理 22 : 1059-1066, 2019.

(3) 著書

- 1) 橋本 昱: 環境調整・刺激性制御. 日本認知・行動療法学会編: 認知行動療法事典. 丸善出版, 東京, pp564-565, 2019.

(4) 研究報告書

- 1) 山之内芳雄: 医療計画, 障害福祉計画の効果的なモニタリング体制構築のための研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 平成 31 年度 総括・分担研究報告書. 2020.
- 2) 山之内芳雄: 健康日本 21 (第二次) の総合的評価と次期健康づくり運動に向けた研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業) 平成 31 年度 総括・分担研究報告書. 2020.
- 3) 山之内芳雄: 向精神薬の適切な継続・減量・中止等の精神科薬物療法の出口戦略の実践に資する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業) 平成 31 年度 総括・分担研究報告書. 2020.
- 4) 山之内芳雄: てんかんの地域診療連携体制の推進のためのてんかん診療拠点病院運用ガイドラインに関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業) 平成 31 年度 総括・分担研究報告書. 2020.

- 5) 山之内芳雄：6NC 連携による医療政策研究等を目的とした NDB 研究体制構築のための研究. 運 1 研究基盤経費（横断的研究推進事業）平成 31 年度 総括・分担研究報告書. 2020.
- 6) 山之内芳雄：精神医療政策への萌芽的取組と行政効果検証に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費. 平成 31 年度 総括・分担研究報告書. 2020.
- 7) 山之内芳雄：精神疾患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究. 日本医療研究開発機構 平成 31 年度 総括・分担研究報告書. 2020.
- 8) 羽澄 恵：眠気に伴う精神的苦痛が中枢性過眠症の治療経過に与える影響. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））平成 31 年度 総括研究報告書. 2020
- 9) 羽澄 恵：ナルコレプシー患者における精神健康の不良に関わる疾患特有の心理社会的問題の解明. 科学研究費助成事業（学術研究補助金（研究活動スタート支援）平成 31 年度 総括研究報告書. 2020
- 10) 大久保 亮：必須脂肪酸・腸内細菌叢バランスとがん再発恐怖の関連：探索的横断研究. 平成 31 年度がんサバイバーシップ研究助成金 平成 31 度 総括・分担研究報告書. 2020.
- 11) 大久保 亮：がん再発不安に対するオメガ 3 系脂肪酸・プロバイオティクスの有効性の検討. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）平成 31 度 総括・分担研究報告書. 2020.
- 12) 竹島 正：都市型順限界集落ソーシャルキャピタルとセルフケア能力向上プログラムの開発と評価. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））平成 31 年度 総括・分担研究報告書. 2020.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 堀口寿広：学会印象記 第1回日本障害者虐待防止学会. 臨床精神医学 48(5)：649, 2019.
- 2) 堀口寿広：障害児福祉サービスの外部評価に向けた研修の実施経験. 小児保健研究 78 Suppl.：218, 2019.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演,教育講演,シンポジウム,ワークショップ,パネルディスカッション等

- 1) 山之内芳雄：新しい精神保健福祉資料と 630 調査. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 2) 山之内芳雄：NDB を用いた多様な精神疾患の患者数の集計. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 3) 山之内芳雄：精神病床での身体的拘束の法的特性と視点の整理. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.

(2) 一般演題

- 1) 山之内芳雄：地域定着のために必要な医療福祉との連携. 第 8 回日本精神科医学会学術大会, 札幌, 2019.7.4.
- 2) 堀口寿広：障害児福祉サービスの外部評価に向けた研修の実施経験. 第 66 回日本小児保健協会学術集会, 東京, 2019.6.21-23.
- 3) 臼杵理人：統合失調症患者における抗精神病薬持続性注射剤の使用実態と再入院に関するナショナルデータベース研究. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 4) 臼田謙太郎：エジンバラ産後うつ病質問票（EPDS）の妊娠中期における最適なカットオフ得点についての検討. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 5) 羽澄 恵：中枢性過眠症における治療の有無に伴う心理社会的側面の相違. 第 44 回日本睡眠学会学術集会, 愛知, 2019.6.28.

(3) 研究報告会

(4) その他

C. 講演

- 1) 山之内芳雄：精神保健福祉法における身体拘束について．愛知医科大学精神科学講座勉強会，愛知，2019.4.15.
- 2) 山之内芳雄：精神病床のこれからと地域包括ケアへの投資．JMM セミナー，東京，2019.4.20.
- 3) 山之内芳雄：地域包括ケアシステムと今後の精神科医療．The China Association of Social Security (CAoSS) and the External Collaborator，中国，2019.5.21.
- 4) 山之内芳雄：630 調査を通じて見えてきた日本の地域精神医療．第 5 回日本多機能型精神科診療所研究会，静岡，2019.5.26.
- 5) 山之内芳雄：地域定着を促すためのデータ活用と医療資源シフトの必要性．東北ブロック PPST 研究会セミナー，盛岡，2019.6.1.
- 6) 山之内芳雄：くすりのゆっくりした減らし方と高度な医療の普及．家族会“むさしの会”定例・学習会，東京，2019.6.22.
- 7) 山之内芳雄：精神科地域医療の現状と課題～抗精神病薬の適切な減量方法も含めて～．城東精神科懇話会，東京，2019.7.22.
- 8) 羽澄 恵：睡眠とメンタルタフネスを整えよう．公益財団法人総合健康推進財団，東京，2019.7.27.
- 9) 山之内芳雄：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築におけるデータの使い方．市町村・保健福祉事務所・精神保健福祉センター等連絡会，神奈川，2019.8.7.
- 10) 山之内芳雄：精神医療が牽引する「精神障害にも対応した地域包括ケア」．精神障害にも対応した地域包括ケアと精神科病院の経営戦略及びリニューアルのポイント，東京，2019.9.7.
- 11) 山之内芳雄：精神病床のこれからと地域包括ケアへの投資．学術講演会～今後の精神科医療を考える会～，仙台，2019.10.18.
- 12) 山之内芳雄：地域包括ケアシステムで今後の精神科医療にできること．学術講演会～今後の精神科医療を考える会～，東京，2019.10.27.
- 13) 岡山達志：地域包括ケアシステムで今後の精神科医療にできること．学術講演会～今後の精神科医療を考える会～，東京，2019.10.27.
- 14) 羽澄 恵：中枢性過眠症における心理的問題について．日本 narcolepsy 協会第 16 回定期総会，千葉，2019.11.23.
- 15) 山之内芳雄：精神医療がけん引する精神障害にも対応した地域包括ケアの構築．愛知県 開設者・管理者懇談会，愛知，2019.12.19.
- 16) 山之内芳雄：精神保健医療福祉施策の近未来展望．みんなネットフォーラム，東京，2020.2.21.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 山之内芳雄：公益社団法人 日本精神神経学会 広報委員.
- 2) 堀口寿広：公益社団法人 日本小児保健協会 代議員.
- 3) 堀口寿広：公益社団法人 日本小児保健協会 小児保健奨励賞研究助成選考委員.

(3) 座長

- 1) 堀口寿広：第3回多職種による投稿論文書き方セミナー．第66回日本小児保健協会学術集会，東京，2019.6.21-23.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 堀口寿広：公益社団法人 日本小児保健協会「小児保健研究」誌 編集委員長.
- 2) 堀口寿広：「チャイルド・ヘルス」誌 編集協力者.

E. 研修

- 1) 山之内芳雄：新精神保健福祉資料の見方と使い方．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 第56回精神保健指導課程研修，東京，2019.7.8.
- 2) 臼杵理人：統合失調症の薬物療法／認知症の薬物療法．対象理解Ⅰ臨床薬理学・精神薬理学（日本精神科看護協会研修会），東京，2019.5.24.
- 3) 臼杵理人：主な精神疾患の理解／精神科薬物療法の理解．精神科看護初心者研修会，東京，2019.7.16.
- 4) 堀口寿広：クリニカルパスについて学ぶ，作る．日本精神科看護協会秋田県支部第6回研修会，秋田，2019.9.20.
- 5) 堀口寿広：若年層の”しにたい”に関する困りごと．一般社団法人 社会的包摂サポートセンター 若年層の希死念慮とその対応を考える研究会 第2回検討会．東京，2019.11.9.
- 6) 羽澄 恵：不眠障害と概日リズム睡眠—覚醒障害のアセスメント．不眠と概日リズム睡眠—覚醒障害に対する診断横断的認知行動療法セミナー．東京，2019.11.22.

F. その他

- 1) 堀口寿広：精神科医療におけるクリティカルパスと地域連携（2019）．松田文雄編：公益財団法人日本精神科病院協会第5回 SENIOR コース 精神科医療と患者処遇 上巻．pp.143-170，2019.6.1.
- 2) 堀口寿広：国土交通省総合政策局安心生活政策課：公共交通機関の車両等に関する移動円滑化整備ガイドライン—バリアフリー整備ガイドライン—旅客施設編．2019.4.1.
- 3) 堀口寿広：国土交通省総合政策局安心生活政策課：公共交通機関の車両等に関する移動円滑化整備ガイドライン—バリアフリー整備ガイドライン—車両等編．2019.4.1.
- 4) 堀口寿広：編集後記．小児保健研究 78(5)：479，2019.9.30.

3. 薬物依存研究部

Ⅰ. 研究部の概要

薬物依存研究部は、「麻薬・覚せい剤等に関する実態調査結果に基づく勧告」（総務庁，平成 10 年 5 月）により，機能強化が要請され，平成 21 年度より研究室の改組及び 1 研究室の新設がなされ，下記のように 3 研究室体制となっている。

心理社会研究室

- (1) 薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること。
- (2) 薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること。
- (3) 薬物依存の予防及びその指導，研修の方法の研究に関すること。

依存性薬物研究室

- (1) 薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること。
- (2) 依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。
- (3) 中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。

診断治療開発研究室

- (1) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること。
- (2) 薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること。
- (3) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること。

人員構成は，次のとおりである。

部長：松本俊彦，心理社会研究室長：嶋根卓也，依存性薬物研究室長：舩田正彦，診断治療開発研究室長：近藤あゆみ，流動研究員：猪浦智史，阿久根陽子（4 月より），客員研究員：浅沼幹人（岡山大学脳神経機構学分野），尾崎 茂（東京都保健医療公社豊島病院），宮永 耕（東海大学健康科学部），和田 清（埼玉県立精神医療センター），成瀬暢也（埼玉県立精神医療センター），森田展彰（筑波大学医学医療系），谷渕由布子（同和会千葉病院），三島健一（福岡大学薬学部），境 泉洋（徳島大学大学院），山田正夫（神奈川県立精神保健福祉センター），池田朋広（高崎健康福祉大学健康福祉学部），平田豊明（千葉県精神科医療センター），高野 歩（横浜市立大学医学部看護学科），本田洋子（福岡市精神保健福祉センター），大嶋栄子（NPO 法人リカバリー），池田和隆（東京医学総合研究所），三好美浩（岐阜大学医学部看護学科），高岸百合子（駿河台大学心理学部），鈴木秀人（東京都監察医務院，4 月より），奥村泰之（東京都医学総合研究所，6 月より）科研費研究員：米澤雅子，富山健一，熊倉陽介，菊池美名子，古田島浩子，喜多村真紀，伴恵理子，加藤 隆，瓜生美智子，大宮宗一郎（筑波大学大学院，8 月まで），外来研究員：引土絵未（学術振興会特別研究員），併任研究員：今村扶美，川地 拓，山田美紗子（以上，病院臨床心理室），船田大輔，宇佐美貴士，村上真紀，沖田恭治（5 月より），（以上，病院第二精神科），研究生：青尾直也，今井航平，加藤重城，橋本美保，花岡晋平，福森崇之，大澤美佳，高木のり子，田中紀子（4 月より），邱冬梅（4 月より），林俊吉（4 月より），山田理沙（4 月より），山本泰輔（4 月より），大宮宗一郎（9 月より），青木彩香（9 月より），筒井寿穂（12 月まで）

Ⅱ. 研究活動

A. 疫学的研究

1) 大麻依存症の患者を対象とした病院調査

本調査は，大麻使用と依存症や精神病の発症，および職業的・社会的機能の低下との関連について，臨床遺伝学的家族歴，大麻の使用期間・頻度，使用する大麻製品（THC 濃度），併存精神障害や，並行して使用した他の精神作用物質の影響などといった情報を踏まえて検討することを目的として実施

した。

対象は、2018年「全国精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査において報告症例が100例を超えていた薬物依存症専門医療機関9施設において、2019年10～12月の3か月に通院もしくは入院で治療を受けた、ICD-10「大麻使用による精神と行動の障害」に該当する全ての成人患者のうち、同意が得られた者である。情報収集方法は、各調査実施施設の担当医が調査票にしたがって対象患者に質問する方法を採用した。調査票には、臨床遺伝学的家族歴、大麻使用様態、大麻に期待する効果、大麻関連障害診断、他の精神作用物質の習慣的使用、併存精神障害の診断と大麻使用開始との経時的関係、自殺関連事象や反社会的傾向、および、それらの大麻使用開始との経時的関係などの項目を設定した。

その結果、9施設より合計71例の大麻関連障害症例（平均年齢35.1（標準偏差10.2）歳：男性59例[83.1%]、女性12例[16.9%]）であった。この71例から得られたデータを用い、大麻使用に関する「依存症候群」「精神病性障害」「残遺性・遅発性精神病性障害」の各診断、ならびに、大麻使用による「職業的機能の低下」と「社会的機能の低下」に関連する要因について多重比較を行った。その結果、現在の「依存症候群」診断に関連する項目として、「乾燥大麻以外的大麻使用」（ $p=0.017$ 、オッズ比5.190, 95%信頼区間[1.345～20.033]）が、現在の「残遺性・遅発性精神病性障害」に関連する要因として、「現在の年齢の高さ」（ $p=0.043$ 、オッズ比1.074, 95%信頼区間[1.002～1.151]）と「仲間意識の強化を期待して使用」（ $p=0.015$ 、オッズ比0.168, 95%信頼区間[0.040～0.708]）が、「職業的機能の低下」に関連する要因として、「週4日以上の使用」（ $p=0.001$ 、オッズ比11.243, 95%信頼区間[2.524～50.079]）が、そして、「社会的機能の低下」に関連する要因として、「現在独身であること」（ $p=0.028$ 、オッズ比13.931, 95%信頼区間[1.338～145.095]）、および「週4日以上の使用」（ $p=0.033$ 、オッズ比4.669, 95%信頼区間[1.130～19.288]）が抽出された。なお、現在の「精神病性障害」に関連する要因については明らかにならなかった。

以上より、本研究では、高濃度THC含有製品の使用や頻回の大麻使用が、依存症候群診断や職業的・社会的機能の低下を引き起こす可能性が示唆された。その一方で、精神病性障害や残遺性・遅発性精神病性障害については、大麻使用様態、臨床遺伝学的家族歴、併存する精神障害、他の精神作用物質の併用といった項目のいずれとも関連する要因が見いだされなかった。（厚労科研：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。松本俊彦、嶋根卓也）

2) 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究

本研究は、保護観察所と精神保健福祉センターなどの地域支援機関との橋渡しをしながら、保護観察の対象となった薬物事犯者の長期転帰を調査する、「Voice Bridges Project：「声」の架け橋プロジェクト」を平成29年3月より実施しているものである。本研究では、令和元年12月末までに、17の精神保健福祉センターから計354名の保護観察対象者が調査に参加し、最長2年半後までの追跡調査が行われている。調査時における対象者の平均年齢は45.6歳で、男性が74.9%、週4日以上働いている者が40.4%であった。保護観察の種類の内訳は、仮釈放の者が65.3%と最多であった。主たる使用薬物が覚せい剤であった者が94.4%、逮捕時におけるDAST-20の平均値は10.8と中程度であった。治療プログラムを受けている者が77.7%いたが、その多くは保護観察所で実施されるプログラムであった。追跡中の各調査期間における薬物再使用者は、追跡開始～3か月後では回答者244名中14名（5.7%）、3～6か月後調では回答者183名中11名（6.0%）、6～9か月後では回答者142名中7名（4.9%）、9か月～1年後では回答者119名中10名（8.4%）、1年～1年半後では回答者52名中4名（7.7%）であった。その内、違法薬物使用者は、追跡開始～3か月後で5名（2.0%）、3～6か月後で5名（2.7%）、6か月～1年後で6名（5.0%）、1年～1年半後で2名（3.8%）、1年半～2年後で1名（6.3%）であった。さらに Kaplan-Meier 解析を実施したところ、1年経過後の累積生存率は92.6%、2年経過後の累積生存率は84.2%であった。なお、法務省保護局観察課から提供されたデータを分析した結果、調査実施地域における薬物事犯保護観察対象における本調査同意率は11.5%であることが明らかになった。

現在、本研究プロジェクトは、各地域の「ご当地性」を活かした薬物依存症地域支援の連携構築に向けて、「Voice Bridges Project（「声」の架け橋プロジェクト）」はさらなる広がりをみせている。本プロジェクトを通して各地域での取り組みを共有することにより、他の地域にも薬物事犯保護観察対象者を地域で支える体制構築が広がることが期待されている。（厚労科研：障害者政策総合研究事業。松本俊彦）

3) 薬物使用に関する全国住民調査（2019 年）

わが国の一般住民における薬物使用の実態を把握するとともに、その経年変化を調べることを目的に全国調査を行った。本研究は、わが国で唯一の全国の一般住民を対象とする薬物使用に関する疫学研究である。1995 年より隔年で実施され、今回で 13 回目の調査となった。計 3,945 名（女性 51.7%，平均年齢 43 歳）の一般住民から有効回答を得た大麻使用者の増加が確認された。大麻の生涯経験者数は約 161 万人、過去 1 年経験者数は約 9 万人と推計された。過去の調査データと比較すると、大麻、コカイン、MDMA は増加傾向、覚せい剤および危険ドラッグは横這い、有機溶剤は減少傾向で推移していることが明らかとなった。（令和元年度厚生労働科学研究費補助金（以下、厚労科学研究）：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。嶋根卓也、猪浦智史、邱 冬梅、和田 清）

4) 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究（ダルク追っかけ調査 2019）

本研究は、2016 年に開始された「ダルク追っかけ調査」の継続研究である。2016～2018 年度までの第一期調査（FU1～FU4、フォローアップ＝FU と表記）では、全国 46 団体のダルク利用者 695 名が追跡対象となった。本研究では、「ダルク追っかけ調査」を継続することで、ダルク利用者の中長期的予後を把握することを目的とした。2019～2021 年度までを第二期調査（FU5～）とし、フォローアップを継続する。また、ダルク職員を対象とした「ダルク意見交換会」を通じて、ダルクが直面する課題について抽出・整理することを目的とした。「ダルク追っかけ調査」の継続研究が開始された。現在までに計 457 名から同意を再取得し、薬物依存症者を対象とする縦断研究としては依然として大規模なコホートを維持している。（厚労科学研究：障害者政策総合研究事業。嶋根卓也、高岸百合子、喜多村真紀、猪浦智史、引土絵未、山田理沙、近藤あゆみ、米澤雅子、松本俊彦）

5) 新規危険ドラッグの乱用実態把握のための効果的な調査手法の確立

本研究では、レクリエーション・セッティングの一つとして音楽関連の野外イベント（野外フェスティバル）をフィールドとした、大麻の使用実態を掘り下げる試みを行った。使用される大麻は、従来の乾燥大麻や大麻樹脂が高頻度で報告された。また、大麻クッキーなどの加工品、電子タバコで使用する大麻リキッド、高濃度の THC を含有する大麻ワックスなど新たな形状の大麻製品に関する使用経験も確認された。更に、大麻の規制や北米の大麻合法化に対する考えが把握できた。また、大麻使用経験者の間に、大麻使用を肯定する考えが広がっており、海外における嗜好目的あるいは医療目的での大麻使用が認められる動きが、大麻使用行動に影響を与えている可能性が推測された。（厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。嶋根卓也、山田理沙、船田正彦）

6) 全国の刑務所で収容されている覚せい剤事犯者に関する実態調査

全国の刑務所で収容されている覚せい剤事犯者に関する実態を明らかにすることを目的とする。2017 年度に法務省が事業として実施した「薬物事犯者に関する研究」で得られた情報のうち、個人情報を含まない情報のみを成果有体物授受（MTA: Material Transfer Agreement）として国立精神・神経医療研究センターが譲り受け、法務省法務総合研究所との共同研究として詳細な分析を行った。（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。嶋根卓也、近藤あゆみ、高岸百合子、喜多村真紀、大宮宗一郎、伴恵理子、松本俊彦）

7) わが国の青少年における薬物乱用・依存に関する実態調査およびデータ・アーカイブに関する研究

2018 年度に実施した「薬物使用と生活に関する全国高校生調査」の集計および解析作業を実施し、報告書を作成した。作成した報告書は、対象校、教育委員会、文部科学省にフィードバックした。ま

た、インターネットで情報公開を行った。(厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。嶋根卓也，猪浦智史，和田 清，松本俊彦)

8) HIV 感染症を伴う薬物使用障害の臨床的特徴と治療・回復支援に関する研究

薬物依存臨床では HIV 感染症を伴う薬物使用障害患者が散見されるが，HIV 感染および HIV 感染の背後にある危険な性行動と薬物使用障害との関連についての知見は，国内では非常に限られている．今年度は，法務省法務総合研究所との共同研究による覚せい剤取締法違反による新規受刑者のデータベースを二次的に解析し，HIV 感染の背後にある危険な性行動に着目し，薬物依存との関係を検討した。(精神・神経疾患研究開発費。嶋根卓也，松本俊彦)

9) 薬物使用のモニタリング調査に関する国際比較研究

本研究は，アジア諸国内における，薬物依存・乱用のモニタリングシステムの構築を促進することを目的として，定期的に薬物使用のモニタリング調査を実施しており，薬物使用状況がわが国と共通しているタイ国に注目し，薬物使用のモニタリング調査に関する国際比較研究を推進した．本年度はタイ国で実施されている薬物使用についてのモニタリング調査の概要，および研究方法について調査し，両国で比較可能な研究調査項目について検討した。(令和元年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。猪浦智史，和田 清，嶋根卓也)

B. 臨床研究

1) 薬物使用障害に対する多様な治療法の開発

本研究の目的は，すでに我々が開発した薬物依存症集団療法 (SMARPP) ではカバーできない様々な問題——すなわち，併存精神障害や感染症，性差などの個別的要因，および，治療セッティングを含めた多様なニーズ——を抱える薬物使用障害患者に対する治療法を開発することである．本研究では，以下の 7 つの分担研究開発課題を設定し，個別的配慮を要する集団の臨床的特徴と治療上の配慮点を明らかにするとともに，SMARPP の代替となる治療プログラムの開発を進めている．すなわち，「HIV 感染症を伴う薬物使用障害の臨床的特徴と治療・回復支援に関する研究」(分担：嶋根卓也，精神保健研究所薬物依存研究部)，「薬物使用障害の治療転帰に関する個別的要因の影響に関する研究」(分担：近藤あゆみ 精神保健研究所薬物依存研究部)，「薬物使用障害に対する精神科救急病棟での短期治療プログラムの開発に関する研究」(分担：船田大輔，病院第 2 精神診療部)，「発達障害を伴う薬物使用障害の臨床的特徴と治療法に関する研究」(分担：村上真紀，病院第 1 精神診療部)，「ベンゾジアゼピン受容体作動薬使用障害の臨床的特徴と治療法に関する研究」(分担：宇佐見貴士，病院第 1 精神診療部)，「薬物使用障害に対する個人心理療法の開発とその効果に関する研究」(分担：今村扶美，病院臨床心理部)，薬物使用障害に対する作業療法プログラムの開発と効果に関する研究」(分担：森田三佳子，病院精神リハビリテーション部) である．

今年度，本研究では，当院薬物依存症専門外来における治療関係を 1 年間継続する者の多くで薬物使用障害の重症度が改善することが示された一方で，従来の治療法では十分な効果が得られず，個別性への配慮を要する集団が同定された．その 1 つが，精神障害併存症例である．本研究班では，統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群，双極性障害および関連障害群，解離症群／解離性障害群を併存する者では，既存の治療法では十分な治療効果が得られない可能性が示唆された (近藤分担班)．また，薬物使用障害患者のなかには，3～4 割程度，発達障害の併存が疑われる者もあり，やはり個別性への配慮を要する集団と考えられた (村上分担班)．そしてもう 1 つの集団が，性・ジェンダーへの配慮を要する集団である．覚せい剤使用はしばしば HIV 感染リスクを伴う危険な性的活動と関連するが，その関連の詳細には性差があり，治療に際しては配慮を要する可能性が示唆された (嶋根分担班)．

一方，本研究班では，既存の薬物依存症集団療法に代わる治療法として，精神科急性期病棟における短期入院治療プログラム (FARPP) (船田分担班)，集団作業療法プログラム (リアル生活プログラム) の開発も行い，前二者についてはすでに効果検証を実施中である．個人心理療法プログラムに

については、院内の多部署・多職種が協働して評価・参加登録をするシステムを整備するとともに、既存の集団プログラムを援用するかたちで少数例を試行する段階にとどまった。（精神・神経疾患研究開発費、松本俊彦、嶋根卓也、近藤あゆみ）

2) 覚せい剤依存症患者におけるイフェンプロジルの効果検討と fMRI を基点としたバイオマーカーの開発：二重盲検無作為化比較試験

本研究は、覚せい剤依存患者にイフェンプロジルの投与し、二重盲検無作為化比較試験を用いて、その効果を見出せる主要なエンドポイントを探索的に解析するとともに、fMRI を用いた依存症のバイオマーカー開発を目的とするものである。具体的には、プラセボ群に対し通常用量群と高用量群の3群設定としたのは、保険適応外量である高用量（120 mg/日）の安全性の検討及び用量依存的に、依存症に対する効果があるかを同時並行的に検討することができると考えたからである。さらに、fMRI によるバイオマーカーは、具体的には fMRI 安静時における脳活動の時間変動から人工知能技術により依存症に特徴的な脳領域間の機能的結合（脳領域間の同期状態）を抽出・精査し、機能的結合の値より、投薬前の重症期から投薬後寛解期の「依存症度」を測定し、依存症の指標（バイオマーカー）を作成する。平成 30 年度末までには研究対象者のリクルートは完了し、今年度は、データクリーニングをしたうえで、キーオープンし、現在、結果を解析中である。

3) 薬物使用障害の治療転帰に関する個別的要因の影響に関する研究

2017 年 1 月から 2018 年 12 月までの 24 ヶ月間に NCNP 薬物依存症外来）を受診した新規患者 226 名のうち、治療開始から 1 年後に治療を継続しており、かつ、登録時と 1 年後の 2 時点における情報が得られた 31 名を分析対象とし、1 年後の転帰について検討した。治療開始時および 1 年後の Addiction Severity Index コンボジットスコア（ASICS）平均値はそれぞれ 0.29（SD=0.18）、0.16（SD=0.13）であり、治療開始から 1 年後の薬物依存重症度には有意な改善が認められた（ $t=3.332$, $p=0.002$ ）。次に、ASICS の 2 時点における変化の程度によって対象者を群分けしたところ、治療開始時に重症度が低く 1 年後もそれを維持していた「良好維持群（6 名）」、1 年後の ASICS が治療開始時と比較して減少した「改善群（20 名）」、1 年後の ASICS が治療開始時と比較して増加した「増悪群（5 名）」の 3 群に分類された。DSM-5 による重複障害の有無と種類について「改善群」と「増悪群」を比較した結果、「改善群」における「重複障害あり」の割合が 65%、「増悪群」の割合が 80% であり、有意差は認められなかったが、重複する障害名（複数回答可）や各群における割合もあわせてみると、「改善群」については「抑うつ障害」（35.0%）の割合が高いのに対し、「増悪群」では、「統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群」（40.0%）、「双極性障害および関連障害群」（40.0%）、「解離症群／解離性障害群」（40.0%）、「神経発達症群／神経発達障害群」（20.0%）の割合が高く、治療効果があがりにくい要因のひとつとして、「統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群」、「双極性障害および関連障害群」、「解離症群／解離性障害群」等の重複障害があることの可能性が示唆された。（令和元年度精神・神経疾患研究開発費。近藤あゆみ）

4) 精神保健福祉センターにおける家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究

平成 29 年 9 月から平成 30 年 12 月までに精神保健福祉センターまたは医療機関を訪れた 115 名に対して、登録時、登録後 6 ヶ月、登録後 1 年の 3 時点における自記式アンケート調査への回答を依頼した。そのうち、登録時及び登録後 1 年時の情報が得られた 73 名について、2 時点の前後比較を行うことで家族支援及び家族心理教育プログラムの効果評価を行った。家族の健康状態については、SF-8 平均値の前後比較を行った結果、全体的健康感、活力、社会生活機能、心の健康、日常役割機能（精神）および精神的サマリースコアの平均値に有意な差が認められ、改善した。次に、本人の将来や現状に関する希望の程度を希望尺度により評価し、平均得点の前後比較を行った結果、有意差が認められ、希望が増大した。最後に、本人の治療支援状況の変化については、登録時本人が未治療であったのは 24 名のうち 16 名（66.7%）は 1 年後なんらかの治療支援を受けていた。本研究により、薬物・アルコール問題の影響を受けて過酷な生活を強いられる家族を継続的に支援していくことが様々な観点から重要であることが示された。（令和元年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギ

ュラトリーサイエンス政策研究事業)。近藤あゆみ)

5) 女性薬物依存症者の回復支援に関する研究

医療機関、回復支援施設、更生保護施設を利用する女性薬物使用当事者 10 名を対象とし、インタビュー調査の手法を用いて、回復過程において対象者が抱える生活上の困難や支援ニーズを聞き取った(観察研究、事例研究、インタビュー調査)。インタビューの逐語録を分析データとし、語られた内容をエピソードごとにまとめ、全体の文脈と照らし合わせながら、そこに包含された意味をテーマのかたちで抽出した。抽出されたテーマは、①乱用に至るまでの体験、②断薬を阻害するもの、③断薬の契機、④被支援経験とこれからの生活を構想する上での困りごとおよびニーズの 4 つであった。結果から、回復の阻害要因や課題として、以下の 3 点が明らかになった。まず 1 点目は「支援の場における問題」で、①支援の場が薬物の供給の場になる、②支援や処遇が薬物乱用問題の重症化や維持継続の一端を担う、といった構造的な問題、③支援や処遇の場がストレスの原因になる、④支援の内容がニーズと一致しないといった問題も起きており、支援や処遇を受けることが断薬や対象者たちの抱える問題の解決に必ずしもつながらない現状があった。2 点目は、「重点的な支援を要する領域」についてであり、具体的な支援の領域としては、①生活支援、②子育て支援、③トラウマやメンタルヘルスの問題への取り組みの 3 点があげられた。3 点目は、「女性特有のニーズに配慮したプログラムと支援」の必要性についてであった。女性の薬物依存問題への取り組みには、薬物使用に先立ち起きている精神的・身体的・環境的問題を広く視野に入れた包括的な評価と継続的な支援が重要である。(厚生労働省依存症に関する調査研究事業。近藤あゆみ)

6) 物質使用障害を抱える女性に対する治療プログラムの開発と有効性評価に関する研究

物質使用障害を抱える女性に対する治療プログラムのワークブックを作成した。作成にあたっては、PTSD と物質乱用との併存患者に対する治療についてまとめられた初めての書籍であり、エビデンスに基づいたモデルとして世界中で広く活用されている「Seeking Safety A Treatment Manual for PTSD and Substance Abuse」(Lisa M. Najavits., 2001. 研究開発代表者らの監訳により、2017 年金剛出版から「PTSD・物質乱用治療マニュアル シーキングセーフティ」として邦訳書籍出版済み)と、近年新たに出版された自助のための書籍「Recovery from Trauma, Addiction, or Both Strategies for Finding Your Best Self」(Lisa M. Najavits, 2017. 研究開発代表者らの監訳により、2019 年金剛出版から「トラウマとアディクションからの回復—ベストな自分を見つけるための方法」として出版済み)を主たる参考文献とし、物質乱用とトラウマ問題のみならず、セルフケアや対人関係、感情調節、サポートネットワークなどのトピックも幅広く扱い、安全かつ総合的に改善を目指す独自の包括的プログラムを開発した。今後は、開発したプログラムを用いた効果評価研究を実施する。(日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業。近藤あゆみ)

C. 基礎研究

1) 合成カンナビノイドの中枢作用解析法に関する研究

本研究では、合成カンナビノイドのうち carboxamide を含有する AB-FUBINACA (AB-FUB), 5-Fluoro-AMB (5F-AMB), 5F-MDMB-PICA (5F-MD), 4F-MDMB-BINACA (4F-ADB) について、行動薬理学的特性並びに細胞毒性の発現に関する検討を行った。行動解析として、AB-FUB, 5F-AMB, 5F-MD および 4F-ADB による運動活性および体温に対する影響を検討した。4 種類の合成カンナビノイドにより、カタレプシー様の無動状態が引き起こされた。同様に、体温下降作用の発現が確認された。これら効果は、カンナビノイド CB1 受容体拮抗薬 AM251 前処置によって抑制された。無動状態および体温下降の発現には、カンナビノイド CB1 受容体が関与することが明らかになった。4 種類の合成カンナビノイドの精神依存形成能は、マウスを使用し conditioned place preference (CPP) 法により評価した。4 種類の合成カンナビノイドの条件付けにより有意な CPP の発現が確認された。AB-FUB, 5F-AMB, 5F-MD および 4F-ADB は精神依存形成能を有する危険性が示唆された。4 種類の合成カンナビノイドの受容体作用について、CB1 受容体発現細胞株 CHO-CB1 細胞により解析した。

4種類の合成カンナビノイドの添加により、細胞内カルシウムが増加し、この効果はCB1受容体拮抗薬AM251の前処置により完全に抑制された。AB-FUB, 5F-AMB, 5F-MDおよび4F-ADBはCB1受容体作用薬であることを確認した。マウス limbic area の初代培養神経細胞を使用して、4種類の合成カンナビノイド添加による細胞生存率の評価を行った。AB-FUB, 5F-AMB, 5F-MD および 4F-ADB の添加 24 時間後の細胞生存率は有意に低下し、細胞毒性の発現が確認された。本研究から、4種類の合成カンナビノイドはカンナビノイド CB1 受容体を介して中枢抑制作用を示し、高濃度では細胞毒性を示すことから、乱用により健康被害を示す危険性があると考えられる。合成カンナビノイドはカンナビノイド受容体に作用することから、CHO-CB1 細胞を利用した蛍光強度解析データは、有害作用の推測に利用できると考えられる。また、合成カンナビノイドのうち carboxamide を含む化学構造を有する化合物は、CB1 受容体への作用強度を指標に、包括指定対象範囲を定義できる可能性が示唆された。（厚生科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業、船田正彦）

2) 危険ドラッグの有害作用評価に関する研究

合成カンナビノイドおよびオピオイド系薬物をターゲットとした自立蛍光型検出用細胞の構築を試みた。樹立安定株である CHO 細胞を利用して、カンナビノイド CB1 受容体、オピオイド μ 受容体発現細胞を作製した。それぞれの機能タンパク質発現細胞へ、細胞内モニタリングセンサーとしてカルシウムセンサータンパク質を導入し、受容体-カルシウム反応細胞を樹立した。新規の小型蛍光検出器（ μ 蛍光検出器）を使用して、合成カンナビノイドおよびオピオイド系薬物であるフェンタニル類縁化合物添加によるカルシウム動態を解析したところ、濃度依存性の蛍光増加が確認された。また、危険ドラッグ製品に含まれる合成カンナビノイドおよびオピオイド系薬物の検出も可能であった。本細胞は蛍光発光を利用した危険ドラッグ検出に利用可能である。また、小型蛍光検出器による薬物検出も可能であることから、救急医療などの現場での薬物検出に応用可能であると考えられる。（日本医療研究開発機構（AMED）：医薬品等規制調和・評価研究事業、船田正彦）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

当研究部は、研究部創設以来、厚生労働省に限らず、薬物乱用・依存対策に係る各省庁・自治体・市民団体等と連携を取り続けてきており、独自に研修会を主催するのみならず、各種研修会への講師派遣、啓発用資料および教材作成、調査等への協力などを行っている（細目は研究業績参照）。

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民向け講演会：(Ⅳ. 研究業績 C. 講演 参照)
- ・報道：(Ⅳ. 研究業績 F. その他 参照)

(2) 専門教育面における貢献

- ・研修会・研究会

第 32 回薬物依存臨床医師研修会、第 20 回薬物依存臨床看護研修会（主催）、第 10 回薬物依存症に対する認知行動療法研究会、2019 年度厚生労働省依存症治療拠点機関設置運営事業（薬物依存症回復施設職員研修、依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物））

- ・各種教育研修会等への講師派遣（Ⅳ. 研究業績 C. 講演 参照）

- ・大学

早稲田大学人間科学学術院非常勤講師（松本俊彦）、国立大学法人東京医科歯科大学非常勤講師（松本俊彦）、国立大学法人京都大学非常勤講師（松本俊彦）、国立大学法人岡山大学大学院医歯薬学総合研究科非常勤講師（船田正彦）、東京薬科大学薬学部非常勤講師（嶋根卓也）、津田塾大学非常勤講師（嶋根卓也）、国立障害者リハビリテーションセンター学院非常勤講師（嶋根

卓也)

・その他

Psychiatry and Clinical Neurosciences Reviewer (松本俊彦).

日本アルコール・薬物医学会雑誌査読者 (近藤あゆみ)

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

・政府委員会

厚生労働省医薬・生活衛生局「薬事・食品衛生審議会」臨時委員 (松本俊彦), 厚生労働省医薬・生活衛生局「依存性薬物検討会」構成員 (松本俊彦), 文部科学省生涯学習政策局「青少年を取り巻く有害環境対策の推進 (依存症予防教育推進事業)」技術審査委員 (松本俊彦), 厚生労働省精神・障害保健課「依存症の理解を深めるための普及啓発」に係る企画委員会委員 (松本俊彦), 文部科学省初等中等教育局健康教育食育課「薬物乱用防止広報啓発活動推進協力者会議」委員 (嶋根卓也), 文部科学省初等中等教育局健康教育食育課「学校保健関連委託事業技術審査会」委員, 厚生労働省「依存症に関する調査研究部会」副部会長 (嶋根卓也)

・その他公的委員会

東京地方裁判所登録精神保健判定医 (松本俊彦), 独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員 (松本俊彦), 東京都危険ドラッグ専門調査委員会専門委員 (船田正彦), 福岡県特定危険薬物指定専門委員 (船田正彦), 埼玉県地方薬事審議会薬物指定審査委員会 (嶋根卓也), 精神保健福祉士国家試験委員 (近藤あゆみ)

・研究成果の行政貢献

- ・エチゾラム等の向精神薬指定のための基礎資料となるデータを提供し, 向精神薬乱用・依存防止のための施策に貢献した (厚労省医薬食品局).
- ・「刑の一部執行猶予」制度導入を見越して, 薬物依存者に対する「保護観察所における治療プログラムの開発」, ならびに, 「地域支援ガイドライン」(案)の策定とそのモデル事業の推進に貢献した (法務省保護局).
- ・少年院収容者に対する薬物離脱指導プログラム導入に対して, 「矯正教育プログラム(薬物非行)」策定とその推進に貢献した (法務省矯正局).
 - ・薬物事犯者の再犯防止対策の在り方に関する検討会 (第3回実務者会議) にて, 「民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究」に関する研究成果を情報提供した (法務省)
- ・European Monitoring Centre for Drugs and Drug Addiction (EMCDDA, Lisbon, Portugal) の専門家会議 (2019 Expert meeting on the indicator, prevalence and patterns of drug use) において「薬物使用に関する全国住民調査」に関する研究成果を報告した (EMCDDA, 欧州薬物・薬物依存監視センター)

(5) センター内における臨床的活動

毎週木曜日に薬物依存症外来での診療を行うとともに, デイケアにて薬物再乱用防止のための集団認知行動療法プログラムを実施している (松本俊彦, 近藤あゆみ, 嶋根卓也). また, 毎週火曜日に医療観察法病棟 (8 病棟, 9 病棟) にて物質使用障害治療プログラムの運営をサポートしている (松本俊彦).

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Daisuke Funada, Toshihiko Matsumoto, Yuko Tanibuchi, Yasunari Kawasoe, Satoru akibara, Nobuya Naruse, Shunichiro Ikeda, Takashi Sunami, Takeo Muto, Tetsuji Cho : Changes of clinical symptoms in patients with new psychoactive substance (NPS)-related disorders from fiscal year 2012 to 2014: A study in hospitals specializing in the treatment of addiction. Neuropsychopharmacology Reports. 2019;1-11.doi: 10.1002/npr2.12053.
- 2) Ayumi Takano, Sachiko Ono, Hayato Yamana, Hiroki Matsui, Toshihiko Matsumoto, Hideo Yasunaga, Norito Kawakami : Factors associated with long-term prescription of benzodiazepine: a retrospective cohort study using a health insurance database in Japan. BMJ Open 2019;9:e029641. doi:10.1136/bmjopen-2019-029641
- 3) Ayumi Takano, Yuki Miyamoto, Tomohiro Shinozaki, Toshihiko Matsumoto, Norito Kawakami : Effect of a web-based relapse prevention program on abstinence among Japanese drug users: A pilot randomized controlled trial. Journal of Substance Abuse Treatment 111(2020) : 37-46, 2019."
- 4) 松本俊彦, 高野 歩, 熊倉陽介, 宇佐美貴士, 伴恵理子, 窪田和巳 : 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発:「Voice Bridges Project」. 更生保護学研究 14:3-18, 2019.
- 5) 高井美智子, 川本静香, 山内貴史, 川野健治, 小高真美, 福永龍繁, 松本俊彦, 竹島 正 : 自殺発生から間もない遺族に求められる支援の探索的検討ー心理学的剖検研究における自死遺族の語りからー. 自殺予防と危機介入 39(1) : 124-131, 2019.
- 6) 大澤ひろ, 伊藤絵美, 三浦文華, 風岡公美子, 伴恵理子, 小畑輝海, 松本俊彦 : 更生保護施設における女性覚せい剤乱用者の心理社会的特徴. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 54(3) : 136-155, 2019.
- 7) 大宮宗一郎, 谷渕由布子, 石田恵美, 柳 友里, 山口拓洋, 藤井実, 吉永宏太朗, 林偉明, 関谷希望, 田畑 聡, 白川雄一郎, 堀口忠利, 森田展彰, 斎藤環, 奥村太一, 近藤あゆみ, 松本俊彦 : 精神保健福祉センターにおいて薬物再乱用防止プログラムを提供することの意義ープログラム参加時点の参加者の特徴を踏まえた考察ー. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 54(3) : 120-135, 2019.
- 8) 高木のり子, 太田晴久, 池田朋広, 高塩 理, 松本俊彦 : 多職種チームによる個別介入とワークブックを用いた認知行動療法をワンパッケージ化したプログラムの実践ーうつ病とアルコール問題を併せ持つ者への介入法の検討からー. 精神科治療学 34(11) : 1323-1330, 2019.
- 9) 嶋根卓也, 高橋哲, 竹下賀子, 小林美智子, 高岸百合子, 大宮宗一郎, 近藤あゆみ, 高野洋一, 山本麻由子, 松本俊彦 : 覚せい剤事犯者における薬物依存の重症度と再犯との関連性 : 刑事施設への入所回数からみた再犯. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 54(5) : 211-221, 2019
- 10) 今井航平, 浅見隆康, 松本俊彦 : 依存症家族支援プログラム GIFT の有効性に関する検討. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 54(6) : 247-259, 2020.
- 11) 嶋根卓也, 邱 冬梅, 和田 清 : 日本における大麻使用の現状 : 薬物使用に関する全国住民調査 2017 より, YAKUGAKU ZASSHI, 140(2), 173-178, 2020.
- 12) 山田理沙, 嶋根卓也, 舩田正彦 : レクリエーション・セッティングにおける危険ドラッグ使用パターンの男女別検討, 日本アルコール・薬物医学会雑誌 54(6), 272-285, 2020.
- 13) 谷真如, 高野洋一, 高宮英輔, 嶋根卓也 : 覚せい剤取締法違反により刑事施設に入所した刑の一部執行猶予者の心理・社会的特徴, 犯罪心理学研究, 57(2), 1-15, 2020.

(2) 総説

- 1) 松本俊彦：児童・青年期の非自殺性自傷一嗜癖と自殺との関係から一．児童青年精神医学とその近接領域 60(2), 158-167, 2019.
- 2) 松本俊彦：「ハマる」の来し方・行く末ーアディクション概念の変遷についてー．こころの科学 205 特別企画 行動のアディクション, 18-25, 2019.
- 3) 今村扶美, 松本俊彦：物質使用障害のケースフォーミュレーション．精神療法 増刊第 6 号 ケースフォーミュレーションと精神療法の展開, 161-170, 2019.
- 4) 松本俊彦：市販薬（OTC 薬）乱用・依存の現状と防止に向けた課題．2019 年度 医薬品・医療機器等安全性情報 No.365, 17-21, 2019.
- 5) 松本俊彦：なぜベンゾジアゼピンが問題なのか．治療 特集 不眠症治療宣言！ 101, 1091-1094, 2019.
- 6) 松本俊彦：薬物依存症の地域支援に必要なものとは．罪と罰 56(4), 5-18, 2019.
- 7) 宇佐美貴士, 松本俊彦：10. 一般用医薬品（OTC）の使用障害（解熱鎮痛薬, 鎮咳薬）．精神科治療学 34 増刊号, 35-37, 2019.
- 8) 松本俊彦：薬物依存症の地域支援に必要なものは何か．都市問題 110(11), 4-11, 2019.
- 9) 松本俊彦：【特別講演】刑の一部執行猶予制度以降の薬物依存症地域支援．日本アルコール関連問題学会雑誌 21(1), 143-148, 2019.
- 10) 松本俊彦：V.病態と疾患 10.精神疾患 自殺企図．小児の救急・搬送医療 51 増刊号, 731-734, 2019.
- 11) 松本俊彦：特集 小児科医が知っておきたい精神医学 症状からみた鑑別診断・対応のポイント 自殺企図・自傷行為．小児内科 51(12), 1896-1899, 2019.
- 12) 松本俊彦：全国精神科病院調査から見た大麻関連精神疾患の臨床的特徴ーほかの薬物関連精神疾患との関係から一．週刊医学のあゆみ 271(11), 1193-1199, 2019.
- 13) 松本俊彦：ハーム・リダクションの理念とわが国における可能性と課題．精神神経学雑誌 121(12) : 914-925, 2019.
- 14) 松本俊彦：措置入院における治療・支援の課題～薬物依存症治療を専門とする立場から～．日本精神神経科診療所協会誌ジャーナル 第 23 回（通算 44 回）日本精神神経科診療所協会学術研究会（2017 年度東京大会：大会長神山昭男）特集号, S58-S64, 2019.
- 15) 松本俊彦：児童思春期における自傷行為の理解と援助．小児看護 43(1), 46-51, 2019.
- 16) 松本俊彦：思春期の薬物乱用ー市販薬（OTC 薬）乱用を中心に一．思春期学 37 (4), 323-330, 2019.
- 17) 松本俊彦：薬物依存症からの回復のために医療者は何ができるか．新薬と臨床 69(1), 29-32, 2020.
- 18) 村田雄一, 天野英浩, 杉田智美, 田中優, 渡邊理恵, 森田三佳子, 平林直次, 松本俊彦：薬物依存症治療における作業療法士の試み．新薬と臨床 69(1), 41-46, 2020.
- 19) 松本俊彦：杉山直也：患者の違法薬物使用を知ったとき, どうする？．週刊医学界新聞 3358 号, 3, 2020.
- 20) 松本俊彦：医学的治療が必要なものと, そうでないものとの違いは認識されているのか-DSM における診断カテゴリーの消失と追加．精神科治療学 35(2), 163-169, 2020.
- 21) 松本俊彦：市販薬の依存．治療 プライマリ・ケア医のためのアディクション治療 102(3), 328-332, 2020.
- 22) 沖田恭治, 松本俊彦：大麻使用障害の特徴とその歴史．中毒研究 33(1), 13-19, 2020.
- 23) 竹島正, 山内貴史, 川野健治, 松本俊彦, 高瀬顕功, 島菌進：十代の自殺とその予防．母子保健情報誌 05[特集]母子保健対策における思春期保健の重要性, 9-17, 2020.
- 24) 松本俊彦：特別企画：「依存症が社会に与えるインパクト」に寄せて．ストレス科学 34(3), 153, 2020.

- 25) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか．ストレス科学 34(3)，154-160，2020.
- 26) 嶋根卓也，猪浦智史：わが国における大麻使用の動向-全国規模の疫学調査の結果から，医学のあゆみ 271(11)，1187-1191,2019.
- 27) 嶋根卓也：国内外における大麻使用経験率-疫学調査から-，精神科治療学 35(1)，5-12，2020.1.
- 28) 近藤あゆみ：【薬物依存症からの回復のために-国立精神・神経医療研究センターの取り組み-】薬物使用者の家族を対象とした相談支援，新薬と臨床，69（1），37-40，2020.
- 29) 近藤あゆみ：【薬物乱用のトレンド：大麻をめぐる諸問題】薬物使用者の家族に対する相談支援の意義，医学のあゆみ，271（11），1227-1230，2019.
- 30) 近藤あゆみ：【精神科臨床における家族への支援と働きかけ-家族心理教育-】薬物問題を抱える家族に対する相談支援，臨床精神医学，48（6），737-741，2019.
- 31) 近藤あゆみ：薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム，日本アルコール関連問題学会雑誌，21（1），108-110，2019.
- 32) 引土絵未：薬物依存症と就労支援．臨床精神医学 48(11)，1285-1289，2019.
- (3) 著書
- 1) 松本俊彦，鶴身孝介 監修：Newton 別冊 脳とは何か ここまで解明された！脳研究の最前列，ニュートンプレス，東京，pp140-153，2019.
- 2) 松本俊彦：12 社会心理学的疾患 薬物乱用．小児科診療ガイドラインー最新の診療指針ー第4版 編集：五十嵐隆，総合医学社，東京，pp687-691，2019.
- 3) 井原裕，斎藤環，松本俊彦 監修：こころの科学 メンタル系サバイバルシリーズ 知的障害の子をもつお母さんお父さんの笑顔のために．日本評論社，東京，pp1-136，2019.
- 4) 松本俊彦：6 子供の自傷行為及び自殺企図の基礎知識．新訂 養護教諭が行う健康相談・健康相談活動の理論と実践，ぎょうせい，東京，pp67-72，2019.
- 5) 松本俊彦：思うに任せぬ現実を持ちこたえる．医師のためのアンガーマネジメント，日本医事新報社，東京，pp90-92，2019.
- 6) 松本俊彦：20 認知行動療法．アディクションサイエンス 依存・嗜癖の科学，朝倉書店，東京，pp218-226，2019.
- 7) 松本俊彦：「やりたい」「やってしまった」「やめられない」ー薬物依存症の心理．「助けて」が言えない SOS を出さない人に支援者は何ができるか，日本評論社，東京，pp54-67，2019.
- 8) 松本俊彦 編集：「助けて」が言えない SOS を出さない人に支援者は何ができるか，日本評論社，東京，pp1-263，2019.
- 9) 松本俊彦：特徴をふまえ，子どもの自殺予防を．2019 子ども白書，かもがわ出版，京都，pp110-111，2019.
- 10) 松本俊彦：薬物依存症と治療プログラム，今日の治療指針 私はこう治療している，医学書院，東京，pp1055-1056，2020.
- 11) 松本俊彦：第4章 薬物使用障害に対する外来治療プログラム「SMARPP」．物質使用障害の治療 多様なニーズに応える治療・回復支援，金剛出版，東京，pp73-88，2020.
- 12) 松本俊彦：第7章 アディクションと精神保健．精神看護学 精神保健 第5版 半澤節子，太田保之，藤田長太郎 編著，医歯薬出版株式会社，東京，164-185，2020.
- 13) 三森みさ 著 今成知美，島内理恵，田中紀子，松井由美，松本俊彦，村瀬華子 監修：だらしないうちじゃなくて依存症でした．時事通信社，東京，pp1-272，2020.
- 14) 嶋根卓也：「NO」と言えない子どもたちー酒・タバコ・クスリと援助希求．「助けて」が言えない SOS を出さない人に支援者は何ができるか（松本俊彦編），日本評論社，pp92-101，2019.
- 15) 嶋根卓也：第8章 性的マイノリティ・HIV 感染者の理解と支援．物質使用障害の治療 多様なニーズに応える治療 回復支援（松本俊彦編著），金剛出版，東京，pp141-155，2020.
- 16) 近藤あゆみ：社会復帰，編著 宮田 久嗣，高田 孝二他，アディクションサイエンス：依存・嗜癖の科学，朝倉書店，pp257-262，2019.

- 17) 引土絵未: 第Ⅱ部 3 章アディクションからの回復と治療共同体. 第Ⅳ部 1 章私にとっての治療共同体エンカウンター・グループ. 藤岡淳子編著: 治療共同体実践ガイド ト라우マティックな共同体から回復の共同体へ, 金剛出版, pp95-111, 201-211, 2019.
- 18) 引土絵未: 物質をやめた後の情緒的つながりの回復のために 治療共同体エンカウンター・グループ. 松本俊彦編著 物質使用障害治療の最前線, 金剛出版, pp169-182, 2019.

(4) 研究報告書

- 1) 松本俊彦: 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業(精神障害分野) 再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究(研究代表者 松本俊彦) 総括・分担研究報告書: pp13-57, 2020.
- 2) 松本俊彦, 小松崎智恵, 成瀬暢也, 古川愛造, 川端俊貴, 藤田 治, 梅本愛子, 橋本 望, 加賀谷有行, 横山理恵, 船田大輔, 村上真紀, 宇佐美貴土, 沖田恭治, 谷渕由布子, 嶋根卓也: 大麻依存症の患者を対象とした病院調査. 令和元年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業(研究代表者 嶋根卓也) 総括・分担研究報告書: pp121-150, 2020.
- 3) 船田正彦: 危険ドラッグの検出技術開発に関する研究. 令和元年度精神・神経疾患研究開発費「危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究(主任研究者: 船田正彦)」令和元年度実績報告書. 2020.
- 4) 船田正彦: 危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究. 令和元年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究(研究代表者: 船田正彦)」令和元年度総括・分担研究報告書. pp1-17, 2020.
- 5) 船田正彦: 合成カンナビノイドの中枢作用解析法に関する研究. 令和元年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究(研究代表者: 船田正彦)」令和元年度分担研究報告書. pp18-27, 2020.
- 6) 嶋根卓也: 薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究. 令和元年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」(研究代表者: 嶋根卓也) 令和元年度総括・分担研究報告書
- 7) 嶋根卓也, 猪浦智史, 邱 冬梅, 和田 清: 薬物使用に関する全国住民調査(2019年〈第13回飲酒・喫煙・くすりの使用についてのアンケート調査〉). 令和元年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」(研究代表者: 嶋根卓也) 令和元年度総括・分担研究報告書 pp19-120, 2020.3.
- 8) 嶋根卓也: 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究(ダルク追っかけ調査 2019). 厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業(精神障害分野) 再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究(研究代表者 松本俊彦) 総括・分担研究報告書: pp59-80, 2020.3.
- 9) 嶋根卓也: 令和元年度厚生労働行政推進調査事業費補助金厚生労働科学特別研究事業「一般用医薬品の適正使用の一層の推進に向けた依存性の実態把握と適切な販売のための研究(研究代表者: 嶋根卓也)」総括・分担研究報告書, 2020.3.
- 10) 嶋根卓也, 猪浦智史: 令和元年度厚生労働行政推進調査事業費補助金厚生労働科学特別研究事業「一般用医薬品の適正使用の一層の推進に向けた依存性の実態把握と適切な販売のための研究

(研究代表者：嶋根卓也)」総括研究報告・分担研究報告書，pp2-10，2020.3.

- 11) 嶋根卓也，猪浦智史，北垣邦彦，和田 清，松本俊彦：薬物使用と生活に関する全国高校生調査 (2018)．厚生労働省依存症に関する調査研究事業 わが国の青少年における薬物乱用・依存に関する実態調査およびデータ・アーカイブに関する研究「薬物使用と生活に関する全国高校生調査 2018」(研究代表者：嶋根卓也) 令和元年度研究報告書，2020.3.
- 12) 嶋根卓也：新規危険ドラッグの乱用実態把握のための効果的な調査手法の確立．令和元年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究 (研究代表者：船田正彦)」令和元年度総括・分担研究報告書．Pp66-81，2020.
- 13) 近藤あゆみ，鶴岡晴子，大上裕之，加賀谷有行，酒井ルミ，佐藤嘉孝，松岡明子，竹之内薫，森由貴：精神保健福祉センターにおける家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究，令和元年度厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」(研究代表者：嶋根卓也)，総括・分担研究報告書，pp219-230，2020.3.
- 14) 猪浦智史，和田 清，嶋根卓也：薬物使用のモニタリング調査に関する国際比較研究 (2019 年)．令和元年度厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」(研究代表者：嶋根卓也) 分担研究報告書，pp181-217，2020.3.
- 15) 引土絵未，喜多村真紀，岡崎重人，加藤 隆，山本 大，山崎明義：民間支援団体における回復プログラムの開発研究．令和元年度厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」(研究代表者：嶋根卓也)，総括・分担研究報告書，pp231-246，2020.3.

(5) 翻訳

- 1) リサ・M・ナジャヴィッツ (著)，近藤あゆみ・松本俊彦 (監訳)，浅田仁子 (訳)：トラウマとアディクションからの回復 ベストな自分を見つけるための方法．金剛出版，東京，2020.

(6) その他

- 1) 松本俊彦：精神科診察室—人生におけるダグアウト席．週刊医事新報社 4960 : 3，2019.
- 2) 松本俊彦：薬物依存者の家族に必要なのは「タフラブ (tough love)」．BEN IS BACK, 15, 2019.
- 3) 松本俊彦：依存症，かえられるもの／かえられないもの 5 アルファロメオ狂騒曲．みすず 683 : 2-12，2019.
- 4) 愛甲修子，伊藤研一，内藤新祐，大迫久美恵，大澤功，小川正明，栗田篤志，佐川眞太郎，清水邦光，竹島正，本田哲也，佐藤幹夫：【松本俊彦「薬物依存症」を読む】「人間と発達を考える会」より 松本俊彦氏を囲んで 薬物依存症の治療に大事なこと．編集工房飢餓陣営 49 : 26-76，2019.
- 5) 松本俊彦：薬物依存症者の適切な治療を目指して—薬物依存症センターの取り組み—．ジャフバプレス 146 : 4，2019.
- 6) 松本俊彦：ブックファースト新宿店回転 11 周年記念 名著百選 2019 私が今年，出会った一冊．ブックファースト新宿店 : 4，2019.
- 7) 松本俊彦，信田さよ子：深堀り対談 アディクションアプローチとハームリダクション．Be ! 137 : 48-58，2019.
- 8) 松本俊彦：インタビュー 実際に会っていれば，「人間やめますか」なんて言わない．Be ! 増刊号

- 28 : 33-38, 2019.
- 9) 松本俊彦, 菊池真理子: 薬物依存症ってなんですか?. Elegance イブ 2020 年 1 月号 441-453, 2019.
 - 10) 松本俊彦: 若者の市販薬乱用について. 週刊日本医事新報 4993 : 57, 2020.
 - 11) 松本俊彦: 10 代で急増する市販薬乱用問題. 少年写真新聞 高校保険ニュース 680 号 : 10-11, 2020.
 - 12) 松本俊彦: ”自己治療仮説”に基づき薬物依存症治療の在り方示す. Medical Tribune 53(4) : 11, 2020.
 - 13) 松本俊彦: 依存症, かえられるもの／かえられないもの 7 カフェイン・カンタータ. みすず 62 (2) : 2-13, 2020.
 - 14) 嶋根卓也: ダルク追っかけ調査 2 年後の追跡率 9 割! 完全断薬率 6 割超!. 季刊 Be!135 号, 2019.6.
 - 15) 嶋根卓也: 一薬物乱用の最新動向一増加する大麻に注意を. 体と心 保健総合大百科〈中・高校編〉2019, 少年写真新聞社, p34, 2019.4.
 - 16) 北垣邦彦, 嶋根卓也 (他 11 名): 薬剤師が小学校で行う喫煙防止教育.(教材). 東京薬科大学薬学部社会薬学研究室, 2019.10.
 - 17) 北垣邦彦, 嶋根卓也 (他 11 名): 薬剤師ならではの「薬物乱用防止教室」(教材). 東京薬科大学薬学部社会薬学研究室, 2019.10.
 - 18) 嶋根卓也: 「ダメ, ゼッタイ」で終わらせない 地域の薬局・薬剤師が担うべき薬物乱用防止への役割. Web Excellent Pharmacy (第 8 回), 大日本住友製薬 医療関係者向けサイト, 2020.2.4.
 - 19) 北垣邦彦, 嶋根卓也, 富澤正夫, 小出彰宏, 新井田寛, 小林恵美: 保護者向け薬物乱用防止パンフレット「ただ一度の過ちが子どもの未来を奪います」一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会, 2020.1.
 - 20) 西岡伸紀, 北垣邦彦, 北原徹也, 小林沙友里, 山藤一也, 嶋根卓也, 関根幸枝, 塚本武, : 令和元年度「喫煙, 飲酒, 薬物乱用防止教育に関する指導参考資料 (小学校編). 公益財団法人日本学校保健会, 2020.3.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 松本俊彦: 分科会Ⅲ 話題提供】治療者の立場から一調査研究を踏まえて. 日本刑法学会第 97 回大会, 東京, 2019.5.25.
- 2) 松本俊彦: 【シンポジウム】自死に至る精神医学的機序と自殺予防. 日本賠償科学会第 74 回研究会, 東京, 2019.6.1.
- 3) 松本俊彦: 【シンポジウム 14】人はなぜ薬物依存症になるのかーケミカルコーピングとオピオイド鎮痛薬. 第 13 回日本緩和医療薬学会年会, 千葉, 2019.6.2.
- 4) 松本俊彦: 【教育講演 2】自分を傷つけずにはいられない!ー自傷行為の理解と援助. 第 147 回東北連合産科婦人科学会総会・学術講演会, 山形, 2019.6.15.
- 5) 松本俊彦: 【シンポジウム 55】麻薬中毒者届出制度の意義と課題. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 6) 松本俊彦: 【招聘公演 1】人はなぜ薬物依存症になるのか?. 日本ペインクリニック学会 第 53 回大会, 熊本, 2019.7.18.
- 7) 松本俊彦: 【ランチョンセミナー1】向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. 第 4 回日本中毒学会総会・学術集会, 埼玉, 2019.7.20.
- 8) 松本俊彦: 【シンポジウム 5】薬物依存症臨床から見たカフェイン関連精神障害. 第 41 回日本中毒学会総会・学術集会, 埼玉, 2019.7.21.

- 9) 松本俊彦：【ワークショップ 29】自傷行為の理解と援助．日本認知・行動療法学会第 45 回大会，愛知，2019.9.1.
- 10) 松本俊彦：【分科会 1 指定発言】回復のプロセスに寄り添うリハビリテーション～「気づき」や「つながり」を取り戻す豊かな場づくりを考える．2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，北海道，2019.10.4.
- 11) 松本俊彦：【シンポジウム 10】ハームリダクションは底つき理論を終焉させるのか．2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，北海道，2019.10.5.
- 12) 松本俊彦：【ランチョンセミナー 3 座長】変遷する肝細胞癌の背景～増加する非 B 非 C 幹細胞癌の背景と肝臓スクリーニングの確立に向けて～．2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，北海道，2019.10.6.
- 13) 松本俊彦，大塚達以：【シンポジウム 5 座長】思春期・青年期の自殺対策．第 27 回日本精神科救急学会学術総会，宮城，2019.10.19.
- 14) 松本俊彦：【テーマセッション J】覚せい剤事犯者の社会復帰に向けた地域の役割ー司法・処遇・支援の各視点からー．日本犯罪社会学会第 46 回大会，千葉，2019.10.20.
- 15) 松本俊彦：【特別講演】人はなぜ依存症になるのか～薬物依存症からの回復に必要なもの．第 23 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2019.11.3.
- 16) 松本俊彦：【セッション I】日本における薬物問題の現状と対策の課題．日仏医学コロック 2019，東京，2019.11.9.
- 17) 松本俊彦：【教育講演 1】薬物依存の現状と治療について．日本旅行医学会第 12 回東京大会，東京，2019.11.17.
- 18) 松本俊彦：【教育講演 1】人はなぜ薬物依存症になるのか？．第 26 回日本行動医学会学術総会，東京，2019.12.6.
- 19) 松本俊彦：【市民公開講座】本当の依存症の話をしよう～つながりの病としての依存症～．第 26 回関西アルコール関連問題学会奈良大会，奈良，2019.12.22.
- 20) 舩田正彦，富山健一：【シンポジウム】大麻成分の有害作用に関する研究：依存性と細胞毒性．第 49 回日本神経精神薬理学会，福岡，2019.10.12.
- 21) 富山健一，舩田正彦：【シンポジウム】国内外における大麻規制の現状：医療応用と嗜好品．第 49 回日本神経精神薬理学会，福岡，2019.10.12.
- 22) 舩田正彦：【シンポジウム】薬物乱用に関する最新海外事情：大麻と危険ドラッグをめぐる諸問題．日本旅行医学会 2019 年 第 12 回 東京大会，東京，2019.11.7.
- 23) 舩田正彦，富山健一：薬物乱用の変遷：危険ドラッグから大麻へ．第 29 回神経行動薬理若手研究者の集い，横浜，2020.3.15.
- 24) 富山健一，舩田正彦：【シンポジウム】大麻および関連化合物の依存性と細胞毒性．第 29 回神経行動薬理若手研究者の集い，横浜，2020.3.15.
- 25) 嶋根卓也：【シンポジウム】覚せい剤事犯者の入所度数と薬物依存との関連．シンポジウム 9 覚せい剤事犯者の理解とサポート．第 54 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，北海道，2019.10.5.
- 26) 嶋根卓也：【シンポジウム】薬物使用と生活に関する全国高校生調査 2018．シンポジウム 18 依存症の実態調査：依存症対策全国センター平成 30 年度成果報告，第 54 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，北海道，2019.10.6.
- 27) 嶋根卓也：学校薬剤師による「ダメ，ゼッタイ」で終わらせない薬物乱用防止教室．第 52 回日本薬剤師会学術大会 分科会 19「薬物乱用防止教室の原点にかえる」，山口，2019.10.14.
- 28) 近藤あゆみ：【教育講演】依存症者の家族が抱える困難と相談支援の意義，第 30 回日本嗜癖行動学会 秋田大会，秋田，2019.11.23.
- 29) 近藤あゆみ，嶋根卓也，高橋哲，竹下賀子，小林美智子，高岸百合子，大宮宗一郎，高野洋一，

山木麻由子, 松本俊彦:【シンポジウム】全国調査からみた覚せい剤事犯者の性差, 第54回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 北海道, 2019.10.5.

- 30) 近藤あゆみ, 大嶋榮子, 上岡陽江, 加茂登志子, 菊池美名子, 伴恵理子, 宮地尚子, 森田展彰, 山田幸子, 嶋根卓也, 松本俊彦:【シンポジウム】薬物問題を抱えた女性にとって必要な治療や支援とは, 第54回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 北海道, 2019.10.6.

(2) 一般演題

- 1) Funada M., Tomiyama K.: Effects of cannabinoids on neuronal activity in mouse cerebellar cultures assessed using multi-electrode array techniques. College on problems of drug dependence (CPDD) 81th Annual scientific meeting, San Antonio, TX, USA., 2019.6.11-16.
- 2) Funada M.: The harmful effects of new psychoactive substances (NPS): assessment of drug abuse liability and cytotoxicity. International Conference on New Psychoactive Substances, Taipei, TAIWAN. 2019.7.11-15.
- 3) Shimane T. Increase Cannabis Users in Japan: Findings from nationwide general population survey on drug use in 2017. 2019 Expert meeting on the indicator, prevalence and patterns of drug use, EMCDDA, Lisbon, Portugal, 2019.5.28-29.
- 4) Shimane T. Misuse of medicines among patients with substance use disorders in Japan: findings from Nationwide Mental Hospital Survey. Problem Drug Use (PDU) 2019 Expert meeting, EMCDDA, Lisbon, Portugal, 2019.5.27-28.
- 5) Shimane T., Tachimori H, Qiu D., Wada K.: Increase cannabis users in Japan: findings from nationwide general population survey on drug use 2017. 11th Thailand Substance Abuse Conference. International Influence on Drug Abuse, Bangkok, Thailand, 2019.8.7-9.
- 6) Inoura S., Shimane T., Kitagaki K., Tachimori H, Qiu D., Wada K.: Changing Trends in Substance Use among Japanese Adolescents from Nationwide Junior High School Survey. 11th Thailand Substance Abuse Conference. International Influence on Drug Abuse, Bangkok, Thailand, 2019.8.7-9.
- 7) Shimane T. Drug policy and epidemiology of drug use in Japan: results from nationwide surveys, Taiwan and Japan friendship seminar on Substance use and HIV/AIDS treatment, Tokyo, Japan, 2019.10.29.
- 8) 松本俊彦: 薬物依存症—規制強化か, 回復支援か. 第30回日本医学会総会 2019 中部, 愛知, 2019.4.28.
- 9) 真栗里仁, 村瀬華子, 松下幸生, 松本俊彦, 樋口進: (ポスター) 依存症対策全国センターへ全ての依存症者が等しく治療を受けられる時代を目指して〜. 第115回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-21.
- 10) 朝倉崇文, 常岡俊昭, 寺岡玲奈, 緒方慶三郎, 蒲生裕司, 大石 智, 松本俊彦, 宮岡 等: (ポスター) 大学病院における嗜癮障害患者に対する集団療法の特徴 (北里大学東病院の場合). 第115回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 11) 常岡俊昭, 朝倉崇文, 小野英里子, 横山佐知子, 川合秀明, 岩見有里子, 長塚雄大, 山田真理, 松本俊彦, 岩波明: (ポスター) 大学病院における嗜癮障害患者に対する集団療法の特徴 (昭和大学附属烏山病院の場合). 第115回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 12) 猪浦智史, 嶋根卓也, 北垣邦彦, 和田 清, 松本俊彦: 全国の高校生における両親の飲酒頻度と生徒の暴飲の関連について. 2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 北海道, 2019.9.10.5.
- 13) 喜多村真紀, 嶋根卓也, 小林美智子, 近藤あゆみ, 伴恵理子, 大宮宗一郎, 高岸百合子, 松本俊彦: 覚せい剤の早期使用と小児期逆境体験との関連: 全国の刑務所における「薬物事犯者に関する

る研究」より．2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，北海道，2019.10.5.

- 14) 山田理沙，嶋根卓也，舩田正彦：レクリエーション・セッティングにおける危険ドラッグ使用の実態調査．2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，北海道，2019.10.5.
- 15) 引土絵未，岡崎重人，加藤 隆，山本 大，山崎明義，松本俊彦，嶋根卓也：民間回復支援施設における治療共同体エンカウンター・グループの効果について．2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，北海道，2019.10.5.
- 16) 山崎明義，松本俊彦，嶋根卓也：民間回復支援施設における治療共同体 エンカウンター・グループの効果について．2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，北海道，2019.10.5.
- 17) 引土絵未，小関清之，池戸悦子，岡村真紀，加藤雅江，神田知正，齊藤健輔，佐古恵利子，稗田幸則，山本由紀：依存症関連問題における地域別課題明確化のためのアンケート調査～支部長アンケート報告～．第 55 回公益社団法人日本精神保健福祉士協会全国大会第 18 回日本精神保健福祉士学会学術集会，名古屋国際会議場，2019.8.31.

(3) 研究報告会

- 1) 松本俊彦：保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究．平成 31 年度厚生労働科学研究費補助金「再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究（研究代表者：松本俊彦）」研究成果報告会，東京，2020.3.13.
- 2) 松本俊彦：大麻依存症の患者を対象とした病院調査．平成 31 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」研究成果報告会，東京，2020.3.13.
- 3) 嶋根卓也：民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究（ダルク追っかけ調査 2019）．厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業（精神障害分野）再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究（研究代表者 松本俊彦）研究成果報告会，東京，2020.3.13.
- 4) 嶋根卓也：薬物使用に関する全国住民調査（2019 年〈第 13 回飲酒・喫煙・くすりの使用についてのアンケート調査〉．令和元年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」（研究代表者：嶋根卓也）研究成果報告会，東京，2020.3.13.
- 5) 近藤あゆみ：精神保健福祉センターにおける家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究，令和元年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」（研究代表者：嶋根卓也）研究成果報告会，東京，2020.3.13.
- 6) 猪浦智史：薬物使用のモニタリング調査に関する国際比較研究（2019 年）．令和元年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）研究成果報告会．東京，2020.3.13.

(4) その他

C. 講演

- 1) 松本俊彦：自分を傷つけないにはいられない！自傷行為の理解と援助．登校拒否を考える会・佐倉主催 30 周年記念講演会，千葉，2019.4.7.
- 2) 松本俊彦：精神科医の立場から見る精神症状．大塚製薬株式会社主催 Japanese Neurologist Parkinson's Disease Seminar．東京，2019.4.16.
- 3) 松本俊彦：新しい薬物依存症の理解と援助．ヤンセンファーマ株式会社主催 Addiction Psychia

- try Seminar, 愛知, 2019.4.17.
- 4) 松本俊彦: 薬物依存症からの回復に必要なもの. 大塚製薬株式会社主催 第14回八王子地域精神医療薬学研究会, 東京, 2019.4.24.
 - 5) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために精神科医にできること. 多摩田園臨床精神医学研究会 吉富薬品株式会社 田辺三菱製薬株式会社共催 第56回多摩田園臨床精神医学研究会, 東京, 2019.5.17.
 - 6) 松本俊彦: 子どもの自傷行為の理解と援助. 日本学校教育相談学会 愛知支部主催 平成31年度日本学校教育相談学会愛知支部総会, 愛知, 2019.5.19.
 - 7) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. MSD株式会社主催 Insomnia Symposium～これからの不眠症治療を考える～. 東京, 2019.5.20.
 - 8) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. 徳島県医師会 MSD株式会社主催 徳島県不眠症セミナー～これからの不眠症治療を考える～, 徳島, 2019.5.21.
 - 9) 松本俊彦: 依存症について. 社会福祉法人 桜ヶ丘社会事業協会 桜ヶ丘記念病院主催 依存症についてをテーマとした講演会, 東京, 2019.5.24.
 - 10) 松本俊彦: 依存症からの回復と居場所. 公益社団法人 埼玉県断酒新生会主催 50周年記念大会, 埼玉, 2019.5.26.
 - 11) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. 公益社団法人中央区医師会主催 中央区医師会学術講演会, 東京, 2019.5.29.
 - 12) 松本俊彦: 差別と偏見・排除のない社会を～私たちは薬物健康障害対策を求めます. NPO 法人全国薬物依存症者家族会連合会主催 やっかれんフォーラム, 神奈川, 2019.6.9.
 - 13) 松本俊彦: 薬物対策には何が必要なのか. 東京大学大学院医学系研究科主催 公共健康医学専攻授業 2019年度講義「精神保健学Ⅰ」, 東京, 2019.6.25.
 - 14) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない!～自傷行為の理解と援助～. 一般財団法人 東京私立中学高等学校協会 東京私学教育研究所主催 学校安全・健康教育研究会(学校保健)講演会, 東京, 2019.7.3.
 - 15) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために精神科医にできること. MSD株式会社主催 第8回自殺関連行動ならびにアディクションからの回復研究会, 京都, 2019.7.6.
 - 16) 松本俊彦: 青少年の薬物乱用防止の為に, 臨床医ができること. 日本女医会神奈川支部主催 日本女医会神奈川支部総会講演会, 神奈川, 2019.7.7.
 - 17) 松本俊彦: 薬物依存症からの回復に必要なもの うつ・自殺. 大塚製薬株式会社大阪支店主催 依存症治療を考える会, 大阪, 2019.7.9.
 - 18) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか～回復のために必要なもの～. 中国地区6大学精神科懇話会 MeijiSeika ファルマ株式会社主催 中国地区6大学精神科懇話会, 広島, 2019.7.13.
 - 19) 松本俊彦: 薬物依存について. 公益社団法人 松原病院主催 保健医療に関する研修会特別講演会, 福井, 2019.7.15.
 - 20) 松本俊彦: PWID 治療の現状と課題. アッヴィ合同会社主催 Medical Discussion 勉強会, 東京, 2019.7.16.
 - 21) 松本俊彦: 依存症治療について. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター主催 第9回国立精神・神経医療研究センター精神医学サマーセミナー, 東京, 2019.7.27.
 - 22) 松本俊彦: 薬物依存症からの回復に必要なこと. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター主催 NCNP 市民公開講座「薬物依存症からの回復とは何か」, 東京, 2019.7.28.
 - 23) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのかー基礎知識とハームリダクションー. 株式会社 朝日カルチャーセンター主催 講座, 東京, 2019.7.31.
 - 24) 松本俊彦: 回復を応援する共生社会とは. AIDS 文化フォーラム主催 第26回 AIDS 文化フォーラム inYOKOHAMA, 神奈川, 2019.8.2.
 - 25) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. MSD株式会社主催 Sleep F

- orum, 宮城, 2019.8.3.
- 26) 松本俊彦: 依存症とはなにか. 一般社団法人 NADA JAPAN 主催 NADA JAPAN3 周年記念カンファレンス, 東京, 2019.8.4.
 - 27) 松本俊彦: 依存症患者の自立生活と居住定着においての必要な支援とは. 特定非営利活動法人 東京ソテリア主催 依存症者に対する居住定着支援モデル事業講演会, 東京, 2019.8.6.
 - 28) 松本俊彦: 薬物依存症予防教育について. 公益社団法人 ギャンブル依存症問題を考える会主催 「ダメ絶対」 だけではない依存症予防教室モデル授業, 石川, 2019.8.7.
 - 29) 松本俊彦: 薬物依存症予防教育について. 公益社団法人 ギャンブル依存症問題を考える会主催 「ダメ絶対」 だけではない依存症予防教室モデル授業, 岡山, 2019.8.14.
 - 30) 松本俊彦: もしも「死にたい」と言われたら. 福井大学 FD・SD 研究会主催 第7回学生支援講演会, 福井, 2019.8.23.
 - 31) 松本俊彦: 子ども・若者の SOS に気づくために～自分を傷つけずにはいられない～. 鶴岡市自殺予防対策ネットワーク会議 鶴岡市健康福祉部主催 鶴岡市こころ元気アップセミナー, 山形, 2019.8.25.
 - 32) 松本俊彦: 薬物依存症予防教育について. 公益社団法人 ギャンブル依存症問題を考える会主催 「ダメ絶対」 だけではない依存症予防教室モデル授業, 高知, 2019.8.30.
 - 33) 松本俊彦: 自死・自殺に本気で向き合う. 特定非営利活動法人 京都自死・自殺相談センター主催 自死・自殺に本気で向き合う公開シンポジウム 比較社会漂流記, 京都, 2019.9.7.
 - 34) 松本俊彦: ハームリダクションとは何か?. 認定 NPO 法人 世界の医療団主催 HARM REDUCTION SYMPOJUM TOKYO 2019, 東京, 2019.9.8.
 - 35) 松本俊彦: 自傷行為の理解と対応. 青森県教育委員会主催 令和元年度「心の健康に関する教育」, 青森, 2019.9.10.
 - 36) 松本俊彦: 依存症治療について. 大塚製薬株式会社大阪支店主催 学術講演会～Autumn Forum～, 大阪, 2019.9.18.
 - 37) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか. 大日本住友製薬株式会社主催 第8回 HAMAConference, 神奈川, 2019.9.19.
 - 38) 松本俊彦: 【基調講演】人はなぜ依存症になるのか. 認定特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構 (コンボ) 主催 リカバリー全国フォーラム, 東京, 2019.9.21.
 - 39) 松本俊彦: 日本におけるハームリダクションの可能性と課題. 公益財団法人たばこ総合研究センター 日本たばこ産業株式会社主催 識者との交流・懇話会, 東京, 2019.9.25.
 - 40) 松本俊彦: これからの依存症予防教育～依存症は回復可能な問題～. 京都府健康福祉部薬務課主催 AIDS 文化フォーラム in 京都プレイベント, 東京, 2019.9.29.
 - 41) 松本俊彦: 新しい薬物依存症の理解と援助. ヤンセンファーマ株式会社主催 三河地区精神科講演会, 愛知, 2019.10.11.
 - 42) 松本俊彦: 自傷・死にたい・暴力などの対応のポイント. bpd 家族会主催 第三回スペシャル講座・定例会, 東京, 2019.10.14.
 - 43) 松本俊彦: 精神科処方薬の乱用・依存について. 昭島市役所保健福祉部主催 昭島市精神保健福祉学習会, 東京, 2019.10.16.
 - 44) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. MSD 株式会社主催 第5回城南 Sleep Forum, 東京, 2019.10.17.
 - 45) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. MSD 株式会社主催 愛知東部不眠研究会 2019, 愛知, 2019.10.23.
 - 46) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない. 国立病院機構琉球病院主催 沖縄県子どもの心の診療ネットワーク事業講演会, 沖縄, 2019.10.27.
 - 47) 松本俊彦: 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けて. 厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課主催 令和元年度再乱用防止対策講習会, 富山, 2019.10.29.

- 48) 松本俊彦：向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること．公益社団法人豊島区医師会地域医療部 MSD 株式会社共催 豊島区医師会精神科医療地域連携講演会，東京，2019.11.1.
- 49) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課中毒係主催 令和元年度再乱用防止対策講習会，千葉，2019.11.5.
- 50) 松本俊彦：思春期における自傷行為について．小田原・足柄下地区中学校研究会主催 講演会，神奈川，2019.11.8.
- 51) 松本俊彦：薬物依存について．ニプロ株式会社主催 第 53 回地域精神病院薬剤師研究会，東京，2018.11.8.
- 52) 松本俊彦：現代の思春期青年期の自傷・依存行動．明治安田こころの健康財団主催 子ども・専門講座 5 現代の思春期青年期を考える，東京，2019.11.10.
- 53) 松本俊彦：依存症とともに生きる．特定非営利活動法人東京ソテリア主催 依存症患者に対する居住定着支援モデル事業講演会，東京，2019.11.10.
- 54) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課中毒係主催 令和元年度再乱用防止対策講習会，青森，2019.11.13.
- 55) 松本俊彦：処方薬乱用・依存を防ぐために医療者に何ができるか．医療法人社団宏彩会主催 東京都精神科医療地域連携事業講演会，東京，2019.11.14.
- 56) 松本俊彦：思春期と自殺．一般社団法人日本家族計画協会主催 2019 年度思春期保健セミナー，東京，2019.11.15.
- 57) 松本俊彦：自分を傷つけること．一般社団法人ウィメンズヘルスリテラシー協会主催 講演会，東京，2019.11.15.
- 58) 松本俊彦：もしも「死にたい」と言われたら．特定非営利活動法人東京多摩いのちの電話主催 2019 年度東京多摩いのちの電話公開講演会，東京，2019.11.17.
- 59) 松本俊彦：子どもたちの孤立とどう向き合うか．SHIP 新宿ヘルスケアインキュベーションパーク主催 講演会，東京，2019.11.20.
- 60) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか？．大塚製薬株式会社主催 学術講演会，東京，2019.11.27.
- 61) 松本俊彦：薬物依存症からの回復のために必要なこと．一般社団法人道北地方物質使用障害研究会主催 道北リカバリーセミナー Polar Bears5 周年記念フォーラム，北海道，2019.11.29.
- 62) 松本俊彦：物質依存の理解と支援．関東甲信越ブロック精神保健福祉センター連絡協議会，東京都立精神保健福祉センター主催 令和元年度関東甲信越ブロック精神保健福祉センター連絡協議会，東京，2019.12.6.
- 63) 松本俊彦：【基調講演】薬物依存症の理解と支援に向けて～回復支援につなげるために～．福岡矯正管区主催 令和元年度九州ブロック再犯防止シンポジウム，福岡，2019.12.16.
- 64) 松本俊彦：青年期の依存症．東京都立小児総合医療センター主催 東京都子供の心診療支援拠点病院事業「児童青年期臨床精神医療講座」（応用編），東京，2019.12.18.
- 65) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのかーその理解と回復支援ー．目白大学心理カウンセリングセンター主催 公開講座，東京，2019.12.21.
- 66) 松本俊彦：アルコールとうつ，自殺 ～死のトライアングルを防ぐために．一般社団法人 日本うつ病センター主催 平成 31 年度「若年勤労者のメンタルヘルスを向上させるために」シンポジウム，東京，2020.1.10.
- 67) 松本俊彦：本当の依存症の話をしよう．和歌山県精神保健福祉協会主催 2019 年度和歌山県精神保健福祉協会県民学習会，和歌山，2020.1.12.
- 68) 松本俊彦：自傷・自殺する若者たち．愛知学院大学心身科学部主催 令和 2 年度心身科学部講演会，愛知，2020.1.17.
- 69) 松本俊彦：依存症に正しく向き合うー予防，治療，回復ー．公益財団法人東京都医学総合研究所主催 2019 年度第 7 回都民講座，東京，2020.1.18.

- 70) 松本俊彦：アディクション看護。日本精神科看護協会主催 アディクション看護講演会，群馬，2020.1.22.
- 71) 松本俊彦：向精神薬の乱用・依存を防ぐために臨床医にできること。参天製薬株式会社主催 東京都耳鼻咽喉科医会学術講演会・講習会，東京，2020.1.25.
- 72) 松本俊彦：回復を応援し，受け入れる社会へ。厚生労働省社会援護局障害保健福祉部主催 依存症の理解を深めるための普及啓発事業，東京，2020.1.26.
- 73) 松本俊彦：薬物依存について。医療法人社団翠会八幡厚生病院主催 九州地区合同勉強会第2回精神医療懇話会，福岡，2020.1.30.
- 74) 松本俊彦：自傷 やめたい！でもやめられない人たちへ～回復のヒントを一緒に考えてみませんか～。東大阪市保健所主催 こころの健康づくり講演会，大阪，2020.2.1.
- 75) 松本俊彦：薬物乱用防止教育で伝えたいこと。昭和薬科大学主催 薬剤師の生涯学習のための研修講座。東京，2020.2.2.
- 76) 松本俊彦：薬物依存症の理解と援助。西山クリニック主催 名古屋市依存症支援者研修（薬物依存症）～薬物依存症の理解と連携～，愛知，2020.2.9.
- 77) 松本俊彦：薬物依存症をもつ人を地域で支える。東京大学医学部附属病院精神神経科主催 東京大学職域・地域架橋型価値に基づく支援者育成Cコース，東京，2020.2.16.
- 78) 松本俊彦：依存症患者の自立生活と居住定着においての必要な支援とは。特定非営利活動法人東京ソテリア主催 依存症患者に対する居住定着支援モデル事業講演会，東京，2020.2.18.
- 79) 松本俊彦：薬物依存症の理解と援助。西山クリニック主催 名古屋市依存症支援者研修（薬物依存症）～薬物依存症の理解と連携～，愛知，2020.2.23.
- 80) 松本俊彦：もしも死にたいと言われたら～自殺リスクの評価と対応～。大塚製薬株式会社主催 学術講演会，東京，2020.2.27.
- 81) 松本俊彦：トークライブ「わたしたちにできること」。厚生労働省社会援護局障害保健福祉部主催 依存症の理解を深めるための普及啓発事業，東京，2020.3.1.
- 82) 松本俊彦：自傷・自殺を理解するー自分を傷つけない生き方のレッスン。株式会社朝日カルチャーセンター主催 講座，東京，2020.3.24.
- 83) 松本俊彦：薬物依存を知り希望がもてる対応を考える。ソーシャルワークを学ぶk a iこころネットワーク福山主催 市民のための精神保健福祉講座，広島，2020.3.29.
- 84) 嶋根卓也：地域の中で（薬物）依存症患者に薬剤師としてどのように関わることができるか。鎌倉市薬剤師会主催研修会，神奈川，2019.4.11.
- 85) 嶋根卓也：「ダメ，絶対」で終わらせない薬物乱用防止教育ー教員による気づき・関わり・つなぎー。京都府教育委員会主催 平成31年度薬物乱用防止教育推進研修会，京都，2019.5.9, 2019.5.10.
- 86) 嶋根卓也：「ダメ，絶対」で終わらせない薬物乱用防止教育。ライオンズクラブ国際協会330-B地区主催薬物乱用防止教育スキルアップセミナー，山梨，2019.5.15.
- 87) 嶋根卓也：「ダメ，絶対」で終わらせない薬物乱用防止教育。ライオンズクラブ国際協会330-B地区主催薬物乱用防止教育スキルアップセミナー，神奈川，2019.5.22.
- 88) 嶋根卓也：「ダメ，絶対」で終わらせない薬物乱用防止活動～薬物乱用防止指導員による気づき・関わり・つなぎ～。東京都福祉保健局主催 東京都薬物乱用防止指導員研修会，東京，2019.6.7.
- 89) 嶋根卓也：ヒトはなぜドラッグを使うのか。「ダメ，絶対」で終わらない薬物乱用防止。大阪府健康医療部主催 大阪府薬物乱用防止指導員研修会，大阪，2019.6.14.
- 90) 嶋根卓也：ヒトはなぜドラッグを使うのか。横須賀市立不入斗中学校，神奈川，2019.6.26.
- 91) 嶋根卓也：ヒトはなぜドラッグを使うのか。横須賀市立衣笠中学校，神奈川，2019.6.26.
- 92) 嶋根卓也：ヒトはなぜドラッグを使うのか。横須賀市立大津中学校，神奈川，2019.6.26.
- 93) 嶋根卓也：臨床医学Ⅱ物質関連障害を中心に。国立障害者リハビリテーションセンター講義，埼玉，2019.7.30.
- 94) 嶋根卓也：ヒトはなぜドラッグを使うのか「ダメ，絶対」で終わらせない薬物乱用防止教室。神

- 奈川県教育委員会主催 令和元年度薬物乱用防止教室指導者講習会, 神奈川, 20019.8.19
- 95) 嶋根卓也:「健康行動教育科学研究会主催 第28回薬物乱用防止教育研修会, 東京, 2019.8.23.
- 96) 嶋根卓也:横浜ひまわり家族会主催 第3回「薬物依存症者と家族フォーラム」, 神奈川, 2019.8.25.
- 97) 嶋根卓也:ヒトはなぜ薬物を使うのか. 白梅学園大学, 東京, 2019.9.19
- 98) 嶋根卓也:HIV 性感染症と薬物依存のつながり:「ダメ. ゼッタイ.」で終わらせない薬物乱用防止について. 第89回みやぎ薬剤師学術研修会, 宮城, 2019.9.28
- 99) 嶋根卓也:東京都教職員研修センター主催専門性向上研修, 東京, 2019.10.10.
- 100) 嶋根卓也:ヒトはなぜ, ドラッグを使うのか. 京都府健康福祉部薬務課主催 高校生と考える薬物乱用防止シンポジウム in 京都, 京都, 2019.10.26.
- 101) 嶋根卓也:薬物依存の理解と支援:ゲートキーパーとしての薬剤師. 長崎県薬剤師会主催 うつ病支援体制強化薬剤師研修事業研修会, 長崎, 2020.1.17.
- 102) 嶋根卓也:医薬品乱用・依存の理解と支援-気づき・関わり・つなぎ-. 佐賀県薬剤師会主催 薬剤師生涯学習, 佐賀, 2020.1.18.
- 103) 嶋根卓也:ヒトは, なぜ薬物を使うのか. 警察庁刑事局組織犯罪対策部主催 薬物銃器犯罪根絶の集い・千葉大会, 千葉, 2020.1.25.
- 104) 嶋根卓也:HIV 感染症と薬物依存とのつながり-薬剤師による支援を考える-. 広島県薬剤師会主催 令和元年度「抗 HIV 薬服薬指導研修会」, 広島, 2020.1.26.
- 105) 嶋根卓也:「ダメ, ゼッタイ」で終わらせない薬物乱用防止教育. 東京都多摩立川保健所主催 違法植物監視隊研修会, 東京, 2020.2.3.
- 106) 嶋根卓也:「ダメ, ゼッタイ」で終わらせない薬物乱用防止教育:薬剤師による気づき・関わり・つなぎ. 令和元年度日本薬剤師会 学校薬剤師部会 くすり教育研修会「学校におけるくすり教育の現状と課題」, 東京, 2020.2.9.
- 107) 嶋根卓也:「ダメ, ゼッタイ」で終わらせない薬物乱用防止教育. ライオンズクラブ国際協会 諫早ライオンズクラブ CN55 周年記念講演会, 長崎, 2020.2.11.
- 108) 近藤あゆみ:薬物依存症からの回復のために 家族ができること, できないこと, 新潟家族会主催 移動家族会, 新潟県, 2019.6.8.
- 109) 近藤あゆみ:境界線を大切にしたコミュニケーション, 東京都立中部総合精神保健福祉センター主催家族教室, 東京都立中部総合精神保健福祉センター, 東京都, 2019.7.19.
- 110) 近藤あゆみ:本人の良き回復支援者になる, 琉球 GAIA 主催家族会, 東京都, 2019.8.3.
- 111) 近藤あゆみ:境界線を大切にしたコミュニケーション, 東京都立中部総合精神保健福祉センター主催家族教室, 東京都立中部総合精神保健福祉センター, 東京都, 2019.8.5.
- 112) 近藤あゆみ:上手なコミュニケーションで本人を治療につなげる, 千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室, 千葉県精神保健福祉センター, 千葉県, 2019.8.14.
- 113) 近藤あゆみ:境界線を大切にしたコミュニケーション, 東京都立多摩総合精神保健福祉センター主催依存症家族教室, 東京都立多摩総合精神保健福祉センター, 東京都, 2019.8.20.
- 114) 近藤あゆみ:本人の良き回復支援者になる, 琉球 GAIA 主催家族会, 東京都, 2019.9.7.
- 115) 近藤あゆみ:良いコミュニケーションで本人を治療につなげる, 新潟市こころの健康センター主催令和元年度アルコール・薬物依存症の家族教室, 新潟市こころの健康センター, 新潟県, 2019.9.24.
- 116) 近藤あゆみ:境界線を大切にしたコミュニケーション, 東京都立中部総合精神保健福祉センター主催家族教室, 東京都立中部総合精神保健福祉センター, 東京都, 2019.10.25.
- 117) 近藤あゆみ:本人の良き回復支援者になる, 琉球 GAIA 主催家族研修会, 神奈川県, 2019.11.30.
- 118) 近藤あゆみ:境界線を大切にしたコミュニケーション, 東京都立中部総合精神保健福祉センター主催家族教室, 東京都立中部総合精神保健福祉センター, 東京都, 2020.1.20.
- 119) 近藤あゆみ:上手なコミュニケーションで本人を治療につなげる, 千葉県精神保健福祉センター

- 主催薬物依存症家族教室，千葉県精神保健福祉センター，千葉県，2020.2.5.
- 120) 近藤あゆみ：薬物依存症者とともに暮らす家族にとって重要なこと，東京保護観察所主催家族会，東京保護観察所，東京都，2020.2.7.
- 121) 近藤あゆみ：あなたの大切な人が薬物依存症だったら～回復のために家族にできること・できないこと～，千葉保護観察所主催引受人会，千葉保護観察所，千葉県，2020.2.21.
- 122) 近藤あゆみ：境界線を大切にしたいコミュニケーション，東京都立中部総合精神保健福祉センター主催家族教室，東京都立中部総合精神保健福祉センター，東京都，2020.2.28.
- 123) 引土絵未：栃木ダルク主催家族教室「依存者本人の成長を助ける関わり」，栃木，2019.7.6.
- 124) 猪浦智史：「ダメ，ゼッタイ」で終わらせない薬物乱用防止教室．北海道で更生と再犯防止を考える会主催，北海道，2019. 5. 18.
- 125) 猪浦智史：「ダメ，ゼッタイ」で終わらせない薬物乱用防止教室．第 66 回北海道薬学大会北海道薬剤師会学薬部会主催，北海道，2019. 5. 19.
- 126) 猪浦智史：海外の地域精神医療のありかた～タイの薬物事情と治療～：精神看護学講座.新潟医療福祉大学，新潟，2019. 7. 4.
- 127) 猪浦智史：生活習慣病について．特定非営利活動法人八王子ダルク．生活習慣病予防教室，東京，2019. 9. 13.
- 128) 猪浦智史：食生活を振り返ろう．特定非営利活動法人八王子ダルク．生活習慣病予防教室，東京，2019. 10. 23.
- 129) 猪浦智史：ヒトはなぜドラッグを使うのか．福知山市立日新中学校，京都，2019. 10. 25
- 130) 猪浦智史：栄養バランスについて考えよう．特定非営利活動法人渋谷ダルク．栄養教室，東京，2019. 10. 28.
- 131) 猪浦智史：運動の効果と休息．特定非営利活動法人八王子ダルク．生活習慣病予防教室，東京，2019. 11. 13.
- 132) 猪浦智史：エネルギーの収支決算．特定非営利活動法人八王子ダルク．生活習慣病予防教室，東京，2019. 12. 6.
- 133) 猪浦智史：薬物乱用の現状について．富士市暴力追放・薬物乱用防止市民大会，山梨，2020. 2. 8.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 松本俊彦：日本アルコール・アディクション医学会 理事
- 2) 松本俊彦：日本社会精神医学会 評議員
- 3) 松本俊彦：日本精神科救急学会 理事
- 4) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会 理事
- 5) 松本俊彦：日本司法精神医学会 評議員
- 6) 船田正彦：日本アルコール・アディクション医学会 評議員
- 7) 船田正彦：日本神経精神薬理学会 評議員
- 8) 船田正彦：日本薬理学会 評議員
- 9) 嶋根卓也：日本アルコール・アディクション医学会 評議員
- 10) 近藤あゆみ：日本アルコール・アディクション医学会 理事

(3) 座長

- 1) 松本俊彦：【座長】柱 2-3-2「様々な依存の理解とその対応方法」．第 30 回日本医学会総会 2019 中部，愛知，2019.4.28.

- 2) 松本俊彦, 新谷宏伸:【司会】シンポジウム 18 ICD-11 に収載された複雑性 PTSD の理解と治療ートラウマケア技法の実際ー. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 3) 椎名明大, 松本俊彦:【司会】シンポジウム 55 患者の違法薬物使用を知ったとき, 精神科医はどうふるまうべきなのか?. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 4) 松本俊彦:【自主シンポジウム】解離症／解離性障害の理解と治療ーリソースとしての「内なる家族」ー. 日本家族心理学会, 岩手, 2019.9.21.
- 5) 船田正彦:【座長】シンポジウム「国内外における大麻規制の現状: 医療応用と嗜好品」第 49 回日本神経精神薬理学会, 福岡, 2019.10.12.
- 6) 船田正彦, 富山健一:【座長】シンポジウム「薬物乱用の変遷: 危険ドラッグから大麻へ」第 29 回神経行動薬理若手研究者の集い, 横浜, 2020.3.15.
- 7) 嶋根卓也, 小林美智子:【座長】シンポジウム 9「覚せい剤事犯者の理解とサポート」日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 北海道, 2019.10.5.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 松本俊彦: 日本青年期精神療学会 編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 松本俊彦: 第 33 回薬物依存臨床医師研修
- 2) 松本俊彦: 第 21 回薬物依存臨床看護等研修
- 3) 松本俊彦: 第 10 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修
- 4) 松本俊彦: 2019 年度厚生労働省依存症治療拠点機関設置運営事業 (依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修 (薬物))
- 5) 松本俊彦: 2019 年度厚生労働省依存症治療拠点機関設置運営事業 (薬物依存症回復施設職員研修)
- 6) 引土絵未: 治療共同体エンカウンター・グループ研修 (薬物依存研究部・治療共同体研究会主催)

(2) 研修会講師

- 1) 松本俊彦: 薬物再乱用防止プログラム. 法務総合研究所主催 第 16 回保護局関係職員処遇強化特別研修, 東京, 2019.5.20.
- 2) 松本俊彦: アディクションを持つ保護者への対応について～アルコールや薬物依存症を持つ保護者の特徴等と面接・指導～. 東京都児童相談センター主催 令和元年度児童福祉司中上級研修 (第 3 回), 東京, 2019.6.4.
- 3) 松本俊彦: 依存症ってどんな病気?. 大阪弁護士会 7 会派 (春秋会, 一水会, 友新会, 法友倶楽部, 法曹公正会, 法曹同志会, 五月会) 共催 大阪弁護士会員が所属する 7 会派合同研修会, 大阪, 2019.6.12.
- 4) 松本俊彦: 自死・自傷・依存・生きづらさの実態. 浄土真宗本願寺派 子ども・若者ご縁づくり推進室主催 第 2 期思春期・若者支援コーディネーター養成研修会, 京都, 2019.6.18.
- 5) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助. 福岡県高等学校養護教諭研究会主催 平成 31 年度福岡県高等学校養護教諭研究会第 1 回研修会, 福岡, 2019.6.28.
- 6) 松本俊彦: リストカットをする生徒の理解と対応. 川崎市立高津高等学校定時制主催 生徒指導研修会, 神奈川, 2019.7.2.
- 7) 松本俊彦: 薬物依存症の治療とリカバリーに向けた支援について. 国立精神・神経医療研究センター病院看護部主催 看護師を対象とした臨床教育研修, 東京, 2019.7.10.
- 8) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助. 一般社団法人 日本いのち

- の電話連盟主催 2019 年度関東・甲信越ブロック研修，東京，2019.7.14.
- 9) 松本俊彦：アルコールと自殺・自傷．独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター主催 2019 年度第 1 回アルコール依存症臨床医等研修，神奈川，2019.7.17.
 - 10) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか一回復支援のためのヒント．国立成育医療研究センターこころの診療部 子どもの心の診療ネットワーク事業 中央拠点病院主催研修会 「子どもの心の諸問題と依存」，東京，2019.7.19.
 - 11) 松本俊彦：薬物依存症と重複障害．2019 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物）．東京，2019.7.29.
 - 12) 松本俊彦：自殺・自傷．2019 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物）．東京，2019.7.29.
 - 13) 松本俊彦：薬物問題に関連する法律．2019 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物）．東京，2019.7.29.
 - 14) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか～自己治癒仮説と自傷行為～．熊本県精神保健福祉センター主催 令和元年度思春期精神保健対策専門研修会，熊本，2019.8.5.
 - 15) 松本俊彦：SMARPP の理念と意義．法務省矯正局成人矯正課 法務省保護局監察課主催 薬物依存対策研修，東京，2019.8.26-28.
 - 16) 松本俊彦：安心して人に依存できない人たちの支援～自傷行為の理解と援助～．京都府乙訓保健所主催 令和元年度民生委員・児童委員人権問題啓発研修，京都，2019.10.1.
 - 17) 松本俊彦：子どもたちの自傷や「死にたい」にどう対応するか～気づき・関わり・つながる大人になるために～．佐賀県総合福祉センター主催 令和元年度児童福祉施設（性）教育研修会，佐賀，2019.10.8.
 - 18) 松本俊彦：アルコールと自殺・自傷．独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 2019 年度第 2 回アルコール依存症臨床医等研修，神奈川，2019.10.18.
 - 19) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか．横浜家庭裁判所主催 家庭裁判所調査官研修，神奈川，2019.10.25.
 - 20) 松本俊彦：SMARPP の理念と意義．国立精神・神経医療研究センター主催 第 11 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2019.11.18.
 - 21) 松本俊彦：薬物依存症臨床における司法的問題への対応．国立精神・神経医療研究センター主催 第 11 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2019.11.19.
 - 22) 松本俊彦：アルコールとうつ，自殺～『死のトライアングル』を防ぐために．沖縄県立総合精神保健福祉センター主催 令和元年度かかりつけ医心の健康対応力向上研修，沖縄，2019.11.22.
 - 23) 松本俊彦：認知行動療法を用いた薬物依存症に対する集団療法の理念と意義．独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 令和元年度アルコール・薬物関連問題研修，佐賀，2019.11.26.
 - 24) 松本俊彦：学校における自殺予防対策．一般社団法人秋田県医師会主催 学校保健・学校医研究会並びに学校精神保健研修会，秋田，2019.12.7.
 - 25) 松本俊彦：覚せい剤依存症と医療．法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第 51 回研修，東京，2019.12.11.
 - 26) 松本俊彦：矯正施設における自殺・自傷への対応．法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第 51 回研修，東京，2019.12.12.
 - 27) 松本俊彦：生徒の自傷行為にどう寄り添うか．東京都教育庁主催 令和元年度「都立学校における専門医派遣事業」（精神科）研修会，東京，2019.12.13.
 - 28) 松本俊彦：思春期の問題行動（リストカット・依存症を中心に）．一般社団法人日本女性医学学会主催 2019 年度女性のヘルスケア研修会第 2 回研修会，東京，2019.12.15.
 - 29) 松本俊彦：規制薬物等に対する依存がある対象者への処遇について．大阪保護観察所主催 規制薬物等に対する依存がある対象者にかかる自庁研修，大阪，2020.1.7.

- 30) 松本俊彦：依存症を理解する．独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター主催 アディクション研修会，新潟，2020.1.24.
- 31) 松本俊彦：薬物依存症者の治療及び支援．法務総合研究所主催 第55回保護局関係職員高等科研修，東京，2020.1.29.
- 32) 松本俊彦：児童思春期の自傷行為．北海道大学病院主催 第7回さっぽろ子どもの心の診療ネットワーク事業研修会，北海道，2020.2.21.
- 33) 松本俊彦：自傷・自殺のリスク評価と対応．2019年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 依存症回復支援職員研修，東京，2020.2.25.
- 34) 舩田正彦：行動薬理学からみた薬物依存（精神依存，身体依存）令和元年度薬物依存臨床医師研修・薬物依存臨床看護等研修．東京，2019.9.3.
- 35) 嶋根卓也：医薬品乱用と薬剤師の役割：気づき・関わり・つなぎ．兵庫県薬剤師会主催 第5回兵庫県薬剤師会ゲートキーパー研修会，兵庫，2019.6.15.
- 36) 嶋根卓也：薬物使用と感染症（HIV・肝炎）．2019年度依存症治療指導者/依存症相談対応指導者/地域生活支援者養成研修，東京，2019.7.29.
- 37) 嶋根卓也：①青少年と薬物乱用・依存②全国の民間リハビリ施設の活動状況とその課題・栃木ダルクの活動．令和元年度薬物依存臨床医師研修・薬物依存臨床看護等研修．東京，2019.9.4-5.
- 38) 嶋根卓也：①薬物中毒・乱用・依存の概念と最近の薬物関連障害患者の動向．②薬物依存症と性的マイノリティおよびHIV感染．国立精神・神経医療研究センター主催 第11回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2019.11.19-20.
- 39) 嶋根卓也：自殺予防対策ゲートキーパー養成研修会．高知県薬剤師会主催，高知，2019.12.8.
- 40) 嶋根卓也：薬物依存症と性的マイノリティ・HIV・感染症．2019年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 依存症回復支援職員研修，東京，2020.2.25.
- 41) 近藤あゆみ：アルコール・薬物問題のアセスメントと支援，岩手県精神保健福祉センター主催令和元年度薬物・アルコール関連問題支援者研修会，岩手，2019.6.14.
- 42) 近藤あゆみ：依存症からの回復における家族支援の重要性，神奈川県精神保健福祉センター主催令和元年度薬物相談業務研修，神奈川，2019.6.26.
- 43) 近藤あゆみ：依存症からの回復における家族支援の重要性，各務原病院主催依存症を考えるつどい，岐阜，2019.6.29.
- 44) 近藤あゆみ：薬物依存症からの回復を支える 地域ネットワーク ～連携と支援の実例事例を基に考える～．栃木県精神保健福祉センター主催令和元年度薬物依存症相談担当者専門研修会，栃木，2019.7.12.
- 45) 近藤あゆみ：アルコール・薬物問題を抱えた 家族に対する相談支援，京都市こころの健康増進センター主催令和元年度京都市精神保健福祉実践研修，京都，2019.7.26.
- 46) 近藤あゆみ：薬物問題を抱えた家族に対する相談支援，国立精神・神経医療研究センター主催市民公開講座，東京，2019.7.28.
- 47) 近藤あゆみ：薬物依存症者の家族に対する相談支援，2019年度依存症治療指導者/依存症相談対応指導者/地域生活支援者養成研修，東京，2019.7.30.
- 48) 近藤あゆみ：SMARPP の実際，法務省主催令和元年度薬物依存対策研修，東京，2019.08.27.
- 49) 近藤あゆみ：薬物依存症者の家族に対する相談支援，法務省主催令和元年度薬物依存対策研修，東京，2019.8.26.
- 50) 近藤あゆみ：薬物依存症者をもつ家族に対する支援，国立精神・神経医療研究センター主催第31回（令和元年度）薬物依存臨床医師研修会第20回（令和元年度）薬物依存臨床看護等研修会，東京，2019.9.6.
- 51) 近藤あゆみ：依存症者をもつ家族に対する相談支援，大阪府こころの健康総合センター主催令和元年度依存症相談対応・実践研修，大阪，2019.9.10.

- 52) 近藤あゆみ：薬物依存症からの回復を支える 地域ネットワーク ～連携と支援の実事例を基に考える～，栃木県精神保健福祉センター主催令和元年度薬物依存症相談担当者専門研修会，栃木，2019.9.20.
- 53) 近藤あゆみ：依存症について～識る，聴く，感じる～，相模原市精神保健福祉センター主催公開依存症家族講座，神奈川，2019.10.8.
- 54) 近藤あゆみ：薬物使用者の家族に対する相談支援，2019 年度広島県依存症治療拠点機関事業 医療従事者等向け研修会[薬物依存]，広島，2019.10.15.
- 55) 近藤あゆみ：NCNP における薬物依存症治療と家族支援，Taiwan and Japan friendship seminar on Substance use and HIV/AIDS treatment，東京，2019.10.29.
- 56) 近藤あゆみ：薬物依存症者とその家族に対する相談支援，2019 年度精神保健福祉研修（後期）アディクション支援研修，東京，2019.11.5.
- 57) 近藤あゆみ：薬物問題に悩む家族を 支援につなげる，2019 年度精神保健福祉研修（後期）アディクション支援研修，東京，2019.11.5.
- 58) 近藤あゆみ：あなたの大切な人が薬物依存症だったら ～回復のために家族にできること・できないこと～，東京都保護観察所立川支部主催引受人会，東京，2019.11.15.
- 59) 近藤あゆみ：SMARPP の実際，国立精神・神経医療研究センター主催第 11 回 認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2019.11.19.
- 60) 近藤あゆみ：アルコール関連問題を抱えた家族に対する相談支援，愛知県精神保健福祉センター令和元年度アルコール健康障害研修，愛知，2019.11.29.
- 61) 近藤あゆみ：依存症問題を抱える世帯への包括的支援，千葉市心の健康センター主催令和元年度千葉市依存症支援者教育研修，千葉，2019.12.10.
- 62) 近藤あゆみ：薬物依存症者の家族に対する相談支援，法務省主催第 55 回保護局関係職員高等科研修，東京，2020.01.29
- 63) 近藤あゆみ：薬物依存症者に対するインテークと重症度評価，2019 年度薬物依存症回復施設職員研修，東京，2020.02.26.
- 64) 引土絵未：令和元年度自殺対策推進事業「地域支援研修」「自殺に傾いた人へのかかわり～「弱さ」へのまなざしからみえるもの～」，埼玉，2019.7.25.
- 65) 引土絵未：2019 年度鳥取県アルコール健康障害・薬物依存症支援拠点機関事業依存症研修会「エンパワメント・グループ」，鳥取，2019.7.27.
- 66) 引土絵未：法務省保護局主催 薬物依存対策研修「グループワーク」，法務省，東京，2019.8.27.
- 67) 喜多村真紀：グループワーク(1)(2). 国立精神・神経医療研究センター主催第 11 回 認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2019.11.18-19.

F. その他

- 1) 松本俊彦：厳罰主義が広がる時代 クラブカルチャー，そして若い世代への影響は？深澤真紀さん，松本俊彦さん薬物報道を斬る(3)，BuzzFeedNews，2019.4.1.
- 2) 松本俊彦：「男らしさの呪い」がみんなを苦しめている 深澤真紀さん，松本俊彦さん薬物報道を斬る(4)，BuzzFeedNews，2019.4.2.
- 3) 松本俊彦：「仕事ばかりしないで遊んでください！」みんなが少しずつ適当な社会へ 深澤真紀さん，松本俊彦さん薬物報道を斬る(5)，BuzzFeedNews，2019.4.3.
- 4) 松本俊彦：「バイキング」のバッシングにも申す 深澤真紀さん，松本俊彦さん薬物報道を斬る（番外編），BuzzFeedNews，2019.4.4.
- 5) 松本俊彦：薬物依存について，フジテレビ「Live news it!」，2019.4.5.
- 6) 松本俊彦：厳罰より治療が世界の潮流，朝日新聞，2019.4.20.
- 7) 松本俊彦：ピエール瀧事件を考える 長く治療に携わる松本俊彦医師に聞く④ 密売は規制 使用

- は回復支援 薬物依存は治療可能な健康問題と知って. 日刊スポーツ, 2019.4.26.
- 8) 松本俊彦: ピエール瀧事件を考える 長く治療に携わる松本俊彦医師に聞く㊥ 社会復帰難しくする依存者=ゾンビ. 日刊スポーツ, 2019.4.26.
 - 9) 松本俊彦: ピエール瀧事件を考える 長く治療に携わる松本俊彦医師に聞く㊦ 治療や回復支援に重きを置いた報道を. 日刊スポーツ, 2019.4.28.
 - 10) 松本俊彦: 誰もが依存症になる可能性がある. 厚生労働省, 2019.5.1.
 - 11) 松本俊彦: 10 連休明けから約 1 週間 子供の SOS 見逃さないで!. 公明新聞, 2019.5.15.
 - 12) 松本俊彦: 薬物健康障害対策法を 「やっかれん」 フォーラム開催. しんぶん赤旗, 2019.6.11.
 - 13) 松本俊彦: 薬物依存症 治療支援の法制化求める 家族会が総会で決議. 福祉新聞, 2019.6.17.
 - 14) 松本俊彦: ピエール瀧被告に執行猶予判決. 証人出廷した専門家が指摘する「回復しにくい社会」の問題点とは?. Huffingtonpost, 2019.6.18.
 - 15) 松本俊彦: ギャンブル依存 どう向き合う?. 日本経済新聞, 2019.6.5.
 - 16) 松本俊彦: ピエール瀧被告の情状承認に担当医師, 薬物依存は「軽症・・・瀧さんはやめられる可能性が高い」. SANSPOCOM, 2019.6.6.
 - 17) 松本俊彦: ピエール瀧被告の初公判, どのマスコミも全く報じない”面白すぎた実態”とは!? 通販番組風の証言, 裁判官の異常反応・・・!. TOKANA, 2019.6.11.
 - 18) 松本俊彦: ピエール瀧被告初公判 名証言引き出した小野裁判官の愛あるナイスプレー.BLOGOS, 2019.6.6.
 - 19) 松本俊彦: 芸能人の薬物問題「土下座を慣習にしないで」、依存症者や家族が追い詰められる懸念. 弁護士ドットコム, 2019.6.11.
 - 20) 松本俊彦: ピエール瀧被告初公判 ドイツに移住し音楽活動計画浮上「家族を養っていく責任がある」. Sponichi Annex, 2019.6.6.
 - 21) 松本俊彦: 白石監督が瀧被告のサポートを約束「話し相手に」. 日刊スポーツ, 2019.6.6.
 - 22) 松本俊彦: 初公判では淡々と・・・ピエール瀧が消せない復帰への懸念材料. 日刊ゲンダイ, 2019.6.7.
 - 23) 松本俊彦: 田口淳之介容疑者の移送を上空から撮影...「過剰な薬物報道」はいつまで続くのか. BuzzFeedNews, 2019.5.23.
 - 24) 松本俊彦: 田口淳之介の逮捕を”転落劇”として消費してしまう報道の問題. WEZZY, 2019.5.25.
 - 25) 松本俊彦: 新精神作用物質使用患者における臨床症状の変化. Care Net, 2019.5.27.
 - 26) 松本俊彦: フォーラム 薬物依存どうすれば 「孤立の病」回復への共生を. 朝日新聞, 2019.6.23.
 - 27) 松本俊彦: 大学がカジノ推進のシンポジウム? 「#立教はカジノに魂を売るな」と学内外から批判の声. Buzz Feed News, 2019.6.22.
 - 28) 松本俊彦: 薬物依存めぐる現状と「刑の一部執行猶予」制度. Yahoo ニュース, 2019.6.21.
 - 29) 松本俊彦: “薬物克服”のお墨付きを得たピエール瀧被告の今後の活動は. 日刊ゲンダイ DIGITAL, 2019.6.20.
 - 30) 松本俊彦: 「やめたくてもやめられない」コントロールできなくなる依存症. NHK バリバラ, 2019.7.4.
 - 31) 松本俊彦, 鶴身孝介: 身近にひそむ依存症「やめられない」という心の病. Newton 2019 年 7 月号, 2019.7.7.
 - 32) 松本俊彦: 大事なものは、助けを求める「援助希求能力」をやしなうこと～自傷する子どもたちとどう向き合うのか. のんびる 2019 年 8 月号, 2019.7.15.
 - 33) 松本俊彦: 薬物依存 治療法知って 15 日, 福井で講演. 福井新聞, 2019.7.7.
 - 34) 松本俊彦: 依存症は他人事ではない 孤立の病との視点が重要. 日本経済新聞, 2019.6.8.
 - 35) 松本俊彦: 田口 小嶺被告は瀧担当医が診察 依存基準は達さず. 日刊スポーツ, 2019.7.16.
 - 36) 松本俊彦: 薬物依存 孤立避けて ハピリン 精神科医が講演. 福井新聞, 2019.7.17.

- 37) 松本俊彦：死にたいと言われた時，考えてほしいこと 絶望を分かつというゴール. Withnews, 2019.8.9.
- 38) 松本俊彦：リストカット「気持ちいい」と言ってしまう理由 自傷との向き合い方. Withnews, 2019.8.10.
- 39) 松本俊彦：薬物依存回復 応援を 横浜でフォーラム開幕. 毎日新聞 地方版, 2019.8.3.
- 40) 松本俊彦：タウンウィークリー講座講演. 山形新聞朝刊, 2019.8.2.
- 41) 松本俊彦：「ダメ，絶対」だけではない依存症予防教室モデル授業. 山陽新聞 dijital, 2019.8.14.
- 42) 松本俊彦：薬物犯罪で逮捕された芸能人へのバッシング，薬物治療を妨げる危険性／松本俊彦先生へのインタビュー. Wezzy, 2019.8.26.
- 43) 松本俊彦：カフェイン依存 市販薬乱用の危険な実態. 夕刊フジ, 2019.8.25.
- 44) 松本俊彦：減らない 10 代の自殺 その対策は？. 週刊 日本医事新報, 2019.8.24.
- 45) 松本俊彦：薬物依存は特別ではない 高知東生さん体験講演へ 8/30 に予防イベント. 高知新聞, 2019.8.27.
- 46) 松本俊彦：元・NHK アナウンサーはいかに薬物から立ち直ったのか？「僕が違法薬物で逮捕され NHK をクビになった話」を刊行！. JIJI.COM, 2019.8.21.
- 47) 松本俊彦：【厚労科研調査】10 代で一般薬依存が増加ー最多は鎮咳・去痰薬「ブロン」. 薬事日報, 2019.8.22.
- 48) 松本俊彦：【食と健康 ホントの話】カフェイン依存・・・市販薬乱用の危険な実態！咳止めや鎮痛薬にも. Zakzak by 夕刊フジ, 2019.8.26.
- 49) 松本俊彦：「薬物依存症になっても解決策はある！」脅さない薬物乱用防止教育とは／松本俊彦先生インタビュー. WEZZY, 2019.8.27.
- 50) 松本俊彦：高知東生さん薬物依存の怖さを語る. NHK NEWS WEB, 2019.8.30.
- 51) 松本俊彦：障害者の自立へ向け豊島区でフォーラム 21,22 日参加者募集. 東京新聞 TokyoWeb, 2019.9.3.
- 52) 松本俊彦：「クスリをやった」と言える治療の場を. AERA, 2019.9.9.
- 53) 松本俊彦：薬物依存で治療の患者 厚労省調査 市販薬乱用 10 代で急増. 信濃毎日新聞, 2019.9.16.
- 54) 松本俊彦：風邪薬 10 代の乱用急増 薬物依存 危険ドラッグはゼロ. 東京新聞, 2019.9.17.
- 55) 松本俊彦：自信失うと比較顕著に. 毎日新聞, 2019.9.16.
- 56) 松本俊彦：10 代薬物依存 市販薬乱用 厚労省調査 生きづらさを抱え. 沖縄タイムス朝刊 1 面, 2019.9.16.
- 57) 松本俊彦：購入量制限は骨抜き 薬物依存調査 80 年代にも問題化. 沖縄タイムス朝刊 7 面, 2019.9.16.
- 58) 松本俊彦：市販薬乱用の 10 代が急増 危険ドラッグ取り締まり強化の影響か. 毎日新聞, 2019.9.16..
- 59) 松本俊彦：10 代薬物依存に市販薬 乱用防ぐ対策が必要か. 沖縄タイムス朝刊 5 面, 2019.9.17.
- 60) 松本俊彦：市販薬乱用 10 代急増 ネットに「せき止めで多幸感」. 毎日新聞, 2019.9.17.
- 61) 松本俊彦：生きるための「孤独な対処スキル」としての子どもの自傷. 大人ができることは？. HUFFPOST, 2019.9.18.
- 62) 松本俊彦：くめざまし SEVEN>急増・10 代咳止め薬を過剰摂取・トイレに 25 本の空き瓶 . フジテレビ「めざましテレビ」, 2019.9.19.
- 63) 松本俊彦：市販薬の乱用 防止策を探らなければ. 信毎 Web, 2019.9.19.
- 64) 松本俊彦：トイレに 25 本の空き瓶・・・市販薬を過剰摂取する若者が急増 乱用の実態と体への影響を調査. FNN PRIME, 2019.9.16.
- 65) 松本俊彦：薬局 確認甘く ネットでも販売 購入量制限は骨抜き. 東京新聞, 2019.9.17.
- 66) 松本俊彦：市販薬乱用 10 代急増 ネットに「せき止めで多幸感」. 毎日新聞, 2019.9.17.

- 67) 松本俊彦：市販薬乱用 10代で急増 厚労省調査 せき止めなど依存症。中日新聞，2019.9.16.
- 68) 松本俊彦：せき止め乱用 10代で急増 生きづらさを抱え…ネット情報影響か 大量服用，生活波
掟も。京都新聞，2019.9.24.
- 69) 松本俊彦：市販薬の不適切販売と乱用・依存問題，その実態は？. Aging Style，2019.9.24.
- 70) 松本俊彦：違法薬物で逮捕された人は，笑顔を見せちゃダメなのか，高知東生さんたちと話し合
った，「回復」を支えられる報道のあり方。HUFFPOST，2019.9.26.
- 71) 松本俊彦：市販薬の乱用 悩み抱える子に広がり エナジードリンクが入り口に。日本経済新聞，
2019.10.7
- 72) 松本俊彦：ひとりで悩まないで～若者の自殺対策 1 誰もが行動に移すとは限らない。公明新聞，
2019.10.3.
- 73) 松本俊彦：薬物依存症からの回復 ハームリダクションを考える 上。しんぶん赤旗，2019.9.30.
- 74) 松本俊彦：薬物依存症からの回復 ハームリダクションを考える 下。しんぶん赤旗，2019.10.1.
- 75) 松本俊彦：せき止め乱用 10代急増 薬物依存調査 安価，簡単に入手。琉球新聞，2019.9.16.
- 76) 松本俊彦：せき止め乱用 10代で急増 厚労省調査 薬物依存患者の41%。北日本新聞，2019.9.16.
- 77) 松本俊彦：市販薬乱用 10代で急増 厚労省調査 薬物依存患者の41%。河北新聞，2019.9.16.
- 78) 松本俊彦：市販薬乱用 10代で急増 厚労省調査 せき止め薬や風邪薬。茨城新聞，2019.9.16.
- 79) 松本俊彦：せき止め薬乱用，10代急増 薬物依存調査 入手容易で「多幸福感」。神戸新聞，2019.9.16.
- 80) 松本俊彦：薬物依存 せき止め乱用 10代急増 厚労省調査 危険ドラッグはゼロ。山陽新聞，
2019.9.16.
- 81) 松本俊彦：10代の薬物依存患者 市販薬乱用が急増。長崎新聞，2019.9.16.
- 82) 松本俊彦：薬物依存患者 10代の市販薬乱用急増 厚労省 18年調査 ネット情報背景か。愛媛新
聞，2019.9.16.
- 83) 松本俊彦：せき止め乱用 10代で急増 薬物依存患者 18年調査。山陰中央新聞，2019.9.16.
- 84) 松本俊彦：市販薬乱用 10代で急増 厚労省調査 せき止めなど依存症。中日新聞，2019.9.16.
- 85) 松本俊彦：市販薬乱用 10代で急増 厚労省が薬物依存調査 危険ドラッグはゼロに。岩手日報，
2019.9.16.
- 86) 松本俊彦：厚労省 薬物依存調査 せき止め乱用 10代で急増 危険ドラッグはゼロに。富山新聞，
2019.9.16.
- 87) 松本俊彦：厚労省 薬物依存調査 せき止め乱用 10代で急増 危険ドラッグはゼロに。北國新聞，
2019.9.16.
- 88) 松本俊彦：薬物依存 10代患者 せき止め乱用急増 厚労省調査。東奥日報，2019.9.16.
- 89) 松本俊彦：せき止め乱用 10代急増 薬物依存患者ら 安価・入手簡単。中国新聞，2019.9.16.
- 90) 松本俊彦：薬物依存 10代，市販薬乱用 急増 厚労省調査 治療患者の4割超。岐阜新聞，2019.9.16.
- 91) 松本俊彦：せき止め乱用 10代急増 薬物依存調査 危険ドラッグはゼロ。静岡新聞，2019.9.16.
- 92) 松本俊彦：10代，せき止め乱用急増 薬物依存厚労省調査 危険ドラッグはゼロ。山形新聞，
2019.9.16.
- 93) 松本俊彦：せき止め乱用，10代で急増 薬物依存 厚労省調査 危険ドラッグはゼロに。日本海新
聞，2019.9.16.
- 94) 松本俊彦：市販薬乱用，10代で急増 厚労省・18年 薬物依存調査 危険ドラッグはゼロ。秋田さ
きがけ，2019.9.16.
- 95) 松本俊彦：せき止め乱用 10代急増 危険ドラッグはゼロ 厚労省調査。高知新聞，2019.9.16.
- 96) 松本俊彦：せき止め市販薬 10代で乱用急増 厚労省調査。熊本日日新聞，2019.9.16.
- 97) 松本俊彦：薬物依存患者の18年厚労省調査 せき止め乱用，10代急増 安価な市販薬，入手も
容易。新潟日報，2019.9.16.
- 98) 松本俊彦：市販薬乱用 10代急増 ネットに「多幸福感」生活波状恐れ 18年厚労省調査。福井新聞，

- 2019.9.16.
- 99) 松本俊彦：せき止め乱用 10 代で急増 18 年薬物依存実態調査 危険ドラッグはゼロに。四國新聞, 2019.9.16.
- 100) 松本俊彦：せき止め乱用, 10 代急増 薬物依存調査 危険ドラッグゼロに。福島民友, 2019.9.16.
- 101) 松本俊彦：せき止め乱用 10 代で急増 厚労省の薬物依存調査 危険ドラッグはゼロ。福島民報, 2019.9.16.
- 102) 松本俊彦：市販薬 10 代の乱用急増 昨年調査 精神科患者, 4 割以上。日本経済新聞, 2019.9.16.
- 103) 松本俊彦：厚労省調査 市販薬乱用 10 代急増 危険ドラッグはゼロに。下野新聞, 2019.9.16.
- 104) 田中紀子, 松本俊彦：依存症学会でまさかの優秀論文賞！画期的な研究「LOST」とは？。アゴラ, 2019.10.7.
- 105) 松本俊彦：ひとりで悩まないで～若者の自殺対策 2。公明新聞, 2019.10.17.
- 106) 松本俊彦：10 代の「市販薬」乱用者急増…ネット販売解禁と関係は？ わが子が乱用していたら？。大人んサー, 2019.10.28.
- 107) 松本俊彦：ひとりで悩まないで～若者の自殺対策 3。公明新聞, 2019.10.24.
- 108) 松本俊彦：「死にたい」と言える関係を 精神科医・松本俊彦さん講演。佐賀新聞, 2019.10.11.
- 109) 松本俊彦：自殺した児童生徒 最多の 332 人 昭和 63 年度以降で。NHK 政治マガジン, 2019.10.17.
- 110) 松本俊彦：自殺した児童生徒 最多の 332 人 昭和 63 年度以降で。NHK「ニュースセブン」, 2019.10.17.
- 111) 松本俊彦：ひとりで悩まないで～若者の自殺対策 4。公明新聞, 2019.11.1.
- 112) 松本俊彦：ひとりで悩まないで～若者の自殺対策 5。公明新聞, 2019.11.7.
- 113) 松本俊彦：薬物依存症への偏見なくせ。佐賀新聞, 2019.11.12.
- 114) 松本俊彦：田代まさし容疑者の出演動画, NHK が非公開に。薬物依存の苦しみを語っていた。BuzzFeedNews, 2019.11.6.
- 115) 松本俊彦, 上岡陽江, 古藤吾郎：特集「元タレントの田代まさしさんが覚醒剤所持で逮捕。薬物依存からの回復, そして支援の課題を改めて考える」。TBS ラジオ「荻上チキ・Session-22」, 2019.11.7.
- 116) 松本俊彦：逮捕の田代さんに「待ってる仲間, たくさんいるよ」, 専門家からは「順調な回復プロセス」との声。弁護士ドットコムニュース, 2019.11.12.
- 117) 松本俊彦：マスコミの罪…薬物乱用の「処罰報道」が, 依存症患者に与える苦しみ。現代ビジネス, 2019.11.12.
- 118) 松本俊彦：薬物依存症への偏見なくせ 国立精神・神経医療研究センター松本俊彦さん。佐賀新聞 LIVE, 2019.11.12.
- 119) 松本俊彦：覚醒剤依存「回復のカギは他人を頼れること」。毎日新聞「医療プレミア」, 2019.11.11.
- 120) 松本俊彦：「またか」と思っても…田代まさしさんをバッシングしてはいけない理由。Yahoo ニュース, 2019.11.7.
- 121) 松本俊彦：沢尻エリカ容疑者逮捕 相次ぐ著名人の違法薬物摘発にどう向き合えばいいか？。BuzzFeedNews, 2019.11.16.
- 122) 松本俊彦：合法的な薬物依存「デパス」のなんとも複雑な事情。東洋経済オンライン, 2019.11.29.
- 123) 松本俊彦：10 代市販薬乱用広がる 厚労省調査「多幸感」求め依存。読売新聞, 2019.11.25.
- 124) 松本俊彦：覚醒剤違反「再犯」66% 防止白書 09 年から 7.7 ポイント増。読売新聞, 2019.11.29.
- 125) 松本俊彦：薬物依存症には刑罰ではなく治療が必要な事を知って欲しい。VIDEO NEWS, 2019.12.7.
- 126) 松本俊彦：いまこそ薬物依存を考える。NHK バリバラ, 2019.12.12.
- 127) 松本俊彦：オピニオンフォーラム 薬物は罪ですか 非犯罪化し治療・支援を。朝日新聞,

2019.12.13.

- 128) 松本俊彦:「ジャッジする前に背景を考える」想像力ある社会を目指す, 精神科医 松本俊彦先生. note.com, 2019.12.21.
- 129) 松本俊彦: 薬物依存 罰より支援. 毎日新聞, 2019.12.22.
- 130) 松本俊彦:「ダメ, 絶対」では依存症を防げないし, 説教はむしろ回復から遠ざけてしまいます. 週刊女性, 2020.1.28.
- 131) 松本俊彦: ストロングゼロで「自殺行動」「暴力も」ー松本俊彦氏が”ヤバイ酒”に警鐘. サイゾーウーマン, 2020.1.24.
- 132) 松本俊彦: もっと知りたい 薬とのつきあい方 2. 朝日新聞, 2020.1.28.
- 133) 松本俊彦: 身近なお酒や薬に潜む危険. NHK ラジオ第一「N ラジ」, 2020.1.29.
- 134) 松本俊彦: 規制だけでは解決できない増える 10 代の市販薬乱用. 週刊東洋経済 690 号, 2020.2.15.
- 135) 松本俊彦: 自傷行為から回復するために. 灯台 714 号, 2020.3.1.
- 136) 松本俊彦: やまゆり園事件考 刑事責任能力 下 別人格認められず. 神奈川新聞, 2020.3.9.
- 137) 松本俊彦: やまゆり園事件 16 日公判 被告への大麻の影響焦点. 朝日新聞, 2020.3.14.
- 138) 松本俊彦:「危険性は違法薬物」並み!?「ストロング系」が人気だけど… しんぶん赤旗, 2020.3.29.
- 139) 松本俊彦: 相模原殺傷事件 判決を機に (2) 風化させない努力必要. 秋田さきがけ, 2020.3.22.
- 140) 松本俊彦: 自殺 判断力欠く精神状態 昨年の自殺者 2 万人超. 読売新聞, 2020.3.27.
- 141) 松本俊彦: 相模原殺傷事件 判決を機に 被告の孤立感を想像 措置入院妥当性検証を. 愛媛新聞, 2020.3.30.
- 142) 船田正彦:「大麻汚染」少年に急拡大 昨年 429 人検挙, 大阪は最多 100 人, 朝日新聞 (夕刊), 2019.5.10.
- 143) 船田正彦: 大麻, 若者侵食 危険ドラッグから回帰?, 朝日新聞 (夕刊), 2019.5.16.
- 144) 嶋根卓也: 処方薬乱用防止へ薬薬連携ーお薬手帳の情報提供に活路 厚生労働省研究班. 薬事日報, 2019.4.15.
- 145) 嶋根卓也:「薬物構わない」中学生増加 18 年全国調査 ネットの影響か. 神戸新聞, 2019.6.22.
- 146) 嶋根卓也: 中学生 大麻容認が増加 18 年 7 万人調査 ネット影響か. 高知新聞, 2019.6.22.
- 147) 嶋根卓也:「薬物 OK」中学生増加 昨年全国調査 大麻 1.9%, ネット影響か. 北國新聞, 2019.6.22.
- 148) 嶋根卓也: 中学生 薬物に抵抗薄く 大麻容認 1.9%増 ネット影響か. 西日本新聞, 2019.6.22.
- 149) 嶋根卓也: 中学生 薬物「構わない」増 18 年全国調査 大麻の少年少女摘発急増. 信濃毎日新聞, 2019.6.22.
- 150) 嶋根卓也: 大麻 中学生の「容認」増加 ネットの影響か 18 年 7 万人調査. 毎日新聞, 2019.6.22.
- 151) 嶋根卓也: 中学生で大麻容認論増加 全国調査 ネット影響か. 共同通信, 2019.6.22
- 152) 嶋根卓也: 日本の中学生, 大麻容認率が増加. スプートニク日本(web 記事), 2019.6.23
- 153) 嶋根卓也:「大麻の使用構わない」中学生で増加 18 年調査. 日本経済新聞 (電子版) 2019.6.28.
- 154) 嶋根卓也: 大麻容認, 中学生で増加 昨年の全国調査 少年少女, 摘発は 5 倍超に. 日本経済新聞, 2019.6.29.
- 155) 嶋根卓也: たばこ感覚? 中学生の間に「大麻は問題ない」意識が広がっている背景とは. オトナセンサー (web 記事) 2019.7.9.
- 156) 嶋根卓也: 大麻汚染 進む低年齢化(上). 読売新聞, 2019.9.30
- 157) 嶋根卓也: 大麻汚染 進む低年齢化(下). 読売新聞, 2019.10.4.
- 158) 嶋根卓也: 薬物の危険性 若者に訴え. 読売新聞 (京都版) 2019.10.27
- 159) 嶋根卓也: 沢尻被告所持の MDMA クラブ参加者の 8%使用. 北日本新聞, 2019.12.8
- 160) 嶋根卓也: MDMA 使用 8% クラブイベント参加者. 大分合同新聞, 2019.12.8
- 161) 嶋根卓也: 合成麻薬「クラブ利用者間で拡大」専門家調査 8%に使用経験. 中国新聞, 2019.12.8.

- 162) 嶋根卓也 : クラブ参加者 8%使用経験 沢尻被告所持の MDMA. 静岡新聞, 2019.12.11.
- 163) 嶋根卓也 : 沢尻被告所持 MDMA 8%が使用経験 クラブイベント参加者. 福井新聞, 2019.12.8.
- 164) 嶋根卓也 : クラブイベント参加者 8%が MDMA 使用経験. スポーツ報知, 2019.12.8.
- 165) 嶋根卓也 : MDMA 使用経験, クラブ参加者の 8%. 日本経済新聞, 2019.12.8.
- 166) 嶋根卓也 : 沢尻被告所持の MDMA クラブ参加者の 8%が経験. 下野新聞, 2019.12.8.
- 167) 嶋根卓也 : クラブ利用者の 8%使用 沢尻被告所持 MDMA 専門家調査「経験率, 非常に高い」.
デリーー東北, 2019.12.8.
- 168) 嶋根卓也 : MDMA クラブ参加者 8%経験. 上毛新聞, 2019.12.8.
- 169) 嶋根卓也 : 沢尻被告所持 MDMA クラブ参加者 8%使用経験 専門家調査 利用者間で拡大か.
茨城新聞, 2019.12.8.
- 170) 嶋根卓也 : 大麻 高校生 0.3%「経験」全国調査 使用動画 影響も. 読売新聞, 2019.12.18.

4. 行動医学研究部

I. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

成人を主な対象とした様々な精神健康上の問題、特にトラウマ性疾患、悲嘆についての病態解明、治療研究に取り組むとともに、自然災害、犯罪被害、虐待等におけるストレスを緩和し、効果的な治療と支援の研究を進め、代表的な病態である PTSD の神経科学的・遺伝学的な解明と治療研究を推進している。各種震災、事故等に際しては専門家派遣などの現地支援に当たるとともに、効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる。また関係諸機関（厚生労働省、警察庁、内閣府等中央省庁、精神保健福祉センター、災害医療センター、保健医療科学院、世界保健機構、兵庫県および新潟こころのケアセンター等）とのネットワークの構築、共同研究の推進、教育研修活動も積極的に行っているところである。自然災害、犯罪被害者への対応に関するガイドラインの作成、普及、研修に取り組んでいる。

また、ストレス関連疾患、特に心身症や摂食障害、生活習慣病を対象に、Biopsychosocial モデルに基づき、心身相関の観点から病因や発症のメカニズム、病態を臨床的、基礎的に研究し、効果的な治療法や予防法を開発している。前年度に引き続き精神保健対策費補助金摂食障害治療支援センター設置運営事業による摂食障害全国基幹センターが当研究部内に設置された。

臨床面では研究部のスタッフがセンター病院心療内科・精神科外来で診療・研究に携わっている。

令和元年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：金 吉晴（併任）。診断技術研究室長：篠崎康子（～9月）。ストレス研究室長：安藤哲也。心身症研究室長：関口 敦。認知機能研究室長：堀 弘明。常勤研究員は伊藤真利子、大沼麻実。流動研究員は小原千郷、河西ひとみ、島津恵子、大滝涼子（～7月）、中島実穂。科研費研究員は船場美佐子、菅原彩子、伊藤（丹羽）まどか（5～6月）、高村恒人（1月～）。科研費研究補助員は國重寛子、秀 美保。併任研究員は有賀 元、富田吉敏、丹羽まどか（4月）。協力研究員は倉 尚樹。外来研究員は袴田優子、林 明明、丹羽まどか（7月～）。研究生は上田 鼓、宮本悦子、赤井利奈、国弘志保、菅原まゆみ、井上朋子、笥 亮子（4月）、堀 有信、岡崎純弥、牧田 潔、荒川和香子、大友理恵子、中山未知、堀江美智子、松岡 潤、井野敬子、須賀楓介、大塚豪士（5月～）、大滝涼子（8月～）、今井理紗（1月～）、樽松文子、樋上巧洋、勝沼り。実習生は下村寛治（5～10月）、小島汐里（5月～）。客員研究員として兒玉直樹、大和 滋、西園マーハ文、藤井 靖、菊地裕絵、近喰ふじ子、守口善也、寺澤悠里（1月～）、加茂登志子、小西聖子、宮地光恵、井筒 節、堤 敦朗、福地 成、松本和紀、濱崎由紀子、中島聡美、田中英三郎、宮本純子、笥 亮子（5月～）、藤村朗子（5月～）、茅野龍馬（8月～）の各氏を迎えている。（順不同）

II. 研究活動

1) 複雑型 PTSD に関する認知行動療法の検討

複雑性PTSDに対する認知行動療法である、STAIR/NST (STAIR Narrative Therapyともよばれる) の日本での実施可能性、安全性、有効性を検討するために、オープン前後比較試験を実施中である。またスーパーバイズ体制の構築と治療者育成を行っている。単施設での臨床試験を多施設共同研究へと拡大し、登録と治療介入を進めている。今年度は、STAIR/NSTの治療原理と治療マニュアルが書かれた書籍の翻訳を完了し、ワークシートやハンドアウトと合わせて、日本語版の出版準備を行った。加えて、センター内外で開催された複雑性PTSD研修会や勉強会にて、複雑性PTSDの診断や病態理解、治療法についての講義を行った。（金、丹羽、大滝）

2) PTSD の病態解明と治療効果予測法開発に向けた、遺伝子・バイオマーカー・心理臨床指標による多層的検討

トラウマ体験者（PTSD 発症群，非発症群）と健常者を対象とし，遺伝子解析（遺伝子多型，遺伝子発現，DNA メチル化），内分泌・免疫系や自律神経系指標を含むバイオマーカー測定，脳 MRI 計測，認知機能測定，多角的な心理・臨床的評価を行う．PTSD 発症群に対しては持続エクスポージャー療法等の治療を行い，治療反応性との関連も検討する．これらの検討により，PTSD の病因・病態解明，生物学的指標に基づく客観的治療効果予測法の開発を目指す．名古屋市立大学精神医学教室との共同研究として実施しており，現在までに合計 232 名（本年度：42 名）のデータを収集し継続中．PTSD 患者において血液中の炎症マーカー濃度が自記式質問紙で評価したレジリエンス・QOL の得点との間に負の相関を示すことを明らかにしたこと（Imai et al., 2019 Sci Rep），末梢血から抽出した RNA を用いた網羅的遺伝子発現解析によって PTSD に病態に基づく亜型が存在する可能性を見出したこと（Hori et al., 2020 Psychoneuroendocrinology），PTSD 患者において BDNF 遺伝子の Val66Met 多型とネガティブな記憶バイアスの間に関連を見出したこと（Hori et al., 2020 Sci Rep）などが本年度の主要な成果である．（堀，関口，伊藤，林，丹羽，金）

3) PTSD に対するメマンチンの有効性に関するオープン臨床試験

PTSD 患者を対象として，アルツハイマー型認知症の治療に用いられている NMDA 受容体拮抗薬メマンチンを投与し，PTSD 治療におけるメマンチンの有効性を検討する．PTSD 症状と認知機能を主要アウトカム指標とする．本研究では，予備的検討としてオープン臨床試験を行い，効果サイズや安全性を検討することにより，その後予定している RCT のプロトコールを作成することを目的とする．本年度中に合計 10 名の実施が完了したため，中間解析結果についての論文を作成中である．また，メマンチン治療前後で遺伝子発現解析や内分泌・免疫系測定，脳 MRI 計測を行い，治療効果機序の解明および治療効果サロゲートマーカーの開発を目指している（堀，関口，伊藤，金）

4) 血液検査による統合失調症・気分障害の診断法の開発に関する研究

患者・健常者から血液を採取し，タンパク・mRNA・代謝物などを定量することにより統合失調症や気分障害の診断法や分類，経過判定指標に役立つ分子を同定することを目的とする．神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施しており，すでに約 440 名の被験者のサンプルが集積されている．双極性障害患者において血中の炎症性サイトカイン濃度が脂肪酸デサチュラーゼ（FADS）遺伝子の多型や魚の摂取量と関連すること（Koga et al., 2019 Transl Psychiatry），双極性障害患者では血中オレキシン濃度が有意に低下していること（Tsuchimine et al., 2019 Neuropsychiatr Dis Treat）を見出したことなどが本年度の主要な成果である．（堀）

5) 災害時精神保健医療ガイドライン作成

災害情報データベース内容の最新化のため，災害時精神保健医療に関する過去 10 年以内に発表された査読文献に焦点を当て，とくにシステマティックレビューを行った文献を中心に収集しその内容を要約・精査した．（金，中島，島津）

6) 一過性ストレスが記憶へ及ぼす効果に関する研究

一過的なストレスを経験した際に，ストレスが記憶パフォーマンスへ与える影響および，ストレスの生理的反応，さらに性格特性等との関連を調べる研究であり，ノイズストレス課題（ホワイトノイズ）または社会的ストレス課題（スピーチおよび暗算課題）をストレス負荷として使用した．健常大学生を対象に実験を行い，単語や画像による記憶への影響を検討した．（林，金）

7) 情報処理（主に記憶）バイアスを標的とした心理治療の有効性の検証とその神経生物学的機序の解明

ストレス関連精神障害に対するリスク保有者を対象として，記憶領域にも働きかける新しい CBM の有効性およびその神経作用機序について，国立精神神経医療研究センターや北里大学，労働安全総合研究所等と共同で，fMRI や遺伝子（発現を含む），内分泌・免疫炎症系指標を用いて包括的な観点から検証するプロジェクトを進めている．現在までに 113 名データを収集している．本年度はその成果を 2 本の原著論文として発表し，プレスリリースした（袴田，堀）

8) 摂食障害治療支援センターにおける相談・支援事例の調査

摂食障害治療支援センター（支援センター）での相談・支援事例を収集、集積し、内容を解析し、解析内容を支援センターにフィードバックして業務の改善に役立て、摂食障害支援ガイドラインの開発および支援体制モデルの確立のための基礎資料とするための研究を実施した。令和元年度は、4 全国 4 カ所の支援センターの 2019 年 4 月～2019 年 11 月末までの相談事例延べ 1085 件を解析し報告書にまとめた。また、各支援センターのコーディネーターへの研修及び聞き取り調査を実施し、報告法を統一しデータの精度を高めた。（小原，安藤）

9) 全国の診療所における摂食障害の患者数調査

全国精神科・心療内科を標榜している診療所を対象に抽出調査を行い、全国精神科・心療内科を標榜する診療所を受診した摂食障害の患者数を推計するための調査を実施し、患者数を約 1 万 5 千人と推計した。（安藤）

10) 精神保健研究所の摂食障害相談支援実態と課題の調査

精神保健福祉センターでの相談・支援実態や課題の質問紙調査を TMC 立森久照室長と共同で実施し、全てのセンター（69 か所）から回答を得た。解析の結果 80%が将来摂食障害の支援の実施を考えており、必要なリソースとして専門医療機関と、摂食障害支援の研修が求められていること等がわかった。（安藤）

11) 神経性やせ症のゲノムワイド関連研究

神経性やせ症のゲノムワイド関連解析に関する国際コンソーシアムに参加し、研究成果が Nature Genet 誌に発表された（安藤）

12) 神経性過食症に対する認知行動療法の無作為比較試験

日本人の神経性過食症患者を対象に摂食障害の認知行動療法「改良版」(enhanced cognitive behavior therapy : CBT-E) の効果検証のための東京大学，東北大学，九州大学，国立国際医療研究センター国府台病院および当センターTMC との多施設共同無作為化比較試験の研究体制構築，計画と倫理申請，および準備を終了し，被験者の募集を開始した。また，CBT-E の原著者によるケーススーパーヴィジョンにより介入実施者を養成した。プロトコル論文が BioPsychoSocial Med 誌に受理された。（小原，関口，菅原彩子，船場，河西，安藤，富田）

13) 過敏性腸症候群に対するビデオ教材を併用した認知行動療法プログラムの実現可能性および有効性の検討

これまでに過敏性腸症候群（IBS）に対する内部感覚暴露を用いた CBT（CBT-IE）の日本語版を作成し，単群 20 例の前後比較によるフィージビリティ研究により，高い効果量をもって腹部症状や QOL の改善が認められた（論文投稿中）。さらに CBT-IE プログラムのコストを軽減するため，対面セッションの前にビデオ教材を視聴するプログラムを開発し，センター病院心療内科 富田吉敏医師，消化器内科有賀 元院長と共同で 17 例の前後比較によるフィージビリティ研究を実施し，解析結果を学会報告した（論文投稿準備中）。（船場，河西，藤井，富田，安藤）

14) 過敏性腸症候群に対するビデオ教材を併用した認知行動療法プログラムのランダム化比較研究

過敏性腸症候群（IBS）に対するビデオ教材を併用した CBT プログラムの効果検証のため東京大学，東北大学，国立国際医療研究センター病院，同国府台病院および当センター病院，TMC との多施設共同無作為化比較試験プロトコルを確定し，プロトコル論文が BioPsychoSocialMedicine に掲載された。全施設で両群合計 22 例の IBS 患者を症例登録し（内 16 例が NCNP），研究を継続している。（河西，船場，関口，藤井，小原，富田，安藤）

15) 過敏性腸症候群に併存する自己臭恐怖の実態調査

国内の有病率が高い自己臭恐怖は Olfactory reference syndrome として世界的にも症例報告が増えてきたが，その病態や効果的な治療法についてまだほとんど明らかになっていない。ORS は過敏性腸症候群（IBS）にしばしば併存する。本年度は匿名のインターネット調査によって，203 名の IBS 様症状と自己臭恐怖をもつ人々を対象にデータを収集し，結果を学会で発表した。（河西，関口，船場，富田，小原，菅原彩子，安藤）

16) 心療内科で実施する心理療法の認知神経科学的メカニズムの解明のための観察研究

国立国際医療センター（NCGM）国府台病院の心療内科で実施している心理療法前後で、認知心理検査を実施し、心理療法の認知科学的な治療構造を明らかにすることを目指している。主に、心身症の認知的モデルとして注目されている、内受容知覚の変容に着目をして、心理療法の治療構造の解明を目指している。NCGM 国府台病院診療内科河合啓介診療科長、田村奈穂医師、庄子雅保心理士、馬場安希心理士、および慶應大学文学部寺澤悠理准教授（客員研究員）らとの共同研究として実施している。NCGM の倫理審査の承認を受け、検査バッテリーを確定させ、45 名からデータ収集を行った。（関口、菅原彩子、寺澤）

17) 機能性腸障害関連認知評価尺度および過敏性腸症候群関連行動反応評価尺度

過敏性腸症候群に特化した認知・行動的側面の評価尺度する機能性腸障害関連認知評価尺度および過敏性腸症候群関連行動反応評価尺度の日本語版を標準化する研究を横浜市立大学健康社会医学ユニットの菅谷渚助教と実施し、データを収集した。（船場、河西、小原、関口、有賀、富田、安藤）

18) エクソーム解析による摂食障害原因変異の網羅的探索

摂食障害発症に寄与する原因変異ならびに遺伝子を同定するため、東海大学の岡 晃講師との共同研究により、摂食障害罹患同胞 10 家族を対象に罹患者 20 名および非罹患者 18 名の計 38 名のエクソームシーケンシングを東海大学の岡 晃講師との共同研究で実施した。全ての遺伝様式について罹患同胞で一致する変異を抽出し、たんぱく質の構造を変化させようと予測される変異を絞り込んだ。（安藤）

19) ストレス関連疾患の疾患横断的なバイオマーカー検索のための脳 MRI 研究

トラウマ歴やストレス負荷などが脳内情報処理や脳神経回路ダイナミクスに与える影響を疾患横断的に検証し、多様な表現型を有するストレス関連疾患の新たな診断法の開発を目指している。PTSD 患者、IBS 患者及び健常群、延べ 80 名のデータを収集した。（関口、菅原彩子、勝沼、伊藤、林、丹羽、堀、金）

20) 疾患横断的脳画像レジストリ研究

摂食障害患者と、心身症患者の疾患横断的な脳画像レジストリを構築している。脳 MR 画像は、3 テスラ MRI 装置が利用できる共同研究施設（東北大学、千葉大学、産業医科大学、九州大学）において、可能な限り撮像シーケンスを統一し、安静時 fMRI、拡散テンソル強調画像、T1 強調画像による撮像を行なっている。同時に質問紙や認知課題での心理評価・症状評価を行なっている。疾患の枠組みを超え、認知・心理・行動指標に特異的な脳内情報処理や脳神経回路ダイナミクスの異常の解明をするための、研究基盤構築を行っている。各施設における総数では、摂食障害患者のベースライン 90 例、フォローアップ 38 例、健常群ベースライン 120 例、フォローアップ 45 例の脳 MR 画像および心理検査データが収集できた。心身症（IBS）患者に関しては、NCNP において 13 例の患者群を対象として MRI 検査を実施し、5 例の治療介入前の検査を実施済みである。（関口、安藤、河西、船場、小原、菅原彩子、勝沼）

21) 脳画像データ統合による解析研究

脳画像研究を実施している心療内科関連施設（東北大学、千葉大学、産業医科大学、九州大学）で収集した脳画像データを NCNP に集約し、脳画像の前処理及び個人内解析を半自動的に実行できる解析パイプラインを構築している。更に、分担施設でも解析を実施するためのデータダウンロードシステムを構築し、解析用 PC を導入して横断的な解析研究を行い疾患横断的な認知・心理・行動指標に特異的な脳内情報処理や脳神経回路ダイナミクスの異常の解明を目指している。（関口、安藤、河西、船場、小原、菅原彩子）

22) 内受容知覚訓練の認知神経科学的効果の検証

心身症の認知的モデルとして注目されている、内受容知覚に着目した研究であり、バイオフィードバックの手法を用いた内受容感覚訓練を実施し、訓練前後に脳 MRI、認知検査を実施することにより、認知神経科学的な効果を検証している。慶應大学文学部の寺澤悠理准教授（客員研究員）と

の共同研究で実施しており、訓練課題を開発し、延べ 22 名の健常大学生を対象とした訓練介入データを収集した。内受容感覚の訓練により、行動様式がより適応的になることを明らかにしたこと (Sugawara A, et al., 2020 BioPsychoSocial Medicine) が本年度の主要な成果である。(関口, 菅原彩子, 勝沼, 寺澤)

23) 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出

摂食障害への認知行動療法 (CBT) 前後の縦断的観察研究を実施し、CBT 前後の脳 MRI, 臨床データ, 遺伝子発現, 神経回路機能の変化との関係性明らかにすることで、摂食障害の早期発見・早期介入に資する CBT 効果の神経科学的エビデンスを創出することを目指す。(関口, 安藤, 堀, 河西, 菅原彩子, 高村, 小原, 守口, 富田, 金)

24) 医療機関を受診していない摂食障害患者と家族の支援ニーズに関する調査研究

病院を受診していない摂食障害患者や家族の支援ニーズを解明・整理することを目的とする。過去に集められた支援ニーズに関する情報を参考に Web 調査を実施し、患者・家族, 受診中・非受診という立場の違いから検討を進め、支援ニーズを解明・整理する。(菅原彩子, 関口, 小原)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 東進ハイスクール Toshin.com 高校生の悩み相談「考え方を変えると感情が変わります」2019.5.15. (金)
- ・ 東進ハイスクール Toshin.com 高校生の悩み相談「不安を溜め込まず、考え方の基準を変えてみよう」2019.5.22. (金)
- ・ 第一生命保険株式会社「健康第一 Report (メンタルヘルス編)」リーフレット監修, 2019.12. (金)
- ・ 日本経済新聞デジタル版「怖い記憶をゲノム情報で修正へ PTSD のなりやすさ把握」2020.3.27. (堀, 金)
- ・ 摂食障害情報ポータルサイト (一般向け <http://www.edportal.jp/>, 専門職向け <http://www.edportal.jp/pro/>) を運営し、市民および専門職への摂食障害の普及・啓発を行った (安藤, 関口, 小原)。令和元年度は 1 年間に 1,777,828 ページビュー, 1,036,767 セッション, 797,727 ユーザー (google analytics) のアクセスがあった。
- ・ 第 6 回 NCNP メディア塾で、「隠れた医療難民を救え：摂食障害の治療と支援」と題してテレビ局, ラジオ局, 新聞社, 雑誌社などの記者, ジャーナリストを対象に講演を行った (安藤, 小原)

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 全国の行政職員向け研修会等で、災害精神保健に関する最新知見を提供している。(金)
- ・ 連携大学教授：東京大学大学院医学系研究科 (金)
- ・ 特別招聘教授：慶応義塾大学環境情報学部 (金)
- ・ 客員教授：山梨大学医学部 (金), 東北大学大学院医学系研究科 (金), 武蔵野大学 (金), ニューヨーク大学医学部精神科 (金), 東京女子医科大学 (金), 東北大学大学院医学系研究科 (安藤)
- ・ 客員准教授：山梨大学大学院 (安藤), 東北大学大学院医学系研究科 (関口)
- ・ 大学講師：京都大学医学部 (金), 学習院大学文学部 (金), 東京大学医学部 (安藤), 東北大学東北メディカル・メガバンク機構 (関口)
- ・ 各地の医師会, 大学等の依頼を受け、トラウマ対応, PTSD 治療, 犯罪被害者対応, 被災者・遺族対応, 災害精神保健に関する一連の講演を行った (金)
- ・ センター病院受託実習生指導：早稲田大学大学院 (2 名), 明星大学大学院 (2 名) (安藤, 小原, 河西)

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて 2019 年度精神保健に関する技術研修. 第 3 回 災害時 PFA と心理対応研修を開催した. 2019.5.23-24. (金, 大沼)
- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて 2019 年度精神保健に関する技術研修. 第 17 回摂食障害治療研修を開催した. 2019.9.17-20 (安藤, 関口, 小原)
- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて 2019 年度精神保健に関する技術研修. 第 4 回 災害時 PFA と心理対応研修を開催した. 2019.10.16-17. (金, 大沼)

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

① 公的委員会

- ・ ふくしま心のケアセンター 顧問 (金)
- ・ みやぎ心のケアセンター 顧問 (金)
- ・ 被災 3 県心のケア総合支援調査研究等事業 実施委員会 委員 (金)
- ・ 日本医療政策機構 アドバイザリーボードメンバー (金)

② 摂食障害治療支援センター設置運営事業

令和元年度も平成 26~30 年度に続き NCNP が摂食障害全国基幹センターに指定され, 事務局実施責任者 (センター長) を安藤哲也が, 実施担当者を関口 敦 (副センター長), 小原千郷, 菅原彩子が担当した. 全国摂食障害対策連絡協議会開催及び摂食障害全国基幹センターの設置運営を行い神経性無食欲症や神経性大食症などの摂食障害対策を推進した. 摂食障害治療支援センターを統括した, 摂食障害情報ポータルサイトを運営した. 平成 30 年度の摂食障害全国基幹センターおよび宮城県, 静岡県, 福岡県, 千葉県の摂食障害治療支援センターの成果をまとめた報告書を作成した. 摂食障害治療コーディネーター研修および養護教諭を対象にしたゲートキーパー研修を実施した. 「摂食障害治療支援コーディネーターのための相談支援の手引き」を作成し, 発刊した, 摂食障害全国基幹センターHP で事業の活動と成果物を公開した. (精神保健等国庫補助金: 安藤, 関口, 小原)

③ 摂食障害の治療支援ネットワークの指針と簡易治療プログラムの開発

地域での摂食障害の多機関連携システムを構築するため, 1) 精神保健福祉センターや自治体の担当課を対象に, 摂食障害の相談支援実態, 地域連携構築のための課題を調査し, 提言をまとめること, 2) 精神科領域, 身体科領域および相互での連携の指針とマテリアルを作成すること, 3) 非専門家でも実施可能な簡易治療プログラムを開発すること, を目指して研究を大阪市立大学神経精神科井上幸紀教授, 兵庫医科大学精神科神経科松永寿人教授, 東京大学心療内科吉内一浩准教授, 九州大学心療内科須藤信行教授, 千葉大学精神科中里道子教授, NCGM 国府台病院心療内科河合啓介医長および TMC 立森久照室長との共同研究で実施した. (AMED 障害者対策総合研究開発事業: 安藤, 関口, 小原, 菅原彩子, 菊地)

④東日本成人矯正医療センター「摂食障害受刑者の円滑な社会復帰のための治療・支援体制の構築に向けた検討会議」構成員 (安藤)

(5) センター内における臨床的活動

- ・ センター病院に併任して毎週月曜日の心療内科外来を担当し心身症, 摂食障害の診療を行った. また, 月 2 回 IBS 外来を担当し, 過敏性腸症候群その他の機能性消化管疾患の診療を実施した. (安藤)
- ・ 病院において外来診療を行っている. (堀)
- ・ 機能性消化管疾患患者を中心に心理治療を実施した. (河西, 船場)

(6) その他

- ・ 行動医学研究部 HP に「自然災害に関するガイドライン」「薬物療法アルゴリズム」「犯罪被害者のメンタルヘルス情報ページ」を掲載し、専門家、一般に対し治療や対応についての啓発を行っている。(金)
- ・ OECD の傘下である NEA [Nuclear Energy Agency: 原子力機関 (本部所在地: パリ)] の Expert Group on Non-radiological Public Health Aspects of Radiation Emergency Planning and Response (EGNR) の一員として、WHO と協働で原子力緊急時におけるメンタルヘルスならびに心理社会的支援について政策の枠組みを構築し、ステークホルダーらを対象に実用的なツール作成に結びつける事業に参加している。(金, 島津)

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Hakamata Y, Komi S, Sato E, Izawa S, Mizukami S, Moriguchi Y, Motomura Y, Matsui M, Kim Y, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H: Cortisol-related hippocampal-extrastriate functional connectivity explains the adverse effect of cortisol on visuospatial retrieval. *Psychoneuroendocrinology* 109: 104310, 2019.4.
- 2) Ito M, Kim Y: Somatoform disorder and negative emotion: Clinical implication for psychotherapy. *Psychiatry and clinical neurosciences*, 73(9):517, 2019.9
- 3) Imai R, Hori H, Itoh M, Lin M, Niwa M, Ino K, Ogawa S, Sekiguchi A, Kunugi H, Akechi T, Kamo T, Kim Y: Relationships of blood proinflammatory markers with psychological resilience and quality of life in civilian women with posttraumatic stress disorder. *Sci Rep* 9: 17905, 2019.11.
- 4) Hori H, Yoshida F, Itoh M, Lin M, Niwa M, Ino K, Imai R, Ogawa S, Matsui M, Kamo T, Kunugi H, Kim Y: Proinflammatory status-stratified blood transcriptome profiling of civilian women with PTSD. *Psychoneuroendocrinology* 111: 104491, 2020.1.
- 5) Hori H, Itoh M, Yoshida F, Lin M, Niwa M, Hakamata Y, Ino K, Imai R, Ogawa S, Matsui M, Kamo T, Kunugi H, Kim Y: The BDNF Val66Met polymorphism affects negative memory bias in civilian women with PTSD. *Sci Rep* 10:3151, 2020. 2.
- 6) Lin M, Kim Y: The reliability and validity of the 18-item long form and two short forms of the Problematic Internet Use Questionnaire in three Japanese samples. *Addictive Behaviors* 101:105961, 2020.2.
- 7) Hakamata Y, Mizukami S, Izawa S, Moriguchi Y, Hori H, Kim Y, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H.: Basolateral amygdala connectivity with subgenual anterior cingulate cortex represents enhanced fear-related memory encoding in anxious humans. *Biological Psychiatry: Cognitive Neuroscience and Neuroimaging* 5(3): 301-310, 2020.3.
- 8) Kawanishi H, Sekiguchi A, Funaba M, Fujii Y, Yoshiuchi K, Kikuchi H, Kawai K, Maruo K, Sugawara N, Hatano K, Shoji T, Yamazaki T, Toda K, Murakami M, Shoji M, Ohara C, Tomita Y, Fukudo S, Ando T: Cognitive behavioral therapy with interoceptive exposure and complementary video materials for irritable bowel syndrome (IBS): protocol for a multicenter randomized controlled trial in Japan. *BioPsychoSocial Medicine* 13: 14, 2019.6.
- 9) Watson HJ, Yilmaz Z, Thornton LM, Hübel C, Coleman JRI, Gaspar HA, Bryois J, Hinney A, Leppä VM, Mattheisen M, Medland SE, Ripke S, Yao S, Giusti-Rodríguez P, Hanscombe KB, Purves KL, Adan RAH, Alfredsson L, Ando T, Andreassen OA, Baker

- JH, Berrettini WH, Boehm I, Boni C, Perica VB, Buehren K, Burghardt R, Cassina M, Cichon S, Clementi M, Cone RD, Courtet P, Crow S, Crowley JJ, Danner UN, Davis OSP, de Zwaan M, Dedoussis G, Degortes D, DeSocio JE, Dick DM, Dikeos D, Dina C, Dmitrzak-Weglarz M, Docampo E, Duncan LE, Egberts K, Ehrlich S, Escaramís G, Esko T, Estivill X, Farmer A, Favaro A, Fernández-Aranda F, Fichter MM, Fischer K, Föcker M, Foretova L, Forstner AJ, Forzan M, Franklin CS, Gallinger S, Giegling I, Giuranna J, Gonidakis F, Gorwood P, Mayora MG, Guillaume S, Guo Y, Hakonarson H, Hatzikotoulas K, Hauser J, Hebebrand J, Helder SG, Herms S, Herpertz-Dahlmann B, Herzog W, Huckins LM, Hudson JI, Imgart H, Inoko H, Janout V, Jiménez-Murcia S, Julià A, Kalsi G, Kaminská D, Kaprio J, Karhunen L, Karwautz A, Kas MJH, Kennedy JL, Keski-Rahkonen A, Kiezebrink K, Kim YR, Klareskog L, Klump KL, Knudsen GPS, La Via MC, Le Hellard S, Levitan RD, Li D, Lilenfeld L, Lin BD, Lissowska J, Luykx J, Magistretti PJ, Maj M, Mannik K, Marsal S, Marshall CR, Matingsdal M, McDevitt S, McGuffin P, Metspalu A, Meulenbelt I, Micali N, Mitchell K, Monteleone AM, Monteleone P, Munn-Chernoff MA, Nacmias B, Navratilova M, Ntalla I, O'Toole JK, Ophoff RA, Padyukov L, Palotie A, Pantel J, Papezova H, Pinto D, Rabionet R, Raevuori A, Ramoz N, Reichborn-Kjennerud T, Ricca V, Ripatti S, Ritschel F, Roberts M, Rotondo A, Rujescu D, Rybakowski F, Santonastaso P, Scherag A, Scherer SW, Schmidt U, Schork NJ, Schosser A, Seitz J, Slachtova L, Slagboom PE, Slof-Op 't Landt MCT, Slopian A, Sorbi S, Świątkowska B, Szatkiewicz JP, Tachmazidou I, Tenconi E, Tortorella A, Tozzi F, Treasure J, Tsitsika A, Tyszkiewicz-Nwafor M, Tziouvas K, van Elburg AA, van Furth EF, Wagner G, Walton E, Widen E, Zeggini E, Zerwas S, Zipfel S, Bergen AW, Boden JM, Brandt H, Crawford S, Halmi KA, Horwood LJ, Johnson C, Kaplan AS, Kaye WH, Mitchell JE, Olsen CM, Pearson JF, Pedersen NL, Strober M, Werge T, Whiteman DC, Woodside DB, Stuber GD, Gordon S, Grove J, Henders AK, Juréus A, Kirk KM, Larsen JT, Parker R, Petersen L, Jordan J, Kennedy M, Montgomery GW, Wade TD, Birgegård A, Lichtenstein P, Noring C, Landén M, Martin NG, Mortensen PB, Sullivan PF, Breen G, Bulik CM: Genome-wide association study identifies eight risk loci and implicates metabo-psychiatric origins for anorexia nervosa. *Nature genetics* 51(8): 1207-1214, 2019.7.8.
- 10) Munn-Chernoff MA, Johnson EC, Chou YL, Coleman JRI, Thornton LM, Walters RK, Yilmaz Z, Baker JH, Hübel C, Gordon S, Medland SE, Watson HJ, Gaspar HA, Bryois J, Hinney A, Leppä VM, Mattheisen M, Ripke S, Yao S, Giusti-Rodríguez P, Hanscombe KB, Adan RAH, Alfredsson L, Ando T, Andreassen OA, Berrettini WH, Boehm I, Boni C, Boraska Perica V, Buehren K, Burghardt R, Cassina M, Cichon S, Clementi M, Cone RD, Courtet P, Crow S, Crowley JJ, Danner UN, Davis OSP, de Zwaan M, Dedoussis G, Degortes D, DeSocio JE, Dick DM, Dikeos D, Dina C, Dmitrzak-Weglarz M, Docampo E, Duncan LE, Egberts K, Ehrlich S, Escaramís G, Esko T, Estivill X, Farmer A, Favaro A, Fernández-Aranda F, Fichter MM, Fischer K, Föcker M, Foretova L, Forstner AJ, Forzan M, Franklin CS, Gallinger S, Giegling I, Giuranna J, Gonidakis F, Gorwood P, Gratacos Mayora M, Guillaume S, Guo Y, Hakonarson H, Hatzikotoulas K, Hauser J, Hebebrand J, Helder SG, Herms S, Herpertz-Dahlmann B, Herzog W, Huckins LM, Hudson JI, Imgart H, Inoko H, Janout V, Jiménez-Murcia S, Julià A, Kalsi G, Kaminská D, Karhunen L, Karwautz A, Kas MJH, Kennedy JL, Keski-Rahkonen A, Kiezebrink K, Kim YR, Klump KL, Knudsen GPS, La Via MC, Le Hellard S, Levitan RD, Li D, Lilenfeld L, Lin BD, Lissowska J, Luykx J, Magistretti PJ, Maj M, Mannik K,

- Marsal S, Marshall CR, Mattingsdal M, McDevitt S, McGuffin P, Metspalu A, Meulenbelt I, Micali N, Mitchell K, Monteleone AM, Monteleone P, Nacmias B, Navratilova M, Ntalla I, O'Toole JK, Ophoff RA, Padyukov L, Palotie A, Pantel J, Papezova H, Pinto D, Rabionet R, Raevuori A, Ramoz N, Reichborn-Kjennerud T, Ricca V, Ripatti S, Ritschel F, Roberts M, Rotondo A, Rujescu D, Rybakowski F, Santonastaso P, Scherag A, Scherer SW, Schmidt U, Schork NJ, Schosser A, Seitz J, Slachtova L, Slagboom PE, Slof-Op't Landt MCT, Slopian A, Sorbi S, Świątkowska B, Szatkiewicz JP, Tachmazidou I, Tenconi E, Tortorella A, Tozzi F, Treasure J, Tsitsika A, Tyszkiewicz-Nwafor M, Tziouvas K, van Elburg AA, van Furth EF, Wagner G, Walton E, Widen E, Zeggini E, Zerwas S, Zipfel S, Bergen AW, Boden JM, Brandt H, Crawford S, Halmi KA, Horwood LJ, Johnson C, Kaplan AS, Kaye WH, Mitchell J, Olsen CM, Pearson JF, Pedersen NL, Strober M, Werge T, Whiteman DC, Woodside DB, Grove J, Henders AK, Larsen JT, Parker R, Petersen LV, Jordan J, Kennedy MA, Birgegård A, Lichtenstein P, Norring C, Landén M, Mortensen PB, Polimanti R, McClintick JN, Adkins AE, Aliev F, Bacanu SA, Batzler A, Bertelsen S, Biernacka JM, Bigdeli TB, Chen LS, Clarke TK, Degenhardt F, Docherty AR, Edwards AC, Foo JC, Fox L, Frank J, Hack LM, Hartmann AM, Hartz SM, Heilmann-Heimbach S, Hodgkinson C, Hoffmann P, Hottenga JJ, Konte B, Lahti J, Lahti-Pulkkinen M, Lai D, Ligthart L, Loukola A, Maher BS, Mbarek H, McIntosh AM, McQueen MB, Meyers JL, Milaneschi Y, Palviainen T, Peterson RE, Ryu E, Saccone NL, Salvatore JE, Sanchez-Roige S, Schwandt M, Sherva R, Streit F, Strohmaier J, Thomas N, Wang JC, Webb BT, Wedow R, Wetherill L, Wills AG, Zhou H, Boardman JD, Chen D, Choi DS, Copeland WE, Culverhouse RC, Dahmen N, Degenhardt L, Domingue BW, Frye MA, Gäbel W, Hayward C, Ising M, Keyes M, Kiefer F, Koller G, Kramer J, Kuperman S, Lucae S, Lynskey MT, Maier W, Mann K, Männistö S, Müller-Myhsok B, Murray AD, Nurnberger JI, Preuss U, Räikkönen K, Reynolds MD, Ridinger M, Scherbaum N, Schuckit MA, Soyka M, Treutlein J, Witt SH, Wodarz N, Zill P, Adkins DE, Boomsma DI, Bierut LJ, Brown SA, Bucholz KK, Costello EJ, de Wit H, Diazgranados N, Eriksson JG, Farrer LA, Foroud TM, Gillespie NA, Goate AM, Goldman D, Grucza RA, Hancock DB, Harris KM, Hesselbrock V, Hewitt JK, Hopfer CJ, Iacono WG, Johnson EO, Karpyak VM, Kendler KS, Kranzler HR, Krauter K, Lind PA, McGue M, MacKillop J, Madden PAF, Maes HH, Magnusson PKE, Nelson EC, Nöthen MM, Palmer AA, Penninx B, Porjesz B, Rice JP, Rietschel M, Riley BP, Rose RJ, Shen PH, Silberg J, Stallings MC, Tarter RE, Vanyukov MM, Vrieze S, Wall TL, Whitfield JB, Zhao H, Neale BM, Wade TD, Heath AC, Montgomery GW, Martin NG, Sullivan PF, Kaprio J, Breen G, Gelernter J, Edenberg HJ, Bulik CM, Agrawal A: Shared genetic risk between eating disorder and substance-use-related phenotypes: Evidence from genome-wide association studies. *Addict Biol* e12880, 2020.2.16.
- 11) Ohara C, Sekiguchi A, Takakura S, Endo Y, Tamura N, Kikuchi H, Maruo K, Sugawara N, Hatano K, Kawanishi H, Funaba M, Sugawara A, Nohara N, Kawai K, Fukudo S, Sudo N, Cooper A, Yoshiuchi K, Ando T: Effectiveness of enhanced cognitive behavior therapy for bulimia nervosa in Japan: a randomized controlled trial protocol. *BioPsychoSocial Medicine* 14: 2, 2020.2.24.
 - 12) Yamato S, Kurematsu A, Amano T, Ariga H, Ando T, Komaki G, Wada K: Urocortin 1: A putative excitatory neurotransmitter in the enteric nervous system. *Neurogastroenterology & Motility* e13842, 2020.3.20.
 - 13) Koga N, Ogura J, Yoshida F, Hattori K, Hori H, Aizawa E, Ishida I, Kunugi H: Altered

- polyunsaturated fatty acid levels in relation to proinflammatory cytokines, fatty acid desaturase genotype, and diet in bipolar disorder. *Transl Psychiatry* 9(1): 208, 2019.8.
- 14) Tsuchimine S, Hattori K, Ota M, Hidese S, Teraishi T, Sasayama D, Hori H, Noda T, Yoshida S, Yoshida F, Kunugi H: Reduced plasma orexin-A levels in patients with bipolar disorder. *Neuropsychiatr Dis Treat* 15: 2221-2230, 2019.8.
 - 15) Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Sakaki K, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Magistro D, Sassa Y, Kawashima R: Association of copper levels in the hair with gray matter volume, mean diffusivity, and cognitive functions. *Brain Structure and Function* 224(3): 1203-1217, 2019.4.
 - 16) Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Sakaki K, Sassa Y, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Daniele M, Kawashima R: Empathizing associates with mean diffusivity. *Scientific Reports* 9(1): 8856, 2019.6.
 - 17) Ikeda S, Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Nakagawa S, Sekiguchi A, Hanawa S, Araki T, Sakaki K, Nozawa T, Yokota S, Daniele M, Kawashima R: Neural Substrates of Self- and External-preoccupation: A Voxel-based Morphometry Study. *Brain and Behavior* 9(6): e01267, 2019.6.
 - 18) Takeuchi H, Tomita H, Taki Y, Kikuchi Y, Ono C, Yu Z, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Sakaki K, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Daniele M, Sassa Y, Kawashima R: A Common CACNA1C Gene Risk Variant has Sex-Dependent Effects on Behavioral Traits and Brain Functional Activity. *Cereb Cortex* 29(8): 3211-3219, 2019.7.
 - 19) Nakagawa S, Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Kotozaki Y, Shinada T, Maruyama T, Sekiguchi A, Iizuka K, Yokoyama R, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Magistro D, Sakaki K, Jeong H, Sasaki Y, Kawashima R: Mean diffusivity related to rule-breaking guilt: the Macbeth effect in the sensorimotor regions. *Scientific Reports* 9(1): 12227, 2019.8.
 - 20) Matsudaira I, Oba K, Takeuchi H, Sekiguchi A, Tomita H, Taki Y, Kawashima R: rs1360780 of the FKBP5 gene modulates the association between maternal acceptance and regional gray matter volume in the thalamus in children and adolescents. *PLoS ONE* 14(8): e0221768, 2019.8.
 - 21) Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Sakaki K, Sassa Y, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Daniele M, Kawashima R: Mean diffusivity associated with trait emotional intelligence. *Social cognitive and affective neuroscience* 14(8): 871-883, 2019.8.
 - 22) Nakagawa S, Sugiura M, Sekiguchi A, Kotozaki Y, Miyauchi CM, Hanawa S, Araki T, Sakuma A, Kawashima R: The pitfall of empathic concern with chronic fatigue after a disaster in young adults. *BMC psychiatry*, 19(1): 338, 2019.11.
 - 23) Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Sakaki K, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Magistro D, Sassa Y, Kawashima R: Association of iron levels in hair with brain structures and functions in young adults. *Journal of Trace Elements in Medicine and Biology* 58: 126436, 2020.3.
 - 24) Sugawara A, Terasawa Y, Katsunuma R, Sekiguchi A: Effects of interoceptive training

- on decision making, anxiety, and somatic symptoms. *BioPsychoSocial Medicine* 14: 7, 2020.3.
- 25) Ito M, Miyamae M, Yokoyama C, Yamashita Y, Ueno O, Maruo K, Komazawa A, Niwa M, Honda M, Horikoshi M: Augmentation of positive valence system? focused cognitive behavioral therapy by inaudible high-frequency sounds for anhedonia: a trial protocol for a pilot study. *JAMA Network Open* 2(11), 1-13, 11, 2019.
 - 26) 河西ひとみ, 関口 敦, 富田吉敏, 船場美佐子, 本田 暉, 樋上巧洋, 藤井 靖, 安藤哲也: 腸管ガスに関連する症状を主訴とする患者への認知行動療法の無効例から考える今後の臨床研究の方向性. *心身医学* 60(1): 50-57, 2020.1.
 - 27) 高橋信, 芳賀清憲, 三浦直樹, 青山久枝, 狩川大輔, 関口 敦, 川島隆太: 管制官の空間情報処理の神経基盤: 機能的 MRI を用いた研究. *ヒューマンインタフェース学会論文誌* 22(1): 35-42, 2020.1.
 - 28) 松島公望, 林 明明, 荒川 歩: キリスト教信者におけるキリスト教的宗教意識と主観的幸福感との関連: ローマ・カトリック教会とホーリネス系 A 教団を対象にして. *社会心理学研究* 35(2): 39-49, 2019.11.
 - 29) 小原千郷, 鈴木真理, 西園マーハ文, 末松弘行, 鈴木裕也, 山岡昌之, 石川俊男, 生野照子: 一般女性における摂食障害の認識調査 病名認知度と誤解・偏見. *心身医学* 60(2): 162-172, 2020.3.

(2) 総説

- 1) Hori H, Kim Y: Inflammation and post-traumatic stress disorder. *Psychiatry Clin Neurosci* 73: 143-153, 2019.4.
- 2) 金 吉晴: 持続エクスポージャー療法 (PE): 情動処理による恐怖記憶の修正. *トラウマティック・ストレス* 17(1): 1-29, 2019.6.
- 3) 金 吉晴: 持続エクスポージャー療法の普及と展望. 特別企画トラウマ臨床の明日. 前田正治編. *こころの科学*. 日本評論社, 東京, pp68-72, 2019.11.
- 4) 安藤哲也: 摂食障害患者の医学・心理社会的要因の研究と診療体制. *公衆衛生* 83(10): 724-730, 2019.10.
- 5) 堀 弘明: PTSD と炎症. *総合病院精神医学* 31: 160-173, 2019.4.
- 6) 小原千郷: 摂食障害の理解の促進と啓発の現状と課題: 日本摂食障害協会(JAED)の取り組みから (特集 摂食障害の理解と対応). *公衆衛生* 83(10): 762-766, 2019.10.
- 7) 小原千郷: トレーニング指導者に必要な摂食障害の知識 摂食障害の認知行動療法から学ぶ ① 食生活を整える. *JATI EXPRESS* 74: 40-42, 2019.12.
- 8) 西園マーハ文, 小原千郷, 鈴木真理: 【児童思春期の精神疾患患者の理解とケア】さまざまな精神疾患・状態の子ども 子どもの摂食障害の理解と治療. *小児看護* 43(1): 41-45, 2020.1.
- 9) 鈴木真理, 小原千郷: 摂食障害の生きづらさ 治療論の展開 巨大迷路からの脱出 生きづらさと家族会. *こころの科学* 209: 89-93, 2020.1.
- 10) 小原千郷: トレーニング指導者に必要な摂食障害の知識 摂食障害の認知行動療法から学ぶ ② 食行動の乱れを招く認知を変える. *JATI EXPRESS* 75: 40-42, 2020.2.
- 11) 丹羽まどか: 複雑性 PTSD の病態理解と治療ー認知行動療法～STAIR/NST の立場から (特集 複雑性 PTSD の臨床ー“心的外傷～トラウマ”の診断力と対応力を高めよう). *精神療法* 45(3): 349-353, 2019.6.

(3) 著書

- 1) 金 吉晴: 15 精神疾患, 心的外傷後ストレス障害 (PTSD). 永井良三 編. 今日の診断

- 指針 第8版. 医学書院, 東京都, 1459, 2020.3.
- 2) 伊藤真利子: 第5章 反応時間に影響する要因 5.3 脳への薬理作用. 心理学, 認知・行動科学のための反応時間ハンドブック. 勁草書房, 東京, 122-124, 2019.9.20.
 - 3) 伊藤真利子: 第6章 異なる母集団の反応時間の特性 6.6 発達障害. 心理学, 認知・行動科学のための反応時間ハンドブック. 勁草書房, 東京, 154-155, 2019.9.20.
 - 4) 伊藤真利子: 第6章 異なる母集団の反応時間の特性 6.7 精神疾患. 心理学, 認知・行動科学のための反応時間ハンドブック. 勁草書房, 東京, 156-157, 2019.9.20.
 - 5) 伊藤真利子: 第6章 異なる母集団の反応時間の特性 6.8 アルツハイマー病, パーキンソン病. 心理学, 認知・行動科学のための反応時間ハンドブック. 勁草書房, 東京, 158-159, 2019.9.20.
 - 6) 小原千郷: 摂食障害患者と家族への支援. 家族心理学年報 37 保健医療分野に生かす個と家族を支える心理臨床. 金子書房, 東京, 80-88, 2019.8.29.
 - 7) 袴田優子: 認知機能(記憶)の生物学的基礎. 健康心理学辞典. 丸善出版, 東京, 64-65, 2019.10.9.
 - 8) 袴田優子: 感情・情動の生物学的基礎. 健康心理学辞典. 丸善出版, 東京, 66-67, 2019.10.9.

(4) 研究報告書

- 1) 金 吉晴: 災害後の適応促進のための短期介入: SOLAR (The Skills for Life Adjustment and Resilience Program) 生活への適応と回復スキルのためのプログラムに関する報告. 令和元年度厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業)「災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証(研究代表者: 宮崎美砂子)」, 令和元年度分担研究報告書. pp100-104, 2020.3.
- 2) 宮崎美砂子, 奥田博子, 春山早苗, 石川麻衣, 金 吉晴, 植村直子: 実務保健師の災害時の対応能力育成のための研修ガイドライン(案)の作成. 令和元年度厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業)「災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証」, 令和元年度分担研究報告書. pp11-17, 2020.3.
- 3) 安藤哲也: 摂食障害の治療支援ネットワークの指針と簡易治療プログラムの開発. AMED 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)2018年度委託研究開発実績報告書. 2019.5.
- 4) 安藤哲也: 6.令和元年度事業の活動と成果 7.摂食障害の現状 8.事業全体の実績 9.摂食障害の現状 10.事業の成果 11.摂食障害全国基幹センター事業. 令和元年度摂食障害治療支援センター設置運営事業報告書. pp25-55, 2020.3.
- 5) 安藤哲也: 118.摂食障害の効果的な治療法の普及に関する研究. 三菱財団 研究・事業報告書 2019. pp1-5, 2020.3.
- 6) 堀 弘明: 中高年期女性におけるストレス関連症状と認知機能および血液中ストレスマーカーの関連. 大和証券ヘルス財団研究業績集 43. pp65-70, 2020.3.
- 7) 安藤哲也, 関口 敦, 小原千郷, 菅原彩子, 國重寛子: 摂食障害全国基幹センター活動報告書 平成30年度. 平成30年度精神保健対策費補助金摂食障害治療支援センター設置運営事業報告書. pp32-48, 国立精神・神経医療研究センター. 2018.3
- 8) 関口 敦: 中枢性摂食異常症および中枢神経感作病態を呈する疾患群の脳科学的な病態解明と, エビデンスに基づく患者ケア法の開発. 平成30年度厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業 総括・分担研究報告書. pp1-56, 2019.

- 9) 河西ひとみ, 船場美佐子, 菅原典夫, 富田吉敏, 関口 敦, 安藤哲也: 自己臭症患者に対する認知行動療法プログラムの実現可能性の検討ー消化器症状に関連する臭いを主訴とする患者を対象としてー. 公益財団法人 メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告集 2019 年度 (第 31 号). pp47-52., 2020.3.
- 10) 大沼麻実: WHO 版心理的応急処置の研修受講者の支援状況と知識および自己評価に対する追跡調査. 平成 28-30 年度文科省科学研究費助成事業 研究成果報告書, 2019.6.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 丹羽まどか, 金 吉晴: 複雑性 PTSD (Complex PTSD) とは. 日本精神衛生会「心と社会」No.176, 50(2): 67-72, 2019.6.
- 2) 金 吉晴: これからの高齢精神科開業医を取り巻く状況へ思うこと. 公益社団法人 日本精神神経科診療所協会 日精診 45(6): 4-8, 2019.11.
- 3) 三ツ村崇志, (監修) 大野裕, 大平英樹, 関口 敦: ストレスの心理学. Newton 2019 年 10 月号: 74-89, 2019.10.7.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Sugawara A, Terasawa Y, Katsunuma R, Sekiguchi A: Neural underpinning of interoceptive dysfunction, and an effect of interoceptive training. The 25th World Congress of the International college of psychosomatic medicine, Italy, 2019.9.11-13.
- 2) 金 吉晴: PTSD 治療における抗不安薬の位置づけ. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-22.
- 3) 金 吉晴: パネルディスカッション「アカデミア視点から見る今後の日本のメンタルヘルス政策への期待」. 「国際潮流と日本のメンタルヘルス政策」グローバル専門家会合, 東京, 2019.12.18.
- 4) 安藤哲也: 摂食障害の認知行動療法「改良版」(CBT-E). 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-22.
- 5) 安藤哲也: 摂食障害の医療の課題. 第 23 回日本摂食障害学会学術集会, 東京, 2019.11.2.
- 6) 関口 敦: 失体感と脳科学. 〈身〉の医療研究会 第 5 回研究交流会, 大阪, 2019.5.12.
- 7) 関口 敦, 野内 類: 脳トレでできるがん治療後の認知機能回復. 第 17 回日本臨床腫瘍学会学術集会, 京都, 2019.7.20.
- 8) 関口 敦: 心療内科における脳画像研究～摂食障害病理と心身症のメカニズム解明を目指して. 第 3 回ヒノ脳イメージング研究会, 東京, 2019.9.6-7.
- 9) 関口 敦: 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出. 第 23 回日本摂食障害学会学術集会, 東京, 2019.11.2-3.
- 10) 関口 敦: 脳画像研究で検証する中枢神経感作病態. 第 2 回日本心身医学関連学会合同集会, 大阪, 2019.11.15-17.
- 11) 斉藤仙邦, 大沼麻実, 木村尚徳, 渡邊 圭: これまでの経験を基に被災者支援を再考する. 東北福祉大学感性福祉研究所 研究プロジェクト 3.11 G3-3 チーム主催, 曹洞宗復興支援室分室/全国曹洞宗青年会災害復興支援部, チャイルドラインふくしま共催, 福島, 2020.1.23.
- 12) 小原千郷: CBT-E の実践と臨床的課題～ケース検討を通じて～イニシャルケースでの戸惑い. 第 23 回日本摂食障害学会学術集会, 東京, 2019.11.2-3.
- 13) 中島実穂, 丹野義彦: 自己洞察と抑うつ: 「自分を分かっている」と感じることに意味はあ

るのか？. 日本心理学会第 83 回大会, 大阪, 2019.9.11-13.

- 14) 坂本真士, 山川 樹, 中島実穂, 佐々木淳, 吉野 聡: 新しいタイプの抑うつ症候群への心理学アプローチ—「新型うつ」とは何だったのか—. 日本心理学会第 83 回大会, 大阪, 2019.9.11-13.

(2) 一般演題

- 1) Tsutsumi A, Izutsu T, Kim Y: Mental health and psychical support in disaster settings. APEC Digital Hub for Mental Health Round Table Meeting, Singapore. 2019.6.27.
- 2) Lin M, Kim Y: Comparison between computer and paper-and-pencil surveys in a laboratory environment. 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapy, Berlin, 2019.7.18-20.
- 3) Tsutsumi A, Izutsu T, Tanaka E, Tanaka C, Tuliao M, Kim Y: A Study on Rights-based Self-learning Tools to Promote Mental Health, Well-being & Resilience after Disasters. The 34th Congress of Japan Association for International Health, Mie. 2019.12.7-8.
- 4) Nakagawa S, Takauchi H, Taki Y, Nouchi R, Kotozaki Y, Shinada T, Maruyama T, Sekiguchi A, Iizuka K, Yokoyama R, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Magistro D, Sasaki K, Jeong H, Sasaki Y, Kawashima R: The effects of deep emotions on chronic fatigue in young adults. 19th WPA World Congress of Psychiatry, Portugal, 2019.8.21-24.
- 5) Kawanishi H, Sekiguchi A, Funaba M, Tomita Y, Sugawara N, Kanazawa M, Fukudo S, Ando T. Clinical features of olfactory reference syndrome with irritable bowel syndrome-like symptoms: An internet-based study. the 78th Annual Meeting of the American Psychosomatic Society. Long Beach, CA. Conference canceled. 2020.3.11-14.
- 6) Funaba M, Kawanishi H, Fujii Y, Higami K, Tomita Y, Sekiguchi A, Ando T. Predictors of response to interoceptive exposure-based cognitive-behavioral therapy (CBT-IE) in irritable bowel syndrome patients in Japan. the 78th Annual Meeting of the American Psychosomatic Society. Long Beach, CA. Conference canceled. 2020.3.11-14.
- 7) 井筒 節, 田中英三郎, 金 吉晴: 精神保健・心理社会的支援における心理的応急処置 (PFA) の効果に関する国際的実証研究. 第 18 回日本トラウマティック・ストレス学会, 京都, 2019.6.15-16.
- 8) 井筒 節, 堤 敦朗, 田中英三郎, 金 吉晴: 障害者権利条約と SDGs 時代の精神保健・ウェルビーイング. 第 18 回日本トラウマティック・ストレス学会, 京都, 2019.6.15-16.
- 9) 林 明明, 丹野義彦, 金 吉晴: ストレス負荷による気分変動へのハーディネスの影響. 第 18 回日本トラウマティック・ストレス学会, 京都, 2019.6.15-16.
- 10) 金 吉晴: 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所の紹介 (ポスター). 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-22.
- 11) 林 明明, 丹野義彦, 金 吉晴: 連合記憶と学習後ストレスとの関連. 日本心理学会第 83 回大会, 大阪, 2019.9.11-13.
- 12) 富田吉敏, 河西ひとみ, 船場美佐子, 安藤哲也: 過敏性腸症候群において慢性膵炎など別病態の混在の可能性について. 第 2 回日本心身医学関連学会合同集会, 大阪, 2019.11.15-17.
- 13) 河西ひとみ, 関口 敦, 船場美佐子, 富田吉敏, 菅原典夫, 安藤哲也: 過敏性腸症候群様症状と自己臭恐怖の併存例を対象としたインターネットによる実証調査. 第 2 回日本心身医学関連学会合同集会, 大阪, 2019.11.15-17.
- 14) 船場美佐子, 河西ひとみ, 藤井 靖, 樋上巧洋, 富田吉敏, 関口 敦, 安藤哲也: 過敏性腸症候群に対する内部感覚曝露を用いた認知行動療法の実施可能性の検討—ビデオ教材を併用して—. 第 2 回日本心身医学関連学会合同集会, 大阪, 2019.11.15-17.

- 15) 松平 泉, 大場健太郎, 竹内 光, 関口 敦, 富田博秋, 川島隆太, 瀧 靖之: 視床の灰白質体積に対する FK506 結合タンパク質の一塩基多型と母親の受容性の交互作用効果. 第 42 回日本神経科学大会, 新潟, 2019.7.25-28.
- 16) 河西ひとみ, 船場美佐子, 富田吉敏, 菅原典夫, 関口 敦, 安藤哲也: IBS 様症状と自己臭恐怖の併存例を対象としたインターネットによる実態調査(質的研究). 第 26 回日本行動医学会学術総会, 東京, 2019.12.6-7.
- 17) 吉国泰代, 大沼麻実, 鈴木満: シンガポールおよびドバイでの在留邦人を対象とした WHO 版心理的応急処置 (PFA: Psychological First Aid) 研修とコミュニティ支援. 多文化精神医学会, 京都, 2019.11.30.

(3) 研究報告会

- 1) 金 吉晴: 医療心理懇話会第 4 回集会 主催, 東京, 2019.10.2-3.
- 2) 金 吉晴: 複雑性 PTSD の概況と活動. 医療心理懇話会第 4 回集会, 東京, 2019.10.2-3.
- 3) 安藤哲也: 摂食障害の多機関連携システムの開発. 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野) 「摂食障害の治療支援ネットワークの指針と簡易治療プログラムの開発」令和元年度第 1 回班会議, 東京, 2019.8.18.
- 4) 安藤哲也: 摂食障害の治療支援ネットワークの指針と簡易治療プログラムの開発. 令和元年度 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野) の面接評価委員会, 東京, 2019.12.3.
- 5) 安藤哲也: 摂食障害の多機関連携システムの開発. 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野) 「摂食障害の治療支援ネットワークの指針と簡易治療プログラムの開発」令和元年度第 2 回班会議, 東京, 2020.2.1.
- 6) 堀 弘明: PTSD に対するメマンチンの効果. 医療心理懇話会第 4 回集会, 東京, 2019.10.2-3.
- 7) 関口 敦: 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出. 第 7 回心身医学のニューロサイエンス研究会, 福岡, 2019.11.23.
- 8) 大沼麻実: 実務保健師の災害時の対応能力育成のための研修ガイドラインにおけるサイコロジカル・ファーストエイド. 平成 30 年度・令和元年度厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業) 災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証』班会議, 東京, 2019.9.23.

(4) その他

- 1) 安藤哲也: 令和元年度第 1 回摂食障害治療支援センター連携ミーティングおよびランチミーティング. 令和元年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」, 東京, 2019.8.25.
- 2) 安藤哲也: 令和元年度第 2 回全国摂食障害対策連絡協議会. 令和元年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」, 東京, 2019.8.25.
- 3) 安藤哲也: 第 1 回 摂食障害受刑者の円滑な社会復帰のための治療・支援体制の構築に向けた検討会議. 摂食障害受刑者の円滑な社会復帰のための治療・支援体制の構築に向けた検討会, 東京, 2019.11.22.
- 4) 安藤哲也: 第 2 回 摂食障害受刑者の円滑な社会復帰のための治療・支援体制の構築に向けた検討会議. 摂食障害受刑者の円滑な社会復帰のための治療・支援体制の構築に向けた検討会, 東京, 2020.1.17.

C. 講演

- 1) 金 吉晴: PTSD の病態と治療. 東京大学医学部付属病院精神神経科, 東京, 2019.7.1.
- 2) 金 吉晴: 複雑性 PTSD: 診断と認知行動療法. 第 4 回名古屋トラウマ研究会, 愛知, 2019.8.1.

- 3) 金 吉晴：パニック障害の病態と複雑性 PTSD の関連についてーパニック発作～不安・抑うつ発作に焦点をあてて。第 41 回赤坂精神医学懇話会，東京，2019.9.7.
- 4) 金 吉晴：PTSD の病態と治療。第 119 回 石川県神経科精神科医会学術講演会，石川，2019.10.31.
- 5) 安藤哲也：摂食障害の臨床と研究の最近の動向。高知医療再生機構講演会～DC セミナー～，高知。2020.1.25.
- 6) 安藤哲也：摂食障害を取り巻く環境はどうすればよくなるのか？。宮城県摂食障害治療支援センター市民公開講座，仙台，2020.2.22.
- 7) 大沼麻実：災害支援の心理的支援～サイコロジカル・ファーストエイドについて～。災害・事故時のこころのケア対策事業関係職員研修，北九州市保健福祉局精神保健福祉センター，福岡，2019.8.19.
- 8) 大沼麻実：心理的応急処置。厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「2019 年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」災害歯科保健医療体制研修会，東京，2019.9.22.
- 9) 大沼麻実：心理的応急処置。厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「2019 年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」災害歯科保健医療体制研修会 中日本ブロック，東京，2019.11.16.
- 10) 大沼麻実：心理的応急処置。厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「2019 年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」災害歯科保健医療体制研修会 西日本ブロック，東京，2019.12.14.
- 11) 大沼麻実：心理的応急処置（サイコロジカル・ファーストエイド：PFA）について。公益社団法人香川県歯科医師会警察歯科医会 身元確認研修会，香川，2020.2.23.

D. 学会活動

(1) 学会主催

- 1) 安藤哲也：第 23 回日本摂食障害学術集会，大会長，国立精神・神経医療研究センター教育研修棟ユニバーサルホール他，小平市，東京，2019.11.2-3.

(2) 学会役員

- 1) Kim Y: International Society for Traumatic Stress Studies 理事
- 2) Kim Y: Global Committee, International Traumatic Stress Studies 委員
- 3) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会 理事
- 4) 金 吉晴：自殺予防学会 理事
- 5) 金 吉晴：日本不安症学会 評議員
- 6) 安藤哲也：日本摂食障害学会 理事
- 7) 安藤哲也：日本心身医学会 評議員
- 8) 安藤哲也：日本心療内科学会 評議員
- 9) 安藤哲也：日本ストレス学会 評議員
- 10) 堀 弘明：日本生物学的精神医学会 評議員
- 11) 関口 敦：日本心身医学会 幹事
- 12) 関口 敦：日本心身医学会 評議員
- 13) 小原千郷：日本摂食障害学会 評議員

(3) 座長

- 1) 関口 敦，福土審：摂食障害病理と治療構造の脳科学的観点からの再解釈。第 23 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2019.11.2-3.

- 2) 関口 敦, 平田幸一: 中枢神経感作病態としての心身相関. 第2回日本心身医学関連学会合同集会, 大阪, 2019.11.15-17.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board member
- 2) Kim Y: European Journal of Psychotraumatology, editorial board member
- 3) Kim Y: Disaster Health, editorial board member
- 4) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor
- 5) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 編集委員長
- 6) Hori H: Frontiers in Psychiatry, editorial board

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 金 吉晴: 2019 年度精神保健に関する技術研修, 第3回 災害時 PFA と心理対応研修. 東京, 2019.5.23-24.
- 2) 金 吉晴: 2019 年度精神保健に関する技術研修, 第4回 災害時 PFA と心理対応研修. 東京, 2019.10.16-17.
- 3) 安藤哲也: 第4回摂食障害の認知行動療法 CBT-E 研修会. 東京, 2019.8.4.
- 4) 安藤哲也: Implementing CBT-E: a one-day clinical workshop for practitioners. (講師: Prof. Zafra Cooper) 第23回日本摂食障害学会学術集会関連企画, 東京, 2019.11.3.
- 5) 安藤哲也: 養護教諭のための摂食障害ゲートキーパー研修会. 第23回日本摂食障害学会学術集会関連企画, 東京, 2019.11.3.

(2) 研修会講師

- 1) Kim Y: Case presentation and supervision. 2019 Expert conference of PE. Tokyo. 2019.7.24.
- 2) 金 吉晴: 第16回 Prolonged Exposure Therapy 講習会, 東京, 2019.4.30.
- 3) 金 吉晴: 災害時のこころのケア-総論. 2019 年度 第3回 災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2019.5.23-24.
- 4) 金 吉晴, 大沼麻実, 原島あゆみ, 中村夕貴: サイコロジカル・ファーストエイド研修. 第3回災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2019.5.23-24.
- 5) 金 吉晴: 複雑性 PTSD の理解と治療. 児童相談所・児童心理治療施設・医療機関等医師専門研修, 神奈川, 2019.6.25.
- 6) 金 吉晴, 大沼麻実, 諸見秀太, 金井純子, 猿渡英代子, 庄司弥生: サイコロジカル・ファーストエイド研修. 第4回災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2019.10.16-17.
- 7) 金 吉晴, 大沼麻実: 災害時の WHO 版 PFA (心理的応急処置: サイコロジカル・ファーストエイド) 概論. 令和元年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース1, 東京, 2019.10.23.
- 8) 金 吉晴, 大沼麻実: 災害時の WHO 版 PFA (心理的応急処置: サイコロジカル・ファーストエイド) 概論. 令和元年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース2, 東京, 2019.11.8.
- 9) 金 吉晴: C-PTSD の病態理解, 診断, 心理療法. 複雑性 PTSD 研修会, 宮城, 2020.1.16-17.
- 10) 金 吉晴, 丹羽まどか: Narrative therapy の治療内容①②. 複雑性 PTSD 研修会, 宮城, 2020.1.16-17.
- 11) 金 吉晴, 丹羽まどか, 大滝涼子: 治療全体の振り返り. 複雑性 PTSD 研修会, 宮城, 2020.1.16-17.
- 12) 金 吉晴: STAIR の日常臨床への応用. 複雑性 PTSD 研修会, 宮城, 2020.1.16-17.

- 13) 安藤哲也：体重，体重測定，体重への懸念と心理教育，規則正しい食生活，ステージ2評価と計画．第4回神経性過食症に対する認知行動療法 CBT-E 研修会，東京，2019.8.4.
- 14) 安藤哲也：摂食障害病態・治療概論．第17回摂食障害治療研修，東京，2019.9.17.
- 15) 安藤哲也：体重，体重測定，体重への懸念と心理教育，規則正しい食生活，ステージ2評価と計画．第5回神経性過食症の認知行動療法 CBT-E 研修会，大阪，2019.9.29.
- 16) 安藤哲也：摂食障害の概論．第3回摂食障害研修．令和元年度専門研修過程矯正医療科，東京，2020.1.16.
- 17) 安藤哲也：体重，体重測定，体重への懸念と心理教育，規則正しい食生活，ステージ2評価と計画．第6回神経性過食症の認知行動療法 CBT-E 研修会，仙台，2020.2.23.
- 18) 安藤哲也，小原千郷：隠れた医療難民を救え：摂食障害の治療と支援．第6回 NCNP メディア．国立精神・神経医療研究センター教育研修棟ユニバーサルホール．2019.8.23.
- 19) 堀 弘明：PTSD の神経科学と薬物療法．令和元年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース1，東京，2019.11.28-29.
- 20) 堀 弘明：PTSD の神経科学と薬物療法．令和元年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース2，東京，2019.12.19-20.
- 21) 大沼麻実，高橋真里：災害支援の「いろは」を学ぶ．長崎県臨床心理士会 特別セミナー，東京，2019.6.23.
- 22) 大沼麻実：WHO 版 PFA ブースター研修．みやぎ心のケアセンター，宮城，2019.6.25.
- 23) 大沼麻実：WHO 版サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．災害時メンタルヘルスケア研修，静岡県精神保健福祉センター，静岡，2019.8.2.
- 24) 大沼麻実：医学教養「至誠と愛」の実践学修「Psychological First Aid」．東京女子医科大学，東京，2019.9.20.
- 25) 大沼麻実，宮川 治，滝 友秀，吉元なるよ，諸見秀太，高江洲慶：サイコロジカル・ファーストエイド研修．沖縄県立総合精神保健福祉センター，沖縄，2019.9.27.
- 26) 大沼麻実，平 安明，原田大幹，井上幸代，赤嶺遼太郎，諏訪賀一：サイコロジカル・ファーストエイド研修．沖縄県精神科病院協会，沖縄，2019.9.28.
- 27) 大沼麻実：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．外務省 領事中堅研修，東京，2019.11.20.
- 28) 大沼麻実，宮澤章人，鈴江 毅：令和元年度サイコロジカル・ファーストエイド：PFA 研修．浜松市精神保健福祉センター，静岡，2019.11.22.
- 29) 大沼麻実：PFA(Psychological First Aid)研修．東北福祉大学感性福祉研究所 研究プロジェクト 3.11 G3-3 チーム主催，曹洞宗復興支援室分室／全国曹洞宗青年会災害復興支援部，チャイルドラインふくしま共催，福島，2020.1.22.
- 30) 大沼麻実，森脇愛子：サイコロジカル・ファーストエイド研修．立命館大学障害学生支援室，京都，2020.2.27.
- 31) 丹羽まどか：STAIR 段階の治療内容－対人関係①②．複雑性 PTSD 研修会，宮城，2020.1.16-17.
- 32) 丹羽まどか：症例提示．複雑性 PTSD 研修会，宮城，2020.1.16-17.

F. その他

- 1) 金 吉晴：東進ハイスクール Toshin.com 高校生の悩み相談「考え方を変わると感情が変わります」2019.5.15.
- 2) 金 吉晴：東進ハイスクール Toshin.com 高校生の悩み相談「不安を溜め込まず，考え方の基準を変えてみよう」2019.5.22.
- 3) 金 吉晴，松本俊彦：第一生命保険株式会社「健康第一 Report（メンタルヘルス編）」リーフレット監修，2019.12.

- 4) 大沼麻実：ボランティアの前に 学んでおきたい正しい支援の方法. 保健同人社 みんなの健康ライブラリー(会員制 Web サイト), 2020.2.15.
- 5) 鈴木真理, 小原千郷, 菅原彩子：NHK 厚生文化事業団 貸出ビデオと冊子「摂食障害 理解と回復のために」, 2020.3.27.

5. 児童・予防精神医学研究部

Ⅰ. 研究部の概要

現在、精神科医療の焦点は三次予防から二次予防、一次予防へと移行している。多くの精神疾患において、顕在発症してからの治療には限界があり、より早期の段階からの介入が、より効果が高いことが知られている。さらに、発症を未然に予防することが、国民のこころの健康の増進に寄与すると期待されている。特に、児童、青年、成人期を通して、精神疾患の発症前から切れ目のない包括的な対策が重要である。児童・予防精神医学研究部は、精神疾患の早期介入および予防、児童・青年期のメンタルヘルス、ならびに関連する領域に関する調査研究および情報発信を行っている。

早期介入・予防に向けた活動としては、統合失調症、気分障害、発達障害などにみられる認知機能障害を、1) これらの精神疾患の早期発見指標、2) 患者の社会復帰に直結する治療の対象、などと位置付けた研究を展開している。具体的には、認知機能の標準的評価法の整備や、経頭蓋直流刺激を用いた新たな治療法の開発に関するトランスレーショナルな研究が挙げられる。

児童・青年期の精神科的障害については、ロボットを用いた発達障害への新たな介入法の開発やコホート研究などを継続している。また、発達障害者支援法に沿った、エビデンスに基づく知識の普及および支援体制の社会実装を推進するため、多領域の専門家に向けた情報発信および啓発活動にも取り組んでいる。

人員構成は以下のとおりである。部長：住吉太幹、精神疾患早期支援・予防研究室室長：松元まどか、児童・青年期精神保健研究室室長：熊崎博一、流動研究員（3名）：藤里紘子、白間 綾、飯島和樹、科研費研究員（8名）：Andrew M. Stickley、斎藤 彩、末吉一貴、生田目光、原口英之（2019年6月1日より）、岨野太一（2019年9月1日より）、科研費心理療法士（1名）：長谷川由美、客員研究員（12名）：神尾陽子、池澤 聡、中村 亨、上野佳奈子、青木保典、石井良平、住吉チカ、樋口悠子、川崎康弘、鈴木道雄、高橋秀俊、数井 裕、併任研究員（1名）：立森久照、研究生（7名）：荻野和雄、海老島健、岡 琢哉、原口英之（2019年5月31日まで）、上田奈津貴、近藤和樹、岩田 遼（2019年10月16日より）

Ⅱ. 研究活動

- 1) ニューロモデュレーションの精神疾患への応用に関する研究（日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究）（住吉、白間、末吉、長谷川、和田）

経頭蓋直流刺激(tDCS)を用いた統合失調症など精神疾患の治療法、および反応予測法の開発を展開している。これまで、統合失調症患者における日常生活技能がtDCSにより改善することや、精神病症状の改善効果の程度が、近赤外線スペクトロスコーピーのデータにより予測できることを世界で初めて報告した。また、統合失調症患者のワーキングメモリーに対するtDCSの有効性を、メタ解析法により実証した。また、tDCSを含む経頭蓋電気刺激(tES)研究に関するコンソーシアムの構築を、関西や北陸の複数の大学とともに開始した。

- 2) 統合失調症の認知機能障害に対する神経生理学的研究（住吉、松元、白間、飯島、末吉、長谷川、和田）

統合失調症では障害される認知機能の神経基盤として、前頭前野の機能障害が示唆されている。また前頭前野の機能障害は、課題状況に合わせた柔軟な注意コントロールの異常を生じさせる。新たな試みとして、認知課題遂行中の神経生理反応(瞳孔、網膜電図、脳波等)を測定し、統合失調症における認知機能障害の背景メカニズムを検討する。

- 3) 精神疾患レジストリの構築：（日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業：「精神疾

患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究」：代表 中込和幸（住吉，白間，末吉，長谷川）

精神科疾患レジストリで用いる評価項目のうち、正・負の感情価および QOL を自記式で測定するもの（第 2 層 a）に関しては、ベースラインからフォローアップまで ePRO 製品「ヒビログ」を用いて登録，入力する運用である。2019 年度は，第 2 層 a 項目の値の患者へのフィードバックのために，わが国に標準データがないもの（PANAS, ISI, SWLS, ULS）について，15~79 歳の健常者 2,200 名を対象にアンケートを用いて性，年代ごとに標準化を目指した。結果として，少なくとも一部は正規分布を示さず，順位法を用いてフィードバックを行うことを決定した。

- 4) 児童・思春期の心の健康問題支援のためのケースマネジメント手法の開発（日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業：「児童・思春期における心の健康発達・成長支援に関する研究」：代表 水野雅文）（住吉，長谷川）

多職種・多機関がネットワークを構築して若年者の心の健康問題の支援を行う上で共通する課題と，課題への効果的な対応方法につき検討するため，ケースマネジメントに関する好事例を収集，分析することを目的とした。特に，医療的な問題ではない場合，家族に問題がある場合の対応方法につき，具体的な事例を通じてケースマネジメント体制のあり方を検討した。具体的には，メンタルヘルスに関する学校 - 精神医療保健福祉連携の現状調査として，医療従事者等 7 名からアンケートが回収され，内 5 名にインタビューを実施した。また，メンタルヘルスに関する学校 - 精神医療保健福祉連携の現状調査として，教育関係者 92 名からアンケートを回収した。

福祉，医療，教育，行政等の関係者に対し，心の健康問題への対応に関する講習会を実施し，ケースマネジメントを施行するにあたっての意見集約を行った。具体的には，本研究開発課題について，思春期の若者の日常生活やメンタルヘルス支援に日々取り組んでいる学校教員と意見交換を実施し，若者の身近な大人から見て必要な支援策に関する意見を収集し，本研究開発課題の検討に役立てた。開催場所については，愛知，岐阜，東京，埼玉（2 箇所）であった。以上の活動から得られた知見を，「心の健康発達・成長支援マニュアル」の作成に役立てた。その際，医療的な問題ではない場合，家族に問題がある場合のマネジメントについても留意した。

以上の活動は，精神保健研究所地域・司法精神医療研究部の藤井千代部長の支援のもと，同部の小塩靖嵩研究員らとの協働により行われた。

- 5) Negative Valence Systems を対象とした治療法創出と臨床評価法に関する研究（精神・神経疾患研究開発費：「精神疾患の NVS (negative valence system) に対する治療法の開発」：代表 中込和幸（住吉，白間，末吉，長谷川，和田）

精神疾患を対象とし，1) NVS に関連する精神症状（不安，うつ，不満足など）および神経・社会認知機能の検討，2) 社会機能などの評価，疾患横断的に得られた臨床症状と，他の分担研究者が施行する脳機能など生物学的指標との関連の検討，3) ニューロモデュレーションなどを用いた介入法の効果の検討，4) NVS に関連する臨床症状の治療反応性を予測する指標の特定を目的とする。

2019 年度は，経頭蓋直流刺激（tDCS:ニューロモデュレーション）による統合失調症患者の認知機能改善効果を，これまで報告されてきた研究データのメタ解析に基づき検証した。9 編の論文が本研究の条件に一致し，tDCS 刺激群 133 名および偽刺激群 137 名の計 270 名が解析に組み込まれた。結果として，対象となった認知機能領域のうち，ワーキングメモリーにおいて有意な中等度の改善効果が示された。

- 6) 睡眠障害における社会機能・認知機能評価手法の確立（精神・神経疾患研究開発費：「社会機能／QOL 改善と出口戦略を見据えた睡眠障害のクリニカルパスの開発」）（住吉，松元，白間）

睡眠障害の診断治療ガイドラインの作成に資する統合失調症の社会機能評価尺度の妥当性の検

証を行うことを目的に、睡眠の質との関連が示唆されている認知機能との関連を調べる。併せて当研究班の枠組みでデータ収集を前向きに行い、代表研究者および他の分担研究者が得た臨床的指標との関連を検討する。2019年度は、当センター病院の統合失調症早期診断・治療センター(EDICS)と協働し、発症後5年以内の患者におけるベースライン、及び1年後の社会機能転帰(SLOFで測定)を、神経認知機能(BACSで測定)、社会認知機能(SCSQで測定)、日常生活技能(UPSA-Bで測定)の各指標が予測するか検討した。60名を対象とした重回帰分析の結果、初期統合失調症患者の1年後の機能的転帰は、特に神経認知機能や日常生活技能により予測された。

- 7) 精神疾患ブレインバンクの推進(精神・神経疾患研究開発費:「NCNPブレインバンクの運営および生前登録システムの推進」(代表 斉藤祐子)(住吉)

精神疾患の病態解明や根治的治療法の開発には、ヒト脳を用いた研究は重要である。本研究は、NCNPブレインバンクへの精神疾患患者死後脳リソースの蓄積を促進することを目的とする。その一環として、精神疾患患者からの検体収集を促進する活動を実施している。本年度は特に、統合失調症および双極性障害の死後脳における蛋白質の発現異常に関する文献のレビューを行った。その結果、両疾患に共通する所見として、1) 海馬における reelin, BDNF, complexin 1,2, parvalbumin, glucocorticoid receptor, serotonin2A receptor の発現低下、2) 前頭前皮質における reelin, Homer1, APP の発現低下、3) 前部帯状回における calbindin, CREB の発現低下が示唆された(Yamada et al. Curr Pharm Des 2020)。

- 8) 気分状態の安定した双極性障害患者の認知機能改善に対する Lurasidone 併用療法(ELICE-BD)の有効性評価のための6週間のランダム化二重盲検プラセボ対照多施設試験(代表 Lakshmi Yatham, University of British Columbia)(住吉, 末吉)

双極性障害患者の認知機能障害は重大な臨床課題であり、気分状態の安定期であっても患者の機能に影響を及ぼす。本研究では、5カ国が参加する多施設国際共同の大規模なランダム化二重盲検プラセボ対照試験により、双極性障害患者の認知機能の改善に関する lurasidone の有効性を調査する。主要評価項目は、国際双極性障害学会の神経認知評価バッテリー(ISBD-BANC)の総合認知スコアのベースラインからエンドポイントの変化量を指標とした認知機能であり、二次的評価項目には、住吉らが開発した UCSD 日常生活技能簡易評価尺度(UPSA-B)によるベースラインからエンドポイントの変化量を用いる。現在、本邦における5施設(NCNP、北海道大学、藤田医科大学、関西医科大学、産業医科大学)、および米国(Case Western Reserve University, Harvard University)、カナダ(University of British Columbia)、イギリス(King's College of London)、スペイン(University of Barcelona)において、被験者のリクルートが進行中である。特に、本邦では目標症例数(75例)の約半数(37例)のランダム化が完了している。

- 9) 超ハイリスク基準群における生体情報評価及びサイトカイン測定による統合失調症の発現予測因子の探索研究(ヤンセンファーマ社からの研究助成金研究)(代表 中込和幸)(住吉, 長谷川)

睡眠異常は統合失調症の神経生物学的側面として重要な症状の1つであり、前駆期や発症早期に訴える症状としてしばしば認められ、顕在発症後も不眠は持続する事が多い。したがって、睡眠状態のモニタリングにより得られる睡眠異常に関するパラメータはUHR該当者において初回エピソード精神病発現に関連するバイオマーカーとなる可能性がある。睡眠障害の他に考えられる発症予測バイオマーカーとしてサイトカインがあげられる。統合失調症における神経炎症および免疫遺伝学の関与、脳内でのサイトカインの異常が疾患と関連するとのデータが蓄積されている。以上より、本研究は以下などを目的とする。

1. 睡眠に関するパラメータについて、健常対照と比較してUHR該当者で差異が見られるか評価する。またUHR該当者での睡眠パターン障害と症状の重症度との関係性を評価する。

2. 健常対照者と比較して UHR 該当者でサイトカイン濃度が異なるか評価する．またサイトカイン濃度が症状の重症度および UHR 該当者における睡眠障害にどのように関連しているか評価する．
3. UHR 該当者においては、12 ヶ月間の縦断的観察を行い、睡眠に関するパラメータおよびサイトカイン濃度の変化と陽性症状の重症度の関係を探査し、UHR 該当者での精神病移行リスクパターンを同定する．

2019 年度末までに、共同研究参加施設（東邦大学、千葉大学、富山大学、奈良県立医大、久留米大学および NCNP）において 40 例の被験者リクルートが行われた．また、新たに東北大学が本研究に参加のため手続きを進めている．

- 10) アンドロイドを媒介した相互コミュニケーションによる主体価値発展支援システムの確立（日本学術振興会科学研究費補助金・新学術領域研究）（熊崎，原口）

本年度はコミュニケーションが苦手な児が二人一組になり、遠隔操作システムを用いてお互いに面接をしあう（片方がアンドロイドを操作することでの面接官役、もう片方がアンドロイドと対面する被験者役）システムを用意した．また実験室の外にアンドロイド操作用のブースを用意したが、アンドロイドとのコミュニケーション相手の表情が見えるようにモニターを設置した．予備実験として 10 名の児にアンドロイドの操作及びアンドロイドとの対面を体験していただき、その後医師によるインタビュー調査を行った．参加者からは特にノンバーバルな表現についての意見をおっしゃっていただき、眉寄せ、頬引きといったノンバーバルな表出を調整した．またアンドロイドと参加者の距離及び声の大きさを適切にするなどコミュニケーションが苦手な児が少しでも違和感なく取り組めるようにシステムを調整した．また操作性についても修正した．その後変更したシステムを用いて、24 名の新規参加者に我々の開発したシステムを体験していただいた．参加者にはアンドロイドの操作及びアンドロイドとの対面をそれぞれ 10 分ずつ体験するというを連続する 4 日行っていた．本システムは参加者間で相性の個人差が強いという問題が残った．

- 11) 自閉スペクトラム症者へのアンドロイドを用いた面接訓練法の確立（日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究）（熊崎）

本年度は操作時に、多くの自閉スペクトラム症(ASD)者が違和感なく操作できるようにアンドロイドの動きを確立することを目的とした．被験者がアンドロイドを操作し、アンドロイドを通して実験補助者とインタラクションしていただくという設定とした．アンドロイドを操作するブースを用意し、アンドロイド操作用のノートパソコンおよびアンドロイドと実験補助者のインタラクションの様子が見えるモニターを配置した．実験中の経時的変化を詳細に検討し、アンドロイドの動きと被験者の感情の関係について分析に取り組んだ．1) アンドロイド操作中の違和感に関する自己記入質問紙、2) ビデオカメラの情報、3) 応募者が被験者からアンドロイド操作中の違和感について聴取した面接の内容を参考にして結果を総合的に分析した．被験者がアンドロイドを違和感なく操作できるように調整を重ねた．またスマートフォンを用いてアンドロイドを操作することも試みた．

- 12) 対話支援のための遠隔操作ロボットシステムの研究開発（日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究）（代表 石黒浩）（熊崎，原口）

本研究では、人と人の円滑な対話を支援する新たなロボット対話システムを実現する．これまでの研究で、対話を苦手とする者の多くは人と直接対話するよりも遠隔操作ロボットを用いた方が円滑に対話できることがわかってきている．本研究では、対話者の能力を補助する高度な機能を持つ遠隔操作ロボットを用いた対話システムを開発する．本年度は感情・選好・認知モデル推定機能により、対話相手の人間の感情や選好や認知モデルを対話主体が用いるモニターに表示することで、対話を支援するシステムの開発に取り組んだ．

13) 自閉スペクトラム症における嗅覚特性解明(武田科学振興財団医学系研究助成) (熊崎)

脳波を用いて ASD 者と健常者の嗅覚誘発脳波を比較した。14 名の ASD 者と 19 名の健常者の匂いに対する嗅覚誘発脳波を比較したところ、匂い呈示後 542 ミリ秒以降の、時間的に比較的後期の処理において違いが認められた。またその違いは、楔部や後帯状皮質などの、嗅覚以外の感覚刺激の処理にも関与する脳領域の活動の違いに由来することが推定された。これらの結果から、ASD 者の嗅覚処理では、脳における高次の認知処理に違いがある可能性が示唆された。

14) 子どもの感情障害に対する認知行動療法の統一プロトコルの有効性(科学研究費補助金 基盤研究)(藤里)

本研究は、感情障害の児童青年に幅広く適用可能な認知行動療法とされる統一プロトコル(Unified protocol: UP)について、①評価者盲検ランダム化比較試験による児童版統一プロトコル(UP-C)の有効性の検討、および②前後比較試験による青年版統一プロトコル(UP-A)の実施可能性および有効性の検討を行うことを目的としている。2 年目である 2019 年度は、UP-C のランダム化比較試験を主に進めた。具体的には、各研究協力機関の治療者の育成および独立評価者の育成を行った。また、新たに 1 施設を研究協力機関として確保するとともに、さらに 1 施設から研究協力の打診をいただき、現実的な運用体制を構築するための打ち合わせを重ねた。9 月より、1 施設でリクルートを開始し、9 例を登録した。また、介入群に対して UP-C を実施するとともに、全症例に対して介入前、介入中、介入後の評価を行い、データを収集した。一方、UP-A の前後比較試験については、運用体制の整備を進めた。

15) 発達障害の早期治療法の確立を目指す社会実装研究(原口, 齊藤, 神尾)

本研究は、精神・神経疾患研究開発費(発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ:一戸班)の分担として行われた。精神保健研究所と所沢市の精研との間で締結した事業の一環としての社会実装研究であり、計画段階から NCNP の研究者や共同研究者(お茶の水女子大学 菅原ますみ教授)だけでなく、さまざまなステークホルダーに参加して共同で検討し、合意をとりながら一歩ずつすすめてきている。最終年次である 2019 年度末時点で、初年次~2 年次に開発したクラウドを介した電子アンケート調査システム(所沢子どもの心の健康調査:Tokorozawa Survey of Children's Mental Health: TOUCH ME “タッチミー”;フェイスシート項目 15, 子どもに関する項目 150-200, 親に関する項目 130, 子どもの年齢により多少変動あり)を利用して、36 名の幼児とその保護者が本調査に参加した。現時点では、児の自閉症的特性と全般的メンタルヘルスの問題が強いほど、育児ストレスが高くなることが示され、先行研究の結果と一致した。幼児期に地域で支援サービスを受けることで、どのように変化していくかについては今後の検討課題である。

16) 児童・思春期における心の健康発達・成長支援に関する研究(齊藤, 神尾)

本研究は、長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)の分担として計画された。学校での子どもの心の健康教育の推進および定期健康診断での適切なアセスメントによる問題の早期発見に資するために、児童青年のメンタルヘルス全般の評価尺度として世界各国で普及している「子どもの強さと困難さアンケート」(The Strengths and Difficulties Questionnaire:SDQ)の高校生での標準化を実施した。SDQ はすでに小学生、中学生での標準化は終了していたが、心の健康問題が顕在化し、教育現場でのニーズの高い高校生については、義務教育終了後であり、調査の実施が困難なため、国内では長く標準化がされてこなかった。また高校は地域差に加え、学校間格差を考慮する必要があり、本研究ではそうしたギャップを埋めるため、本研究班の研究者の所属する大学・研究機関の所在地である、一都五県の全日制高校 8 校(協力率 11.4%)、定時制高校 11 校(協力率 15.7%)から協力を得ることができた。これらの学校が

ら得た親評定 1,548 人分（全日制 1,418 人（男子 871 人・女子 547 人）、定時制 130 人（男子 76 人・女子 54 人））、教師評定 934 人分（全日制 701 人（男子 433 人・女子 268 人）、定時制 233 人（男子 150 人・女子 83 人））、生徒本人評定 1,555 人分（全日制 1,464 人（男子 873 人・女子 542 人）、定時制 140 人（男子 78 人・女子 62 人））の回答を分析の対象とした。SDQ の平均得点（標準偏差）は、評定者別（親／教師／本人）・学校種別（全日制高校／定時制高校）・性別・学年別に算出し、比較検討を行った。さらに生徒個人の心の健康状態を理解する手がかりとするには、対象全体の度数分布表（パーセンタイル表）が役に立つ。SDQ 合計得点および下位尺度得点（情緒の問題、行為の問題、多動・不注意、仲間関係の問題、向社会的な行動）の度数分布を、男女別、年齢帯別、評定者別に算出し、公開した(<https://ddclinic.jp/SDQ/standardvalueinjapan.html>)。すでに終了していた小中学生の標準値についても、本研究結果である高校生の標準値の公開と合わせて、日本語で公開している。本研究によって日本の児童青年のメンタルヘルスの指標が 4 歳から 18 歳まで統一的に示されることとなり、教育場面においてだけでなく、臨床現場、さらに研究においても SDQ が有用な指標として活用されることが期待できる。特に、教育現場においては、保健調査や学校健診の項目とすることで、児童生徒の包括的な健康状態を知ることができ、また学校が行っている心の健康教育の取り組みの評価の指標ともなりうるだろう。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- 統合失調症早期診断・治療センター(EDICS)主催の NCNP 市民公開講座「統合失調症とうまくつきあおう！」(2019.11.23, 講演「日常生活機能の維持・向上のために」(住吉)。
- 気分障害センター主催の市民公開講座「うつ病治療のポイント～社会復帰するために～」(2019.5.25, 講演「気分障害と日常生活機能」(住吉)。
- 朝日新聞・社説「自閉スペクトラム症者へのロボットを用いる意義について」(2019.9.29) (熊崎)。
- 化学工業日報・記事「ロボットを用いた面接への期待について」(2019.10.30) (熊崎)。
- 毎日新聞・記事「ロボットを自閉症者に用いることについて」(2020.1.14) (熊崎)。
- 医療経済オンライン・記事「自閉スペクトラム症者へのロボットを用いる意義について」(2020.1.22) (熊崎)。

(2) 専門教育面における貢献

- 直接の指導により、1 名の大学院生（センター病院第一精神診療部医師）に学位を取得させた（住吉）。
- 臨床実習の一環として防衛医科大学の臨床実習生に対する児童・予防精神医学の講義を担当した（熊崎、白間、藤里）。
- 研究と臨床の橋渡しを目指すカンファレンス「児童・予防精神医学研究会」を統合失調症早期診断・治療センターとの共催で 3 回開催した。センター外から第一線の研究者を講師に招き、NCNP 内の若手医師・研究者を含む多数の参加を得、活発な意見交換を行った（住吉、熊崎）。
- 国際学会等におけるコミュニケーション力の向上を目指し、医学英語のベテラン講師がセンター職員による英語プレゼンテーションに対し指導を行う形式のセミナーを、TMC との共催で開催した（2019.12.4）（住吉）。

(3) 精研の研修の主催と協力

- 国立精神・神経医療研究センターにおいて令和元年度精神保健に関する技術研修、第 14 回発達障害地域包括支援研修：早期支援研修を開催した。2019.7.23-24.（住吉、熊崎）
- 国立精神・神経医療研究センターにおいて令和元年度精神保健に関する技術研修、第 12 回

発達障害地域包括支援研：精神保健・精神医療研修を開催した。 2019.9.25-26. (住吉, 熊崎)

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

- 厚労省 発達障害の情報提供等事業に関する運営会議・構成員(住吉)
- クロザリル適正使用委員会委員 (住吉)

(5) センター内における臨床的活動

- センター病院 統合失調症専門外来・初診 (兼部長診)：毎週月曜日 (住吉)
- センター病院 気分障害センター外来・初診：毎週月曜日 (住吉)
- センター病院 一般再来：毎週金曜日 (住吉)
- センター病院 認知行動療法 (藤里)

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Stickley A, Oh H, Sumiyoshi T, McKee M, Koyanagi A: Injuriy and depression among 212 039 individuals in 40 low and middle-income countries: Epidemiol Psychiatr Sci 27(4), 327-335, 2018.
- 2) Ishikawa S, Kishida K, Oka T, Saito A, Shimotsu S, Watanabe N, Sasamori H, Kamio Y: Developing the universal unified prevention program for diverse disorders for school-aged children. Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health 11,2019, doi : 10.1186/s13034-019-0303-2,.
- 3) Koyanagi A, Veronese N, Vancampfort D, Stickley A, Sarah E Jackson, Hans Oh, Jae Il Shin, Josep Maria Haro, Brendon Stubbs, Lee Smith: Association of bullying victimization with overweight and obesity among adolescents from 41 low-and middle-income countries. Pediatr Obes 13(1) ,3-13, 2018.
- 4) Stickley A, Leinsalu M, DeVlyder JE, Inoue Y, Koyanagi A: Sleep problems and depression among 237 023 community-dwelling adults in 46 low- and middle-income countries. Sci Rep 10(1) ,8173, 2020.
- 5) Isaksson J, Schwab-Stone M, Stickley A, Ruchkin V: Risk and protective factors for problematic drinking in early adolescence- a systematic approach. Child Psychistry & Human Development 1573 - 3327, 2019.
- 6) Leinsalu,M, Reile R, Stickley A: Economic fluctuations and long-term trends in depression : a repeated cross-sectional study in Estonia 2004-20016. J Epidemiol Community Health 72(5) ,409-412, 2018.
- 7) Stickley A, Koyanagi A, Ueda M, Inoue Y, Waldman K, Oh H: Physical multimorbidty and suicidal behavior in the general population in the United States. J Affect Disord 260 604-609, 2020.
- 8) Stickley A, Sumiyoshi T, Narita Z, Oh H, DeVlyder JE, Jacob L, Koyanagi A: Physical injury and psychotic experiences in 48 low- and middle-income countries. Psychol Med 49(14), 2307-2319, 2019.
- 9) Jacob L, Smith L, McDermott D, Haro JM, Stickley A, Koyanagi A: Relationship between

- sexual orientation and psychotic experiences in the general population in England. *Psychol Med* 49(14), 2307-2319, 2019.
- 10) Sumiyoshi T: Cognitive enhancement in schizophrenia by buspirone: Role of serotonin1A receptor agonism. *Schizophr Res* 215,455-456, 2020.
 - 11) Narita Z, Knowles K, Fedina L, Oh H, Stickley A, Kelleher I, DeVylder J: Neighborhood change and psychotic experiences in a general population sample. *Schizophr Res* 206, 2019.
 - 12) Inagawa T, Narita Z, Sugawara N, Maruo K, Stickley A, Yokoi Y, Sumiyoshi T: Meta-Analysis of the Effect of Multisession Transcranial Direct Current Stimulation on Cognition in Dementia and Mild Cognitive Impairment. *Clin EEG Neurosci* 50(4), 273 - 282, 2019.
 - 13) Kumazaki H, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Matsumoto Y, Ishiguro H, Sumiyoshi T, Mimura M, Kikuchi M: Comedic experience with two robots aided a child with autism spectrum disorder to realize the importance of nonverbal communication. *Psychiatry Clin Neurosci*. 73(7), 423 - 423, 2019.
 - 14) Ohi K, Sumiyoshi C, Fujino H, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Sumiyoshi T, Hashimoto R: A 1.5-Year Longitudinal Study of Social Activity in Patients With Schizophrenia. *Front Psychiatry* 10:567, 2019. doi: 10.3389/fpsy.2019.00567.
 - 15) Sumiyoshi T, Watanabe K, Noto S, Sakamoto S, Moriguchi Y, Tan KHX, Hammer-Helmich L, Fernandez J : Relationship of cognitive impairment with depressive symptoms and psychosocial function in patients with major depressive disorder: Cross-sectional analysis of baseline data from PERFORM-J. *J Affect Disord* 258,172 - 178, 2019.
 - 16) Stickley A, Oh H, Sumiyoshi T, Narita Z, DeVylder JE, Jacob L, Waldman K, Koyanagi A: Perceived discrimination and psychotic experiences in the English general population. *Eur Psychiatry* 62,50 - 57, 2019.
 - 17) Stickley A, Waldman K, Koyanagi A, DeVylder JE, Narita Z, Sumiyoshi T, Jacob L, Oh H: Psychotic experiences and accidents, injuries, and poisonings among. *Psychiatry Res* 282, 2019.
 - 18) Kumazaki H, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Matsumoto Y, Ishiguro H, Sumiyoshi T, Mimura M, Kikuchi M: Comedic experience with two robots aided a child with autism spectrum disorder to realize the importance of nonverbal communication. *Psychiatry Clin Neurosci*.72(7), 423-423, 2019.
 - 19) Kumazaki H, Muramatsu T, Miyao M, Okada KI, Mimura M, Kikuchi M: Brief Report: Olfactory Adaptation in Children with Autism Spectrum Disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders*. 49, 3462–3469, 2019.
 - 20) Kumazaki H, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Matsumoto Y, Ishiguro H, Sumiyoshi T, Mimura M, Kikuchi M: Role-Play-Based Guidance for Job Interviews Using an Android Robot for Individuals With Autism Spectrum Disorders. *Frontiers in Psychiatry*. 2019. doi: 10.3389/fpsy.2019.00239,.
 - 21) Kumazaki H, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Yoshimura Y, Ikeda T, Hasegawa C, Saito ND, Shimaya J, Ishiguro H, Mimura M, Kikuchi M: Brief report: A novel system to evaluate autism spectrum disorders using two humanoid robots. *Journal of Autism and Developmental Disorders*. 49(4), 1709 - 1716, 2019.
 - 22) Kumazaki H, Warren Z, Swanson A, Yoshikawa Y, Matsumoto Y, Yoshimura Y, Shimaya J, Ishiguro H, Sarkar N, Wade J, Mimura M, Minabe Y, Kikuchi M: Brief Report: Evaluating the Utility of Varied Technological Agents to Elicit Social Attention from Children with Autism Spectrum Disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders*. 49 (4) ,1700 - 1708, 2019.

- 23) Naito N, Kikuchi M, Yoshimura Y, Kumazaki H, Kitagawa S, Ikeda T, Hasegawa C, Saito DN, Tomiyama S, Minabe Y: Atypical body movements during night in young children with autism spectrum disorder: a pilot study. Scientific Report. 2019. doi: 10.1038/s41598-019-43397-y,.
- 24) Yoshikawa Y, Kumazaki H, Matsumoto Y, Miyao M, Kikuchi M, Ishiguro H: Relaxing Gaze Aversion of Adolescents with Autism Spectrum Disorder in Consecutive Conversations with Human and Android Robot ? A Preliminary Study ?. Frontiers in Psychiatry. 2019. doi: 10.3389/fpsyt.2019.00370,.
- 25) Kumazaki H, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Matsumoto Y, Miyao M, Ishiguro H, Mimura M, Minabe Y, Kikuchi M: How the realism of robot is needed for individuals with autism spectrum disorders in an interview setting?. Frontiers in Psychiatry. 2019. doi: 10.3389/fpsyt.2019.00486,.
- 26) Okumura T, Kumazaki H, Singh KA, Touhara K, Okamoto M: Individuals with autism spectrum disorder show altered event-related potentials in the late stages of olfactory processing. Chemical Senses. 45(1), 37-44, 2019.
- 27) Kumazaki H, Muramatsu T, Kobayashi K, Watanabe T, Terada K, Higashida H, Yuhi T, Mimura M, Kikuchi M: Feasibility of autism-focused public speech training using a simple virtual audience for autism spectrum disorder. Psychiatry and Clinical Neuroscience. 74(2), 124-131, 2019.
- 28) Namatame H, Fujisato H, Ito M, Sawamiya Y: Development and validation of a Japanese version of the Emotion Regulation Questionnaire for Children and Adolescents. Neuropsychiatric Disease and Treatment, 16, 209-219, 2020.
- 29) Yamada Y, Inagawa T, Sueyoshi K, Sugawara N, Ueda N, Omachi Y, Hirabayashi N, Matsumoto M, Sumiyoshi T: Social Cognition Deficits as a Target of Early Intervention for Psychoses: A Systematic Review. Front Psychiatry 10, 333, 2019.
- 30) Ishikawa S, Ishikawa S, Kishida K., Oka T, Saito A, Shimotsu S, Watanabe N, Sasamori, H, Kamio Y: Developing the Universal Unified Prevention Program for Diverse Disorders for School-aged Children. Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health, 2019. Nov 13;13:44. doi: 10.1186/s13034-019-0303-2.
- 31) Stickley A, Koposov R, Kamio Y, Takahashi H, Koyanagi A, Inoue Y, Yazawa A, Ruchkin V : Attention-deficit/hyperactivity disorder and future expectations in Russian adolescents. ADHD Attention Deficit and Hyperactivity Disorders, 2019 Sep; 11(3):279-287. doi: 10.1007/s12402-019-00292-w.

(2) 総説

- 1) Sugawara N, Yasui-Furukori N, Sumiyoshi T: Competence to consent and its relationship with cognitive function in patients with schizophrenia. Front Psychiatry 10,195 doi: 10.3389/fpsyt.2019.00195, 2019.
- 2) Burdick KE, Millett CE, Del Mar Bonnín C, Bowie C, Carvalho AF, Eyler LT, Gallagher P, Harvey P, Kessing LV, Lafer B, Langenecker SA, Lewandowski KE, López-Jaramillo C, Marshall DF, Martinez-Aran A, McInnis M, McIntyre R, Miskowiak KW, Porter RJ, Purdon S, Ryan KA, Sumiyoshi T, Torres IJ, Van Rheenen TE, Vieta E, Woodward N, Yatham LN, Young A: The International Consortium Investigating Neurocognition in Bipolar Disorder (ICONIC-BD). Bipolar Disord 21(1), 6-10, 2019.
- 3) 熊崎博一: 自閉スペクトラム症者へヒューマノイドロボット研究の現状. Brain and Nerve. 71 (7) : 785 – 791, 2019.

- 4) 熊崎博一：自閉スペクトラム症者の嗅覚特性. 総合病院精神医学会雑誌 31 (3) : 336 - 339, 2019.
- 5) 熊崎博一：自閉スペクトラム症者へのロボットを用いた介入の潜在性. 臨床精神医学 48 (9) : 11093 - 1100, 2019.
- 6) 山田悠至, 稲川拓磨, 松元まどか, 横井優磨, 平林直次, 住吉太幹：統合失調症と双極性障害の疾患特異性と連続性：生物学的指標との関連（特集 異なる疾患間での症状の重なり：鑑別可能か?）. 精神科 = Psychiatry 34(6), 618 - 624, 2019.
- 7) 熊崎博一, 吉川雄一郎：ロボット技術の自閉スペクトラム症者への潜在性. 分子精神医学 19(2): 20-24, 2019.

(3) 著書

- 1) Sumiyoshi T, Hashimoto K: Editorial: Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders, In Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders, Frontiers Media Lausanne, 7 - 9, 2019.
- 2) Sueyoshi K, Sumiyoshi T: Electrophysiological Evidence in Schizophrenia in Relation to Treatment Response. In Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders. Frontiers Media Lausanne, 37 - 42, 2019.
- 3) Kurachi M, Takahashi T, Sumiyoshi T, Uehara T, Suzuki M: Early Intervention and a Direction of Novel Therapeutics for the Improvement of Functional Outcomes in Schizophrenia: A Selective Review. In Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders, Frontiers Media Lausanne, 66 - 76, 2019.
- 4) Sumiyoshi C, Fujino H, Sumiyoshi T, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Hashimoto R: Semantic Memory Organization in Japanese Patients with Schizophrenia Examined with Category Fluency. In Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders, Frontiers Media, Lausanne, 77 - 86, 2019.
- 5) Ohi K, Sumiyoshi C, Fujino H, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Brief Assessment of Intelligence Decline in Schizophrenia as Represented by the Difference Between Current and Premorbid Intellectual Quotient. In Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders, Frontiers Media, Lausanne, 97 - 106, 2019.
- 6) Sumiyoshi T, Toyomaki A, Kawano N, Kitajima T, Kusumi I, Ozaki N, Iwata N, Sueyoshi K, Nakagome K: Verbal Memory Impairment in Patients With Subsyndromal Bipolar Disorder. In Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders, Frontiers Media, Lausanne, 107 - 113, 2019.
- 7) Sugawara N, Yasui-Furukori N, Sumiyoshi T: Competence to Consent and its Relationship With Cognitive Function in Patients With Schizophrenia. In Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders, Frontiers Media, Lausanne, 114 - 118, 2019.
- 8) Omachi Y, Sumiyoshi T: Dose Reduction/Discontinuation of Antipsychotic Drugs in Psychosis; Effect on Cognition and Functional Outcomes. In Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders, Frontiers Media, Lausanne, 155 - 161, 2019.
- 9) Takeda K, Sumiyoshi T, Matsumoto M, Murayama K, Ikezawa S, Matsumoto K, Nakagome K: Neural Correlates for Intrinsic Motivational Deficits of Schizophrenia: Implications for Therapeutics of Cognitive Impairment. In Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders, Frontiers Media, Lausanne, 177 - 187, 2019.
- 10) Narita Z, Inagawa T, Sueyoshi K, Lin C, Sumiyoshi T: Possible Facilitative Effects of Repeated Anodal Transcranial Direct Current Stimulation on Functional Outcome 1 Month Later in Schizophrenia. In Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders, Frontiers Media, Lausanne, 206 - 213, 2019.

- 11) Narita Z, Inagawa T, Maruo K, Sueyoshi K, Sumiyoshi T: Effect of Transcranial Direct Current Stimulation on Functional Capacity in Schizophrenia: A Study Protocol for a Randomized Controlled Trial. In Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders, Frontiers Media, Lausanne, 214 - 218, 2019.
- 12) 住吉太幹: 統合失調症圏障害. 福井, 高木, 小室: 総編集, 今日の治療指針 2020. 医学書院, 東京, pp.1063-64, 2020.
- 13) 海老島健, 住吉太幹: 不登校とひきこもりの理解と対応. 心の健康発達・成長支援マニュアル. こころの健康教室サニタ, 日本医療研究開発機構(AMED)障害者対策総合研究開発事業「児童・思春期における心の健康発達・成長支援に関する研究」班 (研究代表者 水野雅文). 東京, pp.17-19, 2020.
- 14) 長谷川由美, 住吉太幹: スクールカウンセラーの立場からみたアンメット・ニーズ. 心の健康発達・成長支援マニュアル. こころの健康教室サニタ, 日本医療研究開発機構(AMED)障害者対策総合研究開発事業「児童・思春期における心の健康発達・成長支援に関する研究」班 (研究代表者 水野雅文). 東京, pp.51-52, 2020.
- 15) 熊崎博一: 自閉スペクトラム症の感覚特性—嗅覚を中心に. こころの科学 9月号. (日本評論社). 29-33, 2019年.
- 16) 齊藤 彩, 神尾陽子: 子どものメンタルヘルスを測る SDQ. 心の健康発達・成長支援マニュアル. pp121-145. こころの健康教室サニタ, 日本医療研究開発機構(AMED)障害者対策総合研究開発事業「児童・思春期における心の健康発達・成長支援に関する研究」班 (研究代表者 水野雅文). 東京, pp121-145, 2020.

(4) 研究報告書

(5) 翻訳

- 1) ジル・エレンリッチ・メイ, サラ・M・ケネディ, ジェイミー・A・シェアマン, エミリー・L・ビレック, デイビッド・H・バーロウ (著), 藤里紘子・堀越勝 (監訳), 伊藤正哉・加藤典子 (翻訳): つらい感情とうまくつきあう認知行動療法の統一プロトコル 子どものための感情探偵プログラム ワークブック, 福村出版, 東京, 2020.
- 2) ジル・エレンリッチ・メイ, サラ・M・ケネディ, ジェイミー・A・シェアマン, エミリー・L・ビレック, ブライアン・A・バゼッラ, シャノン・M・ベネット, デイビッド・H・バーロウ (著), 藤里紘子・堀越勝 (監訳), 伊藤正哉・加藤典子 (翻訳): つらい感情とうまくつきあう認知行動療法の統一プロトコル 子どものための感情探偵プログラム セラピストガイド, 福村出版, 東京, 2020.

(6) その他

International Society for Bipolar Disorders のホームページ(<https://www.isbd.org/cognitive-assessment>)に, 精神疾患認知機能障害簡易評価尺度(SCIP-日本語版)を掲載

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Sumiyoshi T: Early intervention in psychiatric conditions. Role for neurophysiological measures. In Symposium “Neurophysiological tools in psychiatry – clinical impact on diagnosis, prediction and intervention”. 14th World Congress of Congress of Biological Psychiatry, 2019, 6, 5 (June 2 – 6), Vancouver, Canada (Invited lecture).
- 2) Sumiyoshi T: Disturbances of memory organization in schizophrenia; A cohort study. 19th WPA World Congress of Psychiatry Lisbon, 2019.8.21-24.
- 3) Higuchi Y, Sumiyoshi T: The efficacy of neurophysiological findings in schizophrenia and

- at-risk mental state patients. 19th WPA World Congress of Psychiatry Lisbon, 2019.8.21 - 8.24.
- 4) Noriko Kato, Masaya Ito, Hiroko Fujisato, Mitsuhiro Miyamae, Yuko Shigeeda, Masaru Horikoshi: Current status of research in the Unified Protocol for transdiagnostic treatment of emotional disorders in Japan. 53rd Annual Convention of Association for Behavioral and Cognitive Therapies, Atlanta, USA. 2019.11.21-24.
 - 5) Kumazaki H: "Potentiality of focusing on olfactory trait for autism spectrum disorders" "Clinical use of technology for individuals with autism spectrum disorder" 7th International Conference on Human-Agent Interaction. Kyoto, Japan. 2019.10.
 - 6) 佐藤みのり, 齊藤 彩, 坂田侑奈: うつ病患者と子どもの親子関係に関する研究 (1) - 子どものケア提供行動に着目して -. 日本パーソナリティ心理学会第 28 回大会 武蔵野美術大学, 2019.8.28-8.29.
 - 7) 齊藤 彩, 坂田侑奈, 佐藤みのり: うつ病患者と子どもの親子関係に関する研究 (2) - 注意欠如・多動傾向に着目して -. 日本パーソナリティ心理学会第 28 回大会 武蔵野美術大学, 2019.8.28-8.29.
 - 8) 坂田侑奈, 佐藤みのり, 齊藤 彩: うつ病患者と子どもの親子関係に関する研究 (3) - 自閉症スペクトラム傾向に着目して -. 日本パーソナリティ心理学会第 28 回大会 武蔵野美術大学, 2019.8.28 -8.29.
 - 9) 齊藤 彩, 菅原ますみ: 親子双方の注意欠如・多動症的行動特性と親子関係との関連. 日本教育心理学会第 61 回総会 日本大学, 2019.9.14-9.16.
 - 10) 住吉太幹: 認知機能障害からみた双極性障害の異種性. 第 16 回日本うつ病学会総会 徳島, 2019.7.5-6.
 - 11) 住吉太幹: 気分障害の認知機能障害の評価. 第 16 回日本うつ病学会総会 徳島, 2019.7.5-6.
 - 12) 松元まどか: 統合失調症と霊長類の前頭連合野について. 日本神経精神薬理学会, 2019.10.
 - 13) 樋口悠子, 住吉太幹, 立野貴大, 西山志満子, 高橋 努, 鈴木道雄: 統合失調症薬物治療および精神病発症リスク状態におけるミスマッチ陰性電位の有用性. シンポジウム「統合失調症バイオマーカーとしての mismatch negativity」. 第 115 回日本精神神経学会, 新潟, 2019.6.21(6.20-22)
 - 14) 住吉太幹: 精神疾患レジストリ第 1,2 層の項目と品質管理. シンポジウム「精神疾患レジストリの構築による新たな診断・治療法の開発」. 第 115 回日本精神神経学会, 新潟, 2019.6.22(6.20-22)
 - 15) 住吉太幹: ヒトにおける精神病の早期介入・予防法開発の現状. JSNP シンポジウム「精神疾患の早期介入に向けた治療法の開発」. 第 49 回日本神経精神薬理学会, 福岡, 2019.10.12 (2019.10.11-13)
 - 16) 森尾保徳, 住吉太幹: シグマ 1 受容体アンタゴニスト NE-100 の開発. JSNP シンポジウム「“仮想” 新薬開発会議: シグマアンタゴニストの開発戦略を議論する」. 第 49 回日本神経精神薬理学会, 福岡, 2019.10.13 (2019.10.11-13)
 - 17) 住吉太幹: Treatment of cognitive and functional impairment of schizophrenia with transcranial direct current stimulation. シンポジウム「今日の統合失調症研究」. 第 49 回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島市, 2019.11.28(11.28-30)
 - 18) 樋口悠子, 住吉太幹, 立野貴大, 中島 英, 西山志満子, 高橋 努, 鈴木道雄: 統合失調症および精神病発症リスク状態に対する MMN の臨床的有用性. シンポジウム「統合失調症の病態と MMN」. 第 49 回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島市, 2019.11.29(11.28-30)
 - 19) 熊崎博一: 「自閉スペクトラム症者のロボットインターベンション, 潜在性」「アンドロイド技術が自閉スペクトラム症者にもたらす潜在性」第 60 回日本児童青年精神医学会. 宜野湾市. 2019.12.
 - 20) 熊崎博一: 「環境が変える・環境で変わる発達障害の認知機能: ミクロからマクロのエビデンス」「ロボット介入がもたらす自閉スペクトラム症の認知・行動変化」第 24 回認知神経科学学

会学術集会. 東京都. 2019. 7.

- 21) 熊崎博一：「自閉スペクトラム症の本質に迫る：感覚・運動機能という新たな視点から」「嗅覚特性研究からみえる自閉スペクトラム症者の本質」第 115 回日本精神神経学会学術総会. 新潟市, 2019.6.
- 22) 熊崎博一：「精神神経科領域におけるロボット治療の現状と今後の課題」「精神疾患患者へロボットを用いた介入の現状 アンドロイドの潜在性」第 115 回日本精神神経学会学術総会. 新潟市, 2019.6.
- 23) 熊崎博一： Presidential Symposium 「ロボットとの共存」「ヒューマノイドロボットを用いた自閉スペクトラム症児への介入」第 19 回日本抗加齢医学会総会.横浜市, 2019.6.
- 24) 白間 綾, 武田俊信, 太田晴久, 戸田重信：ADHD 成人における非定型なアラートニング制御：瞳孔径計測による検討. JSNP シンポジウム「ノルアドレナリン神経の多様な機能と関連する病態生理」. 第 49 回日本神経精神薬理学会, 福岡, 2019.10.12 (2019.10.11-13)

(2)一般演題

- 1) Sumiyoshi C, Fujino H, Yamamori H, Kudo N, Azechi H, Fujimoto M, Yasuda Y, Ohi K, Sumiyoshi T, Hahimoto R: Association between work status and subjective aspects of recovery in patients with schizophrenia: A longitudinal study. 7th Schizophrenia International Research Society Conference, 2019, 4, 14, Florence, April (10-14).
- 2) Sumiyoshi T, Watanabe K, Noto S, Sakamoto S, Moriguchi Y, Hammer-Helmich L, Fernandez J: Cognitive function, depressive symptoms and psychosocial function in patients with major depressive disorder treated with antidepressants: A longitudinal analysis of PERFORM-J data. 10th Conference of the International Society for Affective Disorders, 2019, 11, 15, London, November (14-16).
- 3) Ueda N, Kanji T, Maruo K, Sumiyoshi T, Watanabe K, Hanakawa T: Increased central bias in time reproduction in schizophrenia with predominantly positive symptoms. 19th WPA World Congress of Psychiatry Lisbon 2019.8.21-8.24.
- 4) Takeda K, Shimoji K, Matsumoto M, Ogata Y, Maida K, Murakami H, Murayama K, Hanakawa T, Matsumoto K, Nakagome K: Structural connectivity strength of different prefrontal-striatal tract related with the impairment of intrinsic motivation and cognitive control in schizophrenia. 14th World Congress of Biological Psychiatry, Vancouver, Canada, 2019.06.

C. 講演

- 1) 住吉太幹：Bioigen TALLY Study Japan Investigator Meeting, 認知機能障害（CIAS）の評価トレーニング, 東京 2019.11.24.
- 2) 住吉太幹：第 7 回こころの健康講座～学生のメンタルヘルスと教育・医療の協働, 所沢市健康推進部保健センター 健康管理課 こころの健康支援室, 所沢, 2020.2.26.
- 3) 熊崎博一：発達障害研究会 in Yokohama：「自閉スペクトラム症の感覚特性解明に向けて」, 横浜, 2019.11.08.
- 4) 熊崎博一：第 5 回学術講演会 特別記念講演：「ロボットが精神科医の代わりに働く時代は来るのか?」, 有馬高原病院 兵庫県, 2019.12.01.

D. 学会活動

(1) 学会主催

- 1) 住吉太幹：第5回Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder研究会・年次大会, 東京, 2019.5.11

(2) 学会役員

- 1) Sumiyoshi T : World Psychiatric Association Section on Psychoneurobiology, Chair
- 2) Sumiyoshi T : EEG & Clinical Neuroscience Society, Councilor
- 3) Sumiyoshi T : International Society of Bipolar Disorder; Cognition Task Force, Member
- 4) 住吉太幹 : Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder研究会, 理事
- 5) 住吉太幹 : 日本神経精神薬理学会, 評議員, 編集委員
- 6) 住吉太幹 : 日本生物学的精神医学会, 評議員
- 7) 住吉太幹 : 日本臨床精神神経薬理学会, 評議員
- 8) 住吉太幹 : 日本脳科学会, 評議員
- 9) 住吉太幹 : 日本統合失調症学会, 評議員
- 10) 住吉太幹 : 日本精神保健・予防学会, 評議員
- 11) 住吉太幹 : 日本精神保健・予防学会, 評議員
- 12) 熊崎博一 : 日本精神神経学会 精神科医・精神科医療の実態把握・将来計画に関する委員会委員, 小児精神医療委員会委員, PCNワーキンググループ委員
- 13) 熊崎博一 : 日本小児精神神経学会 評議員 ホームページ委員長 編集委員
- 14) 熊崎博一 : 日本児童青年精神医学会 災害委員
- 15) 熊崎博一 : 日本総合病院精神医学会 編集委員
- 16) 熊崎博一 : 日本社会精神医学会 編集委員

(3) 座長

- 1) Sumiyoshi T: Symposium “Electrophysiological and neuropsychological approaches towards phenomenology and onset of psychoses“, 19th WPA World Congress of Psychiatry, 2019.8.24. Lisbon (2019, 8, 21 - 24)
- 2) 住吉太幹 : JSNP シンポジウム「精神疾患の早期介入に向けた治療法の開発」. 第 49 回日本神経精神薬理学会, 福岡, 2019.10.12.
- 3) 住吉太幹 : 招待講演 “Neurodevelopmental disorders - MMN evidence“ 演者 : Teija Kujala . 第49回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2019.11.29.
- 4) 住吉太幹 : 共催シンポジウム「今日の統合失調症研究」 第49回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2019.11.28.
- 5) 住吉太幹 : 共催シンポジウム「統合失調症の病態とMMN」 第49回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2019.11.29.
- 6) 松元まどか : 奨励賞候補口演 第3回ヒト脳イメージング研究会, 東京, 2019.9.6.
- 7) 松元まどか : シンポジウム「臨床医学におけるヒトイメージング研究の地平線」 第3回ヒト脳イメージング研究会, 東京, 2019.9.7.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Sumiyoshi T: Clinical Psychopharmacology and Neuroscience, Associate Editor
- 2) Sumiyoshi T: Clinical EEG and Neuroscience, Editorial Board Member
- 3) Sumiyoshi T: Schizophrenia Research Cognition, Editorial Board Member
- 4) Sumiyoshi T: Neuropsychopharmacology Reports, Editorial Board Member
- 5) Kumazaki H: Autism Research: Editorial Board Member

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 住吉太幹, 熊崎博一 : 令和元年度精神保健に関する技術研修. 第 14 回発達障害地域包括支援研修, 東京, 2019.7.25.

- 2) 住吉太幹, 熊崎博一：令和元年度精神保健に関する技術研修．第 12 回発達障害地域包括支援研修，東京，2019.10.4.
- 3) 住吉太幹, 熊崎博一：第 4 回 児童・予防精神医学研究会．東京，2019.7.19.
- 4) 住吉太幹, 熊崎博一：第 5 回 児童・予防精神医学研究会．東京，2019.11.6.
- 5) 住吉太幹：第 6 回 児童・予防精神医学研究会．東京，2020.1.17.

(2) 研修会講師

- 1) 熊崎博一：発達障害の理解と治療．日本精神科看護協会主催研修，東京，2020.2.21.
- 2) 熊崎博一：発達障害に診られる感覚の問題．第 28 回発達障害支援医学研修，東京，2020.1.30.
- 3) 藤里紘子：児童・青年の感情障害に対する認知行動療法の統一プロトコル．2019 年度認知行動療法センター主催研修，東京，2019.10.26-27.

F. その他

6. 精神薬理研究部

I. 研究部の概要

精神薬理研究部では、最終目標を「精神疾患の克服を目指した研究開発を行い、研究成果を目の前の医療に活かす」と定義し、当センターの事業計画における位置づけを明確化している。具体的には、我が国において重要な政策課題となっている精神疾患に焦点を当て、精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い、政策立案に必須となる臨床研究を実施するとともに、非臨床ステージにおける創薬研究を中心とした精神神経疾患の治療介入法の研究開発を行っている。

精神薬理研究部には、分子精神薬理研究室と向精神薬研究開発室の2室が所属している。令和元年度常勤研究員は部長の山田光彦、分子精神薬理研究室長の三輪秀樹、向精神薬研究開発室長の古家宏樹の3名であった。流動研究員は、國石 洋、小林桃子の2名、科研費研究員は、山田美佐、中武優子(11.1~)であった。併任研究員は、野田隆政(国立精神・神経医療研究センター病院第二精神科医長)であった。客員研究員は、稲垣正俊(島根大学医学部精神科医学講座教授)、岡淳一郎(東京理科大学薬学部名誉教授)、川島義高(明治大学文学部心理社会学科臨床心理学専攻専任講師)、神庭重信(九州大学大学院医学研究院精神病態医学教授)、澤 幸祐(専修大学人間科学部心理学科教授)、白川修一郎(睡眠評価研究機構代表者)、高原 円(福島大学共生システム理工学類准教授)、中嶋智史(広島修道大学健康科学部心理学科講師)、西川 徹(昭和大学医学部薬理学講座客員教授)、古川壽亮(京都大学大学院医学研究科教授)、吉澤一巳(東京理科大学薬学部疾患薬理学研究室准教授)、米本直裕(ファイザー株式会社経営政策管理本部医療技術・事業評価部部長)であった。研究生は、請園正敏、遠藤 香、大槻露華、川島友子、後藤玲央、寺尾真実、西岡玄太郎、渡辺恭江、早田暁伸、中武優子(~10.31)、萱嶋修平、実習生は、石井香織であった。科研費研究助手は、松谷真由美、村松浩美であった。

II. 研究活動

1) 分子精神薬理研究室による研究

分子精神薬理研究室では、光遺伝学等の最先端の神経回路研究手法を駆使して、精神疾患の病態研究を進めている。統合失調症ではノンレム睡眠中に観察されるスピンドル波発生の著しい異常が観察されている。ノンレム睡眠中のスピンドル波密度および活動上昇の生理的意義として、睡眠依存性記憶固定との関連性が提唱され、睡眠依存性記憶固定の機能において、GABA神経系が中心的役割を担っていることが推測される。そこで、スピンドル波発生に重要な神経核におけるGAD67陽性GABA神経細胞の機能を特異的に低下させるモデルマウスを用いて、統合失調症のGABA神経仮説に関する研究を進めている。研究成果は、基礎研究から得られた知見をベッドサイド、ひいては日常臨床へと相互にトランスレーションするための基盤となる。

令和元年度には、群馬大学大学院医学系研究科・分子細胞生物学教室(柴崎貢志准教授)と三輪秀樹室長との共同研究による論文がLab Invest誌に掲載された。本研究の結果、てんかん発作時にはマウス脳のでんかん原性域の温度が上昇すること、温度を感知するTRV4の異常な活性化により発作が悪化していることが明らかとなった。さらに、てんかん原性域の物理的な冷却やTRV4阻害薬の投与により発作は見られなくなった。今後の臨床応用に向けたトランスレーショナル研究が期待される。

2) 向精神薬研究開発室による研究

向精神薬研究開発室では、新規向精神薬候補化合物の基礎研究開発を進めている。統合失調症の背景として、ドーパミン過剰仮説やグルタミン酸機能低下仮説が提唱されている。イオンチャンネル型グルタミン酸受容体の一つであるNMDA受容体は、神経細胞の増殖・分化・移動を調節しており、新生仔期のラットにNMDA受容体拮抗薬を投与すると多様な神経解剖学的変化およびドーパミン過剰を含む神経化学的变化を生じる。新生仔期NMDA受容体遮断ラットは、感覚運動ゲー

ティングの障害や、社会行動の異常、ドーパミン作動薬への過感受性、空間学習障害などの統合失調症に類似する行動異常を示すことから、統合失調症の神経発達障害仮説に基づいた有力な動物モデルと目されている。

令和元年度には、古家宏樹室長による研究成果が **Brain Res** 誌に掲載された。本研究の結果、作業記憶の発達には **NMDA** 受容体の活性が不可欠であり、妊娠中から生後 2, 3 年の間に生じる神経発達障害が統合失調症の典型的な症状の一つである作業記憶の障害の一因となりうる可能性が示された。統合失調症における認知機能の障害は、従来の抗精神病薬では改善されにくいことが知られている。新生仔期 **NMDA** 受容体遮断ラットは、統合失調症の認知機能障害の神経学的基盤の解明と有効な治療法の開発に役立つと期待される。

また、向精神薬研究開発室では、新規向精神薬探索のために必要な構成概念妥当性の高い新規動物モデルを確立することを目指し、社会的敗北ストレス負荷モデルとその目撃モデルを用いた研究を進めている。令和元年度には、中武優子研究員らの論文が **Neurosci Res** 誌に掲載された。本研究の結果、心理的ストレスは身体的ストレスと比べ脳の報酬系により強い影響を及ぼし、うつ病の中核症状である快感消失を引き起こす可能性が示された。また、身体的ストレスに対して緩和作用を示す薬物が心理的ストレスの影響を緩和できなかったことから、ストレスの性質の違いが向精神薬の治療効果に影響しうることが示唆された。本研究で確立した心理的ストレスマウスモデルは、構成概念妥当性の高い新規の慢性ストレスモデルとなるものと考えられる。このモデルを前臨床薬効薬理試験に用いることで、これまで困難とされてきた抗うつ薬あるいはストレス関連疾患治療薬の創薬研究をより合理的に進めることができるものと期待される。

3) 臨床医学研究

精神薬理研究部では、実臨床の改善の基礎となる臨床研究を実施している。

・ **DEPRESSD Project** : カナダ **McGill** 大学の **Brett D. Thombs** 教授が主宰する国際共同研究である **DEPRESSD Project** では、システマティックレビューにより作成された大型データベースについて、参加者個人のデータ (**individual participant data**) に基づくメタ解析を行い、うつ病スクリーニング評価指標の標準化に資する研究を進めている。現在、副次解析研究が精力的に続けられている。令和元年度には、**BMJ** 誌や **Psychol Med** 誌にその成果が原著論文として掲載された。**DEPRESSD Project** から得られたエビデンスが日々の診療に役立つことが期待されている。

・ **SUN☺D study** : 古川壽亮客員研究員が主宰する研究プロジェクトである **SUN☺D study** は、うつ病の最適薬物治療戦略確立を目指して実施された 2,000 症例規模の実践的多施設共同無作為化比較試験である。現在、二次解析研究が精力的に続けられている。令和元年度には、**Psychol Med** 誌や **J Affect Disord** 誌等にその成果が原著論文として掲載された。**SUN☺D study** から得られたエビデンスが日々の診療に役立つことが期待されている。

・ **FLATT study** : 古川壽亮客員研究員が主宰する研究プロジェクトである **FLATT study** は、薬物治療抵抗性うつ病に対するモバイル認知行動療法の効果を検証する無作為割り付け比較試験である。現在、二次解析研究が精力的に続けられている。令和元年度には、**Psychiatry Clin Neurosci** 誌にその成果が原著論文として掲載された。**FLATT study** から得られたエビデンスが日々の診療に役立つことが期待されている。

・ **HOPE Project** : 精神疾患を伴う自殺未遂者ケアに関する先行研究の再評価、精神疾患を伴う自殺未遂者に対するケース・マネジメントの効果についての検討、ケース・マネジメント手法の標準化と人材育成プログラムの事業化に関する研究を進めている。令和元年度には、日本自殺予防学会による「**The HOPE program standards(英語版)**」を公開した。また、**Gen Hosp Psychiatry** 誌や **Psychol Med** 誌にその成果が原著論文として掲載された。諸外国においても、救急医療施設を起点とした自殺未遂者支援の輪が広がればと期待している。

・ **Public Health Research Project** : 米本直裕客員研究員は複数の **Public Health Research Project** に参画している。令和元年度には、**Nature** 誌、**JAMA Pediatrics** 誌、**JAMA Oncol** 誌等にその成果が原著論文として掲載された。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

市民講座，保健所，地方自治団体等による講演会，マスメディア等にて普及啓発活動を行った。

(2) 専門教育面における貢献

- ・東京理科大学薬学部より学部生及び大学院生を受け入れ指導した。
- ・日本精神神経薬理学会認定医・指導医・治験登録医・日本臨床薬理学会認定医として，昭和大学において精神医学の卒前卒後の教育活動を実施。（山田光彦）
- ・東京工業大学において生命理工オープンイノベーションハブ。（三輪秀樹）

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・該当なし

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

- ・厚生労働省自殺未遂者等支援拠点医療機関整備事業評価委員会委員。（山田光彦）
- ・厚生労働省被災3県心のケア総合支援調査研究等事業評価委員会委員。（山田光彦）
- ・大型臨床試験 ACTION-J study（自殺企図の再発防止に対する複合的ケース・マネージメントの効果を検証した多施設共同無作為化比較試験）の成果を元に，厚生労働省は平成28年度の診療報酬改定で「自殺企図の患者に対する継続的な指導の評価」を新設した。令和元年度は算定要件となる継続支援研修を日本自殺予防学会による事業として開催した。

(5) センター内における臨床的活動

日本臨床精神神経薬理学会専門医制度の研修施設である NCNP 病院において専門医・指導医として，病院レジデント等への教育／指導を実施。（山田光彦）

(6) その他

- 1) 三輪秀樹：てんかん悪化の仕組みと解明 冷やすと発作が収束 群馬大学大学院研究グループ発表 新薬開発に期待（上毛新聞社）。2019.10.30.

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Gotoh L, Yamada M, Hattori K, Sasayama D, Noda T, Yoshida S, Kunugi H, Yamada M: Lysophosphatidic acid levels in cerebrospinal fluid and plasma samples in patients with major depressive disorder. *Heliyon* 5(5): e01699, 2019.
- 2) Akechi T, Mantani A, Kurata K, Hirota S, Shimodera S, Yamada M, Inagaki M, Watanabe N, Kato T, Furukawa TA; SUND Investigators: Predicting relapse in major depression after successful initial pharmacological treatment. *J Affect Disord* 250: 108-113, 2019.
- 3) Imai H, Takeshima N, Hayasaka Y, Yonemoto N, Ogawa Y, Tajika A, Fujita H, Kato T, Furukawa TA; FLATT Investigators(Yamada M): Association between patients' feedback comments and depressive mood, satisfaction, homework conducted, and dropouts during self-guided smartphone cognitive behavioral therapy. *Psychiatry Clin Neurosci* 73(6): 349-350, 2019.
- 4) Kawashima Y, Yonemoto N, Inagaki M, Inoue K, Kawanishi C, Yamada M: Interventions to prevent suicidal behavior and ideation for patients with cancer: A systematic review. *Gen*

- Hosp Psychiatry 60: 98-110, 2019.
- 5) Furukawa TA, Kato T, Shinagawa Y, Miki K, Fujita H, Tsujino N, Kondo M, Inagaki M, Yamada M: Prediction of remission in pharmacotherapy of untreated major depression: development and validation of multivariable prediction models. Psychol Med 49(14): 2405-2413, 2019.
 - 6) Akechi T, Kato T, Fujise N, Yonemoto N, Tajika A, Furukawa TA; SUN☺D Investigators(Yamada M): Why some depressive patients perform suicidal acts and others do not. Psychiatry Clin Neurosci 73(10): 660-661, 2019.
 - 7) Akechi T, Sugishita K, Chino B, Itoh K, Ikeda Y, Shimodera S, Yonemoto N, Miki K, Ogawa Y, Takeshima N, Kato T, Furukawa TA for SUN☺D Investigators(Yamada M): Whose depression deteriorates during acute phase antidepressant treatment? J Affect Disord 260: 342-348, 2020.
 - 8) Kusui Y, Nishizawa D, Hasegawa J, Uno K, Miyanishi H, Ujike H, Ozaki N, Inada T, Iwata N, Sora I, Iyo M, Yamada M, Kondo N, Won MJ, Naruse N, Uehara-Aoyama K, Ikeda K, Nitta A: A single medical marker for diagnosis of methamphetamine addiction - DNA methylation of SHAT1/NAT8L promoter sites from patient blood. Curr Pharm Des 26(2): 260-264, 2020.
 - 9) Takeuchi E, Yamada D, Suzuki S, Saitoh A, Itoh M, Hayashi T, Yamada M, Wada K, Sekiguchi M: Participation of the nucleus accumbens dopaminergic system in the antidepressant-like actions of a diet rich in omega-3 polyunsaturated fatty acids. PLOS ONE 15(3): e0230647, 2020.
 - 10) Levis B, Benedetti A, Thombs BD, on behalf of the DEPRESsion Screening Data (DEPRESSD) Collaboration(Yamada M): Accuracy of patient health questionnaire-9 (PHQ-9) for screening to detect major depression: individual participant data meta-analysis. BMJ 2019 365: 11476, 2019.
 - 11) Wu Y, Levis B, Riehm KE, Saadat N, Levis AW, Azar M, Rice DB, Boruff J, Cuijpers P, Gilbody S, Ioannidis JPA, Kloda LA, McMillan D, Patten SB, Shrier I, Ziegelstein RC, Akena DH, Arroll B, Ayalon L, Baradaran HR, Baron M, Bombardier CH, Butterworth P, Carter G, Chagas MH, Chan JCN, Cholera R, Conwell Y, de Man-van Ginkel JM, Fann JR, Fischer FH, Fung D, Gelaye B, Goodyear-Smith F, Greeno CG, Hall BJ, Harrison PA, Härter M, Hegerl U, Hides L, Hobfoll SE, Hudson M, Hyphantis T, Inagaki M, Jetté N, Khamseh ME, Kiely KM, Kwan Y, Lamers F, Liu S-I, Lotrakul M, Loureiro SR, Löwe B, McGuire A, Mohd-Sidik S, Munhoz TN, Muramatsu K, Osório FL, Patel V, Pence BW, Persoons P, Picardi A, Reuter K, Rooney AG, Santos IS, Shaaban J, Sidebottom A, Simning A, Stafford L, Sung S, Tan PLL, Turner A, van Weert HC, White J, Whooley MA, Winkley K, Yamada M, Benedetti A, Thombs BD: Equivalency of the diagnostic accuracy of the PHQ-8 and PHQ-9: A systematic review and individual participant data meta-analysis. Psychol Med online ahead of print, 2019.
 - 12) Nakatake Y, Furuie H, Yamada M, Kuniishi H, Ukezono M, Yoshizawa K, Yamada M: The effects of emotional stress are not identical to those of physical stress in mice model of social defeat stress. Neurosci Res S0168-0102(19): 30261-30265, 2019.
 - 13) McGrath S, Zhao X, Steele R, Thombs BD, Benedetti A, Yamada M, DEPRESsion Screening Data (DEPRESSD) Collaboration: Estimating the sample mean and standard deviation from commonly reported quantiles in meta-analysis. Stat Methods Med Res online ahead of print, 2020.
 - 14) Shibasaki K, Yamada K, Miwa H, Yanagawa Y, Suzuki M, Tominaga M, Ishizaki Y:

- Temperature elevation in epileptogenic foci exacerbates epileptic discharge through TRPV4 activation. *Lab Invest* 100(2): 274-284, 2020.
- 15) Furuie H, Yamada K, Ichitani Y: Differential effects of N-methyl-D-aspartate receptor blockade during the second and third postnatal weeks on spatial working and reference memory in adult rats. *Brain Res.* 1721: 146339, 2019.
 - 16) GBD 2017 Child and Adolescent Health Collaborators, Reiner RC Jr, Olsen HE, Ikeda CT, Echko MM, Ballestreros KE, Manguerra H, Martopullo I, Millear A, Shields C, Smith A, Strub B, Abebe M, Abebe Z, Adhena BM, Adhikari TB, Akibu M, Al-Raddadi RM, Alvis-Guzman N, Antonio CAT, Aremu O, Asgedom SW, Asseffa NA, Avila-Burgos L, Barac A, Bärnighausen TW, Bassat Q, Bensenor IM, Bhutta ZA, Bijani A, Bililign N, Cahuan-Hurtado L, Malta DC, Chang JC, Charlson FJ, Dharmaratne SD, Doku DT, Edessa D, El-Khatib Z, Erskine HE, Ferrari AJ, Fullman N, Gupta R, Hassen HY, Hay SI, Ilesanmi OS, Jacobsen KH, Kahsay A, Kasaeian A, Kassa TD, Kebede S, Khader YS, Khan EA, Khan MN, Khang YH, Khubchandani J, Kinfu Y, Kochhar S, Kokubo Y, Koyanagi A, Defo BK, Lal DK, Kumsa FA, Larson HJ, Leung J, Mamun AA, Mehata S, Melku M, Mendoza W, Mezgebe HB, Miller TR, Moges NA, Mohammed S, Mokdad AH, Monasta L, Neupane S, Nguyen HLT, Ningrum DNA, Nirayo YL, Nong VM, Ogbo FA, Olagunju AT, Olusanya BO, Olusanya JO, Patton GC, Pereira DM, Pourmalek F, Qorbani M, Rafay A, Rai RK, Ram U, Ranabhat CL, Renzaho AMN, Rezai MS, Ronfani L, Roth GA, Safiri S, Sartorius B, Scott JG, Shackelford KA, Sliwa K, Sreeramareddy C, Sufiyan MB, Terkawi AS, Topor-Madry R, Tran BX, Ukwaja KN, Uthman OA, Vollset SE, Weldegewergs KG, Werdecker A, Whiteford HA, Wijeratne T, Yonemoto N, Yotebieng M, Zuhlke LJ, Kyu HH, Naghavi M, Vos T, Murray CJL, Kassebaum NJ: Diseases, Injuries, and Risk factors in child and adolescent health, 1990 to 2017 : Findings from the global burden of diseases, Injuries, and Risk factors 2017 study. *JAMA Pediatr* 2019; 173(6): e190337, 2019.
 - 17) Global Burden of Disease Cancer Collaboration, Fitzmaurice C, Abate D, Abbasi N, Abbastabar H, Abd-Allah F, Abdel-Rahman O, Abdelalim A, Abdoli A, Abdollahpour I, Abdulle ASM, Abebe ND, Abraha HN, Abu-Raddad LJ, Abualhasan A, Adedeji IA, Advani SM, Afarideh M, Afshari M, Aghaali M, Agius D, Agrawal S, Ahmadi A, Ahmadian E, Ahmadpour E, Ahmed MB, Akbari ME, Akinyemiju T, Al-Aly Z, AlAbdulKader AM, Alahdab F, Alam T, Alamene GM, Alemnew BTT, Alene KA, Alinia C, Alipour V, Aljunid SM, Bakeshei FA, Almadi MAH, Almasi-Hashiani A, Alsharif U, Alsowaidi S, Alvis-Guzman N, Amini E, Amini S, Amoako YA, Anbari Z, Anber NH, Andrei CL, Anjomshoa M, Ansari F, Ansariadi A, Appiah SCY, Arab-Zozani M, Arabloo J, Arefi Z, Aremu O, Areri HA, Artaman A, Asayesh H, Asfaw ET, Ashagre AF, Assadi R, Ataeinia B, Atalay HT, Ataro Z, Atique S, Ausloos M, Avila-Burgos L, Avokpaho EFGA, Awasthi A, Awoke N, Ayala Quintanilla BP, Ayanore MA, Ayele HT, Babae E, Bacha U, Badawi A, Bagherzadeh M, Bagli E, Balakrishnan S, Balouchi A, Bärnighausen TW, Battista RJ, Behzadifar M, Behzadifar M, Bekele BB, Belay YB, Belayneh YM, Berfield KKS, Berhane A, Bernabe E, Beuran M, Bhakta N, Bhattacharyya K, Biadgo B, Bijani A, Bin Sayeed MS, Birungi C, Bisignano C, Bitew H, Bjørge T, Bleyer A, Bogale KA, Bojia HA, Borzì AM, Bosetti C, Bou-Orm IR, Brenner H, Brewer JD, Briko AN, Briko NI, Bustamante-Teixeira MT, Butt ZA, Carreras G, Carrero JJ, Carvalho F, Castro C, Castro F, Catalá-López F, Cerin E, Chaiah Y, Chanie WF, Chattu VK, Chaturvedi P, Chauhan NS, Chehraz M, Chiang PP, Chichiabellu TY, Chido-Amajuoyi OG, Chimed-Ochir O, Choi JJ, Christopher DJ, Chu DT, Constantin MM, Costa VM, Crocetti E, Crowe CS, Curado MP, Dahlawi SMA, Damiani G, Darwish AH,

Daryani A, das Neves J, Demeke FM, Demis AB, Demissie BW, Demoz GT, Denova-Gutiérrez E, Derakhshani A, Deribe KS, Desai R, Desalegn BB, Desta M, Dey S, Dharmaratne SD, Dhimal M, Diaz D, Dinberu MTT, Djalalinia S, Doku DT, Drake TM, Dubey M, Dubljanin E, Duken EE, Ebrahimi H, Effiong A, Eftekhari A, El Sayed I, Zaki MES, El-Jaafary SI, El-Khatib Z, Elemineh DA, Elkout H, Ellenbogen RG, Elsharkawy A, Emamian MH, Endalew DA, Endries AY, Eshrati B, Fadhil I, Fallah V, Faramarzi M, Farhangi MA, Farioli A, Farzadfar F, Fentahun N, Fernandes E, Feyissa GT, Filip I, Fischer F, Fisher JL, Force LM, Foroutan M, Freitas M, Fukumoto T, Futran ND, Gallus S, Gankpe FG, Gayesa RT, Gebrehiwot TT, Gebremeskel GG, Gedefaw GA, Gelaw BK, Geta B, Getachew S, Gezae KE, Ghafourifard M, Ghajar A, Ghashghaee A, Gholamian A, Gill PS, Ginindza TTG, Girmay A, Gizaw M, Gomez RS, Gopalani SV, Gorini G, Goulart BNG, Grada A, Ribeiro Guerra M, Guimaraes ALS, Gupta PC, Gupta R, Hadkhale K, Haj-Mirzaian A, Haj-Mirzaian A, Hamadeh RR, Hamidi S, Hanfore LK, Haro JM, Hasankhani M, Hasanzadeh A, Hassen HY, Hay RJ, Hay SI, Henok A, Henry NJ, Herteliu C, Hidru HD, Hoang CL, Hole MK, Hoogar P, Horita N, Hosgood HD, Hosseini M, Hosseinzadeh M, Hostiuc M, Hostiuc S, Househ M, Hussen MM, Ileanu B, Ilic MD, Innos K, Irvani SSN, Iseh KR, Islam SMS, Islami F, Jafari Balalami N, Jafarinia M, Jahangiry L, Jahani MA, Jahanmehr N, Jakovljevic M, James SL, Javanbakht M, Jayaraman S, Jee SH, Jenabi E, Jha RP, Jonas JB, Jonnagaddala J, Joo T, Jungari SB, Jürisson M, Kabir A, Kamangar F, Karch A, Karimi N, Karimian A, Kasaeian A, Kasahun GG, Kassa B, Kassa TD, Kassaw MW, Kaul A, Keiyoro PN, Kelbore AG, Kerbo AA, Khader YS, Khalilarjmandi M, Khan EA, Khan G, Khang YH, Khatab K, Khater A, Khayamzadeh M, Khazae-Pool M, Khazaei S, Khoja AT, Khosravi MH, Khubchandani J, Kianipour N, Kim D, Kim YJ, Kisa A, Kisa S, Kissimova-Skarvek K, Koamaki H, Koyanagi A, Krohn KJ, Bicer BK, Kugbey N, Kumar V, Kuupiel D, La Vecchia C, Lad DP, Lake EA, Lakew AM, Lal DK, Lami FH, Lan Q, Lasrado S, Lauriola P, Lazarus JV, Leigh J, Leshargie CT, Liao Y, Limenih MA, Listl S, Lopez AD, Lopukhov PD, Lunevicius R, Madadin M, Magdeldin S, El Razek HMA, Majeed A, Maleki A, Malekzadeh R, Manafi A, Manafi N, Manamo WA, Mansourian M, Mansournia MA, Mantovani LG, Maroufizadeh S, Martini SMS, Mashamba-Thompson TP, Massenburg BB, Maswabi MT, Mathur MR, McAlinden C, McKee M, Meheretu HAA, Mehrotra R, Mehta V, Meier T, Melaku YA, Meles GG, Meles HG, Melese A, Melku M, Memiah PTN, Mendoza W, Menezes RG, Merat S, Meretoja TJ, Mestrovic T, Miazgowski B, Miazgowski T, Mihretie KMM, Miller TR, Mills EJ, Mir SM, Mirzaei H, Mirzaei HR, Mishra R, Moazen B, Mohammad DK, Mohammad KA, Mohammad Y, Darwesh AM, Mohammadbeigi A, Mohammadi H, Mohammadi M, Mohammadian M, Mohammadian-Hafshejani A, Mohammadoo-Khorasani M, Mohammadpourhodki R, Mohammed AS, Mohammed JA, Mohammed S, Mohebi F, Mokdad AH, Monasta L, Moodley Y, Moosazadeh M, Moossavi M, Moradi G, Moradi-Joo M, Moradi-Lakeh M, Moradpour F, Morawska L, Morgado-da-Costa J, Morisaki N, Morrison SD, Mosapour A, Mousavi SM, Muche AA, Muhammed OSS, Musa J, Nabhan AR, Naderi M, Nagarajan AJ, Nagel G, Nahvijou A, Naik G, Najafi F, Naldi L, Nam HS, Nasiri N, Nazari J, Negoï I, Neupane S, Newcomb PA, Nggada HA, Ngunjiri JW, Nguyen CT, Nikniaz L, Ningrum DNA, Nirayo YL, Nixon MR, Nnaji CA, Nojomi M, Nosratnejad S, Shiadeh MN, Obsa MS, Ofori-Asenso R, Ogbo FA, Oh IH, Olagunju AT, Olagunju TO, Oluwasanu MM, Omonisi AE, Onwujekwe OE, Oommen AM, Oren E, Ortega-Altamirano DDV, Ota E, Otstavnov SS, Owolabi MO, P A M, Padubidri JR, Pakhale S, Pakpour AH, Pana A, Park EK, Parsian H, Pashaei T, Patel S, Patil ST, Pennini A, Pereira

- DM, Piccinelli C, Pillay JD, Pirestani M, Pishgar F, Postma MJ, Pourjafar H, Pourmalek F, Pourshams A, Prakash S, Prasad N, Qorbani M, Rabiee M, Rabiee N, Radfar A, Rafiei A, Rahim F, Rahimi M, Rahman MA, Rajati F, Rana SM, Raoofi S, Rath GK, Rawaf DL, Rawaf S, Reiner RC, Renzaho AMN, Rezaei N, Rezapour A, Ribeiro AI, Ribeiro D, Ronfani L, Roro EM, Roshandel G, Rostami A, Saad RS, Sabbagh P, Sabour S, Saddik B, Safiri S, Sahebkar A, Salahshoor MR, Salehi F, Salem H, Salem MR, Salimzadeh H, Salomon JA, Samy AM, Sanabria J, Santric Milicevic MM, Sartorius B, Sarveazad A, Sathian B, Satpathy M, Savic M, Sawhney M, Sayyah M, Schneider IJC, Schöttker B, Sekerija M, Sepanlou SG, Sepehrimanesh M, Seyedmousavi S, Shaahmadi F, Shabaninejad H, Shahbaz M, Shaikh MA, Shamshirian A, Shamsizadeh M, Sharafi H, Sharafi Z, Sharif M, Sharifi A, Sharifi H, Sharma R, Sheikh A, Shirkoochi R, Shukla SR, Si S, Siabani S, Silva DAS, Silveira DGA, Singh A, Singh JA, Sisay S, Sitas F, Sobngwi E, Soofi M, Soriano JB, Stathopoulou V, Sufiyan MB, Tabarés-Seisdedos R, Tabuchi T, Takahashi K, Tamtaji OR, Tarawneh MR, Tassew SG, Taymoori P, Tehrani-Banihashemi A, Temsah MH, Temsah O, Tesfay BE, Tesfay FH, Teshale MY, Tessema GA, Thapa S, Tlaye KG, Topor-Madry R, Tovani-Palone MR, Traini E, Tran BX, Tran KB, Tsadik AG, Ullah I, Uthman OA, Vacante M, Vaezi M, Varona Pérez P, Veisani Y, Vidale S, Violante FS, Vlassov V, Vollset SE, Vos T, Vosoughi K, Vu GT, Vujcic IS, Wabinga H, Wachamo TM, Wagnew FS, Waheed Y, Weldegebreel F, Weldesamuel GT, Wijeratne T, Wondafrash DZ, Wonde TE, Wondmienen AB, Workie HM, Yadav R, Yadegar A, Yadollahpour A, Yaseri M, Yazdi-Feyzabadi V, Yeshaneh A, Yimam MA, Yimer EM, Yisma E, Yonemoto N, Younis MZ, Yousefi B, Yousefifard M, Yu C, Zabeh E, Zadnik V, Moghadam TZ, Zaidi Z, Zamani M, Zandian H, Zangeneh A, Zaki L, Zendejdel K, Zenebe ZM, Zewale TA, Ziapour A, Zodpey S, Murray CJL: Global, Regional, and National cancer, Mortality, Years of life lost, Years lived with Disability-Adjusted Life-Years for 29 cancer group, 1990 to 2017: A systematic analysis for the global burden of diseases study. *JAMA Oncology* 5(12): 1749-1768, 2019.
- 18) Burstein R, Henry NJ, Collison ML, Marczak LB, Sligar A, Watson S, Marquez N, Abbasalizad-Farhangi M, Abbasi M, Abd-Allah F, Abdoli A, Abdollahi M, Abdollahpour I, Abdulkader RS, Abrigo MRM, Acharya D, Adebayo OM, Adekanmbi V, Adham D, Afshari M, Aghaali M, Ahmadi K, Ahmadi M, Ahmadpour E, Ahmed R, Akal CG, Akinyemi JO, Alahdab F, Alam N, Alamene GM, Alene KA, Alijanzadeh M, Alinia C, Alipour V, Aljunid SM, Almalki MJ, Al-Mekhlafi HM, Altirkawi K, Alvis-Guzman N, Amegah AK, Amini S, Amit AML, Anbari Z, Androudi S, Anjomshoa M, Ansari F, Antonio CAT, Arabloo J, Arefi Z, Aremu O, Armoon B, Arora A, Artaman A, Asadi A, Asadi-Aliabadi M, Ashraf-Ganjouei A, Assadi R, Ataeinia B, Atre SR, Quintanilla BPA, Ayanore MA, Azari S, Babaei E, Babazadeh A, Badawi A, Bagheri S, Bagherzadeh M, Baheiraei N, Balouchi A, Barac A, Bassat Q, Baune BT, Bayati M, Bedi N, Beghi E, Behzadifar M, Behzadifar M, Belay YB, Bell B, Bell ML, Berbada DA, Bernstein RS, Bhattacharjee NV, Bhattarai S, Bhutta ZA, Bijani A, Bohlouli S, Breitborde NJK, Britton G, Browne AJ, Nagaraja SB, Busse R, Butt ZA, Car J, Cárdenas R, Castañeda-Orjuela CA, Cerin E, Chanie WF, Chatterjee P, Chu DT, Cooper C, Costa VM, Dalal K, Dandona L, Dandona R, Daoud F, Daryani A, Das Gupta R, Davis I, Davis Weaver N, Davitoiu DV, De Neve JW, Demeke FM, Demoz GT, Deribe K, Desai R, Deshpande A, Desyibelew HD, Dey S, Dharmaratne SD, Dhimal M, Diaz D, Doshmangir L, Duraes AR, Dwyer-Lindgren L, Earl L, Ebrahimi R, Ebrahimpour S, Effiong A, Eftekhari A, Ehsani-Chimeh E, El Sayed I, El Sayed Zaki M, El Tantawi M, El-Khatib Z, Emamian MH, Enany S, Eskandarieh S, Eyawo O, Ezalarab M, Faramarzi M, Fareed M,

Faridnia R, Faro A, Fazaeli AA, Fazlzadeh M, Fentahun N, Fereshtehnejad SM, Fernandes JC, Filip I, Fischer F, Foigt NA, Foroutan M, Francis JM, Fukumoto T, Fullman N, Gallus S, Gebre DG, Gebrehiwot TT, Gebremeskel GG, Gessner BD, Geta B, Gething PW, Ghadimi R, Ghadiri K, Ghajarzadeh M, Ghashghaee A, Gill PS, Gill TK, Golding N, Gomes NGM, Gona PN, Gopalani SV, Gorini G, Goulart BNG, Graetz N, Greaves F, Green MS, Guo Y, Haj-Mirzaian A, Haj-Mirzaian A, Hall BJ, Hamidi S, Haririan H, Haro JM, Hasankhani, M, Hasanpoor E, Hasanazadeh A, Hassankhani H, Hassen HY, Hegazy MI, Hendrie D, Heydarpour F, Hird TR, Hoang CL, Hollerich G, Rad EH, Hoseini-Ghahfarokhi M, Hossain N, Hosseini M, Hosseinzadeh M, Hostiuc M, Hostiuc S, Househ M, Hsairi M, Ilesanmi OS, Imani-Nasab MH, Iqbal U, Irvani SSN, Islam N, Islam SMS, Jürisson M, Balalami NJ, Jalali A, Javidnia J, Jayatilleke AU, Jenabi E, Ji JS, Jobanputra YB, Johnson K, Jonas JB, Shushtari ZJ, Jozwiak JJ, Kabir A, Kahsay A, Kalani H, Kalhor R, Karami M, Karki S, Kasaeian A, Kassebaum NJ, Keiyoro PN, Kemp GR, Khabiri R, Khader YS, Khafaie MA, Khan EA, Khan J, Khan MS, Khang YH, Khatab K, Khater A, Khater MM, Khatony A, Khazaei M, Khazaei S, Khazaei-Pool M, Khubchandani J, Kianipour N, Kim YJ, Kimokoti RW, Kinyoki DK, Kisa A, Kisa S, Kolola T, Kosen S, Koul PA, Koyanagi A, Kraemer MUG, Krishan K, Krohn KJ, Kugbey N, Kumar GA, Kumar M, Kumar P, Kuupiel D, Lacey B, Lad SD, Lami FH, Larsson AO, Lee PH, Leili M, Levine AJ, Li S, Lim LL, Listl S, Longbottom J, Lopez JCF, Lorkowski S, Magdeldin S, Abd El Razek HM, Abd El Razek MM, Majeed A, Maleki A, Malekzadeh R, Malta DC, Mamun AA, Manafi N, Manda AL, Mansourian M, Martins-Melo FR, Masaka A, Massenburg BB, Maulik PK, Mayala BK, Mazidi M, McKee M, Mehrotra R, Mehta KM, Meles GG, Mendoza W, Menezes RG, Meretoja A, Meretoja TJ, Mestrovic T, Miller TR, Miller-Petrie MK, Mills EJ, Milne GJ, Mini GK, Mir SM, Mirjalali H, Mirrahimov EM, Mohamadi E, Mohammad DK, Darwesh AM, Mezerji NMG, Mohammed AS, Mohammed S, Mokdad AH, Molokhia M, Monasta L, Moodley Y, Moosazadeh M, Moradi G, Moradi M, Moradi Y, Moradi-Lakeh M, Moradinazar M, Moraga P, Morawska L, Mosapour A, Mousavi SM, Mueller UO, Muluneh AG, Mustafa G, Nabavizadeh B, Naderi M, Nagarajan AJ, Nahvijou A, Najafi F, Nangia V, Ndwandwe DE, Neamati N, Negoi I, Negoi RI, Ngunjiri JW, Thi Nguyen HL, Nguyen LH, Nguyen SH, Nielsen KR, Ningrum DNA, Nirayo YL, Nixon MR, Nnaji CA, Nojomi M, Noroozi M, Nosratnejad S, Noubiap JJ, Motlagh SN, Ofori-Asenso R, Ogbo FA, Oladimeji KE, Olagunju AT, Olfatifar M, Olum S, Olusanya BO, Oluwasanu MM, Onwujekwe OE, Oren E, Ortega-Altamirano DDV, Ortiz A, Osarenotor O, Osei FB, Osgood-Zimmerman AE, Otstavnov SS, Owolabi MO, P A M, Pagheh AS, Pakhale S, Panda-Jonas S, Pandey A, Park EK, Parsian H, Pashaei T, Patel SK, Pepito VCF, Pereira A, Perkins S, Pickering BV, Pilgrim T, Pirestani M, Piroozi B, Pirsaeheb M, Plana-Ripoll O, Pourjafar H, Puri P, Qorbani M, Quintana H, Rabiee M, Rabiee N, Radfar A, Rafiei A, Rahim F, Rahimi Z, Rahimi-Movaghgar V, Rahimzadeh S, Rajati F, Raju SB, Ramezankhani A, Ranabhat CL, Rasella D, Rashedi V, Rawal L, Reiner RC Jr, Renzaho AMN, Rezaei S, Rezapour A, Riahi SM, Ribeiro AI, Roever L, Roro EM, Roser M, Roshandel G, Roshani D, Rostami A, Rubagotti E, Rubino S, Sabour S, Sadat N, Sadeghi E, Saeedi R, Safari Y, Safari-Faramani R, Safdarian M, Sahebkar A, Salahshoor MR, Salam N, Salamati P, Salehi F, Zahabi SS, Salimi Y, Salimzadeh H, Salomon JA, Sambala EZ, Samy AM, Santric Milicevic MM, Jose BPS, Saraswathy SYI, Sarmiento-Suárez R, Sartorius B, Sathian B, Saxena S, Sbarra AN, Schaeffer LE, Schwebel DC, Sepanlou SG, Seyedmousavi S, Shaahmadi F, Shaikh MA, Shams-Beyranvand M, Shamshirian A, Shamsizadeh M, Sharafi K, Sharif M, Sharif-Alhoseini M, Sharifi H,

- Sharma J, Sharma R, Sheikh A, Shields C, Shigematsu M, Shiri R, Shiue I, Shuval K, Siddiqi TJ, Silva JP, Singha JA, Sinha DN, Sisay MH, Sliwa K, Smith DL, Somayaji R, Soofi M, Soriano JB, Sreeramareddy CT, Sudaryanto A, Sufiyan MB, Sykes BL, Sylaja PN, Tabarés-Seisdedos R, Tabb KM, Tabuchi T, Taveira N, Temsah MH, Terkawi AS, Tessema ZT, Thankappan KR, Thirunavukkarasu S, To QG, Tovani- Palone MR, Tran BX, Tran KB, Ullah I, Usman MS, Uthman OA, Vahedian-Azimi A, Valdez PR, van Boven JFM, Vasankari TJ, Vasseghian Y, Veisani Y, Venketasubramanian N, Violante FS, Vladimirov SK, Vlassov V, Vos T, Vu GT, Vujcic IS, Waheed Y, Wakefield J, Wang H, Wang Y, Wang YP, Ward JL, Weintraub RG, Weldegewergs KG, Weldesamuel GT, Westerman R, Wiysonge CS, Wondafrash DZ, Woyczynski L, Wu AM, Xu G, Yadegar A, Yamada T, Yazdi-Feyzabadi V, Yilgwan CS, Yip P, Yonemoto N, Lebni JY, Younis MZ, Yousefifard M, Yousof HSA, Yu C, Yusefzadeh H, Zabeh E, Moghadam TZ, Bin Zaman S, Zamani M, Zandian H, Zangeneh A, Zerfu TA, Zhang Y, Ziapour A, Zodpey S, Murray CJL, Hay SI: Mapping 123 million neonatal, infant and child deaths between 2000 and 2017. *Nature* 574(7778): 353–358, 2019.
- 19) Yumoto T, Naito H, Yorifuji T, Tahara Y, Yonemoto N, Nonogi H, Nagao K, Ikeda T, Sato N, Tsutsui H and on behalf of the Japanese Circulation Society Resuscitation Science Study (JCS-ReSS) Group: Geographical differences and the national meeting effect in patients with out-of-hospital cardiac arrests: A JCS-ReSS study report. *Int J Environ Res Public Health* 16(24): 5130, 2019.
- 20) Ueda K, Yonemoto N: Impacts of early intervention on family outcomes: A multicenter cross-sectional study in Japan. *Disabil Health J* 13(1): 100832, 2020.

(2) 総説

- 1) 米本直裕, 川島義高, 稲垣正俊, 河西千秋, 山田光彦: 未遂者介入のエビデンスとこれからの可能性. *自殺予防と危機介入* 39(2): 56-60, 2019.
- 2) 山田光彦: SUN©D 臨床試験を通して日々のうつ病臨床を再考する. *精神医学* 62 (1): 31-37, 2020.
- 3) 國石 洋: 幼少期ストレスによる前頭葉 PV ニューロン異常と認知機能障害. *ファルマシア* 55(8): 794, 2019.
- 4) 則本和伸, 池下克実, 米本直裕, 河西千秋, 下田重朗, 岸本年史: II軸診断を合併した自殺未遂者の再企图防止における介入効果の検証. *自殺予防と危機介入* 39(2): 52-55, 2019.
- 5) 米本直裕: 統計解析計画書 (statistical analysis plan: SAP) とは. *精神医学* 62 (1): 39-48, 2020.

(3) 著書

・該当なし

(4) 研究報告書

・該当なし

(5) 翻訳

・該当なし

(6) その他

- 1) Kawashima Y, Kawanishi C, Yamada M. The HOPE program standards: Assertive case management to prevent repeat suicide attempts among patients admitted to emergency

departments for suicidal behavior. The Japanese Association for Suicide Prevention ver 1.0 (NCNP-Web) February, 2020.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Yamada M, Kawashima Y, Yonemoto N, Inagaki M, Kawanishi C: Dissemination and implementation of evidence-based intervention in psychiatry. Lessons learned from a large scale, multicentre, randomised controlled trial, ACTION-J study. 6th Congress of AsCNP, Fukuoka, 2019.10.11-13.
- 2) Yamada M: Planning and conducting large pragmatic trials in psychiatry : for effective discovery, dissemination and implementation of evidence-based practices. 6th Congress of AsCNP, Fukuoka, 2019.10.11-13.
- 3) Takeuchi E, Yamada D, Suzuki S, Saitoh A, Itoh M, Hayashi T, Yamada M, Wada K, Sekiguchi M: The nucleus accumbens dopaminergic systems involve in anti-depressant-like actions of diet rich in ω -3 polyunsaturated fatty acid in mice. 6th Congress of AsCNP, Fukuoka, 2019.10.11-13.
- 4) Kuniishi H, Sekiguchi M, Yamada M: Optogenetic examination of effects of stress on the orbitofrontal-amygdala synaptic transmission. 第 93 回日本薬理学会年会 (誌上開催), 神奈川, 2020.3.16-18.
- 5) Miwa H: An animal model based on GABA hypothesis of schizophrenia and its endophenotypes. 6th Congress of AsCNP, Fukuoka, 2019.10.11-13.
- 6) 山田光彦: 臨床試験の質を保証するための工夫: SUN©D 試験の経験. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-22.
- 7) 加藤 正, 萬谷昭夫, 倉田健一, 明智龍男, 下寺信次, 渡辺範雄, 稲垣正俊, 山田光彦, 古川壽亮: 大うつ病に対する新規抗うつ剤の最適使用戦略を確立するための大規模無作為割り付け比較試験. 第 16 回日本うつ病学会総会, 徳島, 2019.7.5-6.
- 8) 川島義高, 米本直裕, 稲垣正俊, 山田光彦: 一般救急医療における自損患者の特徴. 第 43 回日本自殺予防学会総会, 愛知, 2019.9.6-8.
- 9) 山田光彦: “仮想” 新薬開発会議: シグマアゴニストの開発戦略を議論する. 第 49 回日本神経精神薬理学会 第 29 回日本臨床精神神経薬理学会, 福岡, 2019.10.11-13.
- 10) 三輪秀樹: 視床網様核における GAD67 遺伝子欠損のノンレム睡眠スピンドル波発生及び睡眠依存性記憶固定への影響. 日本睡眠学会第 44 回定期学術集会, 愛知, 2019.6.27-28.
- 11) 三輪秀樹: 視床網様核における GABA 伝達異常のノンレム睡眠スピンドル波発生への影響. 第 21 回応用薬理シンポジウム, 静岡, 2019.9.20-21.

(2) 一般演題

- 1) Kuniishi H, Yamada D, Wada K, Yamada M, Sekiguchi M: Stress-induced changes in the OFC-BLA synaptic response and its contribution to stress-related behavior. Neuro2019 第 42 回日本神経科学大会 第 62 回日本神経化学会大会, 新潟, 2019.7.25-28.
- 2) Nakatake Y, Yamada M, Furuie H, Yoshizawa K, Yamada M: A ROCK inhibitor, Fasudil, suppressed behavioral changes induced by physical stress, but not by emotional stress in mice social defeat stress model. 6th Congress of AsCNP, Fukuoka, 2019.10.11-13.
- 3) Kawashima S, Kuniishi H, Yoshizawa K, Sekiguchi M, Yamada M: Inactivation of orbitofrontal cortex prevents stress-induced behavioral change in mice. 6th Congress of AsCNP, Fukuoka, 2019.10.11-13.
- 4) Kuniishi H, Yamada D, Wada K, Yamada M, Sekiguchi M: Stress induced postsynaptic

plasticity in the orbitofrontal-amygdala pathy in mice. 6th Congress of AsCNP, Fukuoka, 2019.10.11-13.

- 5) Kuniishi H, Nakatake Y, Sekiguchi M, Yamada M: Adolescent social isolation rearing impaired social behavior and synaptic function in basolateral amygdala in mice. 第 93 回日本薬理学会年会 (誌上開催) 2020.3.16-18.
- 6) Hirai S, Arai M, Kunii Y, Miwa H, Okado H: Creating a novel schizophrenia model mouse caused by a combination of nutoritonal environment and genetic risk and characterization of the onset mechanism. WFSBP Congress 2019 14th World Congress of Biological Psychiatry, Canada, 2019.6.2-6.
- 7) 山田光彦, 川島義高, 米本直裕: 「救急患者精神科継続支援料」要件研修受講者の特徴と自殺予防関連尺度の関連についての検討. 第 16 回日本うつ病学会総会, 徳島, 2019.7.5-6.
- 8) 山田光彦, 川島義高, 中込和幸: 米国精神衛生研究所が提唱する RDoC の自殺関連研究における位置付け. 第 43 回日本自殺予防学会総会, 愛知, 2019.9.6-8.
- 9) 米本直裕, 川島義高, 遠藤 香, 山田光彦: ゲートキーパー研修のアウトカム評価に関する研究: 系統的レビュー. 第 43 回日本自殺予防学会総会, 愛知, 2019.9.6-8.
- 10) 國石 洋, 山田光彦, 関口正幸: 異なる 2 つの前頭前皮質-扁桃体経路におけるストレス応答性のシナプス伝達変化. 2019 年度生理研研究会「情動の生起と変容の多面的理解に向けて」, 愛知, 2019.9.11-12.
- 11) 國石 洋, 関口正幸, 山田光彦: 眼窩前頭皮質-扁桃体回路におけるストレス応答性のシナプス伝達変化. 医療心理懇話会第 4 回集会, 東京, 2019.10.2-3.
- 12) 古家宏樹, 請園正敏, 山田光彦: 新生仔期 MK-801 慢性投与による NMDA 受容体遮断はラットの摂餌行動における社会的促進を障害する. 第 49 回日本神経精神薬理学会 第 29 回日本臨床精神神経薬理学会, 福岡, 2019.10.11-13.
- 13) 石井香織, 中武優子, 山田美佐, 古家宏樹, 吉澤一巳, 山田光彦: 社会的敗北ストレス負荷マウスを用いたリルゾールの抗ストレス効果についての検討. 第 49 回日本神経精神薬理学会 第 29 回日本臨床精神神経薬理学会, 福岡, 2019.10.11-13.
- 14) 山田光彦, 古川壽亮, SUN☺D Investigators: 多施設共同による実践的臨床試験を成功させる工夫ー抗うつ薬の最適使用戦略を確立した SUN☺D 試験の経験ー. 第 40 回日本臨床薬理学会学術総会, 東京, 2019.12.4-6.

(3) 研究報告会

- 1) 古家宏樹: 統合失調症モデルマウス・ラットの行動解析. 精神・神経疾患研究開発費 (30-9) 第 13 回ゲノム編集班サイエンスミーティング, 東京, 2019.11.21.
- 2) 古家宏樹: 神経発達障害仮説に基づいた統合失調症モデルラットの行動解析. 第 6 回統合失調症勉強会, 東京, 2020.1.20.
- 3) 國石 洋: 情動制御神経回路における経験依存的なシナプス変化-光遺伝学による経路特異的なシナプス伝達の単離計測とストレス・生後発達に着目した検討. 精神・神経疾患研究開発費 (30-9) 第 14 回ゲノム編集班サイエンスミーティング, 東京, 2019.12.16.

(4) その他

- 1) 山田光彦: うつ病の初期治療戦略に答える SUN☺Dstudy の経験: 臨床試験の質を保証するための工夫. 精神保健研究所ランチョンセミナー, 東京, 2019.7.1.
- 2) 三輪秀樹: 「脳機能解析のためのウイルスベクターによる遺伝子導入」. 2019 年度 都医学研 夏のセミナー基礎技術コース, 東京, 2019.8.26-30.

C. 講演

- 1) 三輪秀樹：オプトジェネティクスによる精神病態解明．東京工業大学 生命理工オープンイノベーションハブ第6回 LiHub フォーラム光先進医療，東京，2019.5.23.

D. 学会活動

(1) 学会主催

・該当なし

(2) 学会役員

- 1) 山田光彦：日本薬理学会 評議員
- 2) 山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会 評議員
- 3) 山田光彦：日本うつ病学会 評議員
- 4) 山田光彦：日本神経精神薬理学会 評議員
- 5) 山田光彦：Mayo Neuroscience Forum 地区幹事
- 6) 山田光彦：躁うつ病の薬理生化学的研究懇話会 幹事
- 7) 山田光彦：Japanese Genetics Initiative for Drug Abuse: JGIDA group 幹事

(3) 座長

- 1) Yamada M: Novel strategy to treat hallucinations and delusions in schizophrenia: searching for new targets in neural circuits and brain networks. 6th Congress of AsCNP, Fukuoka, 2019.10.11-13.
- 2) 山田光彦：シンポジウム9 新規抗うつ剤の最適使用戦略を確立する日本最大の実践的メガトライアル SUN©D study. 第115回日本精神神経学会学術総会，新潟，2019.6.20-22.
- 3) 山田光彦：自殺予防. 第16回日本うつ病学会総会，徳島，2019.7.5-6.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 山田光彦：分子精神医学 編集同人

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 日本自殺予防学会が主催する「救急患者精神科継続支援料」にかかる要件研修「自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援研修会の企画運営」.

(2) 研修会講師

- 1) 山田光彦：令和元年度「救急患者精神科継続支援料」にかかる要件研修「自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援研修会」関東地区研修会，東京，2019.10.5-6.

F. その他

- 1) 三輪秀樹：「脳機能解析のためのウイルスベクターによる遺伝子導入」. 2019年度 都医学研 夏のセミナー基礎技術コース，東京，2019.8.26-30.
- 2) 「意識はどこにあるのか??? 脳の中を観察してみよう！」世界脳週間 2019 レクチャー&ラボツアー「脳の科学の最前線」. 東京，2019.7.13.

7. 精神疾患病態研究部

I. 研究部の概要

精神疾患病態研究部では、精神疾患の克服とその障害の支援のための先駆的研究活動を展開している。精神疾患の生物学的な研究と精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動をより発展させて全国レベルで展開することを目標としている。精神疾患の生物学的な研究は、認知社会機能、脳神経画像、神経生理機能などの中間表現型及びゲノムなどの生体試料を用いて、統合失調症、気分障害、発達障害などの幅広い精神疾患について疾患横断的に検討することにより、病態を解明し、新たな診断法・治療法の開発を行っている。この研究は、当研究部においてのみ行うものではなく、国立精神・神経医療研究センターの他の研究部門および日本全国 39 の精神疾患関連研究機関の共同研究体制である COCORO (Cognitive Genetics Collaborative Research Organization: 認知ゲノム共同研究機構) を運営しオールジャパン体制で遂行している。精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動は、EGUIDE プロジェクト (Effectiveness of GUIDeline for Dissemination and Education in psychiatric treatment: 精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究) という全国 44 大学を含む 182 医療機関の共同研究組織を牽引し、全国でガイドラインの講習を行い、その効果検証を行っている。

令和元年度の人員構成は次のとおりである。部長：橋本亮太，室長：三浦健一郎，松本純弥，流動研究員：長谷川尚美，科研費研究補助員：木村哲也，村上璃佳，山縣眞美子，高村晶子，研究助手：梅田佳子，併任研究員：久保田智香，三浦拓人，佐藤英樹，宮川 希，客員研究員 48 名，研究生 15 名。

II. 研究活動

A. 精神疾患の病態解明と診断法・治療法の開発研究

1) 精神疾患の脳神経画像研究 (松本，三浦，橋本)

統合失調症を中心に三次元脳構造画像解析，拡散テンソル画像解析，安静時機能的 MRI 解析などを行い，今年度は 7 編の論文成果があった。COCORO の多施設共同研究にて統合失調症，双極性障害，うつ病，自閉スペクトラム症，健常者合わせて 2937 例の拡散テンソル画像のメガアナリシスを行い，統合失調症と双極性障害の共通の脳白質の微小構造異常を見出し，プレスリリースを行った (橋本，Koshiyama et al, Mol Psychiatry, 2020)。精神疾患の脳画像研究では，MRI 機種間の差が大きく疾患による差の検出が難しいことが問題とされている為，三次元 T1 強調脳構造画像を用いて，MRI 機種間の差を超えた統合失調症の脳画像の特徴を抽出し，73%の精度を得た (橋本，Nemoto et al, Psychiatry Clin Neurosci, 2020)。国際的な脳神経画像の巨大コンソーシアムである ENIGMA との共同研究では 3 編の論文成果があった。

2) 精神疾患の眼球運動研究 (三浦，松本，橋本)

統合失調症を中心にフリービューイング課題，滑動性追跡眼球運動課題，注視課題などから得られた眼球運動の特徴，および眼球運動異常を示す眼球運動スコアの解析などを行い，今年度は 6 編の論文成果があった。統合失調症の眼球運動スコアとフリービューイング時の視線の総移動距離が左下前頭回弁蓋部の皮質厚と相関すること (三浦，橋本，Morita et al, Schizophr Res, 2019)，視線の総移動距離がウェクスラー成人知能検査のスコアと関連すること (三浦，橋本，Morita et al, Schizophr Res, 2019) を示した。さらに，統合失調症と自閉スペクトラム症の眼球運動異常の違いを示した (三浦，橋本，Shiino et al, Neuropsychopharmacol Rep, 2019)。その他，眼球運動の基礎研究の国内共同研究と総説を含む 3 編の論文成果があった。

3) 認知社会機能プロジェクト（橋本，松本）

広く診療で使えるような統合失調症の認知機能障害の簡便な測定法を開発し、2000 例程度のデータを COCORO にて集積して解析し、普及のため各地で講習会などを行っている。認知機能障害は、簡略版 WAIS で測定する推定知能と Japanese Adult Reading Test (JART) で測定する推定病前知能の差にて算出したものである。この統合失調症の認知機能障害のメカニズムを安静時機能的 MRI にて解析し、側坐核・前頭葉の神経回路が関与することを見出した（橋本，Yasuda et al, Psychiatry Clin Neurosci, 2020）。

4) 精神疾患の分子メカニズム研究（橋本，松本）

大阪大学との共同研究にて、自閉スペクトラム症にて多くの突然変異が同定されているものの、その機能がほとんどわかっていない POGZ タンパク質が脳の正常な発達に必要であり、その疾患突然変異による POGZ の機能低下によって、マウス脳の発達期における神経細胞の発達、および自閉スペクトラム症と関連する社会性行動に障害を与えることを新たに見出し、プレスリリースを行った（橋本，Matsumura et al, Nature Comm, 2020）。また、福島県立医科大学との共同研究では精神疾患死後脳解析で 3 編の論文成果があった。

5) 司法精神医学領域の生物学的研究（柏木，竹田，三浦，松本，橋本）

暴力の既往のある統合失調症群，暴力の既往のない統合失調症群，健常者データ 1600 例以上を COCORO データベースから抽出し，認知機能，精神病理，社会機能，QOL 等について解析した。犯罪被害者となったてんかん患者の判決文データベース調査を行った。

B. 精神科医療の普及・均てん化に関する研究

1) 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動：EGUIDE プロジェクト（長谷川，久保田，三浦健一郎，松本，三浦拓人，佐藤，柏木，橋本）

EGUIDE プロジェクトは、精神科医に対してガイドラインの教育の講習を行い、ガイドラインの効果を検証する社会実証研究である。対象とするガイドラインは、統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインであり、日本神経精神薬理学会，日本うつ病学会，日本臨床精神神経薬理学会のバックアップを受けて行っている。2016 年に開始した EGUIDE プロジェクトは、本年度 44 大学 182 医療機関が参加する巨大なプロジェクトになり、毎年 20 回以上の講習会を全国で行い、延べ 2000 名以上の精神科医が講習を受講した。EGUIDE プロジェクトにおける検証活動は、講習受講直後のガイドラインの理解度の向上、その後のガイドラインを遵守した治療行動調査における実践度の向上、処方行動を診療の質（Quality Indicator: QI）という形で測定し、例えば統合失調症患者の退院時の抗精神病薬単剤治療率というような QI を設定し、経時的に測定することにより、講習の効果の有無についての検討を行い、多数の学会発表を行った。本年度は、たった一日の講習を受けることにより統合失調症とうつ病の両方のガイドラインに対する理解度が顕著に向上することを示し、プレスリリースを行った（橋本，Takaesu, et al, Psychiatry Clin Neurosci, 2019）。日本の精神医学領域ではこのような社会実証研究はまだ認知されていなかったが、この研究により広く認知されるようになった。

2) 精神科治療ガイドラインの作成・改訂（橋本）

統合失調症薬物治療ガイドラインを当事者・家族・支援者と共同で改訂をしている。精神科領域では初めての試みであり、他の診療領域においても先進的な取り組みである。うつ病治療ガイドラインの改訂にもかかわっている。日本医療機能評価機能の EBM 推進事業である Minds における Minds 診療ガイドラインの有効性評価に関する検討会の委員を務め、ガイドライン作成者向け情報として EGUIDE プロジェクトの内容を「ガイドラインの活用と有効性評価」として作成し、「診療ガイドラインの普及と医療の質向上の評価」について提言を行った。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- 第6回 NCNP メディア塾において、「精神疾患病態研究における DSM と RDoC の功罪」についての講演を行った。また、コメディカルなどを対象とした研修会の講師を務め、専門知識の啓発活動を行った（橋本）。

(2) 専門教育面における貢献

- 統合失調症やうつ病などのガイドラインの作成を行い、精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動である EGUIDE プロジェクトも全国展開している。EGUIDE プロジェクトにおいては、統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインの講習を全国の精神科医を対象に行い、その医療機関における治療に影響を与えるかどうかについての検討を行い、精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果を検証している。令和元年度は、全国で26回の講習を行い200名以上が参加した（橋本）。
- 開発した統合失調症の認知機能障害の簡便な測定法についての講習会を統合失調症学会において行い、評価シートを配布し普及活動を行った（橋本）。
- 国立大学法人 大阪大学の医学系研究科、連合小児発達学研究科および情報科学研究科においては招へい教授として、奈良県立医科大学においては非常勤講師として、精神医学研究の指導や知見の教授を行っている（橋本）。

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- 日本精神神経学会、日本生物学的精神医学会、日本神経精神薬理学会、日本うつ病学会など13の精神医学関連諸学会がまとめた「精神疾患の克服と障害支援にむけた研究推進」の政策提言の作成を昨年度行ったが、今年度は当事者・家族・支援者向けの簡略版の作成に従事した。この提言では、本邦の精神疾患研究の現状と総力を挙げてとりくむべき課題やロードマップを示したうえで、精神疾患の研究を行い、病態の解明、診断法・治療法の開発、介入法を開発することは国民の保健・医療・福祉の向上に資するのみならず、大きな社会の負担を軽減し産業振興に寄与すると提言している（橋本）。
- 公益財団法人 日本医療機能評価機構 EBM 医療情報部 診療ガイドライン活用促進課 より依頼を受け、診療ガイドラインの有効性評価に関する検討会委員を務めた。ガイドラインを作成する立場から、診療ガイドライン活用の取り組みを資料にまとめ、ガイドラインの活用と有効性評価について、実際に診療ガイドラインの活用（普及、導入、評価）、QI やデータベースについて発表を行うなど、診療ガイドラインの有効性評価に関して指導・助言・考察を行った（橋本）。

(5) センター内における臨床的活動

週に一日外来を行っており、中でも統合失調症外来を担当している。

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- Sonderby IE, Gustafsson O, Doan NT, Hibar DP, Martin-Brevet S, Abdellaoui A, Ames D, Amunts K, Andersson M, Armstrong NJ, Bernard M, Blackburn N, Blangero J, Boomsma

- DI, Bralten J, Brattbak HR, Brodaty H, Brouwer RM, Bülow R, Calhoun V, Caspers S, Cavalleri G, Chen CH, Cichon S, Ciufolini S, Corvin A, Crespo-Facorro B, Curran JE, Dale AM, Dalvie S, Dazzan P, de Geus EJC, de Zubicaray GI, de Zwarte SMC, Delanty N, den Braber A, Desrivieres S, Donohoe G, Draganski B, Ehrlich S, Espeseth T, Fisher SE, Franke B, Frouin V, Fukunaga M, Gareau T, Glahn DC, Grabe H, Groenewold NA, Haavik J, Haberg A, Hashimoto R (151 名中 52 番目), Hehir-Kwa JY, Heinz A, Hillegers MHJ, Hoffmann P, Holleran L, Hottenga JJ, Hulshoff HE, Ikeda M, Jahanshad N, Jernigan T, Jockwitz C, Johansson S, Jonsdottir GA, Jönsson EG, Kahn R, Kaufmann T, Kelly S, Kikuchi M, Knowles EEM, Kolskår KK, Kwok JB, Hellard SL, Leu C, Liu J, Lundervold AJ, Lundervold A, Martin NG, Mather K, Mathias SR, McCormack M, McMahon KL, McRae A, Milaneschi Y, Moreau C, Morris D, Mothersill D, Muhleisen TW, Murray R, Nordvik JE, Nyberg L, Olde Loohuis LM, Ophoff R, Paus T, Pausova Z, Penninx B, Peralta JM, Pike B, Prieto C, Pudas S, Quinlan E, Quintana DS, Reinbold CS, Marques TR, Reymond A, Richard G, Rodriguez-Herreros B, Roiz-Santianez R, Rokicki J, Rucker J, Sachdev P, Sanders AM, Sando SB, Schmaal L, Schofield PR, Schork AJ, Schumann G, Shin J, Shumskaya E, Sisodiya S, Steen VM, Stein DJ, Steinberg S, Strike L, Teumer A, Thalamuthu A, Tordesillas-Gutierrez D, Turner J, Ueland T, Uhlmann A, Ulfarsson MO, van 't Ent D, van der Meer D, van Haren NEM, Vaskinn A, Vassos E, Walters GB, Wang Y, Wen W, Whelan CD, Wittfeld K, Wright M, Yamamori H, Zayats T, Agartz I, Westlye LT, Jacquemont S, Djurovic S, Stefansson H, Stefansson K, Thompson P, Andreassen OA; European Consortium, for the ENIGMA-CNV working group: Dose response of the 16p11.2 distal copy number variant on intracranial volume and basal ganglia. *Mol Psychiatry* 25(3):584-602, 2020.
- 2) Grasby KL, Jahanshad N, Painter JN, Colodro-Conde L, Bralten J, Hibar DP, Lind PA, Pizzagalli F, Ching CRK, McMahon MAB, Shatikhina N, Zsembik LCP, Thomopoulos SI, Zhu AH, Strike LT, Agartz I, Alhusaini S, Almeida MAA, Alnæs D, Amlie IK, Andersson M, Ard T, Armstrong NJ, Ashley-Koch A, Atkins JR, Bernard M, Brouwer RM, Buimer EEL, Bulow R, Bürger C, Cannon DM, Chakravarty M, Chen Q, Cheung JW, Couvy-Duchesne B, Dale AM, Dalvie S, de Araujo TK, de Zubicaray GI, de Zwarte SMC, den Braber A, Doan NT, Dohm K, Ehrlich S, Engelbrecht HR, Erk S, Fan CC, Fedko IO, Foley SF, Ford JM, Fukunaga M, Garrett ME, Ge T, Giddaluru S, Goldman AL, Green MJ, Groenewold NA, Grotegerd D, Gurholt TP, Gutman BA, Hansell NK, Harris MA, Harrison MB, Haswell CC, Hauser M, Herms S, Heslenfeld DJ, Ho NF, Hoehn D, Hoffmann P, Holleran L, Hoogman M, Hottenga JJ, Ikeda M, Janowitz D, Jansen IE, Jia T, Jockwitz C, Kanai R, Karama S, Kasperaviciute D, Kaufmann T, Kelly S, Kikuchi M, Klein M, Knapp M, Knodt AR, Kramer B, Lam M, Lancaster TM, Lee PH, Lett TA, Lewis LB, Lopes-Cendes I, Luciano M, Macciardi F, Marquand AF, Mathias SR, Melzer TR, Milaneschi Y, Mirza-Schreiber N, Moreira JCV, Mühleisen TW, Muller-Myhsok B, Najt P, Nakahara S, Nho K, Olde Loohuis LM, Orfanos DP, Pearson JF, Pitcher TL, Putz B, Quide Y, Ragothaman A, Rashid FM, Reay WR, Redlich R, Reinbold CS, Reppe J, Richard G, Riedel BC, Risacher SL, Rocha CS, Mota NR, Salminen L, Saremi A, Saykin AJ, Schlag F, Schmaal L, Schofield PR, Secolin R, Shapland CY, Shen L, Shin J, Shumskaya E, Sønderby IE, Sprooten E, Tansey KE, Teumer A, Thalamuthu A, Tordesillas-Gutierrez D, Turner JA, Uhlmann A, Vallergera CL, van der Meer D, van Donkelaar MMJ, van Eijk L, van Erp TGM, van Haren NEM, van Rooij D, van Tol MJ, Veldink JH, Verhoef E, Walton E, Wang M, Wang Y, Wardlaw JM, Wen W, Westlye LT, Whelan CD, Witt SH, Wittfeld K, Wolf C, Wolfers T, Wu JQ, Yasuda CL, Zaremba D,

Zhang Z, Zwiers MP, Artiges E, Assareh AA, Ayesa-Arriola R, Belger A, Brandt CL, Brown GG, Cichon S, Curran JE, Davies GE, Degenhardt F, Dennis MF, Dietsche B, Djurovic S, Doherty CP, Espiritu R, Garijo D, Gil Y, Gowland PA, Green RC, Hqusler AN, Heindel W, Ho BC, Hoffmann WU, Holsboer F, Homuth G, Hosten N, Jack CR Jr, Jang M, Jansen A, Kimbrel NA, Kolskar K, Koops S, Krug A, Lim KO, Luykx JJ, Mathalon DH, Mather KA, Mattay VS, Matthews S, Mayoral Van Son J, McEwen SC, Melle I, Morris DW, Mueller BA, Nauck M, Nordvik JE, Nothen MM, O'Leary DS, Opel N, Martinot MP, Pike GB, Preda A, Quinlan EB, Rasser PE, Ratnakar V, Reppermund S, Steen VM, Tooney PA, Torres FR, Veltman DJ, Voyvodich JT, Whelan R, White T, Yamamori H, Adams HHH, Bis JC, Debetto S, Decarli C, Fornage M, Gudnason V, Hofer E, Ikram MA, Launer L, Longstreth WT, Lopez OL, Mazoyer B, Mosley TH, Roshchupkin GV, Satizabal CL, Schmidt R, Seshadri S, Yang Q; Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative; CHARGE Consortium; EPIGEN Consortium; IMAGEN Consortium; SYS Consortium; Parkinson's Progression Markers Initiative, Alvim MKM, Ames D, Anderson TJ, Andreassen OA, Arias-Vasquez A, Bastin ME, Baune BT, Beckham JC, Blangero J, Boomsma DI, Brodaty H, Brunner HG, Buckner RL, Buitelaar JK, Bustillo JR, Cahn W, Cairns MJ, Calhoun V, Carr VJ, Caseras X, Caspers S, Cavalleri GL, Cendes F, Corvin A, Crespo-Facorro B, Dalrymple-Alford JC, Dannlowski U, de Geus EJC, Deary IJ, Delanty N, Depondt C, Desrivieres S, Donohoe G, Espeseth T, Fernandez G, Fisher SE, Flor H, Forstner AJ, Francks C, Franke B, Glahn DC, Gollub RL, Grabe HJ, Gruber O, Haberg AK, Hariri AR, Hartman CA, Hashimoto R (360 名中 299 番目), Heinz A, Henskens FA, Hillegers MHJ, Hoekstra PJ, Holmes AJ, Hong LE, Hopkins WD, Hulshoff Pol HE, Jernigan TL, Jonsson EG, Kahn RS, Kennedy MA, Kircher TTJ, Kochunov P, Kwok JBJ, Le Hellard S, Loughland CM, Martin NG, Martinot JL, McDonald C, McMahon KL, Meyer-Lindenberg A, Michie PT, Morey RA, Mowry B, Nyberg L, Oosterlaan J, Ophoff RA, Pantelis C, Paus T, Pausova Z, Penninx BWJH, Polderman TJC, Posthuma D, Rietschel M, Roffman JL, Rowland LM, Sachdev PS, Samann PG, Schall U, Schumann G, Scott RJ, Sim K, Sisodiya SM, Smoller JW, Sommer IE, St Pourcain B, Stein DJ, Toga AW, Trollor JN, Van der Wee NJA, van 't Ent D, Völzke H, Walter H, Weber B, Weinberger DR, Wright MJ, Zhou J, Stein JL, Thompson PM, Medland SE; Enhancing NeuroImaging Genetics through Meta-Analysis Consortium (ENIGMA) Genetics working group: The genetic architecture of the human cerebral cortex. *Science* 367(6484):1340(eaay6690), 2020.

- 3) Shiino T, Miura K, Fujimoto M, Kudo N, Yamamori H, Yasuda Y, Ikeda M, Hashimoto R: Comparison of eye movements in schizophrenia and autism spectrum disorder. *Neuropsychopharmacol Rep* 40(1):92-95, 2020.
- 4) Yasuda Y, Okada N, Nemoto K, Fukunaga M, Yamamori H, Ohi K, Koshiyama D, Kudo N, Shiino T, Morita S, Morita K, Azechi H, Fujimoto M, Miura K, Watanabe Y, Kasai K, Hashimoto R: Brain morphological and functional features in cognitive subgroups of Schizophrenia. *Psychiatry Clin Neurosci* 74(3):191-203, 2020.
- 5) Matsumura K, Seiriki K, Okada S, Nagase M, Ayabe S, Yamada I, Furuse T, Shibuya H, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Nagayasu K, Yamamoto K, Kitagawa K, Miura H, Gotoda-Nishimura N, Igarashi H, Hayashida M, Baba M, Kondo M, Hasebe S, Ueshima K, Kasai A, Ago Y, Hayata-Takano A, Shintani N, Iguchi T, Sato M, Yamaguchi S, Tamura M, Wakana S, Yoshiki A, Watabe AM, Okano H, Takuma K, Hashimoto R, Hashimoto H, Nakazawa T: Pathogenic POGZ mutation causes impaired cortical development and reversible autism-like phenotypes. *Nat Commun* 11(1):859, 2020.

- 6) Nemoto K, Shimokawa T, Fukunaga M, Yamashita F, Tamura M, Yamamori H, Yasuda Y, Azechi H, Kudo N, Watanabe Y, Kido M, Takahashi T, Koike S, Okada N, Hirano Y, Onitsuka T, Yamasue H, Suzuki M, Kasai K, Hashimoto R, Arai T: Differentiation of schizophrenia using structural MRI with consideration of scanner differences: A real-world multi-site study. *Psychiatry Clin Neurosci* 74(1):56-63, 2020.
- 7) Baba M, Yokoyama K, Seiriki K, Naka Y, Matsumura K, Kondo M, Yamamoto K, Hayashida M, Kasai A, Ago Y, Nagayasu K, Hayata-Takano A, Takahashi A, Yamaguchi S, Mori D, Ozaki N, Yamamoto T, Takuma K, Hashimoto R, Hashimoto H, Nakazawa T: Psychiatric-disorder-related behavioral phenotypes and cortical hyperactivity in a mouse model of 3q29 deletion syndrome. *Neuropsychopharmacology* 44(12):2125-2135, 2019.
- 8) Matsumura K, Baba M, Nagayasu K, Yamamoto K, Kondo M, Kitagawa K, Takemoto T, Seiriki K, Kasai A, Ago Y, Hayata-Takano A, Shintani N, Kuriu T, Iguchi T, Sato M, Takuma K, Hashimoto R, Hashimoto H: Autism-associated protein kinase D2 regulates embryonic cortical neuron development. *Biochem Biophys Res Commun* 519(3):626-632, 2019.
- 9) Takaesu Y, Watanabe K, Numata S, Iwata M, Kudo N, Oishi S, Takizawa T, Nemoto K, Yasuda Y, Tagata H, Tsuboi T, Tsujino N, Hashimoto N, Matsui Y, Hori H, Yamamori H, Sugiyama N, Suwa T, Kishimoto T, Hashimoto A, Usami M, Furihata R, Iwamoto K, Fujishiro H, Nakamura T, Mizuno K, Inagaki T, Katsumoto E, Tomita H, Ohi K, Muraoka H, Atake K, Iida H, Nagasawa T, Fujita J, Yamamura S, Onitsuka T, Murata A, Takayanagi Y, Noda H, Matsumura Y, Takezawa K, Iga J, Ichihashi K, Ogasawara K, Yamada H, Inada K, Hashimoto R: Improvement of psychiatrists' clinical knowledge of the treatment guidelines for schizophrenia and major depressive disorders using the "Effectiveness of Guidelines for Dissemination and Education in psychiatric treatment (EGUIDE)" project: a nationwide dissemination, education and evaluation study. *Psychiatry Clin Neurosci* 73(10):642-648, 2019.
- 10) Oya K, Sakuma K, Esumi S, Hashimoto Y, Hatano M, Matsuda Y, Matsui Y, Miyake N, Nomura I, Okuya M, Iwata N, Kato M, Hashimoto R, Mishima K, Watanabe N, Kishi T: Efficacy and safety of lithium and lamotrigine for the maintenance treatment of clinically stable patients with bipolar disorder: A systematic review and meta-analysis of double-blind, randomized, placebo-controlled trials with an enrichment design. *Neuropsychopharmacol Rep* 39(3):241-246, 2019.
- 11) Ohi K, Sumiyoshi C, Fujino H, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Sumiyoshi T, Hashimoto R: A 1.5-year longitudinal study of social activity in patients with schizophrenia. *Front Psychiatry* section Schizophrenia 10:567, 2019.
- 12) Morita K, Miura K, Fujimoto M, Yamamori H, Yasuda Y, Kudo N, Azechi H, Okada N, Koshiyama D, Shiino T, Fukunaga M, Watanabe Y, Ikeda M, Kasai K, Hashimoto R: Eye movement characteristics of schizophrenia and their association with cortical thickness. *Psychiatry Clin Neurosci* 73(8): 508-509, 2019.
- 13) Morita K, Miura K, Fujimoto M, Yamamori H, Yasuda Y, Kudo N, Azechi H, Okada N, Koshiyama D, Ikeda M, Kasai K, Hashimoto R: Eye movement abnormalities and their association with cognitive impairments in schizophrenia. *Schizophr Res* 209:255-262, 2019.
- 14) Ikeda M, Takahashi A, Kamatani Y, Momozawa Y, Saito T, Kondo K, Shimasaki A, Kawase K, Sakusabe T, Iwayama Y, Toyota T, Wakuda T, Kikuchi M, Kanahara N, Yamamori H, Yasuda Y, Watanabe Y, Hoya S, Aleksic B, Kushima I, Arai H, Takaki M, Hattori K, Kunugi H, Okahisa Y, Ohnuma T, Ozaki N, Someya T, Hashimoto R, Yoshikawa T, Kubo M, Iwata N: Genome-Wide Association Study Detected Novel Susceptibility Genes for Schizophrenia

- and Shared Trans-Populations/Diseases Genetic Effect. *Schizophr Bull* 45(4):824-834, 2019.
- 15) van Erp TGM, Walton E, Hibar DP, Schmaal L, Jiang W, Glahn DC, Pearlson GD, Yao N, Fukunaga M, Hashimoto R (109 名中 10 番目), Okada N, Yamamori H, Clark VP, Mueller BA, de Zwarte SMC, Ophoff RA, van Haren NEM, Andreassen OA, Gurholt TP, Gruber O, Kraemer B, Richter A, Calhoun VD, Crespo-Facorro B, Roiz-Santianez R, Tordesillas-Gutierrez D, Loughland C, Catts S, Fullerton JM, Green MJ, Henskens F, Jablensky A, Mowry BJ, Pantelis C, Quide Y, Schall U, Scott RJ, Cairns MJ, Seal M, Tooney PA, Rasser PE, Cooper G, Shannon Weickert C, Weickert TW, Hong E, Kochunov P, Gur RE, Gur RC, Ford JM, Macciardi F, Mathalon DH, Potkin SG, Preda A, Fan F, Ehrlich S, King MD, De Haan L, Veltman DJ, Assogna F, Banaj N, de Rossi P, Iorio M, Piras F, Spalletta G, Pomarol-Clotet E, Kelly S, Ciufolini S, Radua J, Murray R, Marques TR, Simmons A, Borgwardt S, Schonborn-Harrisberger F, Riecher-Rossler A, Smieskova R, Alpert KI, Bertolino A, Bonvino A, Di Giorgio A, Neilson E, Mayer AR, Yun JY, Cannon DM, Lebedeva I, Tomyshev AS, Akhadow T, Kaleda V, Fatouros-Bergman H, Flyckt L; Karolinska Schizophrenia Project, Rosa PGP, Serpa MH, Zanetti MV, Hoschl C, Skoch A, Spaniel F, Tomecek D, McIntosh AM, Whalley HC, Knöchel C, Oertel-Knöchel V, Howells FM, Stein DJ, Temmingh HS, Uhlmann A, Lopez-Jaramillo C, Dima D, Faskowitz JI, Gutman BA, Jahanshad N, Thompson PM, Turner JA: Reply to: New Meta- and Mega-analyses of Magnetic Resonance Imaging Findings in Schizophrenia: Do They Really Increase Our Knowledge About the Nature of the Disease Process? *Biol Psychiatry* 85(7):e35-e39, 2019.
 - 16) Ono S, Miura K, Kawamura T, Kizuka T: Asymmetric smooth pursuit eye movements and visual motion reaction time. *Physiol Rep* 7(14):e14187, 2019.
 - 17) Kunii Y, Hino M, Matsumoto J, Nagaoka A, Nawa H, Kakita A, Akatsu H, Hashizume Y, Yabe H: Differential protein expression of DARPP-32 versus Calcineurin in the prefrontal cortex and nucleus accumbens in schizophrenia and bipolar disorder. *Sci Rep* 16;9(1):14877, 2019.
 - 18) Ohnishi T, Balan S, Toyoshima M, Maekawa M, Ohba H, Watanabe A, Iwayama Y, Fujita Y, Tan Y, Hisano Y, Shimamoto-Mitsuyama C, Nozaki Y, Esaki K, Nagaoka A, Matsumoto J, Hino M, Mataga N, Hayashi-Takagi A, Hashimoto K, Kunii Y, Kakita A, Yabe H, Yoshikawa T: Investigation of betaine as a novel psychotherapeutic for schizophrenia. *EBioMedicine* 45:432-446, 2019.
 - 19) Ono CT, Yu Z, Kikuchi Y, Kunii Y, Hino M, Matsumoto J, Nagaoka A, Ito J, Iwasaki Y, Hagihara H, Miyakawa T, Yoshida M, Saito Y, Niwa SI, Yabe H, Kakita A, Tomita H: Minimal amount of tissue-based pH measurement to improve quality control in neuropsychiatric post-mortem brain studies. *Psychiatry Clin Neurosci* 73(9):566-573, 2019.

(2) 総説

- 1) Morita K, Miura K, Kasai K, Hashimoto R: Eye movement characteristics in schizophrenia: A recent update with clinical implications. *Neuropsychopharmacol Rep* 40(1):2-9, 2020.
- 2) Nakazawa T, Hashimoto R, Takuma K, Hashimoto H: Current Perspective: Modeling of psychiatric disorders using induced pluripotent stem cell-related technologies. *J Pharmacol Sci* 140(4):321-324, 2019.
- 3) 橋本亮太: 巻頭言 ; 精神疾患の客観的科学的診断法の開発の方法について再考する. 日本生物学的精神医学会誌 31(1):1, 2020.
- 4) 橋本亮太: 精神科診断が乗り越えるべきもの: 未来への展望. 精神科診断学 13(1):27-34, 2020.
- 5) 橋本亮太, 稲田 健: 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動: EGUIDE プロジェクト

- ト. 医学のあゆみ 272(2):188-193, 2020.
- 6) 橋本亮太: 精神科医療における標準治療の課題と展望. 日本精神科病院協会雑誌 37(別冊): 150-151, 2019.
 - 7) 三浦健一郎, 橋本亮太: 統合失調症の診療における AI の活用. 臨床精神医学 48(9):1043-1047. 2019.
 - 8) 橋本亮太, 中込和幸: 指導医に求められる薬物療法の教育方法. 臨床精神薬理 22(5):515-519, 2019.
 - 9) 稲田 健, 村岡寛之, 橋本亮太: 統合失調症薬物治療の新たな原則と注意点. 臨床精神薬理 22(4): 341-346, 2019.
- (3) 著書
- 1) Miura K, Takemura A, Taki M, Kawano K : Chapter 24 Model of optokinetic responses involving two different visual motion processing pathways. In Progress in Brain Research, Vol. 248, Mathematical Modelling in Motor Neuroscience: State of the Art and Translation to the Clinic. Ocular Motor Plant and Gaze Stabilization Mechanisms, Edited by Ramat S and Shaikh AG, Academic Press, pp329-340, 2019.
- (4) 研究報告書
- 1) 橋本亮太: 大規模患者リソース及び iPS 技術を用いた統合失調症の病態予測のバイオマーカー開発. 2019 年度科学研究費助成事業基盤研究 (B) 特設分野研究 研究実施状況報告書. 2020.
 - 2) 橋本亮太: 発達障害のリスク遺伝子の同定. 2019 年度科学研究費助成事業特別推進研究 「発達障害に関わる神経生物学的機構の霊長類的基盤の解明 (代表: 高田昌彦)」 2019 年度研究実績報告書. 2020.
 - 3) 橋本亮太: EGUIDE での調査研究. 平成 31 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 「向精神薬の適切な継続・減量・中止等の精神科薬物療法の出口戦略の実践に資する研究 (代表: 三島和夫)」 分担研究報告書. 2020.
 - 4) 橋本亮太: 精神医療分野における治療の質を評価する QI とその向上をもたらす介入技法の開発と実用性の検証. 2019 年度日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野) 2019 年度 委託研究開発成果報告書. 2020.
 - 5) 橋本亮太: 気分障害と統合失調症の疾患連続性に関する脳画像等の総合的解析研究. H31 年度日本医療研究開発機構 戦略的国際脳科学研究推進プログラム 「縦断的 MRI データに基づく成人期気分障害と関連疾患の神経回路の解明 (研究開発代表者: 岡本泰昌)」 2019 年度 委託研究開発成果報告書. 2020.
 - 6) 橋本亮太: レジストリの構築 (評価項目の品質管理). H31 年度日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野) 「精神疾患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究 (研究開発代表者: 中込和幸)」 2019 年度 委託研究開発成果報告書. 2020.
 - 7) 橋本亮太: うつ症状に関する精神疾患横断的な血漿を用いたバイオマーカー開発. H31 年度日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野) 「血液メタボローム解析による精神疾患の層別化可能な客観的評価法の確立と治療最適化への応用 (研究開発代表者: 加藤隆弘)」 2019 年度 委託研究開発成果報告書. 2020.
 - 8) 三浦健一郎: 眼球運動の状況予測性解析法の研究開発と疾患横断的理解. H31 年度日本医療研究開発機構 革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト 「双方向トランスレーショナルアプローチによる精神疾患の脳予測性障害機序に関する研究開発 (研究開発代表者: 小池進介)」 2019 年度 委託研究開発成果報告書. 2020.
 - 9) 松本純弥: 心因性疼痛の治療と認知機能障害の関連. 2019 年度科学研究費助成事業 若手研究

研究実施状況報告書. 2020.

- 10) 安田由華：実践マニュアルの資材作成と利活用に関する研究. 平成 31 年度厚生科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「向精神薬の適切な継続・減量・中止等の精神科薬物療法の出口戦略の実践に資する研究（代表：三島和夫）」分担研究報告書. 2020.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 橋本亮太, 稲田 健：インタビュー ～「統合失調症薬物治療ガイドライン（EGUIDE プロジェクト）」の取り組みから～講習会による診療ガイドライン普及のこころみ. 聞き手・編集・構成：日本医療機能評価機構 EBM 普及推進事業 Minds 事務局.
https://minds.jcqhc.or.jp/s/dissemination_and_evaluation_3. 2020.

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Hashimoto R: The ENIGMA and COCORO:Replication and Harmonization. Symposium" International neuroimaging big data collaborations: ENIGMA and COCORO". 6th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology (AsCNP), Fukuoka, 2019.10.11.
- 2) Miura K: Two frame apparent motion presented with inter-stimulus interval reverses ocular and neuronal responses in macaque monkeys. The Kyoto Symposium on the Eye and Head Movement Control Systems Pre-NCM(2019), Kyoto, 2019.4.21.
- 3) 橋本亮太：統合失調症の認知社会機能障害の簡便な測定法. ワークショップ：第 14 回日本統合失調症学会, 北海道, 2019.4.19.
- 4) 稲田 健, 橋本亮太, 堀合研二郎, 加藤 玲, 市橋香代, 藤井哲也, よしみ佐藤, 池田キュア, 橋本直樹：当事者・家族・支援者と活用する統合失調症薬物治療ガイドの普及にむけて. シンポジウム「統合失調症薬物治療ガイド-患者さん・ご家族・支援者のために-」, 第 14 回日本統合失調症学会, 北海道, 2019.4.20.
- 5) 橋本亮太：アクセプトされる精神医学研究論文の書き方～査読コメントへの対応の仕方～. ワークショップ：アクセプトされる精神医学研究論文の書き方, 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 6) 橋本亮太：体の痛みを考える～精神科の立場から～. 特別企画：スポーツとこころの関係～疾病から治療まで～, 第 45 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会, 大阪, 2019.8.30.
- 7) 橋本亮太：精神科診断が乗り越えるべきもの：未来への展望. 教育講演：第 39 回日本精神科診断学会, 京都, 2019.9.21.
- 8) 池田匡志, 高橋 篤, 鎌谷洋一郎, 桃沢幸秀, 齋藤竹生, 近藤健治, 島崎愛夕, 川瀬康平, 作佐部太也, 岩山佳美, 豊田倫子, 和久田智靖, 菊地 充, 金原信久, 山森英長, 安田由華, 渡部雄一郎, 保谷智史, アレクシッチブランコ, 久島 周, 新井平伊, 高木 学, 服部功太郎, 功刀 浩, 岡久祐子, 大沼 徹, 尾崎紀夫, 染矢俊幸, 橋本亮太, 吉川武男, 久保充明, 岩田伸生：Genome-wide association study detected novel susceptibility genes for schizophrenia and shared trans-populations/diseases genetic effect. CNP ポール・ヤンセン賞受賞講演, 第 29 回日本臨床精神神経薬理学会, 福岡, 2019.10.12.
- 9) 橋本亮太：ガイドラインの臨床現場での位置づけ. シンポジウム「統合失調症薬物治療ガイドライン改訂版の狙いと範囲」, 第 29 回日本臨床精神神経薬理学会, 福岡, 2019.10.11.
- 10) 橋本亮太, 宇野洋太, 松本純弥, 住吉チカ, 森田健太郎, 越山太輔, 岡田直大, 藤野陽生, 大井一高, 藤本美智子, 安田由華, 山森英長, 住吉太幹, 根本清貴, 福永雅喜, 三浦健一郎：精神疾患のバイオタイプ概説. JSNP/JSCNP 合同シンポジウム「精神疾患のバイオタイプの過

去・現在・未来への展望」, 第 49 回日本神経精神薬理学会・第 29 回日本臨床精神神経薬理学会, 福岡, 2019.10.12.

(2) 一般演題

- 1) Sumiyoshi C, Ohi K, Fujino H, Yamamori H, Kudo N, Azechi H, Fujimoto M, Yasuda Y, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Association between Work Status and Subjective Aspects of Recovery in Patients with Schizophrenia: A longitudinal study. Schizophrenia International Research Society (SIRS), Orlando, 2019.4.13.
- 2) Fukuda M, The collaborative team for “A co-production project to develop a practical guidance for patient-centered and life-oriented recovery of schizophrenia”: A co-productive development of a practical guidance for patient-centered and life-oriented recovery of schizophrenia in Japan. 7th European Conference on Schizophrenia Research (ECSR), Berlin, 2019.9.27.
- 3) Fujimoto M, Taomoto D, Katakami S, Omi T, Hashimoto R, Yamamori H, Yasuda Y, Makino T, Yoshikawa H, Iwase M, Ikeda M: Clozapine-induced seizure complicated with vertebral fracture, leg paralysis and pulmonary embolism in a patient with treatment-resistant schizophrenia. 6th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology (AsCNP), Fukuoka, 2019.10.13.
- 4) Aoki S, Matsumoto J, Otani K, Toda W, Motoya R, Itagaki S, Miura I, Yabe H: Pilot investigation of group behavioral activation for chronic low back pain (GBA-P). 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies, Berlin, 2019.7.20.
- 5) 森田健太郎, 三浦健一郎, 藤本美智子, 穴戸恵美子, 椎野智子, 高橋潤一, 山森英長, 工藤紀子, 畦地裕統, 平野羊嗣, 越山大輔, 岡田直大, 鬼塚俊明, 尾崎紀夫, 笠井清登, 池田 学, 橋本亮太: 統合失調症の眼球運動研究. 第 14 回日本統合失調症学会, 北海道, 2019.4.19.
- 6) 山田 恒, 本山美久仁, 椎野智子, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太, 松永寿人: 統合失調症治療に対する治療ガイドライン教育プロジェクト (EGUIDE プロジェクト) の効果 - 過去 2 年の受講者および参加施設のガイドラインに基づく治療行動達成度の変化からの考察 -. 第 14 回日本統合失調症学会, 北海道, 2019.4.20.
- 7) 宇野洋太, 工藤紀子, 山森英長, 藤野陽生, 住吉チカ, 安田由華, 藤本美智子, 勝元榮一, 佐田あゆ美, 畦地裕統, 椎野智子, 松本純弥, 三浦健一郎, 嶋田貴充, 片岡 譲, 高橋潤一, 森田健太郎, 香月あすか, 山本真江里, 岡久祐子, 肥田道彦, 平野羊嗣, 牧之段 学, 中瀧理仁, 橋本直樹, 大井一高, 高橋 努, 根本清貴, 岸本年史, 鈴木道雄, 住吉太幹, 橋本亮太: 精神疾患における認知機能障害と社会活動時間との関連. 第 5 回 CEPD 研究会, 東京, 2019.5.11.
- 8) 島崎愛夕, 齋藤竹生, 大河内 智, 谷口 賢, 二宮光平, 橋本亮太, 池田匡志, 岩田仲生, CPC-J (Clozapine Pharmacogenomics Consortium of Japan: 日本クロザピン薬理ゲノム学コンソーシアム): 生来の白血球数・顆粒球数とクロザピン誘発性顆粒球減少症: Mendelian Randomization 解析. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 9) 藤本美智子, 山森英長, 安田由華, 加藤 恒, 金倉 譲, 岩瀬真生, 池田 学, 橋本亮太: Clozapine により好酸球増加症が生じたが継続投与が可能であった治療抵抗性統合失調症の一例. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 10) 飯田仁志, 伊賀淳一, 越智紳一郎, 安田由華, 山本智也, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太, 川寄弘詔: 精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究 (EGUIDE プロジェクト) 参加施設の診療の質の評価. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 11) 堀 輝, 安田由華, 山本智也, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太, 吉村玲児: EGUIDE プロジェクト参加施設の大学病院は統合失調症の薬物治療で 1 年後の診療の質に変化があったのか. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.

- 12) 三村 将, 稲垣 中, 井上 猛, 岸本泰士郎, 久住一郎, 齊尾武郎, 齊藤卓弥, 佐藤眞弓, 曾良一郎, 坪井貴嗣, 橋本亮太, 松尾幸治, 三浦智史, 三木和平, 三野 進, 宮岡 等, 渡邊衡一郎: 今期の薬事委員会活動報告. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 13) 橋本亮太, 広報委員会: 日本神経精神薬理学会の概要. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 14) 橋本亮太, 稲田 健, 渡邊衡一郎, EGUIDE プロジェクトメンバーズ: EGUIDE プロジェクト: 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 15) 橋本亮太, 稲田 健, 古郡規雄, 中込和幸: 統合失調症薬物治療ガイドライン. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 16) 森尾保徳, 小居秀紀, 橋本亮太, 石郷岡 純, 中込和幸: 日本神経精神薬理学会における産学官協同でのデータシェアリングの取り組み. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 17) 藤本美智子, 三浦健一郎, 森田健太郎, 工藤紀子, 畦地裕統, 山森英長, 安田由華, 池田 学, 橋本亮太: 統合失調症におけるバイオマーカーとしての眼球運動スコアの臨床的意義. 第 41 回日本生物学的精神医学会 若手育成プログラムプロGRESSレポート ライトニングトーク, 新潟, 2019.6.22.
- 18) 宇野洋太, 工藤紀子, 山森英長, 藤野陽生, 住吉チカ, 安田由華, 藤本美智子, 勝元榮一, 佐田あゆ美, 畦地裕統, 椎野智子, 嶋田貴充, 片岡 譲, 高橋潤一, 森田健太郎, 香月あすか, 山本真江里, 岡久祐子, 肥田道彦, 平野羊嗣, 牧之段 学, 中瀧理仁, 橋本直樹, 大井一高, 高橋努, 根本清貴, 岸本年史, 鈴木道雄, 住吉太幹, 橋本亮太: 精神疾患における認知機能障害と社会活動時間との関連. 第 41 回日本生物学的精神医学会, 新潟, 2019.6.23.
- 19) 椎野智子, 三浦健一郎, 藤本美智子, 工藤紀子, 山森英長, 安田由華, 池田 学, 橋本亮太: 自閉スペクトラム症と統合失調症の眼球運動特性の検討. 第 41 回日本生物学的精神医学会, 新潟, 2019.6.23.
- 20) 森田健太郎, 三浦健一郎, 藤本美智子, 山森英長, 安田由華, 工藤紀子, 畦地裕統, 岡田直大, 越山太輔, 池田 学, 笠井清登, 橋本亮太: 統合失調症における眼球運動・認知機能・社会機能の縦断的關係性の検討. 第 41 回日本生物学的精神医学会, 新潟, 2019.6.23.
- 21) 高橋潤一, 三浦健一郎, 森田健太郎, 藤本美智子, 山森英長, 安田由華, 工藤紀子, 宍戸恵美子, 岡崎康輔, 椎野智子, 笠井清登, 平野羊嗣, 橋本亮太, 鬼塚俊明: 大うつ病性障害における眼球運動異常. 第 41 回日本生物学的精神医学会, 新潟, 2019.6.23.
- 22) 山田 恒, 本山美久仁, 椎野智子, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太, 松永寿人: うつ病に対する治療ガイドライン教育プロジェクト (EGUIDE プロジェクト) の効果-ガイドラインに基づく治療行動達成度からの考察-. 第 16 回日本うつ病学会総会, 徳島, 2019.7.5.
- 23) 井出本啓太, 新津富央, 畑登達記, 小田靖典, 木村敦史, 橋本 佐, 亀野陽亮, 蓬萊 政, 山森英長, 戸田重誠, 菱本明豊, 橋本亮太, 中込和幸, 橋本謙二, 伊豫雅臣: 気分障害のバイオマーカーとしての血清中グリア細胞株由来神経栄養因子 (GDNF)に関する多施設共同研究. 第 16 回日本うつ病学会総会, 徳島, 2019.7.5.
- 24) 宇野洋太, 工藤紀子, 山森英長, 藤野陽生, 住吉チカ, 安田由華, 藤本美智子, 勝元榮一, 佐田あゆ美, 畦地裕統, 椎野智子, 嶋田貴充, 片岡 譲, 高橋潤一, 森田健太郎, 香月あすか, 山本真江里, 岡久祐子, 肥田道彦, 平野羊嗣, 牧之段 学, 中瀧理仁, 橋本直樹, 大井一高, 高橋努, 根本清貴, 岸本年史, 鈴木道雄, 住吉太幹, 橋本亮太: 精神疾患における認知機能障害と社会時間活動との関連. 第 16 回日本うつ病学会総会, 徳島, 2019.7.6.
- 25) 高橋潤一, 三浦健一郎, 森田健太郎, 藤本美智子, 山森英長, 安田由華, 工藤紀子, 宍戸恵美子, 岡崎康輔, 椎野智子, 笠井清登, 平野羊嗣, 橋本亮太, 鬼塚俊明: 大うつ病性障害における眼球運動. 第 16 回日本うつ病学会総会, 徳島, 2019.7.6.
- 26) Matsumura K, Seiriki K, Nagase M, Ayabe S, Yamada I, Furuse T, Yamamoto K, Kitagawa

- K, Iguchi T, Sato M, Yamaguchi S, Tamura M, Wakana S, Yoshi A, Watabe AM, Okano H, Takuma K, Hashimoto R, Hashimoto H, Nakazawa T: ASD-related de novo POGZ mutations disrupt cortical neuronal differentiation. 若手道場：第 42 回日本神経科学大会・第 62 回日本神経化学会大会 (Neuro2019), 新潟, 2019.7.26.
- 27) Yamamoto K, Kuriu T, Nakazawa T, Matsumura K, Nayasu K, Baba M, Yamamori H, Yasuda Y, Fujimoto M, Tsurusaki Y, Matsumoto N, Takuma K, Hashimoto R, Hashimoto H: Pathological analysis of neurons from iPS cells derived from patients with schizophrenia in a multiple family. 第 42 回日本神経科学大会・第 62 回日本神経化学会大会 (Neuro2019), 新潟, 2019.7.26.
- 28) Shiino T, Miura K, Fujimoto M, Kudo N, Yamamori H, Yasuda Y, Ikeda M, Hashimoto R: Comparison of eye movement in Autism Spectrum Disorder and Schizophrenia. 第 42 回日本神経科学大会・第 62 回日本神経化学会大会 (Neuro2019), 新潟, 2019.7.27.
- 29) Takamura T, Nakamura T, Yoshinaga K, Ogata Y, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R, Hanakawa T: Multi-site Harmonization of Resting-state functional connectivity MRI data improves classification of major depressive disorder. 第 3 回ヒト脳イメージング研究会, 東京, 2019.9.6.
- 30) 松本純弥, 福永雅喜, 根本清貴, 越山大輔, 三浦健一郎, 岡田直大, 森田健太郎, 山森英長, 宇野洋太, 安田由華, 藤本美智子, 工藤紀子, 畦地裕統, 渡邊嘉之, 笠井清登, 橋本亮太: DTI による大脳白質の髄鞘化/成熟性の評価と社会機能の指標としての労働時間との関連. 第 3 回ヒト脳イメージング研究会, 東京, 2019.9.7.
- 31) 森田健太郎, 三浦健一郎, 藤本美智子, 山森英長, 安田由華, 工藤紀子, 畦地裕統, 岡田直大, 越山大輔, 椎野智子, 福永雅喜, 渡邊嘉之, 笠井清登, 池田 学, 橋本亮太: 統合失調症でみられる眼球運動特徴の神経基盤の検討. 第 3 回ヒト脳イメージング研究会, 東京, 2019.9.7.
- 32) 藤本美智子, 三浦健一郎, 森田健太郎, 工藤紀子, 畦地裕統, 山森英長, 安田由華, 池田 学, 橋本亮太: 統合失調症における眼球運動特性の診断補助的指標としての再現性. 第 39 回日本精神科診断学会, 京都, 2019.9.21.
- 33) 長谷川尚美, 宇野洋太, 安田由華, 山本智也, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: 統合失調症におけるクロザピン治療と医療の質 (Quality Indicator) との関連～EGUIDE プロジェクトの処方調査の結果から～. 第 3 回日本精神薬学会総会・学術集会, 神戸, 2019.9.21.
- 34) Shixing B, Watanabe Y, Tomiyama N, Takahashi H, Hashimoto R, Hata J: The comparison of q-space myelin map, fractional anisotropy and apparent diffusion coefficient values between normal young and old ages. 第 47 回日本磁気共鳴医学会大会, 熊本, 2019.9.21.
- 35) 森田健太郎, 三浦健一郎, 藤本美智子, 穴戸恵美子, 高橋潤一, 山森英長, 安田由華, 工藤紀子, 畦地裕統, 平野羊嗣, 越山太輔, 岡田直大, 鬼塚俊明, 尾崎紀夫, 笠井清登, 池田 学, 橋本亮太: 眼球運動による精神疾患のバイオタイプ分類は可能か. JSNP/JSCNP 合同シンポジウム「精神疾患のバイオタイプの過去・現在・未来への展望」第 49 回日本神経精神薬理学会・第 29 回日本臨床精神神経薬理学会, 福岡, 2019.10.12.
- 36) 長谷川尚美, 宇野洋太, 安田由華, 山本智也, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: 統合失調症におけるクロザピン治療と抗精神病薬単剤治療の関連～EGUIDE プロジェクトの処方調査の結果から～. 第 49 回日本神経精神薬理学会年会, 福岡, 2019.10.12.
- 37) 松本純弥, 福永雅喜, 根本清貴, 越山太輔, 三浦健一郎, 宇野洋太, 岡田直大, 森田健太郎, 山森英長, 安田由華, 藤本美智子, 工藤紀子, 畦地裕統, 笠井清登, 渡邊嘉之, 橋本亮太: 大脳白質の成熟性と社会機能の指標である労働時間との関連. 第 49 回日本神経精神薬理学会年会, 福岡, 2019.10.12.
- 38) 本山美久仁, 山田 恒, 椎野智子, 長谷川尚美, 宇野洋太, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太, 松永寿人: 統合失調症に対する治療ガイドライン教育プロジェクト(EGUIDE プロジェクト)の

- 効果：報告 2 - 過去 2 年の参加施設のガイドラインに基づく治療行動実践度の変化からの考察 - . 第 49 回日本神経精神薬理学会年会, 福岡, 2019.10.13.
- 39) 山田 恒, 本山美久仁, 椎野智子, 長谷川尚美, 宇野洋太, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太, 松永寿人: 統合失調症治療に対する治療ガイドライン教育プロジェクト(EGUIDE プロジェクト)の効果: 報告 1 - 過去 2 年の受講者のガイドラインに基づく治療行動実践度の変化からの考察 - . 第 49 回日本神経精神薬理学会年会, 福岡, 2019.10.13.
- 40) 小林真美, 森脇久視, 小澤篤嗣, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: F2 群を対象とした当院の薬物療法についての現状評価-医療の質の観点から. 第 58 回全国自治体病院学会, 徳島, 2019.10.25.
- 41) 岩瀬真生, 藤本美智子, 埤本大喜, 近江 翼, 畑 真弘, 山森英長, 橋本亮太, 池田 学: クロザピンにより誘発されたけいれん発作により腰椎圧迫骨折, 両下肢麻痺, 膀胱直腸障害をきたした治療抵抗性統合失調症の一例. 第 53 回日本てんかん学会学術集会, 神戸, 2019.10.31.
- 42) 松本純弥, 戸田 亘, 青木俊太郎, 板垣俊太郎, 三浦 至, 石井士朗, 大谷晃司, 橋本亮太, 紺野慎一, 伊藤 浩, 矢部博興: 慢性疼痛と精神疾患 - 身体症状症/身体表現性障害を中心とした脳画像研究 - . 第 49 回日本臨床神経性理学会学術大会, 福島, 2019.11.28.
- 43) 岩瀬真生, 藤本美智子, 埤本大喜, 片上茂樹, 近江 翼, 畑 真弘, 山森英長, 橋本亮太, 池田 学: 難治性統合失調症治療薬により誘発された全身けいれん発作により腰椎圧迫骨折, 両下肢麻痺, 膀胱直腸障害をきたした実態からの教訓. 第 49 回大阪てんかん研究会, 大阪, 2020.1.18.
- 44) 王 凱, 橋本亮太, 岡田研一, 細見岳生, 加納敏行: 脳型認知分類統合システムによる眼球運動特徴量を用いた精神疾患の分類~既存人工知能技術との精度比較~. 大阪大学主催 次世代人工知能シンポジウム 2020, 大阪, 2020.2.4.
- 45) Hayashi K, Matsumoto N, Matsuda K, Miura K, Yamane S, Matsuo S, Yanai K, Eldridge MAG, Richard SC, Richmond BJ, Nagai Y, Miyakawa N, Minamimoto T, Okada M, Kawano K, Sugase-Miyamoto Y: Neural coding of facial images with different skin textures in the temporal lobe of macaque monkeys. 第 42 回日本神経科学大会・第 62 回日本神経化学学会大会 (Neuro2019), 新潟, 2019.7.26.
- 46) Sugita Y, Miura K, Furukawa T: Photoreceptor ribbon synapse may regulate light adaptation in the visual system underlying optokinetic responses. 第 42 回日本神経科学大会・第 62 回日本神経化学学会大会 (Neuro2019), 新潟, 2019.7.26.
- 47) Takemura A, Kawano K, Miura K: 2 フレーム仮現運動刺激はサル大脳皮質 MST 野の活動と追従眼球運動を逆転させた. 第 42 回日本神経科学大会・第 62 回日本神経化学学会大会 (Neuro2019), 新潟, 2019.7.27.
- 48) Chen C-Y, Matrov D, Richard Veale R, Miura K, Isa T: Eye movement tracking in head-fixed common marmosets. 第 9 回日本マーマセット研究会大会, 神戸, 2020.2.14.
- 49) 戸田 亘, 松本純弥, 板垣俊太郎, 大西 隆, 伊藤浩, 石井士朗, 志賀哲也, 松本貴智, 青木俊太郎, 三浦 至, 矢部博興: 自閉スペクトラム症の傾向と白質線維束における関連解析の試み. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 50) 泉 竜太, 松本純弥, 國井泰人, 戸田 亘, 石井士朗, 伊藤 浩, 三浦 至, 矢部博興: 解離性健忘における脳血流 SPECT 画像の 3D-SRT 解析における検討: ケースシリーズ. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 51) 一瀬瑞絵, 松本純弥, 板垣俊太郎, 刑部有祐, 山本慎之助, 三浦 至, 矢部博興: 解離性幻聴が強くみられた強迫性障害の一例. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 52) 三浦 至, 浅野太志, 泉 竜太, 穂積宏俊, 森 湧平, 一瀬瑞絵, 戸田 亘, 刑部有祐, 堀越 翔, 野崎途也, 松本純弥, 板垣俊太郎, 矢部博興: 福島県立医科大学医学部神経精神医学講座の紹介. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 53) 三浦 至, 板垣俊太郎, 松本純弥, 野崎途也, 刑部有祐, 堀越 翔, 矢部博興: 福島県立医科大

- 学医学部附属病院連携施設 精神科専門医研修プログラムについて. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 54) 湯川尊行, 岩倉百合子, 武井延之, 斎藤摩美, 渡部雄一郎, 豊岡和彦, 五十嵐道弘, 新里和弘, 大島健一, 國井泰人, 矢部博興, 松本純弥, 和田 明, 日野瑞城, 入谷修司, 丹羽真一, 竹内亮子, 高橋 均, 柿田明美, 染矢俊幸, 那波宏之: 統合失調症患者における脳内コンドロイチン硫酸鎖の変化. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20.
- 55) 浅野太志, 堀越 翔, 松本純弥, 野崎途也, 戸田 亘, 穂積宏俊, 三浦 至, 矢部博興: 福島県立医科大学附属病院における診療科別の睡眠薬使用状況について. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 56) 堀越 翔, 國井泰人, 松本純弥, 平尾美枝子, 後藤大介, 三浦 至, 矢部博興: 抗認知症薬の 6 ヶ月後の治療反応性はその後の転帰に影響するか. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 57) 森 湧平, 松本純弥, 刑部有祐, 堀越 翔, 戸田 亘, 浅野太志, 板垣俊太郎, 三浦 至, 矢部博興: 抗アレルギー薬投与を契機に体系的な妄想が出現・持続したパーキンソン病患者の一例. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 58) 松本純弥, 刑部有祐, 戸田 亘, 泉 竜太, 一瀬瑞絵, 森 湧平, 板垣俊太郎, 三浦 至, 矢部博興: ビフィズス菌整腸剤の過量服薬を繰り返した境界性パーソナリティ障害の一例. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 59) 坂井美和子, 渡部雄一郎, 染矢俊幸, 荒木一明, 澁谷雅子, 新里和弘, 大島健一, 國井泰人, 矢部博興, 松本純弥, 和田 明, 日野瑞城, 橋本健志, 菱本明豊, 北村 登, 入谷修司, 白川 治, 前田 潔, 宮下哲典, 丹羽真一, 高橋 均, 柿田明美, 桑野良三, 那波宏之: 統合失調症患者の脳内ゲノムにおけるコピー数変異の評価. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 60) 青木俊太郎, 戸田 亘, 菅野和子, 大谷晃司, 本谷 亮, 横倉俊也, 松本純弥, 板垣俊太郎, 三浦 至, 矢部博興: 疼痛と認知行動療法の研究. 第 49 回日本臨床神経性理学会学術大会, 福島, 2019.11.28.
- 61) 青木俊太郎, 戸田 亘, 菅野和子, 大谷晃司, 本谷 亮, 横倉俊也, 松本純弥, 板垣俊太郎, 三浦 至, 矢部博興: 疼痛性障害に対する集団行動活性化の「痛み度」の変化に関する予備調査. 第 49 回日本臨床神経性理学会学術大会, 福島, 2019.11.28.
- 62) 戸田 亘, 松本純弥, 石井士朗, 板垣俊太郎, 大谷晃司, 青木俊太郎, 三浦 至, 志賀哲也, 松本貴智, 菅原茂耕, 山國 遼, 箱崎元晴, 渡邊宏剛, 矢吹省司, 二階堂琢也, 渡邊和之, 加藤欽志, 小林 洋, 伊藤 浩, 紺野慎一, 矢部博興: 心因性が疑われる高齢の慢性疼痛患者における脳血流の変化. 第 49 回日本臨床神経性理学会学術大会, 福島, 2019.11.28.
- 63) 板垣俊太郎, 戸田 亘, 松本純弥, 大西 隆, 伊藤 浩, 志賀哲也, 松本貴智, 青木俊太郎, 三浦 至, 矢部博興: 発達障害における Mismatch Negativity (MMN) と脳画像解析の統合の試み. 第 49 回日本臨床神経性理学会学術大会, 福島, 2019.11.30.
- (3) 研究報告会
- 1) 橋本亮太: 多施設共同研究体制の構築. 第 17 回 IGC 第 13 回 COCORO 合同会議, 東京, 2019.6.1.
- 2) 橋本亮太: 精神疾患のバイオタイプによる診断・治療法の開発. 第 17 回 IGC 第 13 回 COCORO 合同会議, 東京, 2019.6.2.
- 3) 橋本亮太: 精神疾患のバイオタイプによる診断・治療法の開発. 第 18 回 IGC 第 14 回 COCORO 合同会議, 東京, 2019.12.7.
- 4) 橋本亮太: 多施設共同研究体制の構築. 第 18 回 IGC 第 14 回 COCORO 合同会議, 東京, 2019.12.7.
- 5) 三浦健一郎: AI 解析によるバイオタイプの同定. 第 17 回 IGC 第 13 回 COCORO 合同会議,

東京, 2019.6.2.

- 6) 三浦健一郎, 山本哲也, 福永雅喜, 定藤規弘: 追跡眼球運動と視覚誘導性サッケードに関わる脳領域の比較. 第2回生体機能イメージング共同利用実験 研究発表会, 岡崎, 2019.11.26.
- 7) 三浦健一郎: AI 解析によるバイオタイプの同定・眼球運動特性による層別化. 第18回 IGC 第14回 COCORO 合同会議, 東京, 2019.12.7.
- 8) 松本純弥: 認知社会機能と脳構造の関連解析. 第17回 IGC 第13回 COCORO 合同会議, 東京, 2019.6.1.
- 9) 松本純弥: 大規模 MRI 構造データの自動解析に関する QC 法の提案. 第18回 IGC 第14回 COCORO 合同会議, 東京, 2019.12.7.

(4) その他

- 1) 橋本亮太: プレスリリース 精神科治療ガイドラインの教育・普及・検証活動により精神科医の治療ガイドラインへの理解度が向上～精神科医への教育を行い, よりよい医療の実践に大きく前進～ (NCNP, 杏林大学, 東京女子医大, 日本神経精神薬理学会, 日本うつ病学会共同) 2019.8.22. (Psychiatry and Clinical Neuroscience)
- 2) 橋本亮太: プレスリリース 複数の精神疾患に共通する大脳白質の異常を発見・統合失調症と双極性障害に共通の異常- (NCNP, 東京大学, IRCN, AMED 共同) 2019.11.19. (Molecular Psychiatry)
- 3) 橋本亮太: プレスリリース 自閉症患者に生じる遺伝子突然変異が脳の発達や社会性に異常をもたらす分子メカニズムを解明・自閉症の治療戦略の開発に期待- (大阪大学, NCNP, AMED 共同) 2020.2.19. (Nature Communications)
- 4) 橋本亮太: 精神疾患の克服とその障害への支援. NCNP 精神保健研究所ランチョンセミナー, 東京, 2019.5.7.
- 5) 橋本亮太: 精神医療分野における治療の質を評価する QI とその向上をもたらす介入技法の開発と実用性の検証: プロジェクトの概要. 日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業「精神医療分野における治療の質を評価する QI とその向上をもたらす介入技法の開発と実用性の検証」第一回研究班会議, 東京, 2019.5.18.
- 6) 橋本亮太: 指定発言. シンポジウム: 精神科薬物治療の出口戦略を考える, 第115回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.22.
- 7) 橋本亮太: 精神疾患のバイオマーカーについて. 日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業「血液メタボローム解析による精神疾患の層別化可能な客観的評価法の確立と治療最適化への応用」令和元年度第一回研究班会議, 徳島, 2019.7.5.
- 8) 橋本亮太: 精神疾患の眼球運動異常の脳神経回路のメカニズムの解明とその臨床的意義の同定. 第50回 IBIC 大型画像機器研究推進委員会検討会, 小平 (NCNP), 2019.7.23.
- 9) 菅生康子, 林 和子, 松本有央, 松田圭司, 三浦健一郎, 本武陽一, 松尾 真, 澤山正貴, 南本敬史, 岡田真人, 柳井啓司, 佐藤いまり, 西田眞也, 河野憲二: 側頭葉前部における顔の質感知覚を支える神経機構の解明. 第8回多元質感知・領域班会議. 浜松, 2019.9.1.

C. 講演

- 1) 橋本亮太: 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動と精神疾患病態解明研究. 精神医療セミナー (国立精神・神経医療研究センター), 東京, 2019.6.25.
- 2) 橋本亮太: 精神疾患病態研究における DSM と RDoC の功罪. 第6回 NCNP メディア塾, 東京, 2019.8.23.
- 3) 橋本亮太: 統合失調症薬物治療ガイドラインを使いこなすコツ. こころのフォーラム, 茨城, 2019.9.6.
- 4) 橋本亮太: うつ病の治療～ガイドラインの普及・教育・検証～. 第18回三重不安・抑うつ治

療研究会，三重，2019.10.17.

- 5) 藤本美智子，山森英長，三浦健一郎，安田由華，工藤紀子，畦地裕統，住吉チカ，藤野陽生，住吉太幹，池田 学，橋本亮太：Clozapine 投与中の治療抵抗性統合失調症患者における簡易認知機能検査の実践．第 19 回精神疾患と認知機能研究会，東京，2019.11.9.
- 6) 住吉チカ，松井三枝，倉知正佳，橋本亮太，吉村直記，住吉太幹：カテゴリ流暢性課題を利用した統合失調症患者の高次認知機能の評価：最近の研究動向．第 19 回精神疾患と認知機能研究会，東京，2019.11.9.
- 7) 橋本亮太：統合失調症の認知社会機能の測定法とその臨床応用．第 39 回静岡県東部精神科医学会，三島，2019.11.19.
- 8) 橋本亮太：統合失調症の治療法の最近の動向とクロザピン治療．大精神・大阪弁護士会合同勉強会，大阪，2019.11.28.
- 9) 三浦健一郎：眼球運動の特徴から統合失調症を診断できるか？ヘルスケア・医療機器専門技術研究会 第 4 回研究会，和歌山，2020.2.7.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 橋本亮太：日本神経精神薬理学会 評議員，広報委員会委員長，統合失調症薬物治療ガイドラインタスクフォース委員，編集委員会委員，国際学術委員会委員，執行委員会委員，統合失調症薬物治療ガイドライン改訂委員，50 周年記念事業ワーキンググループ委員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会（通称：EGUIDE 委員会）
- 2) 橋本亮太：日本精神神経学会 PCN 編集委員会委員，薬事委員会委員，精神医学研究推進委員会委員
- 3) 橋本亮太：日本神経化学会 評議員，利益相反委員会委員，若手育成委員会委員
- 4) 橋本亮太：日本統合失調症学会 評議員
- 5) 橋本亮太：日本うつ病学会 評議員，気分障害の治療ガイドライン検討委員会委員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会（通称：EGUIDE 委員会）
- 6) 橋本亮太：日本生物学的精神医学会 理事，将来計画委員会委員，関連学会対応委員会副委員長，評議員
- 7) 橋本亮太：日本神経科学学会 臨床・関連学会連携委員会委員
- 8) 橋本亮太：国際神経精神薬理学会 理事，フェローシップ表彰委員会委員，教育委員会委員，評議員
- 9) 三浦健一郎：電子情報通信学会ニューロコンピューティング研究専門委員会 専門委員

(3) 座長

- 1) Hashimoto R: Symposium"International neuroimaging big data collaborations: ENIGMA and COCORO". 6th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology (AsCNP), Fukuoka, 2019.10.11.
- 2) 橋本亮太：統合失調症の認知社会機能障害の簡便な測定法．第 14 回日本統合失調症学会，北海道，2019.4.19.
- 3) 橋本亮太：一般演題「統合失調症」．第 41 回日本生物学的精神医学会，新潟，2019.6.23.
- 4) 橋本亮太，上野修一：第 8 回若手研究者育成プログラムプログレスレポート I. 第 41 回日本生物学的精神医学会，新潟，2019.6.23.
- 5) 橋本亮太：JSNP/JSCNP 合同シンポジウム「精神疾患のバイオタイプの過去・現在・未来への展望」．第 49 回日本神経精神薬理学会・第 29 回日本臨床精神神経薬理学会，福岡，2019.10.12.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 橋本亮太：日本精神神経学会機関誌「Psychiatry and Clinical Neuroscience」編集委員会委員
- 2) 橋本亮太：日本神経精神薬理学会機関誌「Neuropsychopharmacology Reports」「日本神経精神薬理学雑誌」編集委員会委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 橋本亮太：第 14 回日本統合失調症学会ワークショップ，統合失調症の認知社会機能障害の簡便な測定法．北海道，2019.4.19.
- 2) 橋本亮太：大阪精神科診療所協会主催，統合失調症薬物治療ガイドライン講習会．大阪，2019.5.19.
- 3) 橋本亮太：大阪精神科診療所協会主催，うつ病治療ガイドライン講習会．大阪，2019.5.26.
- 4) 橋本亮太：第 115 回日本精神神経学会学術総会ワークショップ，日常診療に診療ガイドラインは役にたつのか．新潟，2019.6.21.
- 5) 橋本亮太：第 16 回日本うつ病学会総会，EGUIDE プロジェクト うつ病治療ガイドライン講習会．徳島，2019.7.7.
- 6) 橋本亮太：第 16 回日本うつ病学会総会，EGUIDE プロジェクト：精神科医のための双極性障害治療ガイドライン講習会．徳島，2019.7.6.
- 7) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北陸地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習．金沢，2019.10.5.
- 8) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北陸地区講習，うつ病治療ガイドライン講習．金沢，2019.10.6.
- 9) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト四国地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習．徳島，2019.10.5.
- 10) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト四国地区講習，うつ病治療ガイドライン講習．徳島，2019.10.6.
- 11) 橋本亮太：第 49 回日本神経精神薬理学会・第 29 回日本臨床精神神経薬理学会，統合失調症薬物治療ガイドライン講習会．福岡，2019.12.13.
- 12) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習．東京，2019.10.19.
- 13) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東地区講習，うつ病治療ガイドライン講習．東京，2019.10.20.
- 14) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習．栃木，2019.10.19.
- 15) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東地区講習，うつ病治療ガイドライン講習．栃木，2019.10.20.
- 16) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習．東京，2019.10.27.
- 17) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北海道講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習．札幌，2019.11.2.
- 18) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北海道講習，うつ病治療ガイドライン講習．札幌，2019.11.3.
- 19) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中部地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習．名古屋，2019.11.2.
- 20) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中部地区講習，うつ病治療ガイドライン講習．名古屋，2019.11.3.
- 21) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東地区講習，うつ病治療ガイドライン講習．東京，2019.11.10.

- 22) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト東北地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習．仙台，2019.12.14.
 - 23) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト東北地区講習，うつ病治療ガイドライン講習．仙台，2019.12.15.
 - 24) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト九州地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習．福岡，2019.12.14.
 - 25) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト九州地区講習，うつ病治療ガイドライン講習．福岡，2019.12.15.
 - 26) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿地区講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習．大阪，2019.12.21.
 - 27) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿地区講習，うつ病治療ガイドライン講習．大阪，2019.12.22.
 - 28) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト浜松医大講習，統合失調症薬物治療ガイドライン講習．浜松，2019.12.21.
 - 29) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト浜松医大講習，うつ病治療ガイドライン講習．浜松，2019.12.22.
- (2) 研修会講師
- 1) 橋本亮太：統合失調症の認知社会機能障害の簡便な測定法．第 14 回日本統合失調症学会，北海道，2019.4.19.
 - 2) 橋本亮太：治療抵抗性．統合失調症薬物治療ガイドライン講習会（大阪精神科診療所協会主催），大阪，2019.5.19.
 - 3) 橋本亮太：精神病性．うつ病治療ガイドライン講習会（大阪精神科診療所協会主催），大阪，2019.5.26.
 - 4) 橋本亮太：本ワークショップの趣旨．ワークショップ：日常診療に診療ガイドラインは役にたつのか，第 115 回日本精神神経学会学術総会，新潟，2019.6.21.
 - 5) 橋本亮太：趣旨説明．EGUIDE プロジェクト：精神科医のための双極性障害治療ガイドライン講習会，第 16 回日本うつ病学会総会，徳島，2019.7.6.
 - 6) 橋本亮太：治療抵抗性．統合失調症薬物治療ガイドライン講習会，第 49 回日本神経精神薬理学会，福岡，2019.10.13.
 - 7) 橋本亮太：趣旨説明．統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習，栃木，2019.10.19.
 - 8) 橋本亮太：治療抵抗性．統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習，栃木，2019.10.19.
 - 9) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習，栃木，2019.10.19.
 - 10) 橋本亮太：趣旨説明．うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習，栃木，2019.10.20.
 - 11) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習，栃木，2019.10.20.
 - 12) 橋本亮太：趣旨説明．統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習，東京，2019.10.27.
 - 13) 橋本亮太：治療抵抗性．統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習，東京，2019.10.27.
 - 14) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習，東京，2019.10.27.

- 15) 橋本亮太：趣旨説明．うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習，東京，2019.11.10.
- 16) 橋本亮太：児童思春期．うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習，東京，2019.11.10.
- 17) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習，東京，2019.11.10.
- 18) 橋本亮太：趣旨説明．統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト浜松医大講習，浜松，2019.12.21.
- 19) 橋本亮太：治療抵抗性．統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト浜松医大講習，浜松，2019.12.21.
- 20) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト浜松医大講習，浜松，2019.12.21.
- 21) 橋本亮太：趣旨説明．うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト浜松医大講習，浜松，2019.12.22.
- 22) 橋本亮太：児童思春期．うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト浜松医大講習，浜松，2019.12.22.
- 23) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト浜松医大講習，浜松，2019.12.22.
- 24) 橋本亮太：統合失調症薬物治療ガイドラインを学び心理社会的介入に活かす．神奈川県作業療法士会研修会，神奈川，2020.1.11.

F. その他

- 1) 橋本亮太：研究会主宰，第 17 回 IGC 第 13 回 COCORO 合同会議．東京，2019.6.1-2.
- 2) 橋本亮太：総合司会，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習．栃木，2019.10.19.
- 3) 橋本亮太：総合司会，うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習．栃木，2019.10.20.
- 4) 橋本亮太：総合司会，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習．東京，2019.10.27.
- 5) 橋本亮太：総合司会，うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区講習．東京，2019.11.10.
- 6) 橋本亮太：研究会主宰，第 18 回 IGC 第 14 回 COCORO 合同会議．東京，2019.12.7.
- 7) 橋本亮太：総合司会，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト浜松医大講習．浜松，2019.12.21.
- 8) 橋本亮太：総合司会，うつ病治療ガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト浜松医大講習．浜松，2019.12.22.

8. 睡眠・覚醒障害研究部

I. 研究部の概要

研究部および研究室の研究目的

睡眠・覚醒障害研究部では、睡眠、意識、認知、感情、意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ、その制御メカニズムを明らかにし、これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害、気分障害、不安障害、認知症性障害、神経・発達障害などの病態および治療法を解明することを目的としている。このため、精神生理学、時間生物学、神経薬理学、分子生物学、神経内分泌学、脳画像解析学などの手法を用いて、学際的な研究を進めている。

部長 1 名、室長 2 名に加え、流動研究員 2 名、研究補助員 3 名、事務助手 1 名および研究助手 3 名、国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている。

研究部の構成

部長：栗山健一。精神生理機能研究室長：肥田昌子（～5/31）、吉池卓也（6/1～）。臨床病態生理研究室長：北村真吾。流動研究員：綾部直子、吉村道孝。併任研究員：都留あゆみ（センター病院）、松井健太郎（5/1～センター病院）。客員研究員：樋口重和（九州大学）、井上雄一（医療法人社団絹和会）、内山 真（日本大学）、兼板佳孝（日本大学）、大川匡子（睡眠総合ケアクリニック代々木）、本多 真（東京都医学総合研究所）、上田泰己（東京大学）、池田正明（埼玉医科大学）、山寺 亘（東京慈恵会医科大学）、阿部高志（筑波大学）、守口善也（ルンドベックジャパン）、福水道郎（瀬川記念小児神経学クリニック）、榎本みのり（東京工科大学）、有竹清夏（埼玉県立大学）、亀井雄一（上諏訪病院）、渡辺和人（獨協医科大学）、三島和夫（秋田大学）、西村勝治（東京女子医科大学）、梶達彦（東京都立多摩総合精神保健福祉センター）、阿部又一郎（伊敷病院）、岡島義（東京家政大学）、高橋英彦（東京医科歯科大学）、肥田昌子（秋田大学）、玉置應子（Brown University）、鈴木正泰（日本大学）。そのほか科研費研究補助員 2 名、センター研究補助員 1 名、科研費事務助手 1 名、科研費研究助手 2 名、センター研究助手 1 名、研究生 16 名。

Ⅱ. 研究活動

- 1) 「健康づくりのための睡眠指針 2014」のブラッシュアップ・アップデートを目指した「睡眠の質」の評価及び向上手法確立のための研究（19FA1009）

厚生労働科学研究費補助金循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業（代表研究者：栗山健一、研究協力者：北村真吾、吉池卓也、綾部直子、吉村道孝）

本研究は「睡眠の質」を反映し、健康を維持するために目標となる指標・数値目標を示すことを目的とする。客観性の高い「睡眠の質」指標には、睡眠脳波検査に基づく睡眠深度や睡眠効率等が用いられてきた。しかし、睡眠脳波は利便性とコストの面で、国民の睡眠健康の指標に用いるには困難である。さらに、睡眠脳波指標と主観的な睡眠充足感に乖離が大きく、簡便かつ客観性が担保された標準化指標の開発が求められる。

「睡眠の質」指標は、睡眠健康の目安になると同時に、生活習慣病等の予防的意義も重要である。本研究では日本人の睡眠状況、「睡眠の質」低下の原因となる睡眠問題や生じうる二次障害を文献調査した上で、「睡眠の質」を規定しうる指標および数値目標をシステムティックレビューし、各論文の質的評価も厳密に行った上で同定することを目標とする。「睡眠の質」の数値目標に客観性を担保するため、既存の大規模コホートデータを再解析し睡眠脳波との関連性を評価する。本課題の成果である「睡眠の質」の評価に資する主観・客観指標の提案は、「健康づくりのための睡眠指針 2014」で明確に示すことができなかった、健康向上に寄与する睡眠の具体的な数値目標を提示することが可能となり、前指針（2014）の課題を克服した、次世代の健

康指針アップデートに直ちに活用可能である。「睡眠の質」ならびに健康づくりに寄与する、睡眠健康の啓発基盤を整備・発展させることで、広く国民に適切な知識を普及させることに寄与する。

2) 社会機能/QOL 改善と出口戦略を見据えた睡眠障害のクリニカルパスの開発

精神・神経医療研究開発費研究事業（主任研究者：栗山健一，研究協力者：北村真吾，吉池卓也，綾部直子，吉村道孝）

本研究事業では、精神疾患に随伴する不眠症、過眠症（眠気）、概日リズム睡眠-覚醒障害（夜型生活や昼夜逆転）に対する効果的で安心な睡眠障害用クリニカルパスを作成することを目的としており、クリニカルパスには患者の要望が大きい shared decision making と出口戦略（維持療法か治療終結かの判断）の視点を取り入れる。クリニカルパスを用いた睡眠医療によって患者の日常機能の大きな阻害要因である社会機能/QOL 障害の向上に資するか検証する。これらの目的のために以下の研究事業に取り組んだ。1) 睡眠障害による社会機能/QOL 障害の実態調査：睡眠障害による社会機能/QOL 障害の同定に適した臨床評価尺度を選択・作成し、睡眠障害の存在が精神疾患患者の社会機能/QOL 障害に及ぼす寄与度を明らかにするための多施設共同実態調査の準備を行った。2) 睡眠障害用クリニカルパスの作成：睡眠症状と社会機能/QOL 障害のアセスメント、治療、寛解・回復基準、減薬・休薬までの流れを明示的に示す睡眠医療クリニカルパスの作成に着手した。不眠、過眠、睡眠リズム異常に対する薬物療法をベースとして、認知行動療法（CBT-I, CBT-R）を活用することでリスクベネフィットと社会機能/QOL の向上を図る診療マニュアルの作成に着手した。

3) 大脳深部皮質下白質病変が不眠症病態に及ぼす影響の検討

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究C（研究代表者：栗山健一）

不眠症は「不眠に対する恐怖」と「生理的過覚醒」が病態の中核をなす症候群であるが、一部の患者は自身の睡眠に対して、眠れているにもかかわらず「全く眠れてない」という誤認を示す。睡眠障害国際分類（The International Classification of Sleep Disorders: ICSD）第2版では、「睡眠状態誤認」は逆説性不眠症（Paradoxical Insomnia: PI）という下位診断分類の特徴とされていたが、近年は多くの不眠症患者が共有する病態特性（スペクトラム）と考えられるようになった。「睡眠状態誤認」は、「漠とした健康障害への不安」を基に生じる認知構造として、身体症状（疼痛性障害含む）と共通した特徴を示し、加齢に伴い増強する疾患共通の治療抵抗因子であると推測される。特に、大脳灰白皮質の萎縮性病変および脳微小血管障害を背景とした大脳白質病変が、この認知構造に関与している可能性が推測されるが、系統的に検討した研究はない。本研究は、上記病態関連性を検討するとともに、身体愁訴、疼痛症状との関連も検討項目に加え、不眠症と身体症状等の精神疾患病態との関連性を検討することを目的し行われる。

4) 概日リズム睡眠-覚醒障害の遺伝的要因とその発症分子メカニズム

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究C（研究代表者：肥田昌子）

概日リズム睡眠-覚醒障害は望ましい時間帯に入眠して覚醒することが困難となる疾患で、生物時計システムの入力・時計本体・出力に関連する機能の障害によって生じると考えられている。概日リズム睡眠-覚醒障害のサブタイプの一つである睡眠-覚醒相前進障害は、睡眠時間帯が著しく前進してしまう疾患である。複数の睡眠-覚醒相前進障害家系において、時計遺伝子 *CKI δ*, *CRY2*, *PER2*, *PER3* のバリエントが発症に関連していると既に報告されている。しかしながら、日本人家系で調べたところ、これらの報告されているバリエントと同一のものは認められなかった。そこで、睡眠-覚醒相前進障害2家系の罹患者6人、非罹患者9人の計15人を対象に、睡眠や概日リズムに関連する76遺伝子についてDNA配列解析を行い、罹患者に

共通するバリエントを探索した。ターゲット遺伝子のエクソン上にないものや、信頼性の低いものを除外して、新規のバリエント 47 種、既知のバリエント 1,167 種に絞り込んだ。このうち、罹患者のみに共通して、CRY2 と TIMELESS に既知のバリエントが 1 つずつ見つかった。最近の研究で、別の睡眠・覚醒相前進障害家系では CRY2 のバリエントが、またそれとは異なる別の睡眠・覚醒相前進障害家系では TIMELESS のバリエントが報告されたが、本研究で見つけた CRY2 と TIMELESS のバリエントは先行研究で見つかったものとは異なっていた。これらの結果は、この 2 遺伝子が睡眠・覚醒相前進障害の発症に寄与している可能性を示唆している。

5) 子どもの睡眠調節に対する睡眠恒常性機能と概日リズム機能の寄与

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C (研究代表者：北村真吾)

本研究の目的は、子どもの年齢変化に伴う睡眠調節の機能変化に対する要因としての睡眠恒常性機能諸側面（主観的眠気、脳波検査）と概日リズム機能諸側面（放熱反応、概日リズム位相後退、夜型化）の寄与の検証である。本年度は、隔離実験を実施した。

研究協力者は 39 名の男女児童である（平均年齢 10.4±2.6 歳、範囲 6～15 歳、男女比 55%:45%）。すべての児童本人及び保護者へ説明を行い書面による同意を得た。参加にあたり児童は実験施設で 1 夜の睡眠ポリグラフ (PSG) のスクリーニングを行い睡眠に問題がないことを確認された。導入された児童は、在宅 7 日間の活動量 FS-760 の測定を行った後に実験室での実験に参加した。習慣的就床時刻の 5.5 時間前に来所し、習慣的就床時刻の 1 時間後の消灯までの間、座位安静で皮膚温測定、唾液メラトニン測定、眠気主観評価、精神運動ビジランス課題、覚醒脳波検査を行った。消灯から 7 時間の睡眠中、PSG の測定を行った。現在解析を行っている。

6) 睡眠・覚醒相後退障害に対する認知行動的アプローチに基づく治療プログラムの構築

文部科学省科学研究費補助金 若手研究 (研究代表者：綾部直子)

生体内の睡眠・覚醒リズム（体内時計）と、外部の明暗サイクルとの間にずれが生じることにより社会生活に支障が生じる「概日リズム睡眠・覚醒障害 (Circadian Rhythm Sleep-Wake Disorders: CRSWD)」がある。CRSWD は、睡眠・覚醒リズムのパターンにより数種類に分類されるが、慣習上あるいは社会的に許容される睡眠時間帯より通常 2 時間以上相対的に後退するものを「睡眠・覚醒相後退障害 (Delayed sleep-Wake phase Disorder: DSWPD)」と定義している。DSWPD は、学校や仕事の前夜に十分な睡眠時間を取るために必要な時間帯に入眠することや、通常の登校時刻や出勤時刻に起床することに対して著しい困難をきたす。さらに、気分の低下や抑うつなど気分障害との合併のしやすさも明らかにされている。特に思春期から若年成人に多く、その有病率は 7～16%とされているが、DSWPD に対する治療法は対症療法が中心となるため根治は難しい。近年、概日リズム睡眠・覚醒障害に対する認知行動的アプローチが提唱されつつあるが、検証が十分とは言えない。そこで本研究では、特に問題とされやすい DSWPD に対して、従来の時間生物学的治療に認知行動的アプローチを加えた包括的な治療プログラムの構築を行うことを目的とする。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は、都民・市民のための公開講座、講演会などにおいて睡眠と健康づくり、睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた。NHK および民放テレビ、ラジオ、オンラインサイト、新聞、雑誌等のメディアを通して、睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った。

(2) 専門教育面における貢献

各研究員は、国内各地の学術集会、研究会、談話会、医師会講演会などで睡眠障害、気分障害、認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した。栗山健一は東京農工大学（客員教授）、滋賀医科大学（客員教授）など教育機関において学生教育の援助を行った。北村真吾は、京都大学（非常勤講師）、神奈川大学（非常勤講師）、埼玉県立大学（非常勤講師）、女子栄養大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った。綾部直子は帝京大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った。

また、研究員は日本睡眠学会、日本時間生物学会、日本生物学的精神医学会、日本公衆衛生学会、不眠研究会、睡眠学研究会、関東睡眠障害懇話会、日本生理人類学会、関東脳核医学研究会などにおける理事、評議員、世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った。国際老年精神医学会、米国睡眠学会、ヨーロッパ睡眠学会、国際時間生物学会等、米国心身医学会、ヨーロッパ CBT 学会、等において講演者、シンポジスト、オーガナイザーとして研究成果を発表し、各国の第一線の研究者達と意見交換を行った。

(3) 精研の研修の主催と協力

研究員は、認知行動療法センターと連携して不眠と概日リズム睡眠-覚醒障害に対する診断横断的認知行動療法研修を実施した。2019. 11. 22-2019. 11. 23.

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

全ての研究員は、厚生労働科学研究（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）「健康づくりのための睡眠指針 2014」のブラッシュアップ・アップデートを目指した「睡眠の質」の評価及び向上手法確立のための研究（研究代表者：栗山健一）に参画し、厚生労働省健康日本 21（第 2 次）による「健康づくりのための睡眠指針」アップデートの際に活用される新たな睡眠健康指標の開発に貢献した。

栗山健一は、厚生労働科学研究（障害者政策総合研究事業）向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究（研究代表者：三島和夫）に参加し、主に睡眠薬の適正処方に関するガイドライン作成に貢献した。

(5) センター内における臨床的活動

栗山健一は、国立精神・神経医療研究センター病院睡眠障害センター長として、睡眠障害臨床部門の管理・運営の指揮を執った。

栗山健一、吉池卓也、綾部直子、吉村道孝は、国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来での診療および臨床研究を行った。

(6) その他

栗山健一は、精神保健判定医として複数の医療観察法裁判に参加し、同法の有機的・機能的運用に貢献した。

北村真吾および研究員は企業から要請された診断機器の安全性、有効性、機能向上に関する受託研究に関わった。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Miyagawa T, Hida A, Shimada M, Uehara C, Nishino Y, Kadotani H, Uchiyama M, Ebisawa T, Inoue Y, Kamei Y, Tokunaga K, Mishima K, Honda M: A missense variant in PER2 is associated with delayed sleep-wake phase disorder in a Japanese population. J Hum Genet

- 64(12): 1219-1225, 2019.
 - 2) Yoshiike T, Honma M, Ikeda H, Kuriyama K: Bright light exposure advances consolidation of motor skill accuracy in humans. *Neurobiology of Learning and Memory* 166: 107084, 2019
 - 3) Yoshiike T, Dallaspezia S, Kuriyama K, Yamada N, Colombo C, Benedetti F: Association of circadian properties of temporal processing with rapid antidepressant response to wake and light therapy in bipolar disorder. *Journal of Affective Disorders* 263: 72-79, 2020.
 - 4) Kawamura A, Yoshiike T, Yoshimura A, Koizumi, H, Nagao K, Fujii Y, Takami M, Takahashi M, Matsuo M, Yamada N, Kuriyama K: Bright light exposure augments cognitive behavioral therapy for panic and posttraumatic stress disorders: a pilot randomized control trial. *Sleep and Biological Rhythms* 18: 101-107, 2019.
 - 5) Yoshiike T, Kuriyama K, Nakasato Y, Nakamura M: Mutual relationship between somatic anxiety and insomnia in maintaining residual symptoms of depression. *Journal of Behavioral and Cognitive Therapy*, in press. doi: 10.1016/j.jbct.2020.03.012.
 - 6) Miidera, H., Enomoto, M., Kitamura, S., Tachimori, H., & Mishima, K. (2020). Association between the use of antidepressants and the risk of type 2 diabetes: A large, population-based cohort study in Japan. *Diabetes Care*, 43(4), 885–893. <https://doi.org/10.2337/dc19-1175>
 - 7) Enomoto, M., Kitamura, S., Tachimori, H., Takeshima, M., & Mishima, K. (2020). Long-term use of hypnotics: Analysis of trends and risk factors. *General Hospital Psychiatry*, 62, 49–55. <https://doi.org/10.1016/j.genhosppsych.2019.11.008>
 - 8) Abe, T., Mishima, K., Kitamura, S., Hida, A., Inoue, Y., Mizuno, K., Kaida, K., Nakazaki, K., Motomura, Y., Maruo, K., Ohta, T., Furukawa, S., Dinges, D.F., Ogata, K. (2020). Tracking intermediate performance of vigilant attention using multiple eye metrics. *Sleep*. <https://doi.org/10.1093/sleep/zsz219>
 - 9) Komada, Y., Okajima, I., Kitamura, S., & Inoue, Y. (2019). A survey on social jetlag in Japan: a nationwide, cross-sectional internet survey. *Sleep and Biological Rhythms*, 1–6. <https://doi.org/10.1007/s41105-019-00229-w>
 - 10) Kitamura, S., Takahashi, M., & Mishima, K. (2019). Sleep problem but not chronotype is associated with retirement from shift work: a cross-sectional retrospective study. *Sleep and Biological Rhythms*, 17(3), 331–337. <https://doi.org/10.1007/s41105-019-00221-4>
 - 11) Kitazawa M, Yoshimura M, Hitokoto H, Sato-Fujimoto Y, Murata M, Negishi K, Mimura M, Tsubota K, Kishimoto T. Survey of the Effects of Internet Usage on the Happiness of Japanese University Students. *Health and Quality of Life Outcomes*. 2019. Oct. 17:151.
 - 12) Takaesu Y, Utsumi T, Okajima I, Shimura A, Kotorii N, Kuriyama K, Yamashita H, Suzuki M, Watanabe N, Mishima K. Psychosocial intervention for discontinuing benzodiazepine hypnotics in patients with chronic insomnia: A systematic review and meta-analysis. *Sleep Med Rev*. 48: 101214, 2019.
- (2) 総説
- 1) 栗山健一：ストレス障害と不眠【特集ストレスと睡眠】．*ねむりとマネジメント* 6(2)：20-23, 2019.
 - 2) 栗山健一：ヒトの睡眠生理と高次脳機能．*睡眠医療* 13(3)：315-320. 2019.
 - 3) 栗本直樹, 栗山健一：【電気けいれん療法の実践・有効性と安全性の追求-】大うつ病性障害に対する電気けいれん療法と維持療法のあるべき姿 再発する患者を診た時に考えること．*総合病院精神医学* 31(1): 31-37, 2019.

- 4) 松野悟之, 吉池卓也, 吉村篤, 森田幸代, 藤井勇佑, 栗山健一: バランスパッドを用いた立位足底知覚トレーニング施行中の頭頂連合野の脳活動と足圧中心動揺指標との関連性の検討 高齢者 2 例での試み. 大阪行岡医療大学紀要 6: 17-22, 2019.
 - 5) 栗山健一: 【こころを育む眠り】第 74 回精神保健シンポジウム「こころを育む眠り」を企画して. 心と社会 50(1): 11-13, 2019.
 - 6) 坂井有里枝, 川崎翠, 森口勲, 河村葵, 栗山健一: 【こころを育む眠り】医学生の睡眠と学業成績の実態調査 医学生にも眠りは重要. 心と社会 50(1): 38-43, 2019.
 - 7) 栗山健一: 【不眠症の治療と睡眠薬】ベンゾジアゼピン受容体作動薬の是非を問う. クリニシアン 66(4): 351-356, 2019.
 - 8) 吉池卓也, 栗山健一: 不安関連疾患と光. 精神医学 61: 927-933, 2019.
 - 9) 綾部直子: 産後うつを契機とした不眠に対する CBT-I の活用と睡眠薬減量の取り組み. 睡眠医療 13(4): 481-486, 2020.
 - 10) 竹島正浩, 綾部直子, 三島和夫: 睡眠薬・抗不安薬の減薬: 3 剤以上使用例からの整理. 臨床精神薬理 23(2): 147-156, 2020.
 - 11) 西村英伍, 元村祐貴, 勝沼るり, 吉村道孝, 三島和夫, 尾方義人: 機械学習を用いた動画解析による生体情報の自動追跡技術: 瞼裂幅計測に用いた一例. 日本生理人類学. 24(1): 35-45, 2019.
 - 12) 北沢桃子, 吉村道孝, 村田まゆ, 藤本友香, 一言英文, 三村將, 坪田一男, 岸本泰士郎: 日本の大学生を対象としたインターネット使用と精神症状との関連. 精神神経学. 121 巻 8 号; 593-601, 2019.
- (3) 著書
- 1) 長尾賢太郎, 栗山健一: 精神・神経系 4 催眠鎮静薬・抗不安薬 治療薬 UP-TO-DATE 2020. メディカルレビュー社, pp35-53, 2020.1.
 - 2) 栗山健一: 5.オレキシン受容体拮抗薬. 睡眠障害の対応と治療ガイドライン. じほう, 第 3 版, pp123-125, 2019.6.
- (4) 研究報告書
- 1) 栗山健一: 睡眠時間指標を補填し国民の健康増進に資する「睡眠の質」指標の探索. 平成 31 年厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)「健康づくりのための睡眠指針 2014」のブラッシュアップ・アップデートを目指した「睡眠の質」の評価及び向上手法確立のための研究 (代表研究者: 栗山健一) 平成 31 年度総括・分担研究報告書, pp 1-12.2020.
 - 2) 栗山健一, 北村真吾, 吉池卓也: 本邦で実施された大規模調査データに基づく「睡眠の質」が健康に及ぼす影響の検討. 平成 31 年厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)「健康づくりのための睡眠指針 2014」のブラッシュアップ・アップデートを目指した「睡眠の質」の評価及び向上手法確立のための研究 (代表研究者: 栗山健一) 平成 31 年度総括・分担研究報告書, pp 13-21.2020.
 - 3) 吉池卓也, 栗山健一: 構造・機能的神経可塑性の概日ダイナミクスが抗うつ治療反応に果たす役割. 精神薬療分野, 一般研究助成. 先進医薬研究振興財団 2019 年度研究成果報告集, pp38-39, 2020.
 - 4) 栗山健一: 社会機能/QOL 改善と出口戦略を見据えた 睡眠障害のクリニカルパスの開発. 精神・神経疾患研究開発費「社会機能/QOL 改善と出口戦略を見据えた 睡眠障害のクリニカルパスの開発」(研究代表者: 栗山健一) (29-1)平成 31 年度統括・分担研究報告書, pp1-4.2020.
- (5) 翻訳

(6) その他

- 1) 吉池卓也：日本睡眠学会第 44 回定期学術集会ベストプレゼンテーション優秀賞，2019.6.28.
- 2) 吉池卓也：第 26 回日本時間生物学会学術大会優秀ポスター賞，2019.10.13.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

- 1) 栗山健一：睡眠障害と睡眠薬の効果的な使い方減，薬法に関して.国分寺市医師会・小金井市医師会合同学術講演会，東京，2019.2.13.
- 2) 栗山健一：サーカディアンリズムと健康医学. Joint Symposium on Insomnia, 京都, 2019.3.14.
- 3) 栗山健一：精神疾患併発における不眠症治療に関して．日本睡眠学会第 44 回定期学術集会，名古屋，2019.06.27-28.
- 4) 栗山健一：よくある訴えに対するマネジメント（逆説性不眠なども踏まえて）．日本睡眠学会第 44 回定期学術集会，名古屋，2019.06.27-28.
- 5) 栗山健一：睡眠脳波を用いたうつ病診断補助機器の開発プロジェクト（AMED）．日本睡眠学会第 44 回定期学術集会，名古屋，2019.06.27-28.
- 6) 栗山健一：恐怖記憶の固定化と睡眠：PTSD の新規治療法開発．日本睡眠学会第 44 回定期学術集会，名古屋，2019.06.27-28.
- 7) 北村真吾：子供の体温リズムと睡眠調節（シンポジウム 21「体温リズムと睡眠」．日本睡眠学会第 44 回定期学術集会，名古屋，2019.06.28.
- 8) 北村真吾：光と概日リズム．第 14 回日本睡眠学会・生涯教育セミナー，2019.09.01.
- 9) 吉池卓也：気分障害の覚醒療法．シンポジウム 1「体内時計と心の健康」．第 26 回日本時間生物学会学術大会，金沢，2019.10.12.
- 10) 吉池卓也：ねむけ・過眠の精神生理学的特徴．シンポジウム 30「過眠は神経症状か，精神症状か？」，第 115 回日本精神神経学会学術総会，新潟，2019.6.20.
- 11) 綾部直子：児童生徒に対する睡眠教育の重要性：心理職・スクールカウンセラーの立場から．日本睡眠学会第 44 回定期学術集会，名古屋，2019.06.28.
- 12) 綾部直子：『不眠症の認知行動療法』ワークショップ 2019．日本睡眠学会教育セミナー，名古屋，2019.06.29.

(2) 一般演題

- 1) 福水道郎，都留あゆみ，亀井雄一，三島和夫，栗山健一，北村真吾，立森久照，中川英二：小児神経科睡眠障害外来患者における 12 歳以下の睡眠障害例の臨床的検討．日本睡眠学会第 44 回定期学術集会，名古屋，2019.6.27-28.
- 2) 松井健太郎，栗山健一，小林美奈，稲田健，西村勝治，井上雄一：睡眠関連摂食障害（SRED）および夜間摂食症候群（NES）に対するラメルテオンの治療効果：後方視的ケースシリーズ．日本睡眠学会第 44 回定期学術集会，名古屋，2019.6.27-28.
- 3) 松野悟之，吉村篤，吉池卓也，森田幸代，藤井勇佑，尾関祐二，栗山健一：地域在住高齢者におけるバランスパッドを用いた 2 種類の立位足底知覚トレーニングによる立位制御能力改善効果の脳機能評価 - 近赤外分光による検討 - ．第 125 回近畿精神神経学会，兵庫，2019.07.27.
- 4) 角幸頼，松尾雅博，栗山健一，鷹見将規，角谷寛：レム睡眠行動障害における抑うつ症状の異質性認知機能・自律神経・ドパミン神経変性との関連．第 115 回日本精神神経学会学術総会，新潟，2019.6.20-22.
- 5) 山本佳樹，吉村篤，藤井勇佑，眞田陸，北村彰浩，川合寛道，栗山健一：幻覚妄想を伴う抑うつ症状を呈するパーキンソン病の治療について—電気けいれん療法が奏功した症例を通じて．第 115 回日本精神神経学会学術総会，新潟，2019.6.20-22.
- 6) 松田有史，吉村篤，藤井勇佑，眞田陸，栗山健一：双極性障害における内服自己中断の問題—

- 家族間葛藤や生活習慣など複数の要因が関係していた症例を通じて一. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-22.
- 7) 鵜飼基生, 肥田昌子, 北村真吾, 井上雄一, 三島和夫: 家族性概日リズム睡眠・覚醒相前進障害の新規遺伝要因. 第 26 回日本時間生物学会学術大会, 金沢, 2019.10.12-13.
 - 8) 北村真吾, 肥田昌子, 三島和夫: 日周指向性と社会的ジェットラグは精神的健康度と直接的に関連するが, クロノタイプは間接的に関連する. 日本睡眠学会第 44 回定期学術集会, 名古屋, 2019.6.27-28.
 - 9) 元村祐貴, 北村真吾, 中崎恭子, 大場健太郎, 勝沼りり, 寺澤悠理, 肥田昌子, 守口善也, 三島和夫: 潜在的睡眠不足からの回復は前頭前野による扁桃体賦活抑制機能の改善を介して気分を改善する: ASL-fMRI 研究. 日本睡眠学会第 44 回定期学術集会, 名古屋, 2019.6.27-28.
 - 10) 榎本みのり, 北村真吾, 肥田昌子, 樋口重和, 岡田(有竹)清夏, 三島和夫: クロノタイプ別の睡眠負債解消における睡眠圧の変化. 日本睡眠学会第 44 回定期学術集会, 名古屋, 2019.6.27-28.
 - 11) 榎本みのり, 北村真吾: 若年健常者における筋脱力のない REM 睡眠の内訳 (%). 日本生理人類学会 79 回大会, 東京, 2019.06.01-02.
 - 12) 樋口重和, 武岡功汰, 江藤太亮, 大橋路弘, 李相逸, 西村悠貴, 北村真吾, 鹿野晶子, 野井真吾: 夜の光による子どものメラトニン抑制の個人差と概日リズム位相の関係. 日本生理人類学会 79 回大会, 東京, 2019.06.01-02.
 - 13) Yoshiike T, Dallaspezia S, Kuriyama K, Yamada N, Colombo C, Benedetti F: Early circadian dynamics of time perception predict antidepressant response to sleep deprivation combined with light therapy in bipolar depression. XVI European Biological Rhythm Society Congress, Lyon, France, 2019.8.25-29.
 - 14) 吉池卓也, Sara Dallaspezia, 栗山健一, 山田尚登, Cristina Colombo, Francesco Benedetti: 双極性障害における時間知覚の日内変動とクロノセラピーに対する即時抗うつ反応の関連. 第 41 回日本生物学的精神医学会, 新潟, 2019.6.22-23.
 - 15) 吉池卓也, Sara Dallaspezia, 栗山健一, 山田尚登, Cristina Colombo, Francesco Benedetti: 双極性障害における時間知覚の日内変動はクロノセラピーに対する即時抗うつ反応と関連する. 日本睡眠学会第 44 回定期学術集会, 名古屋, 2019.6.27-28.
 - 16) 吉池卓也, 栗山健一, 中里容子, 中村元昭: うつ病の残遺症状における身体不安と不眠の相互増悪. 日本睡眠学会第 44 回定期学術集会, 名古屋, 2019.6.27-28.
 - 17) 吉池卓也, Sara Daraspezia, 栗山健一, 山田尚登, Cristina Colombo, Francesco Benedetti: Association of Circadian Properties of Time Perception with Antidepressant Effects of Wake Therapy in Bipolar Depression. 第 26 回日本時間生物学会学術大会, 金沢, 2019.10.12-13.
 - 18) Ayabe N, Mishima K, Kuriyama K: Improvement of Sleep-Wake Rhythm in Patients with Schizophrenia with Long and Irregular Sleep Through Cognitive Behavioral Therapy: A Case Study, 9th World Congress of Behavioural & Cognitive Therapies Berlin, Germany, 2019.7.17-7.20.
 - 19) 綾部直子, 吉村道孝, 栗山健一, 三島和夫: 睡眠・覚醒相後退障害に対する心理社会支援プログラム開発の試み. 第 28 回睡眠環境学会学術大会, 広島, 2019.9.5-9.6.
 - 20) 吉村道孝, 北沢桃子, 岸本泰士郎. ウェアラブル活動量計を用いた睡眠リズムと認知症との関連. 日本生理人類学会第 79 回大会, 東京, 2019.6.1-2.
 - 21) 吉村道孝, 北沢桃子, 江口洋子, 三村將, 岸本泰士郎. 高齢者における睡眠-覚醒リズム(The Sleep Regularity Index: SRI)と睡眠, 精神症状及び認知機能との関係. 日本睡眠学会第 44 回定期学術集会, 名古屋, 2019.6.27-28.
 - 22) 吉村道孝, 北沢桃子, Brian Sumali, 田澤雄基, 貝瀬有里子, 三村將, 岸本泰士郎. ウェアラブル活動量計を用いた睡眠リズムとうつ症状との関連. 第 16 回日本うつ病学会総会, 徳島,

2019.7.5-6.

- 23) 北沢桃子, 山田千晶, 吉村道孝, 川島素子, 井上佐智子, 三村將, 坪田一男, 根岸一乃, 岸本泰士郎. ドライアイ患者におけるうつ症状および不安症状に関する観察研究. 第 16 回日本うつ病学会総会, 徳島, 2019.7.5-6.
- 24) 鶴嶋史哉, 菊地俊暁, 吉村道孝, Liang Kuo-Ching, 北沢桃子, 三村將, 岸本泰士郎. 深層学習を用いた表情データによるうつ症状の重症度判定の試み. 第 16 回日本うつ病学会総会, 徳島, 2019.7.5-6.
- 25) 志賀希子, 泉啓介, 湊和修, 花城清香, Kelley Cortright, 北沢桃子, 藤田卓仙, 吉村道孝, 杉尾樹, 三村將, 岸本泰士郎. デスクワークが多い業務に従事している労働者のストレス・well-being と心理社会的な職場環境に関する考察. 第 35 回日本ストレス学会学術総会, 福岡, 2019.10.26-27.
- 26) 吉村道孝, 北沢桃子, Brian Sumali, Kuo-Ching Liang, 岸本泰士郎. スマートフォンを用いた睡眠計測の妥当性評価. 第 26 回日本末病学会学術総会, 名古屋, 2019.11.16-17.
- 27) Tazawa Y, Liang KC, Yoshimura M, Kitazawa M, Kaise Y, Takamiya A, Kishi A, Mitsykura Y, Mimura M, Kishimoto T. Evaluating Depression With Multimodal Wristband-Type Wearable Device: Accuracy of Assessing Patient Severity and Screening Based on Machine Learning. SOBP's 74th Annual Scientific Conference, Chicago, May 16-18, 2019.
- 28) Katsunuma R, Motomura Y, Yoshimura M, Moriguchi Y, Mishima K. Neural Associations of Moral Judgments Affected by Sleep Deprivation. Neuroscience and Society 2019, Melbourne, December 3-4, 2019.

(3) 研究報告会

- 1) 吉池卓也: 不安関連疾患と高照度光. 医療心理懇話会第 4 回集会, 東京, 2019.10.2-3.
- 2) 吉池卓也: Bright light-induced selective and earlier consolidation of motor skill accuracy in humans. 東京農工大学—国立精神・神経医療研究センター第 5 回合同シンポジウム, 東京, 2019.10.23.
- 3) 綾部直子, 松井健太郎, 長尾賢太郎, 高島智昭, 須賀裕輔, 立山和久, 吉池卓也, 吉田寿美子, 平林直次, 栗山健一: 精神科作業療法士による集団睡眠改善プログラム開発の試み. 不眠研究会第 35 回研究発表会, 東京, 2019.12.7.

(4) その他

C. 講演

- 1) 栗山健一: 学齢期の子どもにとってよい（望ましい）睡眠とは. 平成 31 年度学校訪問型睡眠講座, 東京都町田市立町田第六小学校, 2019.9.12.
- 2) 栗山健一: 睡眠とこころの健康. 山梨県甲府市福祉保健部健康支援センター, 2019.11.17.
- 3) 栗山健一: 不眠症に潜在する不安病態. 第 12 回 精神科臨床睡眠懇話会, 東京, 2019.8.3.
- 4) 栗山健一: 精神疾患に併存する不眠マネジメント. 学術講演会 精神医学アカデミー, 東京, 2019.7.13.
- 5) 栗山健一: 不眠症とうつ病, 神経症性障害の次元的理解. 第 7 回睡眠とうつ病の研究会 特別講演, 東京, 2019.4.23.
- 6) 栗山健一: 不眠症の病態と治療法—新規睡眠薬の使い方—. Joint Symposium on Insomnia, 京都, 2019.3.14.
- 7) 栗山健一: 睡眠障害と睡眠薬の効果的な使い方, 減薬法に関して. 国分寺市医師会・小金井市医師会合同学術講演会, 東京, 2019.2.13.
- 8) 吉池卓也: 睡眠の大切さ. 平成 31 年度学校訪問型睡眠講座, 埼玉県北本市立北小学校, 2019.7.9.

- 9) 吉池卓也：早寝早起き朝ごはん。平成 31 年度学校訪問型睡眠講座，茨城県結城市立結城南中学校，2019.12.3.
- 10) 綾部直子：「睡眠の大切さ」を知ろう。栃木県さくら市立喜連川中学校 睡眠に関する講話 PTA 講演会（睡眠健康推進機構 学校訪問型睡眠講座），栃木，2019.7.4.
- 11) 綾部直子：「睡眠の大切さ」を知ろう。栃木県那須塩原市立黒磯北中学校 睡眠講座（睡眠健康推進機構 学校訪問型睡眠講座，栃木，2019.9.17.
- 12) 綾部直子：良い睡眠で健康に～日常生活でできる快眠のコツを知ろう～。中央区日本橋保健センター精神保健講演，東京，2020.1.31.
- 13) 綾部直子：こころよく眠るためのヒケツ，平塚市睡眠に関する健康講話。神奈川，2020.2.2.
- 14) 綾部直子：睡眠 GO！目指せ，睡眠マスター！～睡眠の大切さを知ろう～。千葉県船橋市立三山東小学校学校保健委員会，千葉，2019.11.30.
- 15) 綾部直子：中学生期の睡眠について考えよう～一見直そう私たちの睡眠～。神奈川県厚木市立南毛利中学校 学校保健委員会，神奈川，2019.10.31.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 栗山健一：日本睡眠学会 幹事・評議員
- 2) 栗山健一：日本時間生物学会 評議員
- 3) 栗山健一：日本生物学的精神医学会：評議員
- 4) 肥田昌子：日本時間生物学会 評議員
- 5) 肥田昌子：日本睡眠学会 評議員
- 6) 北村真吾：日本時間生物学会 評議員
- 7) 北村真吾：日本生理人類学会 理事
- 8) 北村真吾：日本睡眠学会 評議員
- 9) 吉池卓也：日本時間生物学会 評議員
- 10) 綾部直子：日本睡眠学会 評議員
- 11) 吉村道孝：日本未病学会 評議員

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 栗山健一：日本時間生物学会誌 編集委員
- 2) 栗山健一：日本睡眠学会 用語委員会副委員長
- 3) 栗山健一：日本精神神経学会 精神医学研究推進委員
- 4) 肥田昌子：Scientific Reports, Editorial Board.
- 5) 肥田昌子：日本時間生物学会誌 編集委員
- 6) 北村真吾：Journal of Physiological Anthropology, Handling editor.

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

- 1) 綾部直子：令和元年度メンタルヘルスケア・ストレス予防等研修。文部科学省，東京，2019.12.25.

- 2) 綾部直子：令和元年度新規採用職員半年後フォローアップ研修「職場におけるメンタルヘルスマネジメント」．文部科学省，東京，2020.10.2.
- 3) 綾部直子：平成 31 年度文部科学省新規採用職員等研修「メンタルヘルス」．文部科学省，東京，2020.4.10.
- 4) 綾部直子：不眠と概日リズム睡眠・覚醒障害に対する診断横断的認知行動療法研修．国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター，東京，2019.11.22-23.
- 5) 綾部直子：院内研修「不眠症の認知行動療法」．国立精神・神経医療研究センター病院臨床検査部，東京，2019.8.26.

F. その他

- 1) 栗山健一：【TV】睡眠．NHKBS プレミアム「美と若さの新常識～カラダのヒミツ～」，2020.1.14.
- 2) 栗山健一：【TV】睡眠不足が与える脳や体への影響について．NHKBS プレミアム「偉人たちの健康診断」，2020.1.30.
- 3) 栗山健一：【雑誌】熟眠感がありません…私の眠りを妨げているものは？ 女性のカラダ相談室 日経 ARIA，日経 BP マーケティング，2020.2.24.
- 4) 栗山健一：【DVD】すいみんと発育．映像教材「小学校 新しい保健 3・4」，東京書籍
- 5) 栗山健一：【DVD】睡眠と健康．映像教材「中学校保健体育」，東京書籍
- 6) 栗山健一：【新聞】元気にキレイに コロナ禍の睡眠不足に注意「遅寝・遅起き」避けるには，朝日新聞，2019.9.5
- 7) 栗山健一：【新聞】患者を生きる「眠る－体内時計のずれ 5－」，朝日新聞，2019.9.27
- 8) 栗山健一：【新聞】患者を生きる「眠る－睡眠薬を減らす 5－」，朝日新聞，2019.11.1
- 9) 栗山健一：【Web】寝付けない・目覚ましで起きられない 体内時計が原因？，朝日新聞デジタル，2019.9.27
- 10) 栗山健一：【Web】夜眠れず、頭痛や下痢…睡眠障害の大学院生は決意の末に，朝日新聞デジタル，2019.9.28
- 11) 栗山健一：【Web】体のリズム調節する体内時計 その働き、乱れ続けると…，朝日新聞デジタル，2019.9.29
- 12) 栗山健一：【Web】不眠症治療、まずは薬物使わず 薬物治療は医師指導で，朝日新聞デジタル，2019.11.1
- 13) 栗山健一：【Web】母は娘の夜泣きで不眠に 減らせない睡眠薬、募った不安，朝日新聞デジタル，2019.11.4
- 14) 北村真吾：【新聞】メンタル・睡眠 関係深く，日経新聞夕刊，2 面 2019.05.14.
- 15) 北村真吾：【Web】寝坊さん必読「目覚め方改革プロジェクト」が睡眠の悩みに答えてくれた，マイナビニュース 2019.07.30.
- 16) 北村真吾：【Web】時差ボケ解消には光で「体内リズム」の調整を，目覚め方改革プロジェクト 2019.08.01.
- 17) 北村真吾：【Web】海外旅行の「時差ボケ」はこれで解消！，アサジョ 2019.08.25.
- 18) 北村真吾：【Web】遅寝＆遅起きで乱れた体内リズムを戻す！ 寝正月ボケのリセット術，FYTTE2020.01.04.
- 19) 北村真吾：【Web】お正月など長期休暇の「寝だめ」が実は体内リズムを乱す原因に，INTERNET WATCH2020.01.06.
- 20) 北村真吾：【Web】早起きがつらいのは意志が弱いからではない，目覚め方改革プロジェクト 2020.02.03.
- 21) 綾部直子：【新聞】患者を生きる「眠る－睡眠薬を減らす 3－」，朝日新聞 2019.10.30

9. 知的・発達障害研究部

I. 研究部の概要

知的・発達障害研究部は令和元年度も知的障害研究室、発達機能研究室の二室体制で発達障害に関する研究を進めた。当研究部は精神遅滞（知的障害）、限局性学習症（SLD）、注意欠如・多動症（ADHD）や自閉スペクトラム症（ASD）そして顕在化しにくい発達障害として知られる吃音、チック、発達性協調運動障害（DCD）など発達障害を広く捉えて、その近縁状態の発生要因解明、診断法開発、治療法策定、予防対策に関する研究を進展させている。

発達障害児・者はその障害の発生時期や原因、年齢、重症度、養育環境によりまったく異なった症状を示し、多彩な課題を抱えている。これらの問題解決のために臨床例の解析に加えて、調査研究や実験動物を用いた基礎的研究など多面的アプローチを駆使している。研究部の英語名は **Department of Developmental Disorders** であり、発達障害全般について中枢神経病態から理解して診断・治療・対策・処遇までの幅広い守備範囲を研究ターゲットとしている。

令和元年度の常勤研究員は部長（稲垣真澄）、知的障害研究室長（加賀佳美）、発達機能研究室長（北 洋輔）の3名であった。稲垣と加賀は、主として小児神経学、発達障害医学、臨床神経生理学の立場から研究を進めた。北は特別支援教育学、認知神経科学、臨床神経生理学の立場から研究を進めた。稲垣と加賀はセンター病院小児神経診療部の併任医師として ADHD、ASD や SLD といった発達障害児に対する診療を毎週定期的に行い、病院診療部のスタッフとともに臨床研究の充実のため活動を継続した。

令和元年度の流動研究員は上田理誉、江頭優佳の二名であり、併任研究員の中川栄二（センター病院特命副院長、外来部長）とともに研究を進めた。客員研究員（井上祐紀、加我牧子、軍司敦子、後藤隆章、竹市博臣、田中敦士、中村みほ、林 隆、三砂ちづる、宮島 祐、安村 明、山崎広子）の12名は研究部員と相互協力して発達障害に関する研究を実施した。研究生の12名（大井雄平、大森幹真、北村柚葵、小林朋佳、崎原ことえ、鈴木浩太、田中美歩、中村雅子、林小百合、三橋翔太、米田れい子、李 珩）が常勤研究者と共に研究を進めた。奥村安寿子は外来研究員（学術振興会特別研究員）として研究に参画した。白川由佳は科研費研究補助員として研究活動を支えた。なお、井上さゆり、秋月由紀子の二名がセンター研究助手として事務的な補助を行った。稲垣、加賀は神経研究所疾病研究所第二部の併任研究員あるいは研究生として、基盤研究にも携わった。

II. 研究活動

1) ADHD の診断・介入に関する研究

乳幼児期からの高次脳機能の発達とその障害について神経生理学的・神経心理学的アプローチにより研究を進めている。特に視・聴覚認知機能に関する研究を推進し、精神遅滞、ASD、SLD、ADHD など発達障害児・者に適用してその有用性を明らかにした。ADHD 児の多動性評価のためアクチグラフを活用する多施設共同研究を継続発展させて、定型発達小児、ASD 併存の特徴を見いだすべく発達障害児のデータ収集を精力的に進め、論文投稿に至っている。また ADHD や ASD 児の睡眠時脳波の特徴をフーリエ解析や機能的結合状態により明らかにした成果が誌上発表された。発達性協調運動障害（DCD）との関連について ADHD 児の協調運動機能が行為選択に及ぼす影響を明らかにした。てんかんの外科手術（脳梁離断）後の構造的神経ネットワークの解析成果はプレスリリースされた。（稲垣、加賀、北、江頭、上田、奥村、鈴木、加我、後藤、軍司、安村、中川。精神・神経疾患研究開発費）

2) 社会性認知機能評価に関する研究

ASD 児の脳機能の検討と早期診断法の確立をはかるため、声認知や行動モニタリングに関する脳機能評価を継続している。また、ビタミン B6 の有効性について検討した研究も継続した。ヒト

声や環境音を用いた新しい聴力検査法を確立して、健常幼児、小児および成人におけるデータ収集を行い、論文化を進めた。(稲垣、北、鈴木、加我、加賀、崎原、竹市、軍司。精神・神経疾患研究開発費、学術振興会基盤研究)

3) 学習障害、発達性協調運動障害、その他の発達障害に関する研究

発達性読み書き障害・算数障害の診断治療ガイドラインを小児科臨床現場で普及するように、講演や学会発表・誌上発表を通じて広報活動を進めた。部全体で学習障害と ADHD との併存に関する研究を進めて複数の総説を発表した。SLD 児の視覚性刺激に対する脳磁図研究では健常成人、定型発達児や SLD 児の比較検討を進めた。読み書きの標準検査バッテリー確立のため多施設共同研究(山梨大学、国立成育医療研究センター、久留米大学)を継続した。一方、DCD 診断につながる運動機能チェックリストの妥当性について日本人小児で検討し論文化した。弘前大学中村和彦教授が研究代表者を務める吃音、トゥレット、場面緘黙の早期発見尺度の検証及び併存症の調査研究の分担研究を進めた。DCD の病態解明研究の一環で爪サンプル DNA の解析や MABC-2 と関わる脳機能変化を脳波解析で見出す研究を継続し論文化を進めた。また Williams 症候群児における音楽能力と言語スキルの発達の関係についての研究も進めた。(稲垣、北、加賀、江頭、山崎、鈴木、奥村、白川、北村、中村。精神・神経疾患研究開発費、厚生労働科学研究)

4) 発達障害児を持つ家族のレジリエンス向上に関する研究

発達障害とくに ASD 児を持つ保護者の養育レジリエンスを客観的に評価可能な指標を確定し、各種保護者支援の介入前後の養育レジリエンスの変化について多くの共同研究施設で検討が進められ学会発表や誌上発表につながっている。また、共同研究者とともに家族レジリエンス尺度の開発についてもデータ収集を解析論文化したことで、これらの活用も期待され各研究機関からの問合せが続いている。(稲垣、鈴木、加賀、加我。厚生労働科学研究、精神・神経疾患研究開発費)

5) 小児副腎白質ジストロフィー症(ALD)に関する研究

進行性代謝性変性疾患の一つである小児型 ALD に対する骨髄移植(造血幹細胞移植)療法時期決定と治療後評価のための研究を継続した。脳波成分の特徴について解析を進め、発表し論文化を進めている。(稲垣、軍司、崎原、加我、中村。厚生労働科学研究)

6) 発達障害児者の初診待機等の医療的な課題と対応に関する調査研究

信州大学本田秀夫教授を事業とりまとめ者とする調査の中で稲垣、加賀そして鈴木は「発達障害児者の医療的課題の把握と対応策の構築に関する調査研究」を担当事業として受け持ち、発達障害診療に従事する小児科医、小児神経科医、児童精神科医に対して初診待機解消に関する取り組みをウェブならびに個別ヒアリング調査で進めた。その結果、2017 年 1 月の総務省報告時点より「初診待機期間」が全国で若干改善している事が明らかとなった。各医療機関は初診待機解消のために多くの工夫をしており、初診対象者の選択、診療時間・診療継続期間の適正化、コメディカルスタッフの関与など様々な取り組みが明らかとなった。発達障害診療医師を増やすためには、小児科枠、精神科枠にこだわらない同様な内容の充実した医療が提供できる体制整備が望ましいと考えられた。(稲垣、加賀、鈴木。障害者総合福祉推進事業)

7) 発達障害児の行動異常モデルに関する研究

Bronx waltzer (bv) マウスの中枢神経系病態解明はとくに ADHD、ASD など発達障害の病態研究、治療研究につながるものと考えている。bv マウスの原因遺伝子(Srrm4)の発現と不安様行動との関連や脳内 GABA 機能の異常に関する基盤研究を神経研究所疾病研究第二部後藤雄一郎長、井上 健室長との共同で遂行している。これらは発達障害の不安症状の解明と治療法開発に向けた研究につながっている。(稲垣、加賀、田中、白川、李、加我。精神・神経疾患研究開発費)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

常勤研究者は各種講演会、研修会などの場を通じて、研究成果を社会に還元した。常勤・非常勤の研究者全員が発達障害児・者とその家族に対しセンター病院において、日常的診療サポートを提供している。

(2) 専門教育面における貢献

常勤研究者は病院小児神経科レジデントなど若手医師への臨床、研究指導を日常的に行っている。毎週火曜夕方にレジデント対象の神経生理学セミナーを部内で行い、加賀や北が主に講義、実習を担当し、稲垣は病院検査室で行われた電気生理学的検査の所見判読のアドバイスをを行った。また講演会や各種セミナー、講義などにより医師、看護師、保健師、福祉関係専門職、言語聴覚士、学校教員の教育に貢献している。

稲垣は日本小児科学会専門医試験委員として小児科医師の専門知識の普及・向上に貢献した。加賀は東京農工大学工学部の学生講義を担当し、国立障害者リハビリテーションセンター学院児童指導員科の学生に対する「リハビリテーション概論：LD、ディスレクシア」の講義や山梨大学看護学科で身体観察法の中で小児発達などの診察法について教授した。また加賀は脳病態統合イメージングセンター神経生理研究室長（併任）として東京工科大学の学生の脳磁図検査施設見学の際に検査法や施設についての講義を行った。北は東京学芸大学で学習障害教育学特論、学習障害指導法について、首都大学東京で発達の心理と健康について学生講義を担当した。奥村は複数言語環境にある子どもの相談室の運営に相談員として関わった。7月の国立精神・神経医療研究センター小児神経セミナーでは、全国から集まった小児神経科医に対する講義：発達障害の診断と治療を担当した。また、第5回 NCNP メディア塾施設見学プログラムで、「読み書き障害に立ち向かう」をテーマに新聞社やテレビ局などメディア担当者に対して知的・発達障害研究部の研究成果を紹介した。防衛医科大学学生実習は稲垣、北が担当した。国立精神・神経医療研究センターの主催する発達障害やてんかんに関する市民講座には稲垣、加賀が貢献した。

(3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援法に示されている専門家養成のため、全国で開始された、かかりつけ医等発達障害対応力向上研修の基盤研修として、通算 27 回目、28 回目となる発達障害支援医学研修を企画・実施した。

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

稲垣は、環境省の子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）の評価委員として参加した。稲垣は加賀とともに日本障害者スポーツ協会専門委員会医学委員として、知的障害者の国際スポーツ大会参加における医学的判断という社会活動に貢献している。また、加賀は、障害者スポーツ医養成研修講師を務めた。併せて稲垣は独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員として、当該研究所の活動に関する指導助言を行った。稲垣は小平市教育委員会特別支援教育専門家委員会委員、いじめ問題対策委員会委員として行政施策に対する提言を行った。稲垣は日本小児神経学会ガイドライン統括委員会委員として日本医療機能評価機構が提供する診療ガイドライン作成手順を小児神経学分野で応用することに深く関わっている。稲垣と加賀はチック症診療ガイドライン作成ワーキングメンバーとしても参画している。

(5) センター内における臨床的活動

全員が病院に併任としてセンター内の臨床的活動に関わり、知的障害、ADHD、ASD、SLD など発達障害の診療に定期的に携わっている。

(6) その他

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Kita Y, Ashizawa F, Inagaki M: Is the motor skills checklist appropriate for assessing children in Japan? *Brain and Development* 41(6): 483-489, 2019. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.braindev.2019.02.012>
- 2) Kita Y, Ashizawa F, Inagaki M: Prevalence estimates of neurodevelopmental disorders in Japan: A community sample questionnaire study. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 2019. DOI: 10.1111/pcn.12950
- 3) Yasumura A, Omori M, Fukuda A, Takahashi J, Yasumura Y, Nakagawa E, Koike T, Yamashita Y, Miyajima T, Koeda T, Aihara M, Inagaki M: Age-related differences in frontal lobe function in children with ADHD. *Brain and Development* 41(7): 577-586, 2019. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.braindev.2019.03.006>
- 4) Ueda R, Matsuda H, Sato N, Iwasaki M, Sone D, Takeshita E, Motohashi Y, Ishiyama A, Saito T, Komaki H, Nakagawa E, Sugai K, Sasaki M, Kaga Y, Takeichi H, Inagaki M: Alteration of the anatomical covariance network after corpus callosotomy in pediatric intractable epilepsy. *PLoS ONE* 14 (12): e0222876, 2019. DOI:10.1371/journal.pone.0222876
- 5) Ueda R, Takeichi H, Kaga Y, Oguri M, Saito Y, Nakagawa E, Maegaki Y, Inagaki M: Atypical gamma functional connectivity pattern during light sleep in children with attention deficit hyperactivity disorder. *Brain and Development* 42 (2): 129-139, 2020. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.braindev.2019.11.001>
- 6) Kitamura Y, Kita Y, Okumura Y, Kaga Y, Okuzumi H, Ishikawa Y, Nakamura M, Inagaki M: Discrepancy between musical ability and language skills in children with Williams syndrome. *Brain and Development* 42(3): 248-255, 2020. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.braindev.2019.12.002>
- 7) Saito Y, Kaga Y, Nakagawa E, Okubo M, Kohashi K, Omori M, Fukuda A, Inagaki M: Association of inattention with slow-spindle density in sleep EEG of children with attention deficit-hyperactivity disorder. *Brain and Development* 41(9): 751-759, 2019. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.braindev.2019.05.004>
- 8) Suzuki W, Seno T, Yamashita W, Ichinohe N, Takeichi H, Palmisano S: Vection induced by low-level motion extracted from complex animation films. *Experimental Brain Research* 237(12): 3321-3332, 2019. DOI: <https://doi.org/10.1007/s00221-019-05674-0>.
- 9) 北 洋輔, 芦沢文子, 稲垣真澄: 発達性読み書き障害の早期発見に向けた行動観察項目の開発. *小児保健研究* 78(3): 191-198, 2019.
- 10) 北 洋輔, 白川由佳, 鈴木浩太, 江頭優佳, 加賀佳美, 北村柚葵, 西村悠貴, 山下裕史郎, 稲垣真澄: 注意欠如多動症児の協調運動機能が行為選択に及ぼす影響. *脳と発達*, 52(1):5-10, 2019. DOI: <https://doi.org/10.11251/ojiscn.52.5>
- 11) 奥村安寿子, 北 洋輔, 加賀佳美: 日本語によるコミュニケーションが不十分な子どもの学習困難を評価する: スウェーデン語母語児に対する学習・知能検査の事例より. *コミュニケーション障害学* 36(3): 99-112, 2019.
- 12) 北村柚葵, 北 洋輔, 奥村安寿子, 稲垣真澄, 奥住秀之, 石川裕司: 小児期における音高弁別能力の発達的变化. *音楽知覚認知研究* 25(1): 3-12, 2019.

(2) 総説

- 1) 稲垣真澄, 米田れい子: 知的障害. 1361 専門家による私の治療 2019-20 年度版 電子コンテンツ S23, 日本医事新報社, 東京, 2019.
DOI: <https://www.jmedj.co.jp/premium/treat2019/data/0023/?page=25>
- 2) 稲垣真澄: 第2回研究集会(東京)公開シンポジウム「顕在化しにくい発達障害の早期発見と支援」報告. LD 研究 28(3): 316-318, 2019.
- 3) 稲垣真澄, 加賀佳美: 学習障害(LD)・限局性学習症(SLD). 日本医事新報社 No.4978 p49, 2019.
- 4) 加我牧子: 小児聴覚失認の臨床. 認知神経科学 21(3, 4): 172-178, 2019.
- 5) 齋藤貴志, 加賀佳美: 限局性学習症/限局性学習障害. 小児科臨床 別刷 72(2019-増刊号): 1313-1316, 2019.

(3) 著書

- 1) Kaga M: Neurophysiology and neuropsychology in adrenoleukodystrophy (ALD). Imanaka T, Shimozawa N, eds.: Peroxisomes: biogenesis, function, and role in human disease. Springer Press, Singapore, pp261-279, 2019.
- 2) 稲垣真澄, 上田理登: 知的能力障害のアセスメントと支援. 松田 修, 飯干紀代子, 小海宏之 編: 基礎から学ぶ神経心理学, ミネルヴァ書房, 東京, pp118-123, 2019.
- 3) 稲垣真澄, 加賀佳美: 知的障がい(発達障がいを含む). (公財)日本障がい者スポーツ協会 編: 障がいのある人のスポーツ指導教本. ぎょうせい, 東京, pp89-97, 2020.
- 4) 北 洋輔: 学習障害の心理学研究. 北 洋輔, 平田正吾 編: 発達障害の心理学. 福村出版, 東京, pp126-155, 2019.
- 5) 軍司敦子: 自閉症スペクトラム障害の心理学研究の今後. 北 洋輔, 平田正吾 編: 発達障害の心理学. 福村出版, 東京, pp85-96, 2019.
- 6) 奥村安寿子: 注意欠如多動性障害の心理学研究. 北 洋輔, 平田正吾 編: 発達障害の心理学. 福村出版, 東京, pp97-116, 2019.
- 7) 鈴木浩太: 脳活動の計測技術から発達障害を捉える. 北 洋輔, 平田正吾 編: 発達障害の心理学. 福村出版, 東京, pp27-41, 2019.

(4) 研究報告書

- 1) 稲垣真澄, 加賀佳美, 鈴木浩太: 発達障害児者の医療的課題の把握と対応策の構築に関する調査研究. 令和元年度障害者総合福祉推進事業「発達障害児者の初診待機等の医療的な課題と対応に関する調査(事業とりまとめ者: 本田秀夫)」令和元年度研究報告書. pp33-55, 2020.

(5) 翻訳**(6) その他**

- 1) 稲垣真澄: 僕は漢字が書けません. NHK 政治マガジン, 2019.6.12.
<https://www.nhk.or.jp/politics/articles/feature/18611.html>
- 2) 加賀佳美: 知的・発達障がいの病理. 障がい者スポーツ医養成講習会, 障がい者スポーツ指導者養成講習会・研修会報告書 平成30年度, pp131-150, 2019.3.31
- 3) 原 恵子, 稲垣真澄: 2018年度公開シンポジウム(東京)顕在化しにくい発達障害の早期発見と支援. 一般社団法人 日本LD学会 会報 第109号, pp9-10, 2019.6.25.

B. 学会・研究会における発表**(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等**

- 1) 稲垣真澄: 注意欠如・多動症に対するニューロフィードバックの有用性: 訓練効果の予測を中

- 心に. 教育講演 15-2 発達障害 第 49 回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2019.11.29.
- 2) 加賀佳美: 日本における女性研究者の現状と小児神経学会の男女共同参画のための取り組み. Presidential talk event Is glass ceiling present? Toward the equal opportunity of women in child neurology 第 61 回日本小児神経学会学術集会, 愛知, 2019.5.31.
 - 3) 加賀佳美: Associate Editor の役割. 脳と発達編集委員会主催セミナー 論文査読セミナー 第 61 回日本小児神経学会学術集会, 愛知, 2019.5.31.
 - 4) 加賀佳美: 小児てんかん児における実行機能障害. 第 53 回日本てんかん学会学術集会, 兵庫, 2019.10.31.
 - 5) 加賀佳美: 注意欠如多動症 (ADHD) の非侵襲的脳機能評価法: ERP と fNIRS 研究を中心に. シンポジウム 17 発達障害の神経生理学的解析 第 49 回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2019.11.29.
 - 6) 北 洋輔, 平田正吾, 池田吉史, 勝二博亮, 鈴木浩太, 奥村安寿子, 軍司敦子, 後藤隆章: 特別支援教育における発達障害への実験的接近(6) ～生理指標の利用と脳波計測の実演～. 自主シンポジウム 9-14 日本特殊教育学会 第 57 回大会(2019 広島大会), 広島, 2019.9.23.
 - 7) 北 洋輔: 発達性協調運動症の脳機能: ERP 研究を中心に. シンポジウム 18 共感の神経生理学-発達障害を理解するために- 第 49 回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2019.11.29.
 - 8) 北 洋輔: 多言語環境下にある発達障害児の認知特性. 教育講演 15-1 発達障害 第 49 回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2019.11.29.
 - 9) 江頭優佳: ヒト脳機能研究を軸とした研究生活のこれまでとこれから. 日本生理人類学会 第 80 回大会, 愛知, 2019.10.27.
 - 10) 江頭優佳, 加賀佳美, 軍司敦子, 北 洋輔, 木村元洋, 廣永成人, 金子 裕, 高橋秀俊, 花川 隆, 稲垣真澄: 漢字熟語逸脱検出時の視覚ミスマッチフィールドの検討. サテライトシンポジウム 5 第 3 回 MMN 研究会 第 49 回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2019.11.30.
 - 11) 中川栄二: 神経発達症の診断と治療. 教育講演 14 第 61 回日本小児神経学会学術集会, 愛知, 2019.6.2.
 - 12) 中川栄二: 脳波異常を伴う発達障害におけるバルプロ酸の効果. 第 53 回日本てんかん学会学術集会, 兵庫, 2019.10.31.
 - 13) 井上祐紀: 親と子のストレングスに着目した超早期療育をめざして. 特別講演 2 第 71 回日本小児神経学会関東地方会, 東京, 2019.9.28.
 - 14) 加我牧子: 小児聴覚失認の臨床. 会長講演 第 24 回認知神経科学学会学術集会, 東京, 2019.7.14.
 - 15) 岩崎真樹, 上田理誉, 松田博史, 竹市博臣, 曾根大地, 佐藤典子, 住友典子, 齋藤貴志, 中川栄二, 稲垣真澄: 小児難治性てんかんに対する脳梁離断術後の脳構造ネットワーク変化. シンポジウム 8 てんかんと脳梁離断 第 49 回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2019.11.28.
 - 16) 是松聖悟, 宮本雄策, 村松一洋, 山中 岳, 白石秀明, 吉永治美, 中川栄二, 稲垣真澄, 金村英秋, 小林勝弘: 脳波等神経生理検査時の鎮静における医療安全に関する提言・指針の作成. 医療安全委員会主催セミナー 医療安全に関する WG からの提言 第 61 回日本小児神経学会学術集会, 愛知, 2019.5.31.

(2) 一般演題

- 1) Kita Y, Suzuki K, Shirakawa Y, Kaga Y, Kitamura Y, Arakaki K, Mitsuhashi S, Okuzumi H, Inagaki M: Catechol O-methyltransferase polymorphism affects Movement ABC-2 performance profile. 13th International Conference on Developmental Coordination Disorder (DCD-13), Jyväskylä, 2019.6.5-8.
- 2) Egashira Y, Kaga Y, Gunji A, Kita Y, Kimura M, Hironaga N, Kaneko Y, Takahashi H, Hanakawa T, Inagaki M: Deviance detection of Kanji compounds using with magnetoencephalography. 14th International Congress of Physiological Anthropology 2019,

- Singapore, 2019.9.24-27.
- 3) Tanaka M, Kaga Y, Shirakawa Y, Inagaki M: The effects of valproic acid for abnormal sleep rhythm in mice with partial defect of Srrm4. 6th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology, Fukuoka, 2019.10.12.
 - 4) 上田理誉, 松田博史, 佐藤典子, 岩崎真樹, 竹下絵里, 本橋裕子, 石山昭彦, 齋藤貴志, 中川栄二, 須貝研司, 佐々木征行, 加賀佳美, 竹市博臣, 稲垣真澄: 脳梁離断手術後のてんかん発作予後良好群の脳構造ネットワーク変化. 第 61 回日本小児神経学会学術集会, 愛知, 2019.5.31.
 - 5) 上田理誉, 松田博史, 佐藤典子, 岩崎真樹, 曾根大地, 竹下絵里, 本橋裕子, 石山昭彦, 齋藤貴志, 小牧宏文, 中川栄二, 須貝研司, 佐々木征行, 竹市博臣, 加賀佳美, 稲垣真澄: 脳梁離断術後のてんかん発作予後良好群の脳構造ネットワーク変化. 東京農工大学-国立精神・神経医療研究センター 第 5 回合同シンポジウム, 東京, 2019.10.23.
 - 6) 上田理誉, 加賀佳美, 竹下絵里, 本橋裕子, 石山昭彦, 齋藤貴志, 中川栄二, 須貝研司, 佐々木征行, 岩崎真樹, 稲垣真澄: 通常の学級に在籍する小児てんかん患者の適応行動とその関連要因. 第 53 回日本てんかん学会学術集会, 兵庫, 2019.11.1.
 - 7) 上田理誉, 竹市博臣, 大栗聖由, 加賀佳美, 齋藤良彦, 中川栄二, 前垣義弘, 稲垣真澄: 小児 ADHD 浅睡眠脳波におけるガンマ帯域の脳連結パターンについて. 第 49 回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2019.11.29.
 - 8) 江頭優佳, 加賀佳美, 軍司敦子, 北 洋輔, 木村元洋, 廣永成人, 金子 裕, 高橋秀俊, 花川 隆, 稲垣真澄: 漢字熟語認知における逸脱を反映する脳磁場反応. 第 34 回日本生体磁気学会, 北海道, 2019.6.21.
 - 9) 加我牧子, 崎原ことえ, 軍司敦子, 中村雅子, 稲垣真澄: 小児副腎白質ジストロフィー症 (ALD) の発症前造血幹細胞移植 (HSCT) の予後. 第 122 回日本小児科学会学術集会, 石川, 2019.4.21.
 - 10) 北村柚葵, 北 洋輔, 奥村安寿子, 加賀佳美, 奥住秀之, 石川裕司, 中村みほ, 稲垣真澄: Williams 症候群児における音楽能力と言語スキルの発達の関係. 音楽知覚認知学会 2019 年度秋季研究発表会, 青森, 2019.11.10.
 - 11) 鈴木浩太, 北 洋輔, 白川由佳, 江頭優佳, 加賀佳美, 北村柚葵, 三橋翔太, 新垣香菜子, 奥住秀之, 稲垣真澄: 運動の不器用さが反応抑制に関わる事象関連電位成分に及ぼす影響. 日本心理学会第 83 回大会, 大阪, 2019.9.12.
 - 12) 斉藤まなぶ, 北 洋輔, 稲垣真澄: 就学前の DCD 早期発見のためのチェックリストの完成. 第 3 回日本 DCD 学会学術集会, 長崎, 2019.4.14.
 - 13) 斉藤まなぶ, 北 洋輔, 大里絢子, 三上美咲, 小枝周平, 三上珠希, 稲垣真澄, 中村和彦: 就学前の発達性協調運動障害 (DCD) 早期発見のためのチェックリストと活用マニュアルの完成～顕在化しにくい発達障害を早期に抽出するアセスメントツールの開発研究から～. 第 60 回日本児童青年精神医学会総会, 沖縄, 2019.12.7.

(3) 研究報告会

- 1) 稲垣真澄: 衝動性・多動性の診断と治療メニュー作成: ASD 併存の特徴. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 29-6「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」 令和元年度班会議, 東京, 2019.12.17.
- 2) 稲垣真澄, 加賀佳美, 鈴木浩太: 発達障害児者の医療的課題の把握と対応策の構築に関する調査研究. 厚生労働省 2019 年度障害者総合福祉推進事業 本田班 第 3 回検討委員会, 東京, 2020.1.19.
- 3) 加賀佳美: 実行機能・社会性機能障害の診断と治療メニュー作成: ASD 併存の特徴. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 29-6「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」 令和元年度班会議, 東京, 2019.12.17.
- 4) 加賀佳美, 稲垣真澄, 上田理誉, 中川栄二, 齋藤貴志, 石山昭彦, 佐々木征行, 岩崎真樹, 竹

市博臣：てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明．国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 1-4 「てんかんの病態解明と併存症を含めた先駆的・包括的診断と治療方法の開発」班 令和元年度第1回研究班会議，東京，2019.6.9.

- 5) 中川栄二，佐伯幸治：精神症状，神経発達症を伴う小児てんかんの臨床病態の解明と対応．国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 1-4 「てんかんの病態解明と併存症を含めた先駆的・包括的診断と治療方法の開発」班 令和元年度第1回研究班会議，東京，2019.6.9.
- 6) 中川栄二：神経学的評価と睡眠異常の診断と治療メニュー作成：ASD 併存の特徴．国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 29-6「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」 令和元年度班会議，東京，2019.12.17.
- 7) 齋藤貴志，岩崎真樹，大久保 亮，中川栄二，宮川 希，山之内芳雄：NDB を使用したてんかん疫学調査．国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 1-4 「てんかんの病態解明と併存症を含めた先駆的・包括的診断と治療方法の開発」班 令和元年度第1回研究班会議，東京，2019.6.9.
- 8) 金澤恭子，山田知香，藤井裕之，森本笑子，木村有喜男，池谷直樹，西川典子，塚本 忠，齋藤貴志，佐藤典子，岩崎真樹，高橋祐二，中川栄二：成人・高齢者てんかんの臨床病態と治療の解析．国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 1-4 「NDB を使用したてんかん疫学調査」班 令和元年度第1回研究班会議，東京，2019.6.9.

(4) その他

- 1) 稲垣真澄：読み書き困難少年の逆転の発想．日本テレビ，ザ！世界仰天ニュース，医学監修，2019.4.23.
- 2) 稲垣真澄：自閉症の少年と猫．TBS テレビ，笑える！泣ける！動物スクープ 100 連発，医学監修，2019.9.25.
- 3) 稲垣真澄：アクチグラフ研究成果の紹介．出口小児科医院院内講演会，長崎，2020.1.9.
- 4) 稲垣真澄：強盗から主人を守った犬．TBS テレビ，笑える！泣ける！動物スクープ 100 連発，医学監修，2020.1.9.
- 5) 加賀佳美：NIRS 研究成果の紹介．出口小児科医院院内講演会，長崎，2020.1.9.

C. 講演

- 1) 稲垣真澄：発達障害とは何か：ADHD を中心に．東京農工大学 令和元年度脳神経科学講義，東京，2019.7.17.
- 2) 稲垣真澄：学習障がい理解と児童生徒への支援策．令和元年度第4回草加市特別支援教育担当教員育成研修会，埼玉，2019.8.22.
- 3) 稲垣真澄：顕在化しにくい発達障害の早期発見．鳥取県立鳥取療育園 2019 年度職員向け研修会，鳥取，2019.9.13.
- 4) 稲垣真澄：顕在化しにくい発達障害の早期発見に向けた取り組み．第3回小児神経・児童思春期精神医学夏期セミナー九州大会，大分，2019.9.29.
- 5) 稲垣真澄：限局性学習症の診断と支援 ～読み書き障害を中心に～．第38回信州精神神経学会 教育講演2，長野，2019.10.19.
- 6) 稲垣真澄：学習障がいのこどもへのアプローチ ～読み書き障がいを中心に～ (1)分かりにくい発達障がいの気づきを促すチェックリストの開発と活用．福岡市発達障がい者支援センター ゆうゆうセンター支援者向け 発達障がいトピック講座②，福岡，2019.10.26.
- 7) 稲垣真澄：学習障がいのこどもへのアプローチ ～読み書き障がいを中心に～ (2)読み書き障がいの診断と支援について．福岡市発達障がい者支援センター ゆうゆうセンター支援者向け 発達障がいトピック講座②，福岡，2019.10.26.

- 8) 稲垣真澄：顕在化しにくい発達障害の早期発見のためのチェックリスト：CLASP の開発経緯と今後の展開。東京都立東部療育センター第36回医局講演会，東京，2020.1.21.
- 9) 稲垣真澄：学習障害。NCNP 市民公開講座「発達障害の最新の知見」，東京，2020.2.15.
- 10) 加賀佳美：注意欠如多動症。NCNP 市民公開講座「発達障害の最新の知見」，東京，2020.2.15.
- 11) 中川栄二：自閉スペクトラム症。NCNP 市民公開講座「発達障害の最新の知見」，東京，2020.2.15.
- 12) 奥村安寿子：バイリンガル・マルチリンガルの子どもの読み書き：実態と習得過程から考える日本語指導。神奈川県立国際言語文化アカデミア，外国籍県民等支援ボランティア養成講座，神奈川，2019.6.8.

D. 学会活動

(1) 学会主催

- 1) 稲垣真澄：第24回認知神経科学学会学術集会 副会長，東京，2019.7.13-14.
- 2) 加我牧子：第24回認知神経科学学会学術集会 会長，東京，2019.7.13-14.

(2) 学会役員

- 1) 稲垣真澄：日本臨床神経生理学会 理事
- 2) 稲垣真澄：日本小児神経学会 評議員
- 3) 稲垣真澄：日本小児神経学会 ガイドライン統括委員会 委員
- 4) 稲垣真澄：日本小児神経学会 チック診療ガイドライン策定 WG 委員
- 5) 稲垣真澄：日本神経精神薬理学会 評議員
- 6) 稲垣真澄：小児脳機能研究会 代表世話人
- 7) 稲垣真澄：日本発達障害学会 評議員
- 8) 稲垣真澄：日本てんかん学会 てんかん専門医指導医
- 9) 加賀佳美：日本小児神経学会 評議員
- 10) 加賀佳美：日本小児神経学会 長期計画委員会 委員
- 11) 加賀佳美：日本小児神経学会 チック診療ガイドライン策定 WG 委員
- 12) 加賀佳美：日本臨床神経生理学会 代議員
- 13) 加賀佳美：山梨小児神経懇話会 評議員
- 14) 加賀佳美：日本てんかん学会 てんかん専門医指導医
- 15) 加賀佳美：小児脳機能研究会 世話人
- 16) 北 洋輔：日本発達性協調運動障害学会 理事

(3) 座長

- 1) 稲垣真澄：座長 実践教育セミナー4. 初心者向け脳波を読むコツ：ハンズオン 第61回日本小児神経学会学術集会，愛知，2019.5.30.
- 2) 稲垣真澄：司会 シンポジウム 環境が変わる・環境で変わる発達障害の認知機能：ミクロからマクロのエビデンス。第24回認知神経科学学会学術集会，東京，2019.7.13.
- 3) 稲垣真澄：座長 奨励賞受賞記念講演。第49回日本臨床神経生理学会学術大会，福島，2019.11.28.
- 4) 稲垣真澄：座長 シンポジウム 18 共感の神経生理学—発達障害を理解するために—。第49回日本臨床神経生理学会学術大会，福島，2019.11.29.
- 5) 稲垣真澄：座長 発達障害。第49回日本臨床神経生理学会学術大会，福島，2019.11.29.
- 6) 加賀佳美：チューター 実践教育セミナー4. 初心者向け脳波を読むコツ：ハンズオン 第61回日本小児神経学会学術集会，愛知，2019.5.30.
- 7) 加賀佳美：司会 一般口演 1. 第24回認知神経科学学会学術集会，東京，2019.7.14.
- 8) 加我牧子：司会 招待講演。第24回認知神経科学学会学術集会，東京，2019.7.14.

- 9) 奥村安寿子, 北 洋輔: 講演通訳 From practice to research and back again: Addressing the needs of DCD children. 第3回日本DCD学会学術集会, 長崎, 2019.4.14.
- 10) 奥村安寿子, 北 洋輔: 講義通訳 Cognitive Orientation to daily Occupational Performance: CO-OP 講習会, 長崎, 2019.4.15-16.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 稲垣真澄: 日本小児神経学会機関誌「Brain & Development」Managing Editor
- 2) 稲垣真澄: 日本発達障害学会機関誌「発達障害研究」編集委員
- 3) 加賀佳美: 日本小児神経学会 「脳と発達」編集委員会 副編集長
- 4) 北 洋輔: 日本小児神経学会機関誌「Brain & Development」Editorial Board
- 5) 北 洋輔: 日本小児神経学会機関誌 「脳と発達」編集委員会 アドバイザー

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 第27回発達障害支援医学研修, 東京, 2019.6.26-27.
- 2) 第28回発達障害支援医学研修, 東京, 2020.1.29-30.

F. その他

- 1) 令和元年度 第52回日本てんかん学会学術集会みなとみらい賞: 対象論文 (上田理誉, 松田博史, 佐藤典子, 岩崎真樹, 竹下絵里, 本橋裕子, 石山昭彦, 齋藤貴志, 中川栄二, 須貝研司, 佐々木征行, 加賀佳美, 竹市博臣, 稲垣真澄: 脳梁離断手術後のてんかん発作予後良好群の脳構造ネットワーク変化. 第61回日本小児神経学会学術集会, 愛知, 2019.5.31.)
- 2) 令和元年度 Excellent Presentation Award for AsCNP 2019: 対象論文 (Tanaka M, Kaga Y, Shirakawa Y, Inagaki M: The effects of valproic acid for abnormal sleep rhythm in mice with partial defect of Srrm4. 6th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology, Fukuoka, 2019.10.12.)
- 3) 令和元年度 福山幸夫アワード: 対象論文 (Saito Y, Kaga Y, Nakagawa E, Okubo M, Kohashi K, Omori M, Fukuda A, Inagaki M: Association of inattention with slow-spindle density in sleep EEG of children with attention deficit-hyperactivity disorder. Brain and Development 41(9): 751-759, 2019.10. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.braindev.2019.05.004>)

10. 地域・司法精神医療研究部

I. 研究部の概要

当研究部は、生物・心理・社会的観点から精神障害を多面的に捉え、地域に暮らす精神障害者とその家族が主体的な生活を送るための支援技法やシステムの開発、その効果に関する実証的研究を当事者のリカバリー支援の観点から実施することを活動の中心としている。また、医療観察法に基づく医療の検証を通じて、医療観察法の対象者への支援や権利擁護のあり方、それらの一般精神科医療への適用に関する検討を行うことも重要な柱のひとつである。研究活動を通じて政策としても取り入れることが可能な支援モデルを提示し、自治体や専門職、市民への教育研修等を実施してそれらの普及を図ることにより、研究成果の社会への還元を行っている。

研究の実施にあたっては、以下の人員構成で活動を行うとともに、センター病院専門疾病センターの「こころのリカバリー地域支援センター」のデイケア、訪問看護ステーション PORT、所沢市アウトリーチ支援チーム、医療観察法病棟との協働、研究所内の他部との連携および外部機関とのネットワークの構築についても重視している。

令和元年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：藤井千代、精神保健サービス評価研究室長：山口創生、臨床援助技術研究室長：佐藤さやか、司法精神保健研究室長：菊池安希子、制度運用研究室長：河野稔明、常勤研究員：大隅尚広、流動研究員：松長麻美、小塩靖崇、小池純子、塩澤拓亮、科研費研究員：小川 亮、阿部真貴子、科研費研究補助員：岡野茉莉子、藤本 悠（7/1～）相田早織（～2/29）併任研究員：平林直次、坂田増弘、佐竹直子、竹田康二（10/15～）、柏木宏子（10/15～）、客員研究員：伊藤順一郎、福井里江、瀬戸屋雄太郎、吉田光爾、橘 薫子、杉山直也、美濃由紀子、三澤孝夫、曾雌崇弘、研究生：安間尚徳、橋本理恵子、久永文恵、澤田宇多子、松本衣美（4/15～）、所沢市アウトリーチ支援チームについては、統括管理責任者：下平美智代、看護師：中西清晃、精神保健福祉士：西内絵里沙、真行寺伸江、作業療法士：大迫直樹、科研費心理療法士：臼井 香、曹 由寛。

II. 研究活動

- 1) 地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究（藤井、菊池、佐藤、山口、松長、小池）

地域精神保健医療福祉制度の充実により精神障害者が地域で安心して自分らしく生活できるようにするため、エビデンスに基づいた効果的な精神保健医療福祉サービスを地域でより効果的に展開するための具体的かつ実現可能な提言を行うことを目的として、以下の7つの分担班で研究を実施している。

A. 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に関する研究

精神科病院及び診療所、障害福祉サービス事業所に対し、包括ケアシステム構築のニーズと自治体との協働の状況に関する調査の実施、自治体によるアウトリーチ支援の普及が進まない要因に関する調査等を実施し、包括ケアシステム構築における精神科医療機関及び障害福祉サービス事業所の役割、アウトリーチの普及のあり方等につき検討した。

B. 精神科外来機能強化に関する研究

県立高松病院の協力により、包括的支援マネジメント実践ガイドに基づく支援の効果検証を行った。デイケア大規模調査の二次分析、精神科在宅患者支援管理料の算定状況調査も併せて実施した。来年度以降、効果検証を継続する。

C. 措置入院及び退院後支援のあり方に関する研究

措置入院運用ガイドライン、退院後支援ガイドラインの運用実態調査を行い、ガイドライン実装に係る課題を明らかにした。グレーゾーンに係る課題については、昨年度までに実施した調

査の結果に基づき関係者間の協議を踏まえてグレーゾーンに関する課題整理を行った。来年度以降に警察官アンケート、グレーゾーン事例研修の効果検証を行う。

D. 措置通報及び措置入院の実態に関する研究

438人の措置入院患者について提供された医療等のサービス及び転帰に関する前向き調査を実施し、頻回措置入院者の特徴、総合病院における措置入院への対応等につき検討を行った。今後は警察官通報、検察官通報の実態調査を予定している。

E. 精神医療審査会のあり方に関する研究

全国精神医療審査会連絡協議会に対し、代理人請求の実態調査を行い、審査状況や審査に関する課題について明らかにした。来年度以降は、これまでに収集した困難事例の質的検討により、精神医療審査会の課題の整理及び改善策の提言を行う。

F. 精神障害者の意思決定及び意思表示支援に関する研究

患者及び精神科医に対する調査、意思決定支援ツールの検証を行った。また、入院中の精神障害者の権利擁護のための個別支援のあり方につき、当事者グループと共に検討を行った。来年度以降は、石巻市で実行可能性につき検証する。研究成果に基づき意思決定支援及び権利擁護のための個別支援に関する研修資料を作成し、シンポジウムや研修会を開催するなどして医療現場への普及を図る。

G. 精神保健医療福祉制度の国際比較

英国 NHS からの協力を得て、イングランド、ウェールズ、スコットランド、オーストラリア、米国、カナダ、フィンランド等の国と精神病床や平均在院日数、メンタルヘルスにかかる医療費等について比較した。今後は平均在院日数が短い国に関して、入院中及び退院後に提供されている医療・支援の特徴につき情報収集を行う。

2) 精神科救急・急性期病棟の入院患者のコホート研究 (ePOP-J 研究) (山口, 藤井, 菊池, 松長, 小塩, 小池, 小川)

プロジェクト名は「早期に退院する精神障害者における再入院と地域定着に影響する要因に関する縦断研究 (Early discharge and Prognostic community Outcomes for Psychiatric inpatients in Japan [ePOP-J]: A longitudinal study)」としている。本研究は、多施設での前向き縦断研究を通して、精神科医療機関における救急病棟や急性期病棟に入院し、かつ1年未満で退院する入院患者を対象として、入院時から追跡を開始し、退院後12ヵ月間にわたって追跡調査を実施し、退院後12ヵ月間の再入院(アウトカム)と個人の主観的指標(特に生活の質)の推移の関連を探ることを第1の目的とする。また、その他の曝露データ(個人の特性・薬剤治療の内容・入院中の薬剤以外の支援内容、退院後の支援状況、地域・環境の特性)を収集し、アウトカムに関連しうる要因を包括的に検証することを第2の目的としている。本研究には国内21の精神科病院が参加しており、当初予定の635名の患者組み入れを完了した。現在、追跡調査の継続中である。

3) アウトリーチ支援における認知行動療法の提供に関する研究 (佐藤, 松長, 塩澤, 小川)

Assertive Community Treatment (ACT) 支援における認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy: CBT) の効果について Cluster Randomized Controlled Trial (クラスターRCT) デザインによる介入研究を実施した。全国の ACT チーム 15 機関から研究協力を得て、これらのチームをランダムに2群に分け、8チームを介入群、7チームを対照群とし、それぞれ50名(平均年齢 45.11 ± 9.93 歳), 44名(平均年齢 42.16 ± 11.56 歳)の利用者をリクルートした。ベースライン調査終了後から2ヵ月1回、介入群チームを対象に CBT に関する研修及び事例検討会を実施し、これを踏まえた CBT 実践を各チームで12ヵ月間を提供した。分析の結果、精神症状や社会的機能だけでなく、主観的な不安感等にも介入群にのみ有意な改善があった。また、利用者1人あたりにかかる医療費、障害福祉サービス費および訪問回数の1ヵ月あたりの

平均値を算出した。この結果、対照群と比べて対照群のほうがかかる費用が低く、訪問回数も少なかった。以上の検討から ACT チームのような多職種アウトリーチチームによる CBT の提供は利用者の臨床像や生活上の課題を改善することに加え、医療費や障害福祉サービス費用を抑えられることが示唆された。

4) 個別援助付き雇用に関する研究（山口、佐藤、松長、小塩、塩澤）

精神障害者に対する就労支援として最も効果的とされる **individual placement and support (IPS)** に準ずる個別型援助付き雇用の均てん化とプロセスに関する調査に取り組んだ。具体的には実践者とネットワークを構築し、日本版個別型援助付き雇用フィデリティ調査を実施した。また、統合失調症の利用者に対する支援要素を検証するための長期追跡調査の分析も並行して行い、その内容を発表した。また、16 機関の多施設共同前向きコホートを実施して、個別型援助付き雇用事業所における包括的なアウトカムを検証した。

5) 認知機能リハと個別援助付き雇用モデルによる就労支援（佐藤、山口、松長、藤井、小川、安間）

本研究は①オリジナルソフト“Jcores”のブラッシュアップと使用方法の普及、② **Vocational service non-responder** を対象とした **Randomized Controlled Trial** デザインによる **CR+SE** の効果検討、③ **SE** の支援の質や内容を担保するためのフィデリティ調査の 3 要素で構成されている。①については年 1 回の研修会を定期的実施し、研究参加機関の意見を取り入れ、オリジナルソフトやツールについてもより使いやすいものに改訂した。②については、最終的に 63 名のリクルートを実施し、本項執筆時において最終の調査データを収集中である。③についても予定したフィデリティ調査をすべて実施し、本研究において参加機関の就労支援の質は「Fair」レベルで分散が少なく、一定の範囲内の就労支援が実施されたことが担保された。

6) ピアサポートの効果検証に関する研究（山口、小川、相田）

ピアスタッフの効果検証を行うことを目的とし、関東および福岡県における地域活動支援センターおよび就労継続支援 B 型事業所（合計 31 機関、うち 17 機関はピアスタッフを雇用）を対象に、ナチュラルコース・コホートを実施した。現在、全てのデータ収集・分析を完了し、論文化した。本研究は日本で初めてのピアサポートの効果検証研究である。

7) 障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に関する研究（山口、藤井）

障害領域におけるピアサポートの専門性および有効性を高めるための研修カリキュラムの作成し、その効果を検証した論文を発表した。また、研修を担当する講師やファシリテーターを要請する研修を構築した。

8) 精神障害者に対するスティグマに関する研究（山口、小川、小塩、松長、藤井）

東京大学および **Institute of Psychiatry, Psychology & Neuroscience (IoPPN)** の研究者と共同し、精神障害者のスティグマ是正を図るための全般的かつ学術的な研究を推し進めた。2018 年度は、メディアを用いた介入の効果を検証する長期無作為比較試験を論文化した。また、**INDOG READ** という医学生に向けた教育プログラムの効果検証の日本サイトとして、データ種集を完了した。現在、IoPPN の研究者を中心に国際的なデータ分析の途中である。

9) 精神科訪問看護師による家族心理教育 クラスター無作為化比較対照試験（安間、松長、塩澤、山口、佐藤、藤井）

本研究の目的は、精神科訪問看護師が統合失調症をもつ当事者をケアする家族に対して家族心理教育を行うことによる効果を、家族の介護負担感を主要評価項目としてクラスター無作為化

比較対照試験により明らかにすることである。家族会等にインタビューを行って作成したオリジナルツールを用いて全4回で実施する家族心理教育プログラムを開発し、埼玉、東京で訪問看護ステーション事業を展開する事業者の協力を得て、現在100家族弱をリクルートした上で介入を実施中である。

- 10) 統合失調症に関するリカバリーガイドラインの作成に関する研究（山口，松長）
2018年度より，AMED研究費において，統合失調症患者を対象とした治療や支援のガイドライン作成に携わった。利用者の主体性に関する尺度開発に関するデータ収集および分析を実施し，論文化した。
- 11) 医療観察法通院処遇者における暴力および自傷・自殺の予測因子に関する研究（菊池，岡野，相田，阿部）
司法精神科患者においては，暴力のリスク要因と自傷自殺のリスク要因は重複しているとの指摘がある。暴力のリスクアセスメントツールであるHCR-20第3版の日本版を使用し，通院処遇中の医療観察法患者の6ヶ月以内の暴力と自傷自殺行動に対する予測妥当性についてのデータを収集し，分析を実施した。
- 12) 暴力のリスクアセスメントツールの信頼性・妥当性に関する多施設研究（菊池，岡野）
諸外国の司法精神科サービスにおいて標準的に使用されている暴力のリスクアセスメントツールであるHCR-20第3版の日本版を作成し，医療観察法指定入院医療機関における暴力の予測妥当性を検討するため，多施設において1年間の前向き調査を実施した。9つの指定入院医療機関の協力を得てデータを収集し，分析を実施した。
- 13) 医療観察法処遇終了者の社会復帰促進に関する研究（菊池，橋本，岡野，相田）
医療観察法の通院処遇は最長5年で終了し，対象者は一般精神科医療によるケアへと移行していく。通院処遇中に対象者のどのような要因が変化して処遇終了に至るのかを検討することを目的として，単年度あたりの全国の医療観察法処遇終了者を対象に，地域処遇開始時と終了時のニーズ・プロフィールのデータを収集した。地域処遇開始時と終了時の情報が揃っている170名のデータが得られ，変化の特徴についての解析を継続している。
- 14) 医療観察法入院データベースを活用した研究（河野，小池，藤井）
厚生労働省の重度精神疾患標準的治療法確立事業では，医療観察法指定入院医療機関が実施主体となり，同法入院対象者の診療情報をデータベース化して分析・共有することにより，医療を向上させ対象者の社会復帰を促進することを目指している。本研究では，(a)データベースの研究への二次利用に向けた事務局支援，(b)月次集計報告書「指定入院医療機関パフォーマンス指標」のリニューアル，(c)年次集計報告書「医療観察統計資料（仮）」の設計を行った。また，データベースの二次利用を申請して実施する研究の計画を立案した。
- 15) 精神科救急に関する研究（杉山，藤井，塩澤，阿部）
現在運用に大きな地域差がある精神科救急医療体制整備事業（地方自治体）の実態と，医療機関間で多様性がある精神科救急及び急性期の医療内容を把握し，課題の抽出を行って標準化を推進するための諸策について，指針としてまとめるための提言を行った。
- 16) 精神保健・福祉に関するエビデンスに関するWEBサイト作成と精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関する検討のための研究（佐藤，山口，小川，阿部，安間，藤井）

本研究では国内の実践家が効果的な実践を行うための支援として、①精神保健福祉サービス効果等についてのエビデンスの収集及び分類，専門的知見を介した信頼性等の評価を行うこと，②国内外の調査・研究等のシステマティックレビューの実施すること，③これらの結果等を容易に入手可能な日本語プラットフォームの構築を行うことを目的としている。①については令和元年度中に家族，当事者，支援者，行政職員，研究者の精神保健福祉システムに関わるステークホルダーを対象としたグループインタビューを2回実施し，現在内容分析を実施中である。②については下記※に示した検索語によって9,442編を抽出し，現在二次スクリーニングを実施中である。③については株式会社アクセライトと協議を重ね，現在β版を準備中である。

※ 1 Mental Disorders[MH],2 Hospitalization” [Mesh],3 Patient Readmission[MH] 4 patient admission[MH] 5 Employment[MH] 6 Work[MH] 7 Social Participation[MH] 8 return to work[MeSH],9 OR/3-8 10 “Prospective Studies” [Mesh] 11 "Longitudinal Studies"[Mesh] 12 “Cohort Studies” [Mesh] 13 "Observational Studies as Topic"[Mesh] 14 “Observational Study” [Publication Type] 15 "Follow-Up Studies"[Mesh] 16 intervention[Mesh] 17 trial[MeSH] 18 random* 19 control group 20 comparison 21 comparative 22 OR/10-21 23 1 AND 2 AND 9 AND 22 (現在，PROSPEROにて審査中)

17) 就労継続支援 B 型の賃金に関する研究（山口）

総合支援法における就労継続支援 B 型（旧：小規模作業所や授産施設）における賃金に関する調査を実施した。特に，数量的な分析を担当し，平均工賃月額の高低に関連する要因として，「精神障害のある登録利用者数」，「精神障害のある利用者のうち，過去 3 ヶ月の利用で最も少なかった月当たりの利用日数」，「年間事業運営費」，「就労継続 A 型事業所や就労移行支援事業所，一般雇用につながったケースの有無」があることを明らかにした。

18) 計画相談支援と入院アウトカムの検証（山口）

我が国の地域精神保健福祉サービスは，医療サービスと福祉サービスがそれぞれに独立して発展してきたが，患者はその両方を使うことが珍しくない。本研究は，障害者総合支援法における計画相談支援の利用と入院アウトカムとの関連を検証することを目的とする。本年度は，調査デザインおよび調査項目の設定に取り組んだ。

19) 地域精神保健研究における患者・市民参画（山口，佐藤，小川，阿部，安間）

近年の対人サービス評価に関する研究では，研究者や実践者だけでなく，患者や一般市民を含めて実施することが期待されている。国際的には広まりつつある，研究への患者・市民の参画（patient-public involvement: PPI）であるが，日本の地域精神保健の文脈ではまだその言葉さえいられていない。そこで，本研究は，当事者や家族，行政関係者，実践者，研究者など幅広いステークホルダーを集め，地域精神保健研究で取り扱うべきアウトカムや PPI の導入方法などについてのインタビュー調査を実施した。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・地域の保健センターにおける思春期精神保健相談およびアウトリーチによる相談支援を定期的に実施した。（藤井）
- ・国立精神神経・医療研究センター統合失調症センター（EDICS）の市民公開講座に講師として参加した（菊池）
- ・地域における講演会などに講師として可能な限り参加した。

(2) 専門教育面における貢献

- ・愛媛大学 医学部公衆衛生学教室「精神保健」非常勤講師（藤井）
- ・文教大学 人間科学学部「精神障害者の生活支援システム」「精神科リハビリテーション」「就労支援サービス」非常勤講師（山口）
- ・法政大学 現代社会学部「精神保健ソーシャルワークⅡ」非常勤講師（山口）
- ・東洋大学 福祉社会システム先行「精神保健福祉論」「地域福祉システム特論Ⅸ」非常勤講師（山口）
- ・早稲田大学 人間科学部「ケースフォーミュレーション」非常勤講師（佐藤）
- ・立教大学 現代心理学部「健康・医療心理学」非常勤講師（佐藤）
- ・立教大学 大学院臨床心理学専攻「臨床心理基礎実習Ⅰ」非常勤講師（佐藤）
- ・東京医科歯科大学 地域精神看護学（N3）「認知行動療法の基礎：認知行動療法に役立つコミュニケーション」非常勤講師（菊池）
- ・帝京平成大学 大学院臨床心理学研究科「司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開」非常勤講師（菊池）
- ・法務省保護局 社会復帰調整官初任研修「医療観察におけるリスクアセスメント」講師（菊池）
- ・法務省保護局 社会復帰調整官専修科研修「医療観察における事例概念化」講師（菊池）
- ・東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 精神行動医科学分野勉強会（河野）
- ・芝浦工業大学デザイン工学部「行動科学」「認知心理学」非常勤講師（大隅）
- ・京都女子大学大学院発達教育学研究科「司法・犯罪分野における理論と支援の展開」非常勤講師（大隅）
- ・日本社会事業大学 社会福祉学部「精神保健」非常勤講師（松長）
- ・東京大学 医学部健康総合科学科・精神看護学「社会的包摂：アンチスティグマと意思決定支援」非常勤講師（松長）
- ・東京大学 教育学部「学校におけるメンタルヘルス教育：安全・安心教育」非常勤講師（小塩）
- ・法政大学 キャリアデザイン学部「キャリア研究調査実習Ⅴ」非常勤講師（小塩）

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・第3回 地域におけるリスクアセスメント研修の主任（藤井）、副主任（菊池・山口・佐藤）
- ・第7回 医療における個別就労支援研修の主任（藤井）、副主任（山口・佐藤・菊池）
- ・第17回 多職種による包括型アウトリーチ研修の主任（藤井）、副主任（佐藤・山口・菊池）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・厚生労働省 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に係る検討会構成員（藤井）
- ・厚生労働省 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築支援事業広域アドバイザー（藤井）
- ・東京都退院後支援ガイドライン策定委員会委員長（藤井）
- ・埼玉県精神医療審査会医療委員（藤井）
- ・障害者支援のあり方に関する調査研究委員（藤井）
- ・障害者職業総合センター「効果的な就労支援のための就労支援機関と精神科医療機関等との情報共有に関する研究」委員会 オブザーバー（佐藤）
- ・PaRIS Working Group on Patient-Reported Indicators for Mental Health Care Meeting #1, Online meeting（菊池）
- ・NHS Benchmarking Project Contributor（菊池）
- ・内閣府「被害者支援における危険度判定に基づく加害者対応に関する調査研究事業」検討委員（菊池）
- ・法務省保護局「社会内処遇の体系化に関する研究会」アドバイザー（菊池）
- ・法務省矯正局 効果検証センターアドバイザー（菊池）

- ・日本公認心理師協会司法・犯罪分野委員会委員（菊池）
- ・重度精神疾患標準的治療法確立事業のデータ二次利用における審査委員会の組織、規程の整備などの研究支援（河野，小池，藤井）
- ・NPO 法人小山そよかぜ，法人理事，相談支援事業所顧問（小池）
- ・川崎市と精神保健研究所の協定に基づく調査研究—川崎市精神保健福祉センターにおける警察官通報への対応実態の分析（小池，河野）
- ・日本学校保健会「精神疾患に関する指導参考資料作成委員会」委員（小塩）

(5) センター内における臨床的活動

- ・地域精神科モデル医療センターの訪問看護ステーション，および精神科デイケアと連携し，センター内での地域精神科リハビリテーションのシステム作りに関与している（藤井，佐藤，山口）
- ・国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーションにて週に 0.5 程度，訪問時を中心に利用者本人および家族に認知行動療法を提供した（佐藤）
- ・国立精神・神経医療研究センター病院医療観察法病棟（8 病棟）心理療法士として週 1 日程度，対象者の診療に関わった（菊池）
- ・国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーションの事例検討会のスーパーバイザーとして関わった（1.5 時間×2 回）（菊池）

(6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Suzuki K, Yamaguchi S, Kawasoe Y, Nayuki K, Aoki T, Hasegawa N, Fujii C: Development and evaluation of Intensive Case Management Screening Sheet in the Japanese population. *International Journal of Mental Health Systems* 13: 22, 2019.
- 2) Yamaguchi S, Ojio Y, Koike J, Matsunaga A, Ogawa M, Tachimori H, Kikuchi A, Kimura H, Inagaki A, Watanabe H, Kishi Y, Yoshida K, Hirooka T, Oishi S, Matsuda Y, Fujii C: Associations between readmission and patient-reported measures in acute psychiatric inpatients: a study protocol for a multicenter prospective longitudinal study (the ePOP-J study). *International Journal of Mental Health Systems* 13(1): 40, 2019.
- 3) Hayashi T, Yamaguchi S, Sato S: Implementing the individual placement and support model of supported employment in Japan: Barriers and strategies. *Psychiatric Rehabilitation Journal* 43(1): 53-59, 2020.
- 4) Kanie A, Kikuchi A, Haga D, Tanaka Y, Ishida A, Yorozyu Y, Matsuda Y, Morimoto T, Fukuoka T, Takazawa S, Hagiya K, Ozawa S, Iwata K, Ikebuchi E, Nemoto T, Roberts DL, Nakagome K: The Feasibility and Efficacy of Social Cognition and Interaction Training for Outpatients With Schizophrenia in Japan : A Multicenter Randomized Clinical Trial. *Frontiers in Psychiatry* 10: 589, 2019.
- 5) Takeda K, Sugawara N, Yamada Y, Nagata T, Kashiwagi H, Kono T, Hirabayashi N, Okada T: Employment-related factors of forensic psychiatric outpatients with psychotic disorders. *Neuropsychiatric Disease and Treatment* 15: 3341-3350, 2019.
- 6) Osumi T: Mediating role of attenuated physiological arousal on the association between psychopathic traits and fairness norm violation. *Scientific Reports* 9: 18053, 2019.

- 7) Matsunaga A, Yamaguchi S, Sawada U, Shiozawa T, Fujii C: Psychometric properties of scale to assess the therapeutic relationship – Japanese version (STAR-J) *Frontiers in Psychiatry* 10: 575, 2019.
- 8) Ojio Y, Yamaguchi S, Ohta K, Ando S, Koike S: Effects of biomedical messages and expert-recommended messages on reducing mental health-related stigma: a randomised controlled trial. *Epidemiology and Psychiatric Sciences* 29: e74, 2019.
- 9) Shiozawa T, Yamaguchi S, Matsunaga A, Sawada U, Fujii C: Development of the Interpersonal Processes of Care Survey–Japanese version. *Neuropsychopharmacology reports* 40(1): 107-112, 2020.
- 10) Yasuma N, Watanabe K, Matsunaga A, Nishi D. & Kawakami N: Personal values in adolescence and suicidality: a cross-sectional study based on a retrospective recall. *BMC Psychiatry* 19(1): 214, 2019.
- 11) Yasuma N, Watanabe K, Iida M, Nishi D, Kawakami N: Personal values in adolescence and psychological distress in adults: A cross-sectional study based on a retrospective recall. *PLOS ONE* 14(11): e0225454, 2019.
- 12) Yasuma N, Narita Z, Sasaki N, Obikane E, Sekiya J, Inagawa T, Nakajima A, Yamada Y, Yamazaki R, Matsunaga A, Saito T, Watanabe K, Imamura K, Kawakami N, and Nishi D: Psychological intervention for universal prevention of antenatal and postnatal depression among pregnant women: protocol for a systematic review and meta-analysis. *Systematic Reviews* 8: 297, 2019.
- 13) Kawakami N, Yasuma N, Watanabe K, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, Umeda M, Shimoda H, Nishi D: Association of response rate and prevalence estimates of common mental disorders across 129 areas in a nationally representative survey of adults in Japan. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*. 2020.
- 14) 山口創生, 水野雅之, 種田綾乃, 相田早織, 澤田宇多子, 小川 亮, 小塩靖崇, 御蘭恵将, 濱田由紀, 藤井千代, 相川章子: 障害福祉サービス事業所におけるピアサポーターの有無とアウトカムとの関連: 前向き縦断研究. *臨床精神医学* 49(2): 277-288, 2020.
- 15) 山口智史, 西田明日香, 小川佐代子, 小塩靖崇, 東郷史治, 佐々木 司: 学校教員を対象としたメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの効果検証:パイロットスタディ. *学校保健研究* 61(1): 7-13, 2019.
- 16) 小塩靖崇, 住吉太幹, 藤井千代, 水野雅文: 学校・地域におけるメンタルヘルス教育のあり方, *予防精神医学* 4(1): 75-84, 2019.
- 17) 小塩靖崇, 佐藤さやか, 市川 健, 下平美智代, 種田綾乃, 山口創生, 高井敏子, 藤井千代: 障害者就業・生活支援センターにおける精神障害者の就労支援に関する実態調査, *日本社会精神医学会雑誌* 28(3): 246-254, 2019.
- 18) 小池純子, 常岡俊昭, 池田朋広, 黒田治, 針間博彦, 小池 治, 稲本淳子: 措置入院患者と医療観察法対象者の比較に基づく現状と支援に関する検討. *精神医学*, 61(5): 583-593, 2019.
- 19) 小池純子, 小池 治, 佐藤裕大, 小嶋章吾: 重大な他害行為を行った精神障害者の入院中の回復プロセスの解明と看護支援—M-GTA を用いた前向きさを取り戻した経験に基づく分析—. *日本精神保健看護学* 28(1): 1-11, 2019.
- 20) 小池純子, 池田明広, 稲本淳子, 森田哲平, 常岡俊昭, 佐藤裕大, 宮城純子, 長谷川恵子, 岩波明, 中谷陽二: 他害行為を要件に措置入院をした統合失調患者の家族への支援体制の検討—他害行為を受けた家族へのインタビュー調査から—. *精神科*, 35(2): 229-236, 2019.
- 21) 小池純子, 河野稔明, 大町佳永, 村田雄一, 久保正恵, 黒木規臣, 藤井千代, 平林直次: 医療観察法指定入院医療機関データベースの活用と課題—多職種スタッフに対するグループインタビュー調査から. *精神医学* 61(11): 1343-1352, 2019.

- 22) 森田展彰, 渡邊敦子, 新井清美, 小池純子, 望月明見, 大宮宗一郎, 受田恵理, 山田理恵: 更生保護施設における薬物事犯への支援に関する研究. 更生保護学研究 (15): 4-18, 2019.
- 23) 塩澤拓亮, 松長麻美, 佐藤さやか, 藤井千代: 統合失調症をもつ人の家族が求める情報と精神科訪問看護スタッフが提供する情報の比較—インターネットを用いたアンケート調査—. 臨床精神医学 48(7): 887-898, 2019.

(2) 総説

- 1) 小池進介, 山口創生, 小塩靖崇, 安藤俊太郎: 精神病という言葉にスティグマがあるか: 精神病のメタスティグマ. 臨床精神医学 48(7): 821-826, 2019.
- 2) 山口創生: 若手研究者の立場から現在議論すべきと考えられる研究の方向性. 精神障害とリハビリテーション 23(1): 31-33, 2019.
- 3) 山口創生, 佐藤さやか, 堀尾奈都記, 吉田光爾, 下平美智代, 種田綾乃, 池淵恵美, 西尾雅明, 伊藤順一郎: 第 5 回野中賞 最優秀賞 受賞論文要旨(本誌掲載以外の論文) 認知機能リハビリテーションと援助付き雇用の費用対効果: 無作為化比較試験 (日本精神障害者リハビリテーション学会「野中賞」). 精神障害とリハビリテーション 23(1): 53-55, 2019.
- 4) 山口創生, 安間尚徳, 藤井千代: 日々の診察の中で当事者と一緒に悩む: 共同意思決定の研究からみえてきたこと. こころの科学 210: 50-54, 2020.
- 5) 佐藤さやか: 福祉領域におけるスーパーヴィジョン. 臨床心理学 19(3): 316-320, 2019.
- 6) 佐藤さやか: 地域医療・介入のケースフォーミュレーション. 精神療法, 増刊第 6 号: 70-79, 2019.
- 7) 上田英一郎, 菊池安希子, 白川(西)美也子: 医師・心理士が遵守すべき倫理規範. EMDR 研究 11(1): 20-23, 2019.
- 8) 菊池安希子: 眼球運動による脱感作および再処理法 (EMDR): 発展の歴史から本邦における課題へ. トラウマティック・ストレス 17(1): 38-44, 2019.
- 9) 松長麻美: 自殺の対人関係理論に基づいた周産期における希死念慮・自殺企図への対応: 模範事例を用いて. 日本周産期メンタルヘルス学会誌 5(1): 27-32, 2019.
- 10) 小塩靖崇: 児童生徒向け精神疾患教育: 海外と日本の動向, 精神科 35(5): 477-482, 2019.

(3) 著書

- 1) 藤井千代: 精神科地域ケア. 今日の治療指針 2018. (福井次矢, 高木 誠, 小室一成(総編集)), 医学書院, 東京, pp1090-1091, 2020.
- 2) 佐藤さやか: アウトリーチ(訪問)支援における CBTp 不安感からくる生活上の困難をもつケースへの支援. 石垣琢磨, 菊池安希子, 松本和紀他(編著) 事例で学ぶ統合失調症のための認知行動療法. 金剛出版, 東京, pp283-296, 2019.
- 3) 佐藤さやか: 「医者にかかりたくない」「薬を飲みたくない」—治療・支援を拒む心理をサポートする—. 松本俊彦(編著)「助けて」が言えない. 日本評論社, 東京, pp8-18, 2019.
- 4) 佐藤さやか: 精神科デイケアにおける認知行動療法. 日本認知・行動療法学会(編) 認知行動療法事典, 丸善出版, 東京, pp378, 2019.
- 5) 佐藤さやか: 精神科リハビリテーション. 日本健康心理学会(編) 健康心理学事典, 丸善出版, 東京, pp323, 2019.
- 6) 石垣琢磨, 菊池安希子, 松本和紀, 古村 健(編著): 事例で学ぶ統合失調症のための認知行動療法. 金剛出版, 東京, 2019.
- 7) 下平美智代: フィンランドの「経験専門家」というピアサポートのあり方. 大島 巖(監修) 第 2 章ピアスタッフの現状—ピアスタッフとして働くヒント—精神障がいのある人が輝いて働くことを応援する本, 星和書店, 東京, pp64-68, 2019.

- 8) 下平美智代, 川村 全: アウトリーチ支援におけるピアサポート—その意義と留意点—. 大島 巖 (監修) 第2章ピアスタッフの現状—ピアスタッフとして働くヒント—精神障がいのある人が輝いて働くことを応援する本, 星和書店, 東京, pp139-145, 2019.
- 9) 松長麻美: 周産期ボンディング障害の症状構造. 北村俊則 (編著) 周産期ボンディングとボンディング障害・子どもを愛せない親たち, ミネルヴァ書房, 京都, pp19-30, 2019.
- 10) 松長麻美: 全般的機能のアセスメント. 日本認知・行動療学会 (編) 認知行動療法事典, 丸善出版, 東京, 2019.

(4) 研究報告書

- 1) NHS Benchmarking Network (Contributors: Sara G, Young A, Hanson G, Kang H, Salim D, Ridgeway D, Protopopova D, Winkler P, Oates M, Flanagan P, Kikuchi A, Ngo N, Woodcock R, Smith M, Church L, Bergin S, Mitchell J, Mackenzie F, Friedli J, Rodholm, M, Deppert U, Hollen V, Mills S, Clarke A): International Mental Health Comparisons 2019: Child and Adolescent, Adult, Older Adult Services. 2019 International Mental Health Indicators Benchmarking Project Report, International Initiative for Mental Health Leadership (IIMHL), 2019.
- 2) 藤井千代: 地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業) 令和元年度 総括・研究分担報告書. pp1-6, 2020.
- 3) 藤井千代: 精神障害者の意思決定及び意思表示支援に関する研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業) 「地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究」令和元年度 総括・研究分担報告書. pp257-304, 2020.
- 4) 藤井千代: 都市近郊アウトリーチモデル: 心理職によるアウトリーチ支援. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業) 「地域特性に対応した精神保健医療サービスにおける早期相談・介入の方法と実施システム開発についての研究」令和元年度 総括・研究分担報告書. pp38-45, 2020.
- 5) 藤井千代: 好事例分析. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業) 「入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究: コホート研究」令和元年度 総括・研究分担報告書. pp57-66, 2020.
- 6) 藤井千代: ピアサポートの専門性を高めるための研修プログラムの実施とモニタリング. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業) 「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に係る講師を担える人材の養成及び普及のための研究」令和元年度 総括・研究分担報告書. pp9-12, 2020.
- 7) 藤井千代: 「精神障害にも対応する地域包括ケアシステム」時代に対応する自治体による多職種アウトリーチ支援のあり方に関する研究. 公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団 2018年度 (後期) 一般公募「在宅医療研究への助成」完了報告書. pp1-7, 2020.
- 8) 山口創生: 入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究: コホート研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業) 令和元年度 総括・研究分担報告書. pp1-10, 2020.
- 9) 山口創生: 評価尺度及び障害福祉サービス利用状況に関する分析. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業) 「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けた障害福祉サービス等の推進に資する研究」令和元年度 総括・研究分担報告書. pp14-19, 2020.
- 10) 山口創生: 就労継続 B 型事業所を対象とした横断調査の分析. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業) 「就労継続支援 B 型事業所における精神障害者等に対する支援

の実態と効果的な支援プログラム開発に関する研究」令和元年度 総括・研究分担報告書. pp 27-39, 2020.

- 11) 山口創生：ピアサポートの専門性を高めるための研修を担う人材育成プログラムに関する評価. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に係る講師を担える人材の養成及び普及のための研究」令和元年度 総括・研究分担報告書. pp44-49, 2020.
- 12) 佐藤さやか：精神保健・福祉に関するエビデンスのプラットフォーム構築及び精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関する検討のための研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）令和元年度 総括・研究分担報告書. 2020.
- 13) 菊池安希子：問題行動の評価：入院時点データの問題行動評価. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究：コホート研究」令和元年度 総括・研究分担報告書. pp47-55, 2020.
- 14) 河野稔明, 小池純子, 藤井千代, 竹田康二, 山田悠至, 平林直次：指定入院医療機関データベースシステムを活用した研究. 令和元年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「医療観察法の制度対象者の治療・支援体制の整備のための研究」（研究代表者：平林直次）総括・分担研究報告書. pp12-29, 2020.
- 15) 大隅尚広：サイコパシーの表情認識における自己中心性バイアスの検討. 平成 28-30 年度日本学術振興会科学研究費助成事業（若手 B）研究成果報告書. 2019.
- 16) 小塩靖崇：思春期における睡眠習慣（時間・時間帯・質・環境）が精神機能に与える影響の理解. 2018-2019 年度日本学術振興会科学研究費助成事業（若手研究）研究成果報告書. 2020.
- 17) 杉山直也：精神科救急医療における質向上と医療提供体制の最適化に資する研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）令和元年度 総括・研究分担報告書. pp1-8, 2020.
- 18) 杉山直也：精神科救急医療ニーズの多様化に向けた医療の質向上と医療提供体制の最適化に資する分担研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「精神科救急医療における質向上と医療提供体制の最適化に資する研究」. 令和元年度 総括・研究分担報告書. pp9-30, 2020.

(5) 翻訳

- 1) 菊池安希子, 大澤智子（訳）, ジム・ナイプ（著）：EMDR ツールボックスー複雑性 PTSD と解離の理論と治療ー. 東京, 星和書店, 2019.

(6) その他

- 1) 山口創生：図書紹介：WRAR（元気回復行動プラン）のプログラム評価：リカバリーを促進するセルフヘルプツールの包括的検証（小林（清重）知子〔著〕）. 精神障害者とリハビリテーション 23(1)：86-87, 2019.
- 2) 山口創生：編集後記. 精神障害とリハビリテーション 23(1)：91, 2019.
- 3) 山口創生：推薦の言葉（奨励実践：清和会西川病院における IPS 個別就労支援の実践）. 精神障害とリハビリテーション 23(1)：185, 2019.
- 4) 下平美智代：マインドフルネス. メンタルヘルスマガジン こころの元気 plus 13(12)：63, 2019.
- 5) 下平美智代：オープンダイアログの臨床現場での活用. 日本精神保健看護学会誌 28(2)：86-91, 2019.

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Fujii C: After-care services for patients admitted involuntarily by administrative order. The XXXVIth International Congress on Law and Mental Health, University of International Studies of Rome (UNINT), Rome, 2019.7.21-26.
- 2) Fujii C: Local Government Outreach Services to Enhance Access to Mental Health Care. The 23rd World Congress of Social Psychiatry, Bucharest, Romania, 2019.10.26.
- 3) Kikuchi A: Changes Observed in Mentally Disordered Offenders During Forensic Probation in Japan. The XXXVIth International Congress on Law and Mental Health, University of International Studies of Rome (UNINT), Rome, 2019.7.21-26.
- 4) Kono T: Introduction of an online database system to forensic mental health services in Japan. The XXXVIth International Congress on Law and Mental Health, University of International Studies of Rome (UNINT), Rome, 2019.7.21-26.
- 5) Koike J: Positive experiences promoting recovery in Japanese forensic mental health setting. The XXXVIth International Congress on Law and Mental Health, University of International Studies of Rome (UNINT), Rome, 2019.7.21-26.
- 6) 藤井千代: 指定発言. 山下俊幸, 太田順一(座長): 退院後支援の現状と課題—措置入院を中心に—. 第115回日本精神神経学会学術総会, 新潟大会, 新潟, 2019.6.20-22.
- 7) 藤井千代: 指定発言. 原敬 造, 窪田 彰: 新アウトリーチ事業に始まる日本の精神科地域包括ケアシステムの可能性. 第115回日本精神神経学会学術総会, 新潟大会, 新潟, 2019.6.20-22.
- 8) 藤井千代: 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムが目指すこと. 李 利彦, 比嘉千賀(座長): 地域包括ケアシステムに精神科診療所はどうかかわっていくのか. 日本精神科診療所協会第25回学術大会, 埼玉, 2019.6.22-23.
- 9) 山口創生: 調査論文の書き方: 結果を正しく伝えるテクニック. 第8回日本精神保健福祉学会学術研究集会, 東京大会, 東京, 2019.6.1-2.
- 10) 山口創生: ピアサポーターと協働するリカバリー志向型共同意思決定システムの効果 無作為化比較試験. 渡邊衡一郎, 藤井千代(座長): 精神科領域における Shared Decision Making (SDM) の実現可能性. 第115回日本精神神経学会学術総会, 新潟大会, 新潟, 2019.6.20-22.
- 11) 山口創生: 映像による社会的接触およびインターネット自己学習 におけるスティグマ是正の長期的効果: 無作為化比較試験. 中根秀之(座長): 精神疾患へのスティグマ研究の現在: 学校教育, 市民啓発, 社会の取り組みに向けて. 第115回日本精神神経学会学術総会, 新潟大会, 新潟, 2019.6.20-22.
- 12) 安藤俊太郎, 山口創生, 小川 亮, 小塩靖崇, 市橋香代, 近藤伸介, 藤井千代, 笠井清登: INDIGO READ 研究の紹介と日本サイトでの実践. 中根秀之(座長): 精神疾患へのスティグマ研究の現在: 学校教育, 市民啓発, 社会の取り組みに向けて. 第115回日本精神神経学会学術総会, 新潟大会, 新潟, 2019.6.20-22.
- 13) 山口創生: フィデリティとは? フィデリティ調査の意義とは?: 大切にしたい Individual placement and support の哲学. 第6回日本 IPS アソシエーション実践家向け研修, 東京, 2019.7.20.
- 14) 山口創生: 調査論文の書き方: 結果を正しく伝えるテクニック. 2019年度 大学院社会福祉学専攻課程協議会 第1回研究大会, 東京, 2019.08.17.
- 15) 山口創生, 畝木奈津恵, 逆井裕美, 中岡恵理, 松田康裕: 精神障害者リハビリテーションにおけるキャリアと苦悩: だいたい松坂世代を中心に!. 第27回日本精神障害者リハビリテーション学会大阪大会, 大阪, 2019.11.23.
- 16) 山口創生: Severe Mental Illness に対する就労支援とそのエビデンス: 制度設計への提言. 精神保健研究所ランチョンセミナー, 東京, 2019.12.2
- 17) 山口創生: 精神科における共同意思決定 (SDM): 当事者と協働する SDM システム. 大日本住友製薬プレスセミナー, 東京, 2019.12.11.

- 18) 山口創生：リカバリーを重視した支援と IPS. 就労支援研修会（ヴィストキャリア），金沢，2020.01.25.
- 19) 佐藤さやか：シンポジウム「認知リハビリテーション Tips」認知機能リハビリテーションと就労支援. CEPD 研究会，東京，2019.5.11.
- 20) 松田康裕，梅田典子，佐藤さやか：就労支援に役立つ認知機能リハビリテーション (VCAT-J). 第 27 回日本精神障害者リハビリテーション学会大阪大会，大阪，2019.11.23.
- 21) 吉田光爾，宮本有紀，後藤雅博，澤田恭一，佐藤さやか，神谷牧人：学会企画シンポジウム地域ケア（コミュニティメンタルヘルス）を推進するために研究と実践をどうつなぐか：私たちにできることは何か. 第 27 回日本精神障害者リハビリテーション学会大阪大会，大阪，2019.11.24.
- 22) 菊池安希子：統合失調症の認知行動療法～発展の歴史と今後の課題～（教育講演 14）. 第 19 回日本認知療法・認知行動療学会，東京，2019.8.31.
- 23) 桂 雅宏，濱家由美子，松本和紀，菊池安希子：統合失調症の CBT (CBTp) ワークショップ. CBTp ネットワーク，東京，2019.11.10.
- 24) 河野稔明：シンポジウム「長期入院から退院促進へー地域との更なる連携ー」統計からみた入院長期化とその関連要因. 第 15 回医療観察法関連職種研修会，熊本，2019.9.27-28.
- 25) 下平美智代：「オープンダイアログの臨床現場での活用」（教育講演）. 第 29 回日本精神保健看護学会学術集会，愛知，2019.6.8.
- 26) 下平美智代：マインドフルネス～からだの声に気づくことから始めてみよう～（ワークショップ）. リカバリー全国フォーラム 2019，東京，2019.9.21.
- 27) 下平美智代：研修セミナー7「マインドフルネスを体験してみよう」日本精神障害者リハビリテーション学会第 27 回大阪大会，大阪，2019.11.22.
- 28) 染田英麿，渡邊 乾，青柳雄三，西内絵里沙，中西清晃：SOS を出しづらい人やその家族へのアウトリーチ～引きこもり，ホームレス，行政などの現場から～. リカバリー全国フォーラム 2019，東京，2019.9.22.
- 29) 松長麻美：周産期における自殺予防：自殺の対人関係理論を中心として. 日本助産学会ウィメンズヘルスワークショップ，東京，2019.7.27.
- 30) 小塩靖崇：精神疾患に対する生医科学的内容のビデオ講義によるスティグマ軽減効果の検証：無作為化比較試験，第 115 回日本精神神経学会学術総会，新潟，2019.6.20-22.
- 31) 小塩靖崇：学校における精神保健教育－高校生への伝え方－. 第 115 回日本精神神経学会学術総会，新潟，2019.6.20-22.
- 32) 小塩靖崇：高校保健教育における精神疾患の扱い方. 第 23 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2019.11.3.
- 33) 橋本（小市）理恵子，谷山 牧，大久保 豪：トラウマインフォームドケアの現状と課題（交流集会 28）. 第 39 回日本看護科学学会学術集会，石川，2019.12.1.

(2) 一般演題

- 1) Yamaguchi T, Fujii C, Saito J, Katagiri N, Tsujino N, Nemoto T, Mizuno M: Why is suicide attempts by patients with schizophrenia difficult to predict? The 23rd World Congress of Social Psychiatry, Bucharest, Romania, 2019.10.25-28.
- 2) Kanehara A, Koike H, Fujieda Y, Yajima S, Kabumoto A, Morita K, Kumakura Y, Kanata S, Yamaguchi S, Miyamoto Y, Fukuda M, Nochi M, Kasai K: The concept and facilitators of personal recovery for mental health service users in Japan. 7th European Conference on Schizophrenia Research. Berlin, Germany, 2019.9.27.
- 3) Fukuda M, Hashimoto R, Kanata S, Kasai K, Kayama M, Mukaiyachi I, Murai T, Nishida A, Niwa S, Yamaguchi S, Ando S, Kanehara A, Kumakura Y, Matsunaga A, Nakanishi M,

- Yamasaki S: A co-productive development of a practical guidance for patient-centered and life-oriented recovery of schizophrenia in Japan. 7th European Conference on Schizophrenia Research. Berlin, Germany, 2019.9.27.
- 4) Yamaguchi S, Mizuno M, Sato S, Matsunaga A, Sasaki N, Shimodaira M, Fujii C: Association between service intensity and score for Japanese version of individualised supported employment fidelity scale: a longitudinal study. The 23rd World Congress of Social Psychiatry, Bucharest, Romania, 2019.10.27.
 - 5) Sato S, Ogawa M, Matsunaga A, Mizuno M, Yamaguchi S, Kikuchi A, Fujii C: Effects and costs of cognitive behavioral therapy provided by assertive community treatment teams in Japan: a cluster randomized controlled trial. 9th World Congress of Behavioural & Cognitive Therapies, Berlin, 2019.7.17-20.
 - 6) Makita K, Katayanagi A, Misari O, Ito M, Kanie A, Nakajima S, Konishi T, Kikuchi A, Maeda Y, Horikoshi M: Development of a concurrent program for Japanese caregivers of adolescent patients undergoing cognitive processing therapy (CPT). 16th European Society for Traumatic Stress Studies Conference of Netherlands, Rotterdam, June 14-16, 2019.
 - 7) Katayanagi A, Makita K, Misari O, Ito M, Kanie A, Nakajima S, Konishi T, Kikuchi A, Maeda Y, Horikoshi M: Developing a Japanese version of Cognitive Processing Therapy for Young Adults with Post-Traumatic Stress Symptoms. 16th European Society for Traumatic Stress Studies Conference of Netherlands, Rotterdam, June 14-16, 2019.
 - 8) Yamaguchi T, Oguchi Y, Ojio Y, Mori R, Oooka M, Baba Y, Funatogawa T, Katagiri N, Tsujino N, Nemoto T, Mizuno M: A survey of mental health literacy using the internet in Japan. 6th asian congress of schizophrenia research, Nanjing, 2019.8.28-31.
 - 9) Ojio Y, Mori R, Matsumoto K, Nemoto T, Sumiyoshi T, Fujita H, Morimoto T, Nishizono M, Fujii C, Mizuno M: An innovative approach for adolescent mental health in Japan: school-based education about mental health literacy. The 23rd World Congress of Social Psychiatry, Bucharest, Romania, 2019.10.26.
 - 10) Ojio Y, Yamaguchi S, Ota K, Ando S, Koike S: Biomedical messages for reducing mental health-related stigma: A randomised controlled trial. The 23rd World Congress of Social Psychiatry, Bucharest, Romania, 2019.10.26.
 - 11) Oguchi Y, Ojio Y, Mori R, Yamaguchi T, Nemoto T, Kocha H, Mizuno M: Survey on Mental Health Literacy among High School Students in Japan. The 23rd World Congress of Social Psychiatry, Bucharest, Romania, 2019.10.26.
 - 12) Taniyama M, Arakida M, Yamashita R, Hashimoto R, Hobo M, Wakabayashi K, Okubo S: Development of a stress-coping educational program based on the Trauma Informed Approach for welfare recipients in Japanese welfare-to-work programs. 23rd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Chiang Mai, Thailand, January 10-11, 2020.
 - 13) 瀬戸秀文, 藤井千代, 稲垣 中, 太田順一郎, 島田達洋, 大塚達以, 小口芳世, 岩永英之, 椎名明大, 平林直次, 中西清晃, 中村 仁, 吉住 昭: 精神保健福祉法第 26 条に基づく矯正施設長通報の現状把握に関する研究 (その 1) 通報・事前調査について. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-22.
 - 14) 瀬戸秀文, 藤井千代, 稲垣 中, 太田順一郎, 島田達洋, 大塚達以, 小口芳世, 岩永英之, 椎名明大, 平林直次, 中西清晃, 中村 仁, 吉住 昭: 精神保健福祉法第 26 条に基づく矯正施設長通報の現状把握に関する研究 (その 2) 指定医診察要否判断について. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-22.
 - 15) 瀬戸秀文, 藤井千代, 稲垣 中, 太田順一郎, 島田達洋, 大塚達以, 小口芳世, 岩永英之, 椎名明大, 平林直次, 中西清晃, 中村 仁, 吉住 昭: 精神保健福祉法第 26 条に基づく矯正施設長

- 通報の現状把握に関する研究 (その 3) 指定医診察例に. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-22.
- 16) 石川博康, 榎戸芙佐子, 遠藤謙二, 白石弘巳, 新村秀人, 藤井千代, 水野雅文, 森村安史, 山口大樹: 医療倫理委員会の活動について. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-22. (ポスター)
 - 17) 山口創生, 塩澤拓亮, 松長麻美, 澤田宇多子, 種田綾乃: 重い統合失調症を持つ人にも利用可能な簡便な主体性に関する尺度の開発. 第 14 回日本統合失調症学会札幌大会, 北海道, 2019.4.19.
 - 18) 山口創生, 種田綾乃, 相川章子: 地域福祉サービス事業所におけるピアサポーターの有無によるアウトカムの比較: 縦断研究 (PAL-J study). 第 8 回日本精神保健福祉学会 学術研究集会 東京大会, 東京, 2019.6.1-2.
 - 19) 遠藤芳浩, 船本修平, 山口創生, 大川浩子: 障害当事者の就労とパーソナル・リカバリーの関係: インタビュー調査の分析より. 第 27 回日本精神障害者リハビリテーション学会大阪大会, 大阪, 2019.11.23.
 - 20) 千葉理恵, 金原明子, 山口創生, 宮本有紀: パーソナル・リカバリーおよびリカバリー志向性を評価する日本語尺度の系統的レビュー. 第 27 回日本精神障害者リハビリテーション学会大阪大会, 大阪, 2019.11.23.
 - 21) 菊池安希子, 橋本理恵子, 岡野茉莉子, 相田早織, 藤井千代: 精神保健観察から一般精神科医療への移行パターンの研究. 第 15 回日本司法精神医学会大会, 岩手, 2019.6.7-8.
 - 22) 片柳章子, 牧田 潔, 大江美佐里, 伊藤正哉, 蟹江絢子, 菊池安希子, 大澤智子, 中島聡美, 小西聖子, 佐藤珠恵, 堀越 勝: 認知処理法中に再度被害に遭った PTSD 患者の事例報告. 第 19 回日本認知療法・認知行動療学会, 東京, 2019.8.30-9.1.
 - 23) 河野稔明, 竹田康二, 山田悠至, 小池純子, 藤井千代, 平林直次: 医療観察法入院処遇期間の適切な指標の探索—転院例寄与の施設間配分方法に着目して—. 第 15 回日本司法精神医学会大会, 岩手, 2019.6.7-8.
 - 24) 河野稔明, 竹田康二, 山田悠至, 小池純子, 藤井千代, 平林直次: 医療観察法データベースの構築—医療の向上に資する基盤づくりと活用—. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-22.
 - 25) 竹田康二, 河野稔明, 山田悠至, 小池純子, 藤井千代, 平林直次: 研究班報告—指定入院医療機関パフォーマンス指標と通院処遇予後調査から見える医療観察法医療の現状. 第 15 回医療観察法関連職種研修会, 熊本, 2019.9.27-28.
 - 26) 藤野邦夫, 藤野ヤヨイ, 河野稔明, 小池純子, 藤野清美, 竹島 正: 措置入院における精神保健指定医による診断一致. 第 23 回日本精神医学史学会, 岡山, 2019.10.26.
 - 27) 西内絵里沙, 大迫直樹, 下平美智代, 真行寺伸江, 中西清晃: 行政における多職種アウトリーチ支援チームの介入—既存サービスにつなぐにくい医療中断ケースに対するアプローチ—. 日本精神障害者リハビリテーション学会第 27 回大阪大会, 大阪, 2019.11.22-24.
 - 28) 大隅尚広: 顔表情の種類と視線の方向が反応抑制に及ぼす影響 —Go/No-Go 課題における事象関連電位による検討. 第 37 回日本生理心理学会大会, 埼玉, 2019.5.25-26.
 - 29) 大隅尚広: サイコパシー特性による利己的な表情認知 —顔表情の検出における視線方向の影響について. 日本感情心理学会第 27 回大会, 愛知, 2019.6.28-30.
 - 30) 大隅尚広: サイコパシー特性は他者の恐怖に対する反応抑制の失敗を助長するか視線方向の異なる顔表情による検討. 日本心理学会第 83 回大会, 大阪, 2019.9.11-13. (ポスター)
 - 31) 松長麻美, 大橋優紀子, 齋藤知見: 周産期メンタルヘルス領域で用いる自記式調査票の psychometrics 2: Mother-to-infant Bonding Scale (MIBS), Postpartum Bonding Questionnaire (PBQ). 第 16 回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会, 千葉, 2019.10.26-27.

- 32) 小池純子, 佐藤裕大, 新井清美, 大宮宗一郎, 望月明見, 井ノ口恵子, 小嶋章吾, 森田展彰: 刑の一部執行猶予制度化における薬物問題を持つ男性の更生保護施設入所中のリカバリー支援—M-GTAによる回復プロセスの解明. 第15回日本司法精神医学会大会, 岩手, 2019.6.7-8.
 - 33) 小池純子, 柴崎聡子, 河野稔明, 竹島 正: 警察官通報事例に対する行政の地域生活支援体制整備の検討—川崎市の複数回通報事例をもとに—. 第115回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.20-22.
 - 34) 井ノ口恵子, 小池純子, 新井清美, 望月明見, 渡邊敦子, 森田展彰: 薬物依存症者の回復支援を看護の視点から検討する—第3弾—. 第18回日本アディクション看護学会学術集会, 東京, 2019.6.29-30.
 - 35) 望月明見, 森田展彰, 小池純子, 新井清美: 更生保護施設における女性薬物事犯への支援に関する研究. 第18回日本アディクション看護学会学術集会, 東京, 2019.6.29-30.
 - 36) 佐々木英司, 河本次生, 波田野隼也, 佐藤裕大, 小池純子: 精神保健福祉法第23条通報における精神保健福祉士等専門職の役割に関する一考察. 第18回日本精神保健福祉士学会学術集会, 名古屋, 2019.8.30
 - 37) 井ノ口恵子, 新田千枝, 小池純子, 佐藤裕大, 山田幸子, 山田義則, 受田理恵, 渡邊敦子, 森田展彰: 刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援—更生保護施設を中心とした意見交換会—その2. アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 北海道, 2019.10.4-6.
 - 38) 渡邊敦子, 森田展彰, 受田恵里, 安里明友美, 川井田恭子, 小池純子, 新井清美, 井ノ口恵子: 刑の一部執行猶予制度における薬物依存者への地域支援更生保護施設職員に対するアンケート調査の結果. 法と心理学会第20回大会, 2019.10.26-27.
 - 39) 塩澤拓亮, 藤井千代, 平田豊明, 兼行浩史, 野田寿恵, 杉山直也: 精神科救急及び急性期医療サービスにおける医療判断やプロセスの標準化と質の向上に関する研究. 第27回日本精神科救急学会学術総会, 宮城, 2019.10.18-19.
 - 40) 安間尚徳, 渡辺和広, 松長麻美, 西 大輔, 川上憲人: 思春期主体価値と自殺関連行動: 思い出し法による横断研究. 第43回日本自殺予防学会総会, 名古屋, 2019.9.6-9.8. (ポスター)
 - 41) 安間尚徳: 思春期主体価値と成人期の心理的ストレス反応: 思い出し法による横断研究. 第60回日本児童青年精神医学会, 沖縄, 2019.12.5-12.7. (ポスター)
 - 42) 谷山 牧, 荒木田美香子, 山下留理子, 橋本理恵子, 保母 恵, 若林和枝, 大久保 豪: 就労支援を受ける生活困窮者へのトラウマ・インフォームド・ケアを基盤としたストレス対処講座作成と評価. 第39回日本看護科学学会学術集会, 石川, 2019.11.30-12.1.
 - 43) 橋本(小市)理恵子, 谷山 牧, 大久保 豪: 統合失調症の再燃および再発とトラウマとの関係における文献検討. 第39回日本看護科学学会学術集会, 石川, 2019.11.30-12.1.
 - 44) 橋本(小市)理恵子, 宮本有紀, 谷山 牧, 菊池安希子: 外来通院している統合失調症患者の再発に関する研究—Early Signs Scale (ESS) 日本語版自己記入式尺度を使用した追跡研究—. 日本精神衛生学会第35回大会, 大分, 2019.12.7-8. (ポスター) (奨励賞受賞)
 - 45) 大河内彩子, 橋本(小市)理恵子, 藤村一美, 金森弓枝, 喜田昌子: 児童虐待予防に向けた「気になる親」への支援プログラム開発のための基礎的研究. 第8回日本公衆衛生看護学会学術集会, 愛媛, 2020.1.11-12. (ポスター)
 - 46) 橋本(小市)理恵子, 大河内彩子: 支援者が「気になる保護者」の特徴と支援のあり方に関する文献検討. 第8回日本公衆衛生看護学会学術集会, 愛媛, 2020.1.11-12. (ポスター)
- (3) 研究報告会
- 1) Yamaguchi S: Validation of Japanese version of Individualized Supported Employment Fidelity scale (JiSEF): A replication study. Meet the Expert, Kodaira, Tokyo, 2019.12.5.
 - 2) 菊池安希子: 高規格化の社会実験: 英国 DSPD 病棟の経験. 2019年度 第2回 精神医療法研究会, 東京, 2019.11.24.

- 3) 大隅尚広：恐怖は人を道徳的にするか ―サイコパシーの恐怖の障害についての検討。広島修道大学第2回モラル研究会，広島，2019.11.27.

(4) その他

C. 講演

- 1) 藤井千代：精神障害者の退院支援と地域包括ケアシステムの構築について。東京保健所長会，東京，2019.4.25.
- 2) 藤井千代：リカバリー支援のための研究と政策。むさし野会，東京，2019.4.27.
- 3) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について。東松山市精神科地域連携勉強会，埼玉，2019.5.8.
- 4) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について。令和元年度 第1回 広域AD会議，東京，2019.5.17.
- 5) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について。令和元年度 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に係るアドバイザー・都道府県等担当者合同会議及びアドバイザー合同会議，東京，2019.5.29
- 6) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けて一構成要素を中心に。長崎県精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築担当者会議，長崎，2019.6.5.
- 7) 藤井千代：「地域で自分らしく暮らす」を支える地域包括ケア。大阪市精神障害者地域支援連絡協議会例会，大阪，2019.6.28.
- 8) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムと精神障害者の退院支援について。神奈川県精神保健福祉士協会総会，神奈川，2019.6.29.
- 9) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について。刈谷市精神科地域連携勉強会，愛知，2019.7.5.
- 10) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を目指して一概念整理と私たちができること。令和元年度第1回 三重県精神障がい者地域移行・地域定着推進連絡会 三重，2019.7.9.
- 11) 藤井千代：精神障害者の地域生活を支えるために必要な社会資源とは。石神井保健相談所精神保健講演会，東京，2019.7.31.
- 12) 藤井千代：特別講演 I 精神科デイケアにおけるケースマネジメント。日本デイケア学会第24回年次大会，北海道，2019.9.14.
- 13) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムについて。リカバリー全国フォーラム 2019 分科会 20，東京，2019.9.22.
- 14) 藤井千代：全国の措置入院の運用並びに措置入院解除後支援の状況。措置入院の運用並びに措置入院解除後支援に係る意見交換会，鳥取，2019.10.2.
- 15) 藤井千代：精神科における人権擁護について。全国国立病院精神看護管理者全国会議，愛知，2019.11.6.
- 16) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について。精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に向けた学習会，島根，2019.11.18.
- 17) 藤井千代：退院後支援とこれからの精神科地域ケア。第5回 有情の会，愛知，2019.12.4.
- 18) 藤井千代：“精神障害にも対応した地域包括ケアシステム”につなげる，つながる 診療報酬，障害福祉サービス。令和元年度第2回 三重県精神障がい者地域移行・地域定着推進連絡会，三重，2019.12.19.
- 19) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について。愛知県公衆衛生協会教育講演，愛知，2019.12.20.

- 20) 山口創生：パーソナル・リカバリーと就労支援： Individual placement and support の哲学と効果．第 27 回日本精神障害者リハビリテーション学会，大阪プレ大会，大阪，2019.6.29．
- 21) 山口創生：精神科における共同意思決定（SDM）：当事者と協働する SDM システム．大日本住友製薬プレスセミナー，東京，2019.12.11．
- 22) 佐藤さやか：認知機能障害とその支援 - わかってきたこととこれから - ．じうんどう発！精神障害者雇用シンポジウム『働く』を応援する ～仕事と認知機能障害～，じうんどう病院，東京，2019.11.15．
- 23) 佐藤さやか：就労支援と認知機能リハビリテーション（裏テーマとして・・・心理学的支援技法を支援システムにどのようにビルドインするのか？）．センター病院精神科研究会&EDICS 勉強会，東京，2020.1.14．
- 24) 菊池安希子：医療観察法地域処遇中の対象者の変化について．第 160 回【東京】医療観察制度関係機関連絡協議会，東京，2019.10.11．
- 25) 菊池安希子：暴力のリスクアセスメント入門．令和元年度 日本犯罪心理学会近畿地区研究会，大阪，2019.10.5．
- 26) 菊池安希子：EMDR 初学者の質問集．日本 EMDR 学会東京スタディグループ，東京，2019.10.26．
- 27) 菊池安希子：状態維持プランをつくろう．国立精神・神経医療研究センター統合失調症センター公開講座，東京，2019.11.23．
- 28) 菊池安希子，藤井千代，椎名明大，平野美紀，小池純子：高規格化の社会実験：英国 DSPD 病棟の経験．2019 年度 第 2 回 精神医療法研究会，東京，2019.11.24．
- 29) 菊池安希子：高規格化の社会実験：英国 DSPD 病棟の経験．2019 年度 第 2 回 精神医療法研究会，東京，2019.11.24．
- 30) 菊池安希子：トラウマインフォームドケア．令和元年度 医療観察法心理士ネットワーク研究会，新潟，2019.11.29．
- 31) 菊池安希子：「EMDR ツールボックス」に学ぶ（実習編），日本 EMDR 学会東京スタディグループ，東京，2020.1.25．
- 32) 菊池安希子：動機づけ面接法入門①．国立精神・神経医療研究センター病院訪問看護ステーション PORT 勉強会，東京，2020.2.3．
- 33) 菊池安希子：動機づけ面接法入門②．国立精神・神経医療研究センター病院訪問看護ステーション PORT 勉強会，東京，2020.2.10．
- 34) 西内絵里沙：シンポジウム「地域での暮らしを豊かにする多様なアウトリーチ支援のこれから」内 実践報告「所沢市の取り組み」（パネルディスカッション パネラー）．講演会「精神障害のある人の地域での暮らしを豊かにするために」～本人を中心に多様なアウトリーチ支援を考える～，東京，2020.1.11．
- 35) 小塩靖崇：自殺予防教育-思春期のこころの発達と健康．尾北学校保健会（主催：江南市教育委員会），愛知，2019. 6.14．
- 36) 小塩靖崇：自傷の正しい理解と生徒の支援・予防教育．教育研究協議会，東京，2019. 7.22．

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 藤井千代：日本社会精神医学会 理事
- 2) 藤井千代：日本精神保健福祉政策学会 理事
- 3) 藤井千代：日本司法精神医学会 評議員
- 4) 藤井千代：日本精神保健・予防学会 評議員

- 5) 藤井千代：日本精神神経学会 医療倫理委員
- 6) 山口創生：日本精神保健福祉学会 編集委員
- 7) 山口創生：日本統合失調症学会 パブリックリレーション委員会 アドバイザリーボード
- 8) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 常任理事
- 9) 山口創生：こころのバリアフリー研究会 評議員
- 10) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会 常任理事
- 11) 佐藤さやか：公認心理師の会 医療部会委員
- 12) 佐藤さやか：VCAT-J 研究会 理事
- 13) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会 常任理事 第8期会長
- 14) 菊池安希子：日本 EMDR 学会理事 トレーニング委員会委員 倫理委員会委員
- 15) 菊池安希子：日本司法精神医学会 評議員
- 16) 菊池安希子：医療観察法心理士ネットワーク 幹事
- 17) 菊池安希子：日本公認心理師協会 司法犯罪分野委員会委員
- 18) 菊池安希子：EMDR Asia Scientific Committee (2019～)
- 19) 下平美智代：日本精神障害者リハビリテーション学会 常任理事
- 20) 松長麻美：こころのバリアフリー研究会 評議員
- 21) 松長麻美：日本精神障害者リハビリテーション学会 研修委員

(3) 座長

- 1) Fujii C., Gaiind KS: Free Pater 5. The 23rd World Congress of Social Psychiatry, Bucharest, Romania, 2019.10.26.
- 2) 渡邊衛一郎, 藤井千代：精神科領域における Shared Decision Making (SDM) の実現可能性. 第115回日本精神神経学会学術総会, 新潟大会, 新潟, 2019.6.21.
- 3) 山口創生：心理社会的アプローチ. 第27回日本精神障害者リハビリテーション学会大阪大会, 大阪, 2019.11.24.
- 4) 佐藤さやか：リカバリー. 第27回日本精神障害者リハビリテーション学会大阪大会, 大阪, 2019.11.24
- 5) 菊池安希子：「EMDR による妄想性障害女性の抑うつ状態と身体症状の改善」. 日本 EMDR 学会第14回学術大会, 東京, 2019.6.1.
- 6) 菊池安希子：一般演題 3E 対象者との関わりⅡ. 第15回日本司法精神医学会大会, 岩手, 2019.6.7.
- 7) 小池純子：教育講演Ⅲ：アディクションのある人の家族への支援における共通性と多様性. 第18回日本アディクション看護学会学術集会, 東京, 2019.6.29-30.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 藤井千代：日本社会精神医学会雑誌編集委員会副委員長
- 2) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
- 3) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 英文監修者
- 4) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 学会誌編集委員
- 5) 山口創生：学会誌投稿論文等査読小委員会及び査読制度の在り方検討小委員会
- 6) 山口創生：Canadian Journal of Psychiatry: reviewer registration
- 7) 山口創生：Epidemiology and Psychiatric Sciences: reviewer registration
- 8) 山口創生：American Academy of Child and Adolescent Psychiatry: reviewer registration
- 9) 菊池安希子：日本認知療法・認知行動療学会 編集委員
- 10) 菊池安希子：日本 EMDR 学会 英文監修者
- 11) 河野稔明：日本司法精神医学会 編集委員

- 12) 松長麻美 : Archives of Women's Mental Health: reviewer registration
- 13) 大隅尚広 : 日本感情心理学会 感情心理学研究 編集委員
- 14) 小塩靖崇 : IACAPAP テキストブック翻訳委員会委員
- 15) 小塩靖崇 : 予防精神医学 編集委員
- 16) 橋本理恵子 : 日本看護科学学会 和文誌専任査読委員 (～令和元年 9 月)
- 17) 橋本理恵子 : Journal of Psychiatric and Mental Health Nursing: reviewer registration

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 藤井千代, 菊池安希子, 山口創生, 佐藤さやか : 2019 年度精神保健に関する技術研修 第 3 回 地域におけるリスクアセスメント研修. 東京, 2019.8.27.
- 2) 藤井千代, 佐藤さやか, 山口創生, 菊池安希子 : 2019 年度精神保健に関する技術研修 第 17 回 多職種による包括型アウトリーチ研修. 東京, 2019.8.28-30.
- 3) 藤井千代, 山口創生, 佐藤さやか, 菊池安希子 : 2019 年度精神保健に関する技術研修 第 7 回 医療における個別就労支援研修. 東京, 2019.8.28-30.

(2) 研修会講師

- 1) 藤井千代 : 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムについて. 2019 年度精神保健に関する技術研修 2 研修合同, 東京, 2019.8.28.
- 2) 藤井千代 : 退院後支援計画作成のポイント. 「精神障害者の退院後支援に関するガイドライン」における保健所担当者研修, 広島, 2019.9.10.
- 3) 藤井千代 : 地域包括ケアシステムについて. 所沢市自立支援協議会こころ部会研修会, 埼玉, 2019.11.19.
- 4) 藤井千代 : 退院後支援を通じた精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築. 新潟県措置入院に関する研修会, 新潟, 2019.11.28.
- 5) 藤井千代 : 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について. 2019 年度 京都市精神障害者地域移行・地域定着支援事業関係機関研修会, 京都, 2019.12.12.
- 6) 藤井千代 : 多様な精神疾患等に対応できる医療連携体制と精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの関係性. 令和元年度 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築支援事業多様な精神疾患等に対応できる医療連携構築支援研修会, 東京, 2020.1.20.
- 7) 藤井千代 : 「措置入院の運用に関するガイドライン」「地方公共団体による精神障害者の退院後支援のガイドライン」運用状況調査結果について. 第 44 回全国精神保健福祉業務研修会 in 静岡, 静岡, 2020.2.1.
- 8) 藤井千代 : 東京都版退院後支援ガイドラインについて. 「東京都における措置入院者退院後支援ガイドライン」運用に伴う研修, 東京, 2020.2.19.
- 9) 藤井千代 : 計画作成に係るアセスメントについて. 「東京都における措置入院者退院後支援ガイドライン」運用に伴う研修, 東京, 2020.2.20.
- 10) 山口創生 : リカバリーを重視した支援とは: 支援哲学, ゴール設定と評価, 組織体制. 2019 年度精神保健に関する技術研修 2 研修合同, 東京, 2019.8.28.
- 11) 山口創生 : Individual placement and support (IPS)/ 個別型援助付き雇用. 2019 年度精神保健に関する技術研修 第 7 回 医療における個別就労支援研修, 東京, 2019.8.29.
- 12) 山口創生 : リカバリーを重視した支援と IPS. 就労支援研修会 (ヴィストキャリア), 石川, 2020.01.25.
- 13) 佐藤さやか : 認知機能リハビリテーションのエビデンス, 適応等について. 第 5 回 VCAT-J 研修会, 東京, 2019.7.27.

- 14) 菊池安希子：リスクアセスメントの歴史・進め方・演習．第3回地域におけるリスクアセスメント研修，東京，2019.8.27.
- 15) 菊池安希子：訪問におけるリスクマネジメント．地域精神科モデル医療研修シリーズ第17回多職種による包括型アウトリーチ研修，東京，2019.8.30.
- 16) 菊池安希子：司法精神医学③医療観察におけるリスクアセスメント．第12回社会復帰調整官初任研修，東京，2019.10.31.
- 17) 下平美智代：ストレングスアセスメントとケアプランづくりの実際．2019年度精神保健に関する技術研修 第17回多職種による包括型アウトリーチ研修，東京，2019.8.29.
- 18) 下平美智代：（グループワーク）ケアプラン（初版）作り．2019年度精神保健に関する技術研修 第17回多職種による包括型アウトリーチ研修，東京，2019.8.29.
- 19) 下平美智代：（グループワーク）ストレングスアセスメントのグループスーパービジョンとケアプラン改訂．2019年度精神保健に関する技術研修 第17回多職種による包括型アウトリーチ研修，東京，2019.8.29.
- 20) 中西清晃：アウトリーチチームと地域連携．第17回多職種による包括型アウトリーチ研修，東京，2019.8.30.
- 21) 中西清晃：所沢市における精神科アウトリーチの取り組みと現状．埼玉県精神科アウトリーチ研究会研修会，埼玉，2019.11.16.
- 22) 中西清晃：行動制限の動向と地域から見た病院．行動制限最小化研修，石川，2019.9.13.
- 23) 西内絵里沙：精神保健福祉士から見た多職種アウトリーチ支援．第17回多職種による包括型アウトリーチ研修，東京，2019.8.30.
- 24) 西内絵里沙：家族心理教育とは・グループセッション（GS）の進め方・家族心理教育の運営（講師・インストラクター）．標準版家族心理教育研修会 in 横浜・上大岡，神奈川，2019.9.7-8.
- 25) 西内絵里沙：メリデン版訪問看護の実際．メリデン訪問家族支援入門研修，東京，2019.9.29.
- 26) 西内絵里沙：家族支援について．所沢市自立支援協議会研修，埼玉，2020.2.18.
- 27) 小池純子：高齢者・障がい者の相談支援体制における連携のあり方を考える．栃木県地域包括・在宅介護支援センター協議会 県西ブロック 日光市・鹿沼市障がい者自立支援協議会 相談支援部会合同研修会，栃木，2020.2.12.

F. その他

- 1) 山口創生：精神障害者への個別就労支援：Individual placement and support から学ぶこと．薬物依存症者の就労支援に関する合同勉強会，国立精神・神経医療研究センター薬物依存研究部，東京，2019.7.10.
- 2) 菊池安希子：国内で先駆的な取り組みを行っている民間団体へのヒアリング．配偶者暴力被害者支援における期間連携及び加害者対応に関する調査研究事業ヒアリング調査，東京，2019.10.28.
- 3) 菊池安希子：高規格化の社会実験：英国 DSPD 病棟の経験．2019年度 第2回 精神医療法研究会，東京，2019.11.24.
- 4) 松長麻美：ボンディング障害の事例検討．第6回周産期メンタルヘルスセミナー，東京，2019.6.30

11. 自殺総合対策推進センター

I. センターの概要

自殺総合対策推進センター（JSSC）は平成 28 年 4 月 1 日に施行された改正自殺対策基本法の新しい理念と趣旨に基づき、学際的な観点から関係者が連携して自殺対策の PDCA サイクルに取り組むためのエビデンスの提供と、地域の自殺対策を支援する機能を強化することを使命としている。

当センターは、センター長のもとに評議委員会が設置され、さらに自殺実態・統計分析室、地域連携推進室、自殺未遂者・遺族支援等推進室、自殺総合対策研究室の 4 室を置いている。

センター長：本橋 豊、自殺実態・統計分析室長：金子善博、自殺総合対策研究室長：藤田幸司、室長（国際連携担当）：木津喜雅、研究員：森口 和、非常勤研究員：松永博子、田中元基、朴 恵善、吉野さやか、青木みあ、客員研究員：藤原佳典、藤原武男、井門正美、大塚耕太郎、尾崎健一、猪飼周平、センター研究補助員：堀口泰代、武内砂由美、大友真弓、軽部結花（7/19 まで）、木船妙子、土屋美保、櫻井まり（4/1 から 7/31 まで）、原田彩乃（4/16 から）、風間紀子（9/1 から）、平野万由子（11/1 から）。

なお令和 2 年 3 月 31 日に自殺総合対策推進センターは廃止され、同年 4 月 1 日よりその業務を厚生労働大臣指定（調査研究等）法人いのちを支える自殺対策推進センターが継承することとなった。

Ⅱ. 研究活動

1) センター長統括

① 地域の実情に応じた自殺対策推進のための包括的支援モデルの構築と展開方策に関する研究（厚生労働科学研究：センター長が統括）

平成 28 年 4 月に施行された改正自殺対策基本法において、都道府県・市町村における自殺対策計画の策定が義務付けられ、計画に基づき地域自殺対策がすべての自治体において推進されることになった。都道府県・政令市に地域自殺対策推進センターが設置され、「生きることの包括的支援としての自殺対策」が推進される枠組みが整えられた。今後数年間の自殺対策の優先課題は、地域自殺対策計画に基づく地方自治体の自殺対策の推進を、円滑かつ強力に支援することである。本研究の目的は、改正自殺対策基本法の趣旨を踏まえ、地域における自殺対策のための包括的支援モデルと展開方策を確立し、地域自殺対策の推進に必要な政策的・実務的支援の展開方策を社会実装させることであり、これにより厚生労働行政における自殺対策の施策展開に資することを目的とする。

② 革新的自殺研究推進プログラムの運営

改正自殺対策基本法の新しい理念と趣旨に基づき、政府が推進すべき自殺対策の指針として、新たな自殺総合対策大綱（平成 29 年 7 月 25 日閣議決定）が策定された。革新的自殺研究推進プログラムとは、新たな大綱に示された科学的根拠に基づいた自殺総合対策を強力に推進することを目的に、必要な研究のための環境の整備を総合的かつ効果的に行うためのプログラムである。自殺研究のイノベーションをはかるため、次の 3 領域を中心に進めている。

領域 1：自殺対策に関するエビデンスの確立

領域 2：地方自治体の支援ツールの改善

領域 3：新たな政策領域の開拓

令和元年度は次の 13 の研究課題が公募により採択され、精力的に研究が進められた。

・社会経済環境と自殺

（研究代表者：早稲田大学政治経済学術院准教授 上田路子）

・がん患者の専門的・精神心理的なケアと支援方法に関する研究

（研究代表者：国立がん研究センター中央病院支持療法開発部門長 内富庸介）

・国際的視野から見た労働条件・働き方と自殺問題に関する研究

（研究代表者：産業医科大学医学部公衆衛生学教授 松田晋哉）

- ・国際的視野から見た勤務問題と自殺対策に関する研究
(研究代表者：聖路加国際大学公衆衛生大学院教授 ギルモー・スチュアート)
- ・社会全体の自殺リスクを低下させるためのエビデンスに関する社会疫学的研究
(研究代表者：国立長寿医療研究センター老年学・社会科学センター老年学評価研究部長 近藤克則)
- ・自殺予防に対して医療、保健、福祉、心理等の専門家をを目指す学生が有すべき知識と技術向上のための教材の開発と実装に関する研究
(研究代表者：北里大学医学部公衆衛生学教授 堤 明純)
- ・公的マイクロデータを活用した地域自殺対策支援モデルの開発に関する研究
(研究代表者：多摩大学経営情報学部准教授 久保田貴文)
- ・勤労者を含む地域の自殺未遂者等支援のための保健医療福祉サービスの充実にに関する研究
(研究代表者：労働者健康安全機構本部研究ディレクター 伊藤弘人)
- ・ICTを活用した地域自殺対策の強化に関する研究
(研究代表者：NPO 法人OVA代表理事 伊藤次郎)
- ・高齢者ボランティアと協働するソーシャル・キャピタル強化による自殺対策の推進に向けた研究
(研究代表者：東京都健康長寿医療センター研究所 研究部長 藤原佳典)
- ・自殺対策と連動した死因究明と法医学研究―他殺後自殺(無理心中)と子どもの死及び遺族対応に焦点を当てて
(研究代表者：千葉大学大学院医学研究院法医学教室教授 岩瀬博太郎)
- ・インターネット・SNS等の仮想空間における若者の援助希求に関する研究
(研究代表者：中曽根康弘世界平和研究所研究本部主任研究員 高橋義明)
- ・社会全体の自殺リスクを低下させるためのエビデンスに関する社会疫学的研究
(研究代表者：国立長寿医療研究センター老年学・社会科学センター研究部長 近藤克則)
- ・子どもの貧困対策の推進と自殺対策に関する研究
(研究代表者：東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授 藤原武男)

プログラムの運営については、ガバニングボードによるプログラム推進の基本方針と運営方針の策定に基づき、プログラムディレクターが各課題の進捗状況を把握し、研究課題推進委員会による個別課題への助言を行う仕組みが構築され、運用が開始されている。

採択された研究課題は、いずれも自殺総合対策大綱で示された新たな自殺総合対策の方向性を踏まえた学際的・国際的な最新の研究であり、その成果をわが国の自殺総合対策の実務に迅速に還元することを目指す意欲的なものである。

また令和元年度は、本プログラムの3年間(平成29年度～令和元年度)の研究成果をもとに、具体的な政策提言につなげるための政策提言集を作成した。政策提言は多岐にわたり、地域自殺対策を推進するための好事例となる多世代交流型の高齢者の読み聞かせ活動と児童生徒のSOSの出し方に関する連携、地域の児童虐待や子供の自殺を防止するための母子保健活動との連携方策、医学生に対する早期の自殺予防教育の具体的カリキュラムの開発、SNSを用いた若者の自殺対策への具体的介入方策、自殺未遂者対策としての医療保健福祉の連携方策などの有用な成果の獲得などである。政策提言集はホームページ及び冊子にて公開し、国民への情報発信を行った。

③ 第4回国際自殺対策フォーラムの開催

2020年2月11日に第4回国際自殺対策フォーラムを開催した。本フォーラムではボルドー大学法学部教授のLoïc Lerouge氏による「フランスの職場におけるハラスメント法の最新動向」及び厚生労働省大臣官房参事官 岡 英範氏による「職場のパワーハラスメント防止対策」の二つの基調講演と、シンポジウム「自殺対策研究の最先端～成果の社会への還元～」を行った。

基調講演では、Lerouge氏によるフランスにおける広い概念のもと法制化されたハラスメント防止法制についての講演と、岡参事官による日本のハラスメント防止法の概要とその背景についての講演を受けて、日本とフランス両国の情報を共有し、グローバルな観点からハラスメント防止法と自殺対

策について議論を行った。シンポジウムでは、革新的自殺研究推進プログラムの成果の一部が発表され、すべての基礎自治体による地域自殺対策計画の策定の後、次の課題となる自殺対策の政策評価の基礎となるエビデンスをいかに蓄積し、それらの成果をどのように社会に還元していくべきか、その方策について討議を行った。

④ 令和元年度自殺対策推進レアールの企画

自殺対策推進レアールとは、革新的自殺研究推進プログラムと厚生労働科学研究、これら二つの研究プロジェクトのフィールドで得られた研究成果を、中央市場（Les Halles：レアール）に持ち寄って、それら成果物を吟味し交換（情報共有）するため、2019年度に第1回を開催し、2020年は第2回（2020.3.5）を開催する予定で企画を進めていたが、新型コロナウイルス流行の影響のため中止となった。ただしその内容は抄録集として冊子編纂し、公表した。このレアールの目的は、この場で共有された成果物を各自が自分のフィールドに持ち帰り、次のステップを更に進めていくこと、最終的には自殺対策の現場へ研究成果を還元することであり、今後も継続的に実施していく。

⑤ WHO 協力センター（自殺対策・人材育成：JPN-92）としての活動

JSSC は 2015 年に WHO 協力センターとして承認され、その後の協力センターとしての活動を評価され、承認期限である 2019 年の再申請についてもあらためて承認を得て、活動を継続してきた。

令和元年度の WHO 協力センターの活動としては、2020 年 9 月、WHO の国家自殺対策戦略の推進に関する専門家会議“30th World Congress of the International Association for Suicide Prevention（IASP2019）”における WHO のワークショップ（デリーロンドンデリー）に、また“National Suicide Prevention Strategy Implementation and Evaluation”（ジュネーブ）にセンター長が招聘され、そこで日本の国家自殺対策戦略についてプレゼンテーションを行い、日本の国家自殺対策戦略の概要を世界に向けて情報発信した。

また、WHO の公式文書“PREVENTING SUICIDE: A resource for filmmakers and others working on stage and screen”及び“Preventing suicide: a resource for media professionals, update 2017”を「自殺対策を推進するために-映画製作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識-」及び「自殺対策を推進するために-メディア関係者に知ってもらいたい基礎知識 2017 年最新版-」として翻訳・公表し、国内の関係者等に周知した。これらの文書は新聞などの各メディアで報道され、自殺総合対策推進センターの成果として公知された。

⑥ 学会等での研究発表

2020 年 9 月、国家自殺対策戦略の推進に関する専門家会議“30th World Congress of the International Association for Suicide Prevention（IASP2019）”（デリーロンドンデリー）に参加し、日本の国家自殺対策戦略についてプレゼンテーションを行った。また同月に台湾自殺予防学会シンポジウム（台北）、12 月にソウル疫学会シンポジウム（ソウル）、同月、韓国予防医学会シンポジウム（ソウル）に招聘され、上述の内容を基とする発表・講演を行った。2019 年 10 月 23 日、第 78 回日本公衆衛生学会総会（高知市）にて「いのち支える自殺対策：地域に求められる居場所づくりを考える」を実施した。ここでは地域自殺対策計画の策定・実施において、子ども・若者や高齢者だけではなく、マイノリティや自殺未遂者や自死遺族など様々な対象に居場所づくりが取り入れられようとしている中でどのような活動が効果的なのか、また自殺対策において何か課題なのかを共有し検討を行った。

⑦ 国外研究機関等への視察・調査

令和元年度は東アジアにおける自殺対策の国際的な展開を視野に入れ、韓国において忠清南道精神保健福祉センターによる日韓自殺予防シンポジウム(R1.4.19)、ソウル中央大学にてシンポジウム：日本の自殺対策の深層分析シリーズ(R1.10.2)、韓国中央自殺予防センターにて日韓合同シンポジウム(R1.10.22)、白石大学にて日韓自殺予防セミナー(R1.11.11-12)、ソウル疫学会シンポジウム(R1.12.13)、また台湾において、台湾自殺予防学会シンポジウム(R1.9.8)に参加し、センター長及び JSSC 研究員による講演・発表を行うとともに、各関係機関の調査・研究を実施し、東アジア地域における自殺対策国家戦略策定に向け、基盤を形成した。

また 2019 年 5 月、米国の自殺対策関係機関、Suicide Prevention Resource Center 及び Crisis Text Line を訪問・調査し、その調査内容については和文学術雑誌「自殺総合政策研究第 2 巻」にて公表した。

2) 自殺実態・統計分析室の研究活動

自殺実態・統計分析室では、平成 28 年度から実施している地域の自殺実態プロファイルの研究、開発を引き続き行い、平成 29 年度に地域自殺実態プロファイルとして完成させた。これは、改正自殺対策基本法により国及び自殺総合対策推進センターに作成が求められているものであり、法改正により全国自治体に義務付けられた自殺対策計画の策定に際し、地域の自殺の実状を勘案する際の参考とされるものである。その目的は、地域の実態の分析及び地域特性（地域の課題）の効果的な把握であり、自治体における自殺の基本的分析、自殺の地域特性にあった政策形成、対策事業の企画及び評価に活用されることが期待されている。この中では、自殺統計、人口動態統計、国勢調査、経済センサスやその他の公的統計や官公庁の事業統計、民間団体の調査など新たな自殺対策に関連する各種の資料を包括的に活用することが求められている。このプロファイルは都道府県政令指定都市及び都道府県、市区町村に対する自殺対策のための包括的な情報提供として、国内全自治体（1741 カ所）を対象として作成され、項目内容だけでなく効率的な作成配付方法についての研究開発も併せて行った。平成 28 年度中に自殺統計を中心とした第一版を作成し、自殺総合対策推進センターから、国内全自治体に対して配付した。

平成 29 年度にはこのプロファイルを基に、国内全自治体が策定する自殺対策計画の策定基盤として地域自殺対策政策パッケージを完成させ公表し、平成 30 年度にはこのプロファイルの更新版をリリースした。令和元年度は、地域自殺対策計画の PDCA サイクルの推進のためのツール開発を進め、すべての基礎自治体の計画を JSSC の中央管理下に置くシステム開発を行い実用化した。このシステムはオンラインで自治体の計画を収集しデータベース化できるようにしたもので、今後の自殺対策計画の PDCA サイクル推進の基盤データとなるものである。このシステムをもとに国と連携の上、効果的な施策の PDCA サイクルを進めていくこととなった。

3) 地域連携推進室の研究活動

都道府県及び政令指定都市に対して、地域自殺対策推進センター連絡会議の開催、メールや電話等を用いた相談により、自殺総合対策の推進並びに自殺対策計画の策定支援を行った。具体的には 2019 年 7 月 24 日、全国の都道府県・市町村自殺対策関係者を対象に、「令和元年度第 1 回地域自殺対策推進センター等連絡会議」を開催し、国の政策動向及び地域自殺対策計画の執行における地域自殺対策推進センターの役割についての説明及び質疑を行った。（第 2 回 R1.2.28 は新型コロナウイルス流行の影響のため中止。）

併せて、全国の自治体等から研修会等講師の招へいを受け、地域における自殺対策の推進、子ども・若者に対する自殺対策などについての講演を行った（岐阜県教育委員会(R1.8.1)、高知県立精神保健福祉センター(R1.8.7)、福岡県精神保健福祉センター(R1.8.26)、栃木県烏山健康福祉センター(R1.10.17)、東京都思春期保健研究会(R1.11.9)、広島県精神保健福祉センター(R1.12.4)、足立区衛生部(R1.12.2)、新潟県教育庁(R1.12.11)、川崎市総合教育センター(R2.2.18)、新潟県上越市健康福祉部(R2.2.21))。また、自治体(和歌山県)の自殺対策推進の有識者会議に議長（金子室長）及び委員（本橋センター長）として就任した(R1.10)。

4) 自殺未遂者・遺族支援等推進室

2020 年 1 月 18 日、「自殺未遂者ケア研修（一般救急版）」を日本臨床救急医学会と共催で、また 2020 年 1 月 19 日、「自殺未遂者ケア研修（精神科救急版）」を日本精神科救急学会と共催で開催した。精神保健福祉分野の従事者を対象とし、臨床現場で役立つ自殺未遂者ケアのポイントをガイドラインに沿って体系的に、またワークショップを通じ実践的に習得するための内容を企画、実施した。

5) 自殺総合対策研究室

革新的自殺研究推進プログラムの円滑な遂行のため、プログラムの推進体制の構築（研究課題推進委員会の設置、諸規定の再整備、ガバニングボードの選任、Program Director の選任、研究代表者会議の開催等）を行った（Ⅱ研究活動 1)-②）。2018 年度の研究課題の公募・選考を 2019 年 6 月に実施し、12 件の研究課題が採択された。この 12 研究課題に対し研究費を外部委託し、各機関において研究が開始された。革新的自殺研究推進プログラムの研究成果の一部は、2 月 11 日開催の第 4 回国際自殺対策フォーラムのシンポジウムで発表（Ⅱ研究課題 1)-③）、また、3 月 5 日開催の令和元年度自殺対策推進レアール（Ⅱ研究課題 1)-④）にて発表予定であったが中止となったため、革新的自殺研究推進プログラムの研究成果報告書上で、その内容を公表した。

また、自殺実態・統計分析室にて実施した地域自殺実態プロファイルの研究・開発を基に、国内全自治体が策定する自殺対策計画の策定基盤として、平成 29 年度に地域自殺対策政策パッケージを開発し完成させた。平成 30 年度はその政策パッケージにおける自殺対策の事例をデータベース化しウェブサイトで公表したことで、インターネット上にて全国自治体の自殺対策先進事例の検索が可能となった。令和元年度は、地域自殺対策計画の PDCA サイクルの推進に向け、すべての基礎自治体の計画を JSSC の中央管理下に置くためのシステム開発を行った（Ⅱ研究課題 2)）。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

本橋 豊は、NPO 法人 BOND プロジェクトに対し、自殺対策専門家として活動報告書の講評（2020 年 4 月）を行った。

本橋 豊は、2019 年 11 月 9 日に第 58 回東京思春期保健研究会にて「子どもの自殺について」、また 11 月 16 日に日本弁護士連合会第 5 回自殺対策ネットワークづくりに関する全国協議会にて「今後の自殺対策～地域における自殺対策の推進～」と題し、講演を行った。

本橋 豊は日本医療企画の取材を受け、その内容は『厚生労働 9 月号』にて「SNS 時代の自殺対策：若者・子どもの SOS を見逃さない」との特集記事として掲載された。

本橋 豊は、読売新聞のインタビュー連載「子どもの自殺を減らす」の取材を受け、その内容は 2019 年 8 月 20 日、同紙朝刊にて掲載された。

本橋 豊は、読売新聞から、当センターが翻訳を手掛けた WHO の公式文書「自殺対策を推進するために-映画製作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識-」について取材を受け、その内容は 2020 年 1 月 25 日の同紙朝刊に掲載された。

(2) 専門教育面における貢献

精神保健福祉分野の従事者を対象に、1 月 18 日に自殺未遂者ケア研修（一般救急版）を、また 1 月 19 日に自殺未遂者ケア研修（精神科救急版）を開催した。（Ⅱ研究課題 3)）

2019 年 7 月 29 日、入間市学校保健会の視察研修を受け入れ、教育関係者を対象に「SOS の出し方教育」について講義を行った。

2020 年 12 月 11 日、新潟県自殺予防教育プログラム研究指定校公開授業及び研究協議において、自殺対策専門家として参加、指導・助言を行った。

本橋 豊は、広島大学医学部にて客員教授、東京大学大学院医学系研究科及び慶應義塾大学総合政策学部にて非常勤講師を務めた。

金子善博は、東京医科歯科大学医学部、弘前大学医学部にて非常勤講師を務めた。

木津喜雅は、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科にて非常勤講師を務めた。

(3) 精研の研修の主催と協力

平成 28 年 4 月の改正自殺対策基本法の施行に伴い、自治体（都道府県及び市町村）に対して、自

自殺対策計画の策定が義務付けられたことにより、自殺対策の企画・運営に関わる自治体職員の自殺対策の企画・運営・推進能力の向上を目的に「生きることの包括的支援研修」を、2019年10月25日（第1回）、2020年2月5日（第2回）の計2回に分け実施した。第1回「自治体関係者が身につけるべき基本法の理念に基づくゲートキーパー養成について」、第2回「子ども・若者支援の進め方：自治体との連携と自殺対策 SNS 相談事業の進めかたについて」、というテーマのもと、専門家によるシンポジウム形式で実施され、地域自殺対策計画推進のための基盤的施策、重点的施策などに挙げられる領域別の対策や事業推進のための具体的な技術支援を行った。

また、全国の都道府県・市町村自殺対策関係者等を対象にしたオンライン研修システムを完成させ、最先端の自殺対策の講義や研修等について、遠隔地から受講することを可能とした。

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

2019年11月1日、八尾市議会保健福祉常任委員会の行政視察を受け入れ、地域自殺対策についての現状・動向、またその推進について意見交換及び情報提供を行った。

本橋 豊は、東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会の委員を務め、同研究所における社会科学系研究についての評価を行った。また、労働者健康安全機構の医学研究倫理審査委員会の委員を務め、同機構の研究開発計画に関する審査を行った。

金子善博は、和歌山県の自殺防止対策の推進に関する有識者会議の議長に就任し、県政への意見や情報提供を行った。

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

日本の自殺対策の最新動向を世界に発信する媒体として、国際学術雑誌“Suicide Policy Research”第2巻第2号を発刊し、国際的情報発信を強化した。

和文学術雑誌「自殺総合政策研究」第2巻1号（2019年11月）、第2巻2号（2020年3月）を発刊し、日本語による学術情報発信を強化した。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) 朴 恵善, 藤田幸司, 本橋豊. 韓国における自死遺族支援の現状と課題に関する研究. 自殺総合政策研究 2019; 2(1). 12-18.
- 2) 金子善博, 藤田幸司, 木津喜雅, 本橋豊. 自殺総合対策と心理社会的支援. 精神保健研究 65. pp11-15, 2019.
- 3) 木津喜雅, 吉野さやか, 金子善博, 本橋豊. 米国 Crisis Text Line による心理的危機へのテキスト相談の現状に関する調査. 自殺総合政策研究 2(1), pp27-46, 2019.

(2) 総説

- 1) Yutaka Motohashi, Yoshihiro Kaneko, Koji Fujita, Masashi Kizuki. The Key Policies of Japan's Suicide Countermeasures, Suicide Policy Research 2(2), pp1-6, 2019.
- 2) Yutaka Motohashi, Yoshihiro Kaneko, Masashi Kizuki, Koji Fujita, Mia Aoki, Yasuyo Horiguchi, Sayaka Yoshino. How Does Community Engagement Pertain to Suicide Countermeasures?, Suicide Policy Research 2(2), pp7-12, 2019.
- 3) 本橋 豊, 金子善博, 木津喜雅, 藤田幸司, 青木みあ, 堀口泰代, 吉野さやか. コミュニティー・エンゲージメントは自殺対策とどのように関わるのか. 自殺総合政策研究 1(2), pp1-8, 2019.

- 4) 本橋豊, 藤田幸司, 金子善博, 木津喜雅. 【高齢者の自殺・自死とその辺縁問題】総論的報告 超高齢社会における自殺リスク. 老年精神医学雑誌 30(5). pp484-491, 2019.
- 5) 本橋 豊, 金子善博, 木津喜雅. Preventing Suicide:A global imperative. 精神医学 62(5), 医学書院, pp770-774, 2019.
- 6) 金子善博, 木津喜雅, 本橋豊. 地域自殺対策計画策定に資する自殺統計データの実用化. 統計 4月号, 70 巻, 日本統計協会, pp17-24, 2019.

(3) 著書

(4) 研究報告書

- 1) 藤田幸司. 平成 29 年度由利本荘市 生活と心の健康づくりに関する調査報告書. 自殺総合対策推進センター, pp1-196, 2019.
- 2) 朴 恵善, 藤田幸司, 金子善博, 本橋 豊. 韓国の「自殺予防の国家行動計画」について—国家行動計画策定の背景. 自殺総合政策研究 1(1), p6, 2018.
- 3) 木津喜雅. 第 10 回 WHO Mental Health Gap Action Programme (mhGAP) Forum 参加報告. 自殺総合政策研究 1(2), pp9-11, 2019.
- 4) 本橋 豊, 金子善博, 田中元基, 吉野さやか. 学校における自殺対策教育のエビデンス—海外のプログラミングと SOS の出し方に関する教育の比較—. 平成 30 年度自殺対策推進レアル抄録集, 東京, pp43-44, 2019.
- 5) 吉野さやか. 公衆衛生学からみた若者の自殺対策の現状について. 自殺総合政策研究 1(2), pp14-15, 2019.
- 6) 藤田幸司. 自死遺族支援ガイドラインの経緯と解説. 自殺総合政策研究 1(2), pp16-17, 2019.

(5) 翻訳

- 1) 本橋 豊, 木津喜雅, 青木みあ. 自殺対策を推進するために—映画製作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識—, 自殺総合対策推進センター, 東京, 2019. (“PREVENTING SUICIDE. A resource for filmmakers and others working on stage and screenNational Suicide Prevention Strategies”)
- 2) 本橋 豊, 木津喜雅, 青木みあ. 自殺対策を推進するために—メディア関係者に知ってもらいたい基礎知識 2017 年最新版—, 自殺総合対策推進センター, 東京, 2019. (“Preventing suicide. a resource for media professionals, update 2017”)

(6) その他

- 1) 本橋豊. 10 代の自殺を防ぐための SNS の活用, 月間福祉 10 月号, 第 102 巻, 全国社会福祉協議会, pp48-49, 2019.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Motohashi Y. Practical Initiatives to Reduce Suicide at the Community Level in Japan, 2016-2019. 2019 Annual Conference of Taiwanese Society of Suicidology, Taipei, September.8, 2019.
- 2) Motohashi Y., Fujita K., Sasaki H., Matsunaga H., Harima Y., Kaneko Y. An Analysis of Suicidal Ideation and Related Factors in Working Age Population of Rural Areas. The 30th World Congress of the International Association for Suicide Prevention (IASP), Derry-Londonderry, Northern Ireland, September17-21, 2019.
- 3) Motohashi Y., Kizuki M., Kaneko Y., Fujita K. Developing an evaluation framework in

the national suicide prevention policy: an example from Japan. Presented at the 30th World Congress of the International Association for Suicide Prevention (IASP), Derry-Londonderry, Northern Ireland, September 17-21, 2019.

- 4) 本橋豊. 日本の自殺対策戦略とインフラ. 韓国予防医学会シンポジウム: 日本の自殺対策の深層分析シリーズ 1 部—自殺対策の成功理由は?, ソウル, 2019.10.1.
- 5) 本橋豊. 日本の自殺対策戦略とインフラ. 韓国予防医学会シンポジウム: 日本の自殺対策の深層分析シリーズ 2 部—日本の自殺対策の基本理念と根拠創出のための研究, ソウル, 2019.10.2.
- 6) 本橋豊. 日本の国家自殺対策戦略, 自殺対策の国際交流促進のための日韓覚書および国際シンポジウム, 韓国中央自殺予防センター, ソウル, 2019.10.22.
- 7) 吉野さやか. 日本における子ども・若者の自殺対策, 自殺対策の国際交流促進のための日韓覚書および国際シンポジウム, 韓国中央自殺予防センター, ソウル, 2019.10.22.
- 8) 藤田幸司, 朴恵善, 金子善博, 本橋豊. 自死遺族支援の情報提供体制整備・地域格差解消. 第 78 回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019.10.23-10.25.
- 9) 朴恵善, 藤田幸司, 本橋豊. 韓国における自死遺族支援の現状と課題. 第 78 回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019.10.23-10.25.
- 10) 金子善博, 本橋豊, 木津喜雅, 藤田幸司. 海外の国家自殺対策戦略と推進体制に関する研究 フランス全国自殺観察機構について. 第 78 回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019.10.23-10.25.
- 11) 木津喜雅, 金子善博, 本橋豊. アイルランドとイングランドの国家自殺対策戦略の評価の実際と日本に対する含意. 第 78 回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019.10.23-10.25.
- 12) 松永博子, 藤田幸司, 佐々木久長, 播摩優子, 本橋豊. 地域における勤労世代の希死念慮とその関連要因の分析. 第 78 回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019.10.23-10.25.
- 13) 田中元基, 金子善博, 藤田幸司, 木津喜雅, 本橋豊. 児童生徒の SOS の出し方に関する教育における授業実践についての検討. 第 78 回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019.10.23-10.25.
- 14) 福嶋史江, 横道淳子, 石堂純子, 小澤彩, 本橋豊, 藤田幸司, 松永博子, 鈴木宏幸, 小川将, 高橋知也, 藤原佳典. 高齢者ボランティアとの協働による「SOS の出し方に関する教育」の実践(その 1). 第 78 回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019.10.23-10.25.
- 15) 小川将, 鈴木宏幸, 高橋知也, 横道淳子, 福嶋史江, 石堂純子, 小澤彩, 松永博子, 藤田幸司, 本橋豊, 藤原佳典. 高齢者ボランティアとの協働による「SOS の出し方に関する教育」の実践(その 2). 第 78 回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019.10.23-10.25.
- 16) 松永博子, 藤田幸司, 佐々木久長, 本橋豊. 青壮年者の望む老後像と社会経済的格差との関連に関する研究. 第 13 回日本応用老年学会大会, 京都, 2019.10.19-10.20.
- 17) 藤田幸司, 山崎幸子, 蘭牟田洋美. 高齢期におけるネガティブ・ライフイベントのメンタルヘルス及び外出頻度との関連. 日本老年社会学会第 61 回大会, 仙台, 2019.6.7-6.8.
- 18) 松永博子, 藤田幸司, 佐々木久長, 本橋豊. 地域高齢者の孤食・同居者の有無と心の健康の関連について. 日本老年社会学会第 61 回大会, 仙台, 2019.6.7-6.8.

- (2) 一般演題
- (3) 研究報告会
- (4) その他

C. 講演

- 1) 本橋豊. 日本における地域社会の自殺対策. 日韓自殺予防セミナー, 天安, 2019.11.12.
- 2) 本橋豊. 今後の自殺対策について—地域における自殺対策の推進—. 第 5 回全国自殺対策ネットワークづくりに関する全国協議会・シンポジウム, 東京, 2019.11.16.
- 3) 本橋豊. 子供の自殺について. 第 58 回東京思春期保健研究会, 東京, 2019.11.9.

D. 学会活動

- (1) 学会主催
- (2) 学会役員
- (3) 座長
- (4) 学会誌編集委員等

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 第1回生きることの包括的支援研修「自治体関係者が身につけるべき基本法の理念に基づくゲートキーパー養成について」. 東京, 2019.10.25.
- 2) 第2回生きることの包括的支援研修「子ども・若者支援の進め方: 自治体との連携と自殺対策 SNS 相談事業の進めかたについて」. 東京, 2020.2.5.

(2) 研修会講師

- 1) 本橋豊. SOS の出し方に関する教育をどう進めるか～自殺予防に関わる学校での取組～. 岐阜県小・中・義・高特生徒指導研修会, 岐阜, 2019.8.1.
- 2) 本橋豊. SOS の出し方に関する教育をどう進めるか～自殺予防に関わる学校での取組～. 「児童生徒の SOS の出し方に関する教育」の取組推進に関する研修, 高知, 2019.8.7.
- 3) 本橋豊. 自殺対策の PDCA サイクル. 自殺対策研修会, 福岡, 2019.8.28.
- 4) 本橋豊. 若者の自殺未遂者支援の充実～事例に基づく考察と施策の方向性～. 自殺対策ネットワーク研修会, 栃木, 2019.10.17.
- 5) 本橋豊. 地域における高齢者の不安への対応と自殺対策～高齢者の抱える不安と心理的孤立～. 足立区自殺未遂者ケア研修, 東京, 2019.12.2.
- 6) 本橋豊. 自殺対策について～最新の動向～. 精神保健福祉相談員資格取得講習会, 広島, 2019.12.4.

F. その他

12. ストレス・災害時こころの情報支援センター

I. 研究部の概要

平成 23 年東日本大震災の被災者に対する継続的な対応、及び今後発生が予想されるその他の災害の発生に備えた体制づくりのための研究や調査を行うことを目的として、災害時こころの情報支援センターが平成 23 年 12 月に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に設置され、平成 30 年 4 月に「ストレス・災害時こころの情報支援センター」に改称された。

当センターの活動は、主に以下の通りである。

① 災害及び事故・事件後の精神保健医療に係る助言・技術的支援、情報発信・連携

東日本大震災等の支援内容に関するデータの収集や、大規模事故、犯罪被害等が生じた際の精神保健医療活動に係る事例収集を行い、データの調査・分析、エビデンス蓄積、ガイドライン作成を行う職員を配置し、当該情報を地方自治体・関係機関に提供・発信することにより、今後新たに発生する災害時の対応力を強化した。

② 児童養護施設 若草寮への支援

当施設退所者による職員殺傷事件が施設内で発生し、職員のこころのケアについて専門的助言と支援を行った。

令和元年度の当センターの構成は以下の通りである。センター長（併任）：金 吉晴，併任研究員：関口 敦，篠崎康子（～9 月），客員研究員：宮本有紀，種市康太郎，前田正治，高橋 晶，秋山 剛，富田博秋。

II. 研究活動

- 1) WHO 版の心理的応急処置（PFA）の普及活動とアジアへの e-learning 普及研究
- 2) 災害後の心理的リカバリースキルの研究
- 3) 災害時精神保健医療対応に係るガイドライン作成

III. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

以下を通じて研究成果の社会還元を行った。

- 1) 時事ドットコム 新型コロナウイルス集団感染が確認されたクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」について，2020.2.10.（金）
- 2) 毎日新聞 東日本大震災後に PTSD 発症されたケースについて，2020.3.20.（金）

(2) 専門教育面における貢献

- 1) 令和元年度「こころの健康づくり対策事業」補助金による PTSD 対策専門研修事業

災害・事故・犯罪・児童虐待などのトラウマ的体験をされた方々に対して、基本的な精神保健医療対応（こころのケア）を提供する人材を確保するため、精神保健医療福祉業務従事者等に対し、下記 3 コースを実施した。

・心理的トラウマに関する理解を深め、初期対応、PTSD 等の治療の知識を得、基本的対応スキルを習得する通常コース（197 名受講）

A.通常コース 1 令和元年 10 月 23 日

A.通常コース 2 令和元年 11 月 8 日

・認知行動療法（持続エクスポージャー療法）による実際の治療事例を呈示し、患者の回復の可能性と経路を学習し、そうした回復に向けての治療と支援のあり方についてのグループディスカッションを通じて、高度な専門支援のあり方を学ぶ専門コース（121 名受講）

B.専門コース1 令和元年11月28日～29日

B.専門コース2 令和元年12月19日～20日

・犯罪・性犯罪被害者への適切な対応を行うために必要な専門的知識と心理社会的支援・治療対応について習得する犯罪・性犯罪被害者コース（80名受講）

C.犯罪・性犯罪被害者コース 令和2年1月22日

- 2) WHO版PFAを日本に導入し、WHOとの研究協力書の下で、一般研修を継続した。
- 3) PFAのe-learningを作成し、マレーシア、フィリピン、タイへの普及研究を進めた（AMED研究）。
- 4) オーストラリア国立PTSDセンターと共同で災害後の心理的リカバリースキルの研究に着手し、資料の翻訳を行った。
- 5) 各種学術団体で、心のマネジメントや災害時の精神的健康について講演を行った。
- 6) 専門家向けにPTSDや災害精神医療等についての講演を行った。
- 7) メディア取材を通じて専門知識の社会普及を行った。

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて2019年度精神保健に関する技術研修。第3回 災害時PFAと心理対応研修を開催した。2019.5.23-24。（金，大沼）
- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて2019年度精神保健に関する技術研修。第4回 災害時PFAと心理対応研修を開催した。2019.10.16-17。（金，大沼）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

- ・ ふくしま心のケアセンター 顧問（金）
- ・ みやぎ心のケアセンター 顧問（金）
- ・ 被災3県心のケア総合支援調査研究等事業 実施委員会 委員（金）

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Génereux M, Schluter PJ, Takahashi S, Usami S, Mashino S, Kayano R, Kim Y: Psychosocial Management Before, During, and After Emergencies and Disasters-Results from the Kobe Expert Meeting. Int J Environ Res Public Health, 16(8): 1309, 2019.4.
- 2) Seto M, Nemoto H, Kobayashi N, Kikuchi S, Honda N, Kim Y, Kelman I, Tomita H: Post-disaster mental health and psychosocial support in the areas affected by the Great East Japan Earthquake: a qualitative study. BMC Psychiatry, 19(1): 261, 2019.8.
- 3) Lin M, Kim Y. The reliability and validity of the 18-item long form and two short forms of the Problematic Internet Use Questionnaire in three Japanese samples. Addictive Behaviors, 101:105961, 2020.2.

(2) 総説

- 1) Hori A, Takebayashi Y, Tsubokura M, Kim Y : Efficacy of prolonged exposure therapy for a patient with late-onset PTSD affected by evacuation due to the Fukushima nuclear

power plant accident. BMJ case reports 12 : 231960, 2019.12.

- 2) 金 吉晴：持続エクスポージャー療法（PE）：情動処理による恐怖記憶の修正．トラウマティック・ストレス 17(1)：21-29, 2019.6.
- 3) 金 吉晴：持続エクスポージャー療法の普及と展望．特別企画トラウマ臨床の明日．前田正治編．こころの科学．日本評論社，東京，pp68-72, 2019.11.

(3) 著書

(4) 研究報告書

- 1) 金 吉晴：災害後の適応促進のための短期介入：SOLAR（The Skills for Life Adjustment and Resilience Program）生活への適応と回復スキルのためのプログラムに関する報告．令和元年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証（研究代表者：宮崎美砂子）」，令和元年度分担研究報告書．pp100-104, 2020.3.
- 2) 宮崎美砂子，奥田博子，春山早苗，石川麻衣，金 吉晴，植村直子：実務保健師の災害時の対応能力育成のための研修ガイドライン（案）の作成．令和元年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証」，令和元年度分担研究報告書．Pp11-17, 2020.3.

(5) 翻訳

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 金 吉晴：パネルディスカッション「アカデミア視点から見る今後の日本のメンタルヘルス政策への期待」．「国際潮流と日本のメンタルヘルス政策」グローバル専門家会合，東京，2019.12.18.

(2) 一般演題

- 1) 金 吉晴：東日本大震災被災地における中長期的な心理社会的支援の実態と課題（ポスター）．第 115 回日本精神神経学会学術総会，新潟，2019.6.20-22.

(3) 研究報告会

- 1) Kim Y：Disaster mental health and related research. The 1st Core Group Meeting of WHO Thematic Platform for Health Emergency and Disaster Risk Management Research Network, and WKC Forum for Health-EDRM, Hyogo, 2019.10.17-18.

(4) その他

C. 講演

- 1) Kim Y：我が国における災害精神保健対応を強化するための現在の課題と今後について．Korean Mental Health Foundation, Korea, 2019.5.2.
- 2) 金 吉晴：災害と精神医療．第 23 回コンサルテーションリエゾン精神薬学研究会，東京，2019.5.17.

- 3) 金 吉晴：災害とうつ。Tokyo Web Seminar，東京，2019.6.12.
- 4) 金 吉晴：復興期の心理的特徴の理解と支援。令和元年度支援者支援事業（復興期の心理的特徴の理解と支援），広島，2020.1.30.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) Kim Y: International Society for Traumatic Stress Studies 理事
- 2) Kim Y: Global Committee, International Traumatic Stress Studies 委員
- 3) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会 理事
- 4) 金 吉晴：自殺予防学会 理事
- 5) 金 吉晴：日本不安症学会 評議員
- 6) 関口 敦：日本心身医学会 幹事
- 7) 関口 敦：日本心身医学会 評議員

(3) 座長

- 1) Kim Y: Japan research and possible contribution to the global agenda. The 1st Core Group Meeting of WHO Thematic Platform for Health Emergency and Disaster Risk Management Research Network, and WKC Forum for Health-EDRM, Hyogo, 2019.10.17-18.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board member
- 2) Kim Y: European Journal of Psychotraumatology, editorial board member
- 3) Kim Y: Disaster Health, editorial board member
- 4) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor
- 5) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会 編集委員長

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 金 吉晴：2019 年度精神保健に関する技術研修，第 3 回 災害時 PFA と心理対応研修。東京，2019.5.23-24.
- 2) 金 吉晴：2019 年度精神保健に関する技術研修，第 4 回 災害時 PFA と心理対応研修。東京，2019.10.16-17.
- 3) 金 吉晴：令和元年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1. 東京，2019.10.23.
- 4) 金 吉晴：令和元年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 2. 東京，2019.11.8.
- 5) 金 吉晴：令和元年度 PTSD 対策専門研修 B.通常コース 1. 東京，2019.11.28-29.
- 6) 金 吉晴：令和元年度 PTSD 対策専門研修 B.通常コース 2. 東京，2019.12.19-20.
- 7) 金 吉晴：令和元年度 PTSD 対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コース。東京，2020.1.22.

(2) 研修会講師

- 1) 金 吉晴：災害時のこころのケア-総論。2019 年度精神保健に関する技術研修 第 3 回 災害時 PFA と心理対応研修，東京，2019.5.23-24.

- 2) 金 吉晴, 大沼麻実, 原島あゆみ, 中村夕貴: サイコロジカル・ファーストエイド研修. 第3回災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2019.5.23-24.
- 3) 金 吉晴: 災害時のメンタルヘルスケア. 産業医科大学 産業医実務研修センター 産業医学実務講座, 福岡, 2019.6.7.
- 4) 金 吉晴: 災害時のこころのケア-総論. 2019 年度精神保健に関する技術研修 第4回 災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2019.10.16-17.
- 5) 金 吉晴, 大沼麻実, 諸見秀太, 金井純子, 猿渡英代子, 庄司弥生: サイコロジカル・ファーストエイド研修. 第4回災害時 PFA と心理対応研修, 東京, 2019.10.16-17.
- 6) 金 吉晴: PTSD の治療. 令和元年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1. 東京, 2019.10.23.
- 7) 金 吉晴, 大沼麻実: 災害時の WHO 版 PFA (心理的応急処置: サイコロジカルファーストエイド) 概論. 令和元年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1. 東京, 2019.10.23.
- 8) 金 吉晴: PTSD の治療. 令和元年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 2. 東京, 2019.11.8.
- 9) 金 吉晴, 大沼麻実: 災害時の WHO 版 PFA (心理的応急処置: サイコロジカルファーストエイド) 概論. 令和元年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 2. 東京, 2019.11.8.
- 10) 金 吉晴: PTSD の心理療法 エクスポージャー療法を踏まえて. 令和元年度 PTSD 対策専門研修 B.通常コース 1. 東京, 2019.11.28-29.
- 11) 金 吉晴: PTSD の心理療法. 令和元年度 PTSD 対策専門研修 B.通常コース 1. 東京, 2019.11.28-29.
- 12) 金 吉晴: PTSD の心理療法 エクスポージャー療法を踏まえて. 令和元年度 PTSD 対策専門研修 B.通常コース 2. 東京, 2019.12.19-20.
- 13) 金 吉晴: PTSD の心理療法. 令和元年度 PTSD 対策専門研修 B.通常コース 2. 東京, 2019.12.19-20.
- 14) 金 吉晴: 災害と心理的回復 概論. 令和元年度東京都災害時精神保健医療体制研修(普及啓発研修), 東京, 2020.1.10.

F. その他

- 1) 金 吉晴: 時事ドットコム 新型コロナウイルス集団感染が確認されたクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」について, 2020.2.10.
- 2) 金 吉晴: 毎日新聞 東日本大震災後に PTSD 発症されたケースについて, 2020.3.20.

Ⅲ. 研 修 実 績

令和元年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は、国、地方公共団体、精神保健福祉法第 19 条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師、保健師、看護師、作業療法士、臨床心理業務に従事する者、精神科ソーシャルワーカー等を対象に、精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として、精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである。

2019 年度には、災害時 PFA と心理対応研修（2 回）、精神保健指導課程研修（2 回）、発達障害支援医学研修（2 回）、発達障害地域包括支援研修：早期支援、摂食障害治療研修、多職種による包括型アウトリーチ研修、医療における個別就労支援研修、地域におけるリスクアセスメント研修、薬物依存臨床医師研修、薬物依存臨床看護等研修、発達障害地域包括支援研修：精神保健・精神医療、認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修の計 15 回の研修を合計 676 名に対して実施した。

《災害時 PFA と心理対応研修》

令和元年5月23日から5月24日まで、第3回災害時 PFA と心理対応研修を実施し、「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）」に関する基本技能を習得する。また悲嘆、子どもの反応について理解し、不安軽減のためのスキルを習得する。」を主題に、自然災害、甚大事故、犯罪、テロ等のトラウマ的出来事に際して、実際に被災者、被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、臨床心理技術者、行政職員、教育関係者等34名に対して研修を行った。

課程主任 金 吉晴

5月23日（木）

PFA の定義と枠組み

PFA の活動原則(1)

PFA の活動原則(2)

金 吉晴・大沼 麻実・原島あゆみ・中村 夕貴

PFA ロールプレイ

セルフケアとチームのケア

5月24日（金）

心理的リカバリーについて(1)

心理的リカバリーについて(2)

金 吉晴・福地 成・大滝 涼子

リラクゼーション実習

災害時の子どものトラウマと反応

小平 雅基

災害時のこころのケア-総論

金 吉晴

講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部部長
大沼 麻実	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部研究員
大滝 涼子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部研究生

原島 あゆみ	千葉県精神保健福祉センター臨床心理士
中村 夕貴	ワールド・ビジョン・ジャパン支援事業部緊急人道支援課
福地 成	公益社団法人宮城県精神保健福祉協会みやぎ心のケアセンター副センター長
小平 雅基	愛育クリニック部長

《発達障害支援医学研修》

令和元年 6 月 26 日から 6 月 27 日まで、第 27 回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害の診断・治療と支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し発達障害に関心を有する医師で特に指導について責任的立場にある者、自治体において行政的な立場で地域の研修実施に携わる者 44 名に対して研修を行った。

課程主任 稲垣 真澄 課程副主任 加賀 佳美・北 洋輔

6 月 26 日 (水)

厚生労働省の発達障害支援施策の紹介	田中 尚樹
地域における発達障害者支援センターの役割と連携	岡田 祐輔
発達障害児を持つ保護者へ伝えたいこと	林 隆
顕在化しにくい発達障害：吃音の診断と支援	原 由紀
ワークショップ：ADHD 児のストレングスを見立ててポジティブな支援をめざす	
	井上 祐紀

6 月 27 日 (木)

顕在化しにくい発達障害：場面緘黙の診断と支援	金原 洋治
顕在化しにくい発達障害：学習障害の診断と治療	小枝 達也
発達障害の薬物治療：併存疾患の治療・健康管理も含めて	平谷 美智夫
医師が知っておきたい神経心理検査～みかたと活用法	染木 史緒

講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部長
加賀 佳美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
北 洋輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
田中 尚樹	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害施策調整官
岡田 祐輔	静岡県発達障害者支援センターあいら所長
林 隆	医療法人テレサ会西川病院発達診療部部長
原 由紀	北里大学医療衛生学部リハビリテーション学科言語聴覚療法学専攻講師
井上 祐紀	東京慈恵会医科大学精神医学講座准教授
金原 洋治	かねはら小児科院長
小枝 達也	国立成育医療研究センターこころの診療部統括部長
染木 史緒	Director of Assessment, Assistant Professor College of Staten Island, City University of New York

《精神保健指導課程研修》

令和元年7月8日、第56回精神保健指導課程研修《前期》を実施し、「新精神保健福祉資料の見方と使い方を中心に地域における課題と施策の立て方を習得する、地域における課題と施策のモニタリングを通して、計画見直しおよび次期策定のために必要なことについて習得する」を主題に、都道府県で精神疾患の医療計画・障害福祉計画・介護保険事業計画を企画立案する担当部署職員、政令市、中核市、精神保健福祉センター、保健所等で、同様の職務を行う職員42名に対して研修を行った。

課程主任 山之内 芳雄

7月8日（月）

新精神保健福祉資料の見方と使い方

山之内 芳雄

吉田 光爾

瀬戸屋 希

演習1

山之内 芳雄

演習2

臼杵 理人

臼田 謙太郎

講師名簿

山之内 芳雄 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部部長

臼杵 理人 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部室長

臼田 謙太郎 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部

科研費研究員

吉田 光爾 東洋大学ライフデザイン学部教授

瀬戸屋 希 聖路加国際大学精神看護学

《発達障害地域包括支援研修：早期支援》

令和元年 7 月 23 日から 7 月 24 日まで、第 14 回発達障害地域包括支援研修：早期支援を実施し、「地域における早期の自閉症発見とその後の発達支援のシステムのあり方について講義やワークショップを通して、派遣元の地域で実際にスムーズに運用するための課題とその克服のための方法を見つけていただき、研修後の体制整備に活用していただくこと」を主題に、各自治体において、行政的な立場で研修の実施に携わる者、医療、保健、福祉、教育等の分野で支援に携わっており、研修講師となりうる者 43 名に対して研修を行った。

課程主任 住吉 太幹

7 月 23 日（火）

発達障害者支援施策について	加藤 永歳
発達障害のある児の早期発見と早期支援の意義	神尾 陽子
地域特性に応じた発達支援のあり方	高橋 脩

7 月 24 日（水）

自閉症スペクトラムの早期徴候のアセスメント	原口 英之
発達障害のある児の親支援と早期支援	井上 雅彦
鹿児島県の支援体制づくり～紹介票による診断前療育の整備と 自立支援協議会を活用した地域作り～	外岡 資朗
ワークショップ：地域発達支援の行動計画立案	加藤 永歳

講師名簿

住吉 太幹	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部部長
原口 英之	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部研究生
加藤 永歳	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
神尾 陽子	一般社団法人発達障害専門センター代表理事
高橋 脩	豊田市福祉事業団理事長
井上 雅彦	鳥取大学大学院医学系研究科教授
外岡 資朗	鹿児島県こども総合療育センター所長

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《地域におけるリスクアセスメント研修》

令和元年8月27日、第3回地域におけるリスクアセスメント研修を実施し、「リスクアセスメントの歴史と、基本的な考え方について学習する．地域支援を実施するにあたって簡便に使用でき、支援計画作成時にも役立つリスクアセスメントツールの実際の評価方法について演習を通して学び、臨床現場で活用できるようにする．」を主題に、精神科医療機関、精神保健福祉センター、保健所、市町村、地域援助事業者等に勤務する者25名に対して研修を行った．

課程主任 藤井 千代 課程副主任 菊池 安希子

8月27日（火）

リスクアセスメントの歴史	菊池 安希子
リスクアセスメントの進め方	菊池 安希子
リスクアセスメント演習	菊池 安希子

講師名簿

藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部部長
菊池 安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《多職種による包括型アウトリーチ研修》

令和元年 8 月 28 日から 8 月 30 日まで、第 17 回多職種によるアウトリーチ研修を実施し、「医療支援および障害福祉サービスを含むアウトリーチ支援定着のためのプログラム」を主題に、精神科医療機関、障害者総合支援法における障害福祉サービス事業者等に勤務する者（医師、精神保健福祉士、臨床心理業務に従事する者、保健師、看護師、作業療法士、社会福祉士等）40 名に対して研修を行った。

課程主任 藤井 千代 課程副主任 佐藤 さやか・山口 創生・菊池 安希子

8 月 28 日（水）

精神保健（福祉）の現状	藤井 千代
当事者から見たリカバリー	古関 俊彦・竹内 政治
グループワーク 1	ファシリテーター：山口 創生 古関 俊彦・竹内 政治
リカバリー志向型のサービスの提供	山口 創生
グループワーク 2	ファシリテーター：藤井 千代・山口 創生 古関 俊彦・竹内 政治

8 月 29 日（木）

アウトリーチ支援とは	吉田 光爾
ストレングスモデル（概念）	久永 文恵
ストレングスアセスメントとケアプラン作りの実際	下平 美智代
グループワーク	
ケアプラン（初版）作り	
ストレングスアセスメントのグループスーパービジョンとケアプラン改訂	
ファシリテーター：下平 美智代・久永 文恵・地域・司法精神医療研究部	

8 月 30 日（金）

チームビルディングの実際	
看護師から見た多職種アウトリーチ支援	富沢 明美
精神保健福祉士から見た多職種アウトリーチ支援	西内 絵里沙
作業療法士から見た多職種アウトリーチ支援	佐藤 朋恵
精神科医の役割	佐竹 直子
グループワーク	
「チームビルディングのために自分の所属機関で明日からできることは何か？」	
コメンテーター：藤井 千代・佐竹 直子・富沢 明美・西内 絵里沙・佐藤 朋恵	
サービスユーザーからみた多職種アウトリー	PORT（訪問看護ステーション）利用者
訪問におけるリスクマネジメント	菊池 安希子
アウトリーチチームと地域連携	中西 清晃

講師名簿

藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部部長
佐藤 さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
山口 創生	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
菊池 安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
下平 美智代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部
	副看護師長
西内 絵里沙	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部
	看護師
中西 清晃	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部
	医療社会事業専門員
富沢 明美	国立精神・神経医療研究センター病院訪問看護ステーション管理者
佐藤 朋恵	国立精神・神経医療研究センター病院訪問看護ステーション
佐竹 直子	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部医師
古関 俊彦	NPO法人颯埜扉
竹内 政治	さいたま市精神障害者当事者会・ウィーズ事務局長
吉田 光爾	東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科教授
久永 文恵	NPO 法人地域精神保健福祉機構コンボリハビリテーションカウンセラー

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《医療における個別就労支援研修》

令和元年 8 月 28 日から 8 月 30 日まで、第 7 回医療における個別就労支援研修を実施し、「精神科デイケア等における個別支援と事業所外支援を中心とした個別型援助付雇用の就労支援を学び、そこから医療機関が周囲の就労支援機関と組む場合のありかたについて検討する」を主題に、精神科医療機関で臨床に従事しており、利用者の就労支援に関心を持つ者（医師、看護師、作業療法士、精神保健福祉士など）、および医療機関と密接な関係を持ちながら精神障害者の個別就労支援に既に従事している者 26 名に対して研修を行った。

課程主任 藤井 千代 課程副主任 佐藤 さやか・山口 創生・菊池 安希子

8 月 28 日（水）

精神保健（福祉）の現状	藤井 千代
当事者から見たリカバリー	古関 俊彦・竹内 政治
グループワーク 1	ファシリテーター：山口 創生 古関 俊彦・竹内 政治
リカバリー志向型のサービスの提供	山口 創生
グループワーク 2	ファシリテーター：藤井 千代・山口 創生 古関 俊彦・竹内 政治

8 月 29 日（木）

精神障害者就労支援：制度と現状	橋本 久美子
ハローワークが（医療における）就労支援に期待すること	稲葉 あゆみ・池田 真砂子
個別型援助付雇用型就労支援と個別支援の実際	山口 創生
ビジネスマナー/職場の開拓のグループワーク	池田 真砂子・佐藤 江美
医療機関における就労支援	佐藤 江美・木下 明雄
企業が就労支援に期待すること	佐藤 江美・柳澤 悠人・大竹 忠将

8 月 30 日（金）

就労支援における医師の関わり	坂田 増弘
地域における就労支援	
個別就労支援	丸山 次郎
重い精神障害を持つ方への就労支援	岡田 奈央子
すぐに仕事を辞めてしまう方への就労支援	池田 克之
就労支援と利用者からメッセージ	利用者の方・池田 真砂子
パネルディスカッション「ES の役割と多業種・他機関との連携」	
	丸山 次郎・池田 克之・岡田 奈央子
	池田 真砂子・佐藤 江美
グループ・ディスカッション	丸山 次郎・池田 克之・岡田 奈央子
	池田 真砂子・佐藤 江美

講師名簿

藤井 千代 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部部長

佐藤 さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
山口 創生	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
菊池 安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部室長
坂田 増弘	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部医師
古関 俊彦	NPO法人颯埜扉
竹内 政治	さいたま市精神障害者当事者会・ウィーズ事務局長
橋本 久美子	東京労働局職業安定部職業対策課障害者雇用対策係地方障害者雇用担当官
稲葉 あゆみ	八王子公共職業安定所専門援助第二部門就職支援コーディネーター
池田 真砂子	一般社団法人ルンアルン
佐藤 江美	医療法人社団じうんどう慈雲堂病院地域連携推進部デイケア室デイケア 生活支援員
丸山 次郎	一般社団法人 Flat 就労支援センター就労支援員
木下 明雄	医療法人社団じうんどう慈雲堂病院地域連携推進部デイケア室
柳沢 悠人	新光商事株式会社人事システム部アシスタントマネージャー
大竹 忠将	新光商事株式会社経理部業務管理課
岡田 奈央子	NPO 法人 NECST 就労支援コーディネーター
池田 克之	就労移行支援事業所就労支援センターそらいろ所長

《薬物依存臨床医師研修》 《薬物依存臨床看護等研修》

令和元年9月3日から9月6日まで、第33回薬物依存臨床医師研修ならびに第21回薬物依存臨床看護等研修を実施し、「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に、精神科病院、精神保健福祉センター等に勤務する医師12名、看護師等43名に対して研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 嶋根 卓也・船田 正彦・近藤 あゆみ

9月3日（火）

薬物依存臨床総論～乱用・依存・中毒	和田 清
行動薬理学からみた薬物依存（精神依存，身体依存）	船田 正彦
覚せい剤精神疾患の生物学的病態	曾良 一郎

9月4日（水）

薬物関連精神障害患者の臨床	松本 俊彦
女性と薬物乱用・依存	森田 展彰
青少年と薬物乱用・依存	嶋根 卓也
大麻によって発現する動物の異常行動	三島 健一

9月5日（木）

全国の民間リハビリ施設の活動状況とその課題・栃木ダルクの活動	嶋根 卓也・栗坪 千明
【埼玉県立精神医療センターへ移動】病棟見学	
病棟見学と医療施設における薬物依存症の治療（医師）	成瀬 暢也・合川 勇三
病棟見学と医療施設における薬物依存症の治療（看護等）	青柳 歌織

9月6日（金）

精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み	源田 圭子
薬物依存症者家族の支援について	近藤 あゆみ
回復と自助活動	ダルク利用者
ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床	稲田 健

講師名簿

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
船田 正彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
近藤 あゆみ	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長

和田 清	埼玉県立精神医療センター依存症治療研究部部長
曾良 一郎	神戸大学大学院医学研究科精神医学分野教授
森田 展彰	筑波大学医学医療系社会精神保健学准教授
三島 健一	福岡大学薬学部生体機能制御学研究室教授
栗坪 千明	栃木ダルク代表
成瀬 暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長
合川 勇三	埼玉県立精神医療センター第2精神科医長
青柳 歌織	埼玉県立精神医療センター外来主任
源田 圭子	東京都福祉保健局都立精神保健福祉センター地域援助医長
稲田 健	東京女子医科大学医学部医学科神経精神科講師

《摂食障害治療研修》

令和元年 9 月 17 日から 9 月 20 日まで、第 17 回摂食障害治療研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、病院、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害に関心を有する医療従事者 67 名に対して研修を行った。

課程主任 金 吉晴 課程副主任 安藤 哲也

9 月 1 7 日 (火)

摂食障害の疫学・病態・治療概論	安藤 哲也
精神障害・パーソナリティ障害を合併する摂食障害	西園マーハ文
慢性期・回復期の支援	武田 綾
当事者の話を聞く	武田 綾

9 月 1 8 日 (水)

小児科での初期対応と診療	作田 亮一
身体管理・身体合併症	吉内 一浩
家族療法と家族支援	小原 千郷
ガイドド・セルフヘルプ	中里 道子

9 月 1 9 日 (木)

小児の摂食障害	宇佐美 政英
認知行動療法	高倉 修
症例検討	佐藤 康弘
摂食障害とアルコール・薬物などのアディクション	鈴木 健二

9 月 2 0 日 (金)

心理教育	馬場 安希
精神科病院における診療体制	栗田 大輔
入院治療	河合 啓介

講師名簿

安藤 哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
小原 千郷	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部流動研究員
西園 マーハ文	明治学院大学心理学部心理学科教授
武田 綾	NPO 法人のびの会臨床心理療法士
作田 亮一	獨協医科大学埼玉医療センター子どものこころ診療センター教授

吉内 一浩	東京大学大学院医学系研究科ストレス防御・心身医学准教授
中里 道子	国際医療福祉大学医学部精神医学主任教授
宇佐美 政英	国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科診療科長
高倉 修	九州大学病院心療内科診療講師
佐藤 康弘	東北大学病院心療内科助教
鈴木 健二	鈴木メンタルクリニック院長
馬場 安希	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科心理療法士
栗田 大輔	浜松医科大学医学部附属病院精神科神経科助教
河合 啓介	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科診療科長

《発達障害地域包括支援研修：精神保健・精神医療》

令和元年 9 月 25 日から 9 月 26 日まで、第 12 回発達障害地域包括支援研修：精神保健・精神医療を実施し、「発達障害児・者が合併する精神疾患の早期対応と適切な治療のためのシステムのあり方について講義やワークショップを通して、派遣元の地域で実際にスムーズに運用するための課題とその克服のための方法を見つけていただき、研修後の体制整備に活用していただくこと」を主題に、各自治体において該当地域の発達障害者支援に携わる関係者のうち行政的立場で研修の企画や実施に携わる者もしくは医療、保健、福祉、教育等の分野で支援に携わっており、研修講師となりうる者 33 名に対して研修を行った。

課程主任 住吉 太幹

9 月 25 (水)

発達障害者支援施策について	加藤 永歳
発達障害児・者の発達の道筋：子どもから大人へ	神尾 陽子
ADHD における診断の実際	齋籐 卓弥
自治体取組事例①～札幌市での取り組み～	齋籐 卓弥

9 月 26 日 (木)

自閉スペクトラム症の併存症の評価と治療	石飛 信
鹿児島県の地域支援体制づくり～紹介票による診断前療育の整備と 自立支援協議会を活用した地域作り～	外岡 資朗
当事者の体験から～精神医療が ASD 者の人生におよぼす影響について～ ワークショップ	片岡 聡

講師名簿

住吉 太幹	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部部長
加藤 永歳	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
神尾 陽子	一般社団法人発達障害専門センター代表理事
齋籐 卓弥	北海道大学大学院医学研究院児童思春期精神医学分野特任教授
石飛 信	医療法人社団東京愛成会高月病院医師
外岡 資朗	鹿児島県こども総合療育センター所長
片岡 聡	NPO 法人リトルプロフェッサーズ札幌事務局理事長

《精神保健指導課程研修》

令和元年10月4日、第57回精神保健指導課程研修《後期》を実施し、「地域における課題と施策のモニタリングを通して、計画見直しおよび次期策定のために必要なことについて習得する」を主題に、都道府県で精神疾患の医療計画・障害福祉計画・介護保険事業計画を企画立案する担当部署職員、政令市、中核市、精神保健福祉センター、保健所等で、同様の職務を行う職員32名に対して研修を行った。

課程主任 山之内 芳雄 課程副主任 臼杵 理人

10月4日（金）

精神保健福祉資料の見方と使い方

山之内 芳雄

臼田 謙太郎

瀬戸屋 希

演習1

臼杵 理人

演習2

山之内 芳雄

講師名簿

山之内 芳雄 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部部長

臼杵 理人 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部室長

臼田 謙太郎 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神医療政策研究部科研費研究

瀬戸屋 希 聖路加国際大学 精神看護学

《災害時 PFA と心理対応研修》

令和元年 10 月 16 日から 10 月 17 日まで、第 4 回災害時 PFA と心理対応研修を実施し、
「「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）」に関する基本技能を習得する。
また悲嘆、子どもの反応について理解し、不安軽減のためのスキルを習得する。」を主題に、
自然災害、甚大事故、犯罪、テロ等のトラウマ的出来事に際して、実際に被災者、被害者へのこ
ころのケア対応にあたる可能性のある、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健
師、精神保健福祉士、臨床心理技術者、行政職員、教育関係者等 55 名に対して研修を行った。

課程主任 金 吉晴 課程副主任 大沼 麻実

10月16日（水）

PFA の定義と枠組み

PFA の活動原則（1） 金 吉晴・大沼 麻実・猿渡 英代子・庄司 弥生

PFA の活動原則（2） 金井 純子・諸見 秀太

PFA ロールプレイ

セルフケアとチームのケア

10月17日（木）

心理的リカバリーについて（1）

心理的リカバリーについて（2） 金 吉晴・福地 成・大滝 涼子

リラクゼーション実習

災害時のこころのケア-総論 金 吉晴

災害時の子どものトラウマと反応 小平 雅基

講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長
大沼 麻実	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部研究員
大滝 涼子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部研究生

猿渡 英代子	東北工業大学ウェルネスセンターカウンセラー
庄司 弥生	アメリカンクリニック看護師
金井 純子	徳島大学創新教育センター助教
諸見 秀太	独立行政法人国立病院機構琉球病院
福地 成	公益社団法人宮城県精神保健福祉協会みやぎ心のケアセンター副センター長
小平 雅基	愛育クリニック部長

《認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修》

令和元年 11 月 18 日から 11 月 20 日まで、第 11 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修を実施し、「薬物依存症者の臨床的特徴と治療に関するエビデンスを理解し、直面化を避けた動機づけ面接の重要性を理解し、薬物依存症に対する集団認知行動療法のファシリテーションの実際を学ぶとともに、家族支援への理解を深める」を主題に、医療機関、行政機関、司法機関、民間回復施設等で薬物依存症者の援助に従事している者 122 名に対して研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 船田 正彦・嶋根 卓也・近藤 あゆみ

11月18日（月）

薬物依存症患者への対応の基本	成瀬 暢也
SMARPP の理念と意義	松本 俊彦
SMARPP の実際	近藤 あゆみ
SMARPP ビデオ学習	近藤 あゆみ
グループワーク（1）	今村 扶美

11月19日（火）

薬物中毒・乱用・依存の概念と最近の薬物関連障害患者の動向	嶋根 卓也
薬物依存症臨床における司法的問題への対応	松本 俊彦
社会資源（1）～精神保健福祉センターにおける支援～	松岡 明子
社会資源（2）～民間リハビリ施設と自助グループ～	加藤 隆
デモセッション	今村 扶美・川地 拓・加藤 隆
グループワーク（2）	今村 扶美
まとめとディスカッション	松本 俊彦

11月20日（水）

薬物依存症と性的マイノリティおよび HIV 感染	嶋根 卓也
動機づけ面接の基礎	澤山 透
CRAFT の基礎	吉田 精次
ディスカッション	松本 俊彦

講師名簿

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
船田 正彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
近藤 あゆみ	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
今村 扶美	国立精神・神経医療研究センター病院精神リハビリテーション部臨床心理室長
川地 拓	国立精神・神経医療研究センター病院精神リハビリテーション部心理療法士

成瀬 暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長
松岡 明子	広島県立総合精神保健福祉センター事業調整員
加藤 隆	NPO 法人八王子ダルク代表理事
澤山 透	北里大学医学部精神科講師
吉田 精次	藍里病院副院長

《発達障害支援医学研修》

令和2年1月29日から1月30日まで、第28回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害児に対する医学的介入と心理社会的支援の実践」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師で特に指導について責任的立場にある者、自治体において行政的な立場で地域の研修実施に携わる者58名に対して研修を行った。

課程主任 稲垣 真澄 課程副主任 加賀 佳美・北 洋輔

1月29日(水)

発達障害支援施策の紹介	田中 尚樹
発達障害者の就労支援を通じて医師に伝えたいこと	千田 若菜
顕在化しにくい発達障害：発達性協調運動障害の診断と支援	岩永 竜一郎
顕在化しにくい発達障害：チック症、トゥレット症候群の診断と支援	金生 由紀子

1月30日(木)

発達障害にみられる感覚の問題：評価と支援	熊崎 博一
発達障害の青年期の問題	本田 秀夫
地域における発達障害支援：広島県発達障害者支援センターの目指すもの	西村 浩二
発達障害支援の考え方	齊藤 万比古

講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部長
加賀 佳美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
北 洋輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
熊崎 博一	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部室長
田中 尚樹	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害施策調整官
千田 若菜	医療法人社団ながやまメンタルクリニック臨床心理士
岩永 竜一郎	長崎大学生命医科学域教授
金生 由紀子	東京大学大学院医学系研究科脳神経医学専攻統合脳医学講座 こころの発達医学分野准教授
本田 秀夫	信州大学医学部子どものこころの発達医学教室附属病院子どものこころ診療部 教授
西村 浩二	広島県発達障害者支援センターセンター長
齊藤 万比古	恩賜財団母子愛育会愛育研究所愛育相談所長

研修の推移

国 立 精 神 衛 生 研 究 所			
	36年度6月～		54年度～ 61年度
研 修 課 程	・医学科研修 ・心理学研修 ・社会福祉学科研修 ・精神衛生指導学科研修	→	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修

国 立 精 神 ・ 神 経 セ ン タ ー 精 神 保 健 研 究 所					
	61年度		62年度～	18年度～	20年度 21年度
研 修 課 程	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修	→	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神保健指導過程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修	・精神保健指導過程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修 ・発達障害支援課程研修 ・摂食障害治療課程研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・ACT研修 ・薬物依存臨床課程研修 ・児童思春期精神医学研修 ・司法精神医学課程研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修

独 立 行 政 法 人 国 立 精 神 ・ 神 経 医 療 研 究 セ ン タ ー 精 神 保 健 研 究 所		
	22年度	23年度 24年度
研 修 課 程	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・司法精神医学研修 ・PTSD医療研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・発達障害精神医療研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・ACT研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所	
研 修 課 程	25年度	26年度	27年度
	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修 ・ACT・多職種アウトリーチ研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・医療における個別就労支援研修 ・司法精神医学ワンデイセミナー	・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修 ・医療における包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・司法精神医学ワンデイセミナー ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・心理職自殺予防研修 ・メンタルヘルス問題への初期対応指導者研修 ・司法精神医学研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・精神科急性期医療の質を考える研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
研 修 課 程	28年度	29年度	30年度
	・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・地域自殺対策推進企画研修 ・摂食障害治療研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・自殺対策・相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・司法精神医学研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 ・摂食障害看護研修	・発達障害地域包括支援研修: 早期支援 ・発達障害支援医学研修 ・摂食障害治療研修 ・地域精神科モデル医療研修プレセミナー ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・自殺対策・相談支援研修 ・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療 ・精神保健指導課程研修 ・司法精神医学研修 ・摂食障害看護研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修	・災害時PFAと心理対応研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害地域包括支援研修: 早期支援 ・摂食障害治療研修 ・精神障害者地域包括支援研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・地域におけるリスクアセスメント研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療 ・摂食障害看護研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修
研 修 課 程	31・令和1年度		
	・災害時PFAと心理対応研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害地域包括支援研修: 早期支援 ・摂食障害治療研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・地域におけるリスクアセスメント研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修		

令和元年度精神保健に関する技術研修課程 実施計画表

研 修 日 程	課 程 名	申込み方法		申込み期間 (センター書類必着日)	受講料	会 場	定 員	主 任
		WEB	自治体 推薦					副主任
5月23日(木)～24(金)	(第3回) 災害時PFAと心理対応研修	○※		3月14日(木)～4月3日(水)	¥12,000	セ	50	金 吉晴 大沼 麻実
6月26日(水)～27日(木)	(第27回) 発達障害支援医学研修		○	4月4日(木)～4月24日(水) (5月8日(水))	無料	ユ	60	稲垣 真澄 加賀 佳美
7月8日(月)	(第56回) 精神保健指導課程研修	○		4月30日(火)～5月20日(月)	無料	ユ	100	山之内芳雄 白杵 理人
7月23日(火)～24日(水)	(第14回) 発達障害地域包括支援研修: 早期支援		○	5月2日(木)～5月22日(水) (6月5日(水))	無料	ユ	67 組	住吉 太幹
8月27日(火)	◀地域精神科モデル医療研修シリーズ▶ (第3回) 地域におけるリスクアセスメント研修	○		6月18日(火)～7月8日(月)	¥6,000	セ	40	藤井 千代 菊池 安希子 佐藤 さやか 山口 創生
8月28日(水)～8月30日(金)	(第17回) 多職種による包括型アウトリーチ研修	○		6月19日(水)～7月9日(火)	¥18,000	ユ	40	
	(第7回) 医療における個別就労支援研修					多	20	
9月3日(火)～6日(金)	(第33回) 薬物依存臨床医師研修	○		6月26日(水)～7月16日(火)	¥24,000	セ	20	松本 俊彦 船田 正彦 嶋根 卓也 近藤あゆみ
	(第21回) 薬物依存臨床看護等研修						30	
9月17日(火)～20日(金)	(第17回) 摂食障害治療研修	○※		7月10日(水)～7月30日(火)	¥24,000	セ	60	安藤 哲也 関口 敬
9月25日(水)～26日(木)	(第12回) 発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療		○	7月4日(木)～7月24日(水) (8月7日(水))	無料	ユ	67 組	住吉 太幹
10月4日(金)	(第57回) 精神保健指導課程研修	○		7月26日(金)～8月15日(木)	無料	ユ	100	山之内芳雄 白杵 理人
10月16日(水)～17日(木)	(第4回) 災害時PFAと心理対応研修	○※		8月8日(木)～8月28日(水)	¥12,000	ユ・ セ	50	金 吉晴 大沼 麻実
11月18日(月)～20日(水)	(第11回) 認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修	○		9月11日(水)～10月1日(火)	¥18,000	ユ	100	松本 俊彦 船田 正彦 嶋根 卓也 近藤あゆみ
令和2年 1月29日(水)～30日(木)	(第28回) 発達障害支援医学研修		○	10月31日(木)～11月20日(水) (12月4日(水))	無料	ユ	60	稲垣 真澄 加賀 佳美

※推薦状
が必要な
研修

Ⅳ．令和元年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
精神 医療 政策 研究 部	山之内芳雄	研究代表者	「医療計画、障害福祉計画の効果的なモニタリング体制構築のための研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	山之内芳雄	研究分担者	「健康日本21（第二次）の総合的評価と次期健康づくり運動に向けた研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省
	山之内芳雄	研究分担者	「向精神薬の適切な継続・減量・中止等の精神科薬物療法の出口戦略の実践に資する研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	山之内芳雄	研究分担者	「てんかんの地域診療連携体制の推進のためのてんかん診療拠点病院運用ガイドラインに関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	山之内芳雄	主任研究者	Research on Reducing the Burden of Mental Disease and Non-communicable Diseases (NCDs) and Improving Quality of Life (QOL) in Older People international comparison on allocation of resource to out-patient and community mental health care in Asia-pacific region	受託研究	国立長寿医療研究センター
	山之内芳雄	主任研究者	「精神医療政策への萌芽的取組と行政効果検証に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山之内芳雄	研究分担者	「6NC連携による医療政策研究等を目的としたNDB研究体制構築のための研究」	運1研究基盤経費（横断的研究推進事業）	6NC連携
	山之内芳雄	研究協力者	「精神疾患レジストリの構築・統合により、新たな診断・治療法を開発するための研究」	日本医療研究開発機構研究費（長寿・障害総合研究事業（障害者対策総合研究開発事業））	日本医療研究開発機構（AMED）
	羽澄 恵	研究代表者	「眠気に伴う精神的苦痛が中枢性過眠症の治療経過に与える影響」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））	日本学術振興会
	羽澄 恵	研究代表者	「ナルコレプシー患者における精神健康のる表に関わる疾患特有の心理社会的問題の解明」	科学研究費助成事業（学術研究補助金（研究活動スタート支援））	日本学術振興会
	竹島 正	研究分担者	「都市型準限界集落ソーシャルキャピタルとセルフケア能力向上プログラムの開発と評価」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）））	日本学術振興会
	大久保 亮	研究代表者	必須脂肪酸・腸内細菌叢バランスとがん再発恐怖の関連：探索的横断研究	平成30年度がんサバイバーシップ研究助成金	がん研究振興財団
	大久保 亮	研究分担者	「がん再発不安に対するオメガ3系脂肪酸・プロバイオティクスの有効性の検討」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）	日本学術振興会
薬物 依存 研究 部	松本俊彦	研究代表者	再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	研究代表者	「再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究」内「保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	研究開発代表者	物質使用障害を抱える女性に対する治療プログラムの開発と有効性評価に関する研究	日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	松本俊彦	研究開発代表者	薬物使用障害に対する多様な治療法の開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	研究開発分担者	「依存症患者における薬物療法の効果検討とfMRIを基点としたバイオマーカーの開発」内「二重盲検ランダム化比較試験を用いた依存症におけるイフェンプロジル投与効果の検討（患者対応）」	日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	松本俊彦	研究開発分担者	「イフェンプロジル投与による覚せい剤依存症の治療効果検証試験-プロトコル作成」内「研究の情報収集・実施」	日本医療研究開発機構（臨床研究・治験推進研究事業）	日本医療研究開発機構
	松本俊彦	研究開発分担者	「乱用防止に資する医薬品の開発のための製剤学的アプローチに関する研究」内「日本における医療用麻薬の乱用の状況に関する情報収集と解析およびガイドラインに盛り込むべき事項に関する提言・Q&Aの作成」	日本医療研究開発機構（医薬品等規制調和・評価研究事業）	日本医療研究開発機構

Ⅳ 令和元年度委託および受託研究課題

薬物依存研究部	松本俊彦	研究分担者	「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」内「大麻依存症の患者を対象とした病院調査」	厚生労働行政推進調査事業補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「医療用麻薬の乱用リスク要因の分析と適正使用促進のための研究」内「医療用麻薬の乱用リスク要因の分析と適正使用促進のための研究」	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	治験	慢性疼痛患者を対象としたオキシコドン塩酸塩徐放錠からS-8117（OTR）への切替え時の有効性、安全性、薬物動態を評価するオープンラベル試験	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-318)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	S-812217の第1相単回及び反復投与並びに食事の影響試験	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-320)	塩野義製薬
	松本俊彦	拠点病院	拠点センター（薬物依存症）	厚生労働省依存症対策全国拠点機関設置運営事業	厚生労働省
	船田正彦	分担研究者	「危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究」内「危険ドラッグの検出技術開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	船田正彦	研究代表者	危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	研究分担者	「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究」内「フェンタニル類縁化合物の中樞作用解析法に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	研究代表者	危険ドラッグを中心とした中枢神経系に作用する物質の迅速検出法の開発に関する研究	日本医療研究開発機構（AMED）（医薬品等規制調和・評価研究事業）	厚生労働省
	船田正彦	研究分担者	「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究」内「合成カンナビノイドの中樞作用解析法に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究代表者	薬物乱用・依存状況等の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「薬物乱用・依存状況等の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」内「薬物使用に関する全国住民調査（2019年）」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究代表者	一般用医薬品の適正使用の一層の推進に向けた依存性の実態把握と適切な販売のための研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「一般用医薬品の適正使用の一層の推進に向けた依存性の実態把握と適切な販売のための研究」内「民間の依存症支援団体利用者を対象とする、依存実態の再解析及び追加調査」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究」内「新規危険ドラッグの乱用実態把握のための効果的な調査手法の確立」	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究」内「民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業 精神障害分野）	厚生労働省
	嶋根卓也	分担研究者	「わが国の青少年における薬物乱用・依存に関する実態調査およびデータ・アーカイブに関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	嶋根卓也	分担研究者	「全国の刑務所で収容されている覚せい剤事犯者に関する実態調査」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	嶋根卓也	分担研究者	「薬物使用障害の病因・病態・治療反応性に関する多面的研究」内「HIV陽性者における薬物使用障害罹患脆弱性の要因とその支援に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	近藤あゆみ	研究分担者	「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」内「精神保健福祉センターにおける家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省

薬物依存研究部	近藤あゆみ	研究分担者	「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究」内「多機関連携による 薬物依存症者地域支援の好事例に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）	厚生労働省
	近藤あゆみ	分担研究者	「物質使用障害を抱える女性に対する治療プログラムの開発と有効性評価に関する研究」	日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
	近藤あゆみ	分担研究者	「女性薬物依存症者の回復支援に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	菊池美名子	研究代表者	自殺・自傷とジェンダー：予防と回復に向けた学際的理論の構築	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究B	日本学術振興会
	引土絵未	研究分担者	「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」内「民間支援団体における回復プログラムの開発研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	引土絵未	分担研究者	「薬物依存症者の就労支援に関する研究：民間回復支援施設における就労支援について」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	引土絵未	研究代表者	薬物依存症者に対する治療共同体モデルの普及と評価に関する研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）特別研究員奨励費	日本学術振興会
行動医学研究部	猪浦智史	研究分担者	「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」内「薬物使用のモニタリング調査に関する国際比較研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	金 吉晴	研究代表者	A Study on Rights-based Self-learning Tools to Promote Mental Health, Well-being & Resilience after Disasters	日本医療研究開発機構 地球規模保健課題解決推進のための研究事業	日本医療研究開発機構
	金 吉晴	研究分担者	災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証	厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	複雑性PTSDに対する認知行動療法の有効性の検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
	金 吉晴	研究代表者	恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	金 吉晴	分担研究者	実装科学推進のための基盤構築事業	運 I 研究基盤経費（横断的研究推進）	厚生労働省
	安藤哲也	研究代表者	心身症・摂食障害の治療プログラムと臨床マーカーの検証：摂食障害と過敏性腸症候群の治療プログラムの検証とプログラム実施者養成方法の検討	精神神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	安藤哲也	研究代表者	摂食障害の効果的な治療法の普及に関する研究	三菱財団社会福祉事業・研究助成金	三菱財団
	安藤哲也	研究代表者	摂食障害の治療支援センター設置運営事業（全国拠点機関分）	精神保健対策費補助金	厚生労働省
	安藤哲也	研究代表者	摂食障害の治療支援ネットワークの指針と簡易治療プログラムの開発	日本医療研究開発機構障害者対策総合研究開発事業精神障害分野	日本医療研究開発機構
	安藤哲也	研究分担者	過敏性腸症候群に対する認知行動療法のランダム化比較試験と治療効果の神経基盤の解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究代表者	遺伝子発現プロファイリングによるストレス対処方略の個別最適化	武田科学振興財団医学系研究奨励（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	堀 弘明	研究代表者	認知機能・活動量・血液マーカーを用いた客観的なストレス症状測定法の開発	大和証券ヘルス財団調査研究助成金	大和証券ヘルス財団
	堀 弘明	研究代表者	ストレスホルモン・炎症マーカーと認知機能の測定による「ストレス」の客観的定量化	総合健康推進財団一般研究奨励助成	総合健康推進財団
	堀 弘明	研究代表者	認知機能・活動量・血液マーカーを用いた「ストレス」の客観的評価	公益財団法人小柳財団2019年度研究助成金	小柳財団
	堀 弘明	研究代表者	日常的な運動によるストレス関連精神疾患の予後改善効果：炎症系に着目した検討	公益財団法人 中富健康科学振興財団	中富健康科学振興財団
	堀 弘明	研究分担者	恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	中枢性摂食異常症および中枢神経感作病態を呈する疾患群の脳科学的な病態解明と、エビデンスに基づく患者ケア法の開発	厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）	厚生労働省
	関口 敦	研究代表者	シナプス可塑性の個人差評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会

Ⅳ 令和元年度委託および受託研究課題

行動医学研究部	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究奨励（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	関口 敦	研究分担者	心身症・摂食障害の治療プログラムと臨床マーカーの検証：心身症・摂食障害の脳画像の検討	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	関口 敦	研究代表者	疼痛性障害の新規治療プログラムの脳科学的エビデンスの構築	公益財団法人 中富健康科学振興財団	中富健康科学振興財団
	関口 敦	研究分担者	恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出	日本医療研究開発機構 戦略的国際脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構
	伊藤真利子	研究代表者	心的外傷後ストレス障害の評価指標としての認知バイアスの検討	メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金	メンタルヘルス岡本記念財団
	伊藤真利子	研究分担者	複雑性PTSDに対する認知行動療法の有効性の検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
	大沼麻実	研究代表者	心理的応急処置（PFA）e-ラーニング開発と効果検証及び有効な普及方法の考察	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	小原千郷	研究代表者	摂食障害の集団家族心理教育の普及のための標準プログラム及びツールキットの開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	河西ひとみ	研究代表者	自己臭症患者に対する認知行動プログラムの実現可能性の検討 ―消化器症状に関連するにおいを主訴とする患者を対象として―	メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金	メンタルヘルス岡本記念財団
	河西ひとみ	研究分担者	過敏性腸症候群に対する認知行動療法のランダム化比較試験と治療効果の神経基盤の解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	船場美佐子	研究代表者	過敏性腸症候群に対する認知行動療法のランダム化比較試験と治療効果の神経基盤の解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	菅原彩子	研究代表者	医療機関を受診していない摂食障害患者と家族の支援ニーズに関する調査研究	やずや食と健康研究所助成研究	やずや食と健康研究所
	伊藤(丹羽)まどか	研究代表者	複雑性PTSDに対する認知行動療法の有効性の検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
	伊藤(丹羽)まどか	研究代表者	複雑性心的外傷後ストレス障害に対する介入法の検証	文部科学省科学研究費補助金 特別研究員奨励費	日本学術振興会
	袴田優子	研究代表者	ストレス関連精神症状に対する包括的認知介入アプローチの効果評価研究	文部科学省科学研究費補助金 特別研究員奨励費	日本学術振興会
	袴田優子	研究代表者	情動記憶の記録過程を標的とした認知介入プログラムの開発および神経作用機序の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)	日本学術振興会
	林 明明	研究代表者	ストレス状況下における記憶処理メカニズムの解明：臨床的応用可能性へ向けて	文部科学省科学研究費補助金 特別研究員奨励費	日本学術振興会
	林 明明	研究代表者	オンライン調査・実験の信頼性に関する研究：同一回答者のデータ比較を通して	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	加茂登志子	研究分担者	複雑性PTSDに対する認知行動療法の有効性の検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
児童・予防精神医学研究部	住吉太幹	研究代表者	経頭蓋直流刺激による統合失調症患者の社会機能的能力の改善に関する無作為化統制試験	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究 (C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	精神疾患のNVS(negative valence system)に対する治療法の開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	社会機能/QOL改善と出口戦略を見据えた睡眠障害のクリニカルパスの開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	NCNPブレインバンクの運営および生前登録システムの推進	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	精神疾患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	住吉太幹	研究分担者	児童・思春期における心の健康発達・成長支援に関する研究	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	住吉太幹	研究分担者	超ハイリスク基準群における生体情報評価及びサイトカイン測定による統合失調症の発現予測因子の探索研究	共同研究	ヤンセンファーマ株式会社

児童・予防精神医学研究部	住吉太幹	研究分担者	気分状態の安定した双極性障害患者の認知機能改善に対するLurasidone併用療法(ELICE-BD)の有効性評価のための6週間ランダム化二重盲検プラセボ対照多施設試験	共同研究	British Columbia大学
	住吉太幹	研究分担者	統合失調症患者及び統合失調感情障害患者を対象としたデジタル服薬管理システム(プロテウス 服薬管理システム、大塚メディカルソフトウェア)の使用研究、探索的研究	共同研究	大塚製薬株式会社/武田薬品工業
	住吉太幹	研究分担者	統合失調症の社会認知機能障害に対する経頭蓋直流電気刺激の効果に対するパイロット研究	若手臨床研究グループ活動奨励研究費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	前治療抗精神病薬からプレクスピプラゾールの切り替えを実施する統合失調症患者及び統合失調感情障害患者を対象とした服薬継続率に関する多施設共同単群非盲検介入研究	共同研究	大塚製薬株式会社
	熊崎博一	研究代表者	アンドロイドを媒介した相互コミュニケーションによる主体価値発展支援システムの確立	科学研究費助成事業(学術研究助成補助金) 新学術領域公募班	日本学術振興会
	熊崎博一	研究代表者	自閉スペクトラム症者へのアンドロイドを用いた面接訓練法の確立	科学研究費助成事業(学術研究助成補助金)(基盤研究(B))	日本学術振興会
	熊崎博一	研究分担者	対話支援のための遠隔操作ロボットシステムの研究開発	科学研究費助成事業(学術研究助成補助金)(基盤研究(A))	日本学術振興会
	熊崎博一	研究代表者	自閉スペクトラム症における嗅覚特性解明	武田科学振興財団医学系研究助成	武田科学振興財団
	藤里紘子	研究代表者	子どもの感情障害に対する認知行動療法の統一プロトコルの有効性	科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(基盤研究(B))	日本学術振興会
	白間 綾	研究代表者	瞳孔径測定による統合失調症の非定型アラートネスの研究	研究活動スタート支援	日本学術振興会
	神尾陽子	研究代表者	発達障害児に対するグループベースの包括的なメンタルヘルスプログラムの有用性に関する研究	財団助成金	日本生命財団
	神尾陽子	研究分担者	「サルと自閉症児を対象とした援助行動の生物学的・進化的要因解明に関する実験的研究」内「自閉症児の実験の実施」	科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(基盤研究(A))	日本学術振興会
	神尾陽子	研究分担者	発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
精神薬理研究部	山田光彦	分担研究者	「精神疾患のNVS(negative valence systems)に対する治療法の開発」内「Negative Valence Systemsにかかる神経回路特性に基づく新規向精神薬の研究開発」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	分担研究者	「ゲノム編集技術を用いたモデル動物作出による精神神経筋疾患の病態解明」内「ゲノム編集技術を用いたモデル動物の新規医薬品・医療機器開発のための非臨床試験への応用可能性の検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	研究代表者	恐怖記憶の消去学習と再固定化に着目したPTSD曝露療法併用薬の開発	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	研究分担者	「うつ病の病態におけるアストロサイトの機能異常へのリゾホスファチジン酸受容体の関与」内「高速液体クロマトグラフィーによるアミノ酸分析」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	研究分担者	「統合失調症モデルマウスを用いた「幻覚・妄想」の神経基盤の解明」内「計画の実施(行動実験)」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	研究代表者	救急医療を起点とした自殺未遂者支援のエビデンスと社会実装	ヘルスリサーチ研究助成金	ファイザーヘルスリサーチ振興財団
	山田光彦	研究分担者	げっ歯類脳波データを用いた睡眠スピンドル波解析方法	受託研究契約	大日本住友製薬(株)
	三輪秀樹	研究代表者	統合失調症における注意機構異常の神経基盤	科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金	日本学術振興会
	三輪秀樹	研究代表者	統合失調症モデルマウスを用いた「幻覚・妄想」の神経基盤の解明	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「うつ病の病態におけるアストロサイトの機能異常へのリゾホスファチジン酸受容体の関与」内「脳スライスをを用いた電気生理学的解析」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会

Ⅳ 令和元年度委託および受託研究課題

	三輪秀樹	分担研究者	「脳高次機能の発達と老化の制御に共通する分子機構の解明」内「電気生理学的解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	三輪秀樹	研究代表者	ドーパミン神経回路の幻覚・妄想への影響の実体とは？	内藤記念科学奨励金・研究助成	公益財団法人内藤記念科学振興財団
	三輪秀樹	研究代表者	睡眠による脳機能回復	リバネス研究費ウェルネス・エイジングケア賞	(株)リバネス
	三輪秀樹	分担研究者	「危険ドラッグによる有害作用の新規評価法開発に関する研究」内「合成カナビノイドおよびPCP系薬物の中樞神経系への影響に関する脳波による評価」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三輪秀樹	研究代表者	げっ歯類脳波データを用いた睡眠スピンドル波解析方法	受託研究契約	大日本住友製薬(株)
	古家宏樹	研究代表者	統合失調症モデル動物における現実認識能力の障害とその脳内機構	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会
	古家宏樹	研究分担者	「恐怖記憶の消去学習と再固定化に着目したPTSD曝露療法併用薬の開発」内「タンパク発現解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	古家宏樹	研究分担者	「うつ病の病態におけるアストロサイトの機能異常へのリゾホスファチジン酸受容体の関与」内「in vivoマイクロダイアリスを用いた行動薬理学的解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	國石 洋	研究代表者	情動を制御する眼窩前頭皮質－扁桃体回路の発達様式とストレスが与える影響の解明	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会
	小林桃子	研究代表者	関連候補遺伝子WDR3に着目した統合失調症の女性に特異的な分子病態の解明	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会
	山田美佐	研究代表者	うつ病の病態におけるアストロサイトの機能異常へのリゾホスファチジン酸受容体の関与	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田美佐	研究分担者	「恐怖記憶の消去学習と再固定化に着目したPTSD曝露療法併用薬の開発」内「タンパク発現解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田美佐	研究分担者	「回復しないうつ病への新治療戦略：末梢－中枢双方向からの神経新生促進と神経回路調整」内「難治性うつ病モデル動物に対する再生医療的アプローチの治療効果にかかわる神経新生促進関連遺伝子の発現変動解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	米本直裕	研究分担者	「持続可能な連携による大規模データベースに対する臨床疫学研究への応用」内「大規模データベースの臨床疫学的問題に関する研究」	国際医療研究開発事業 疾病研究分野	国立国際医療研究センター
	米本直裕	研究分担者	「国際レジストリ連携(iCRN)の臨床的意義と医療機関における課題に関する研究」内「国際レジストリ連携(iCRN)の社会医学的側面に関する研究」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
精神疾患病態研究部	橋本亮太	研究代表者	大規模患者リソース及びiPS技術を用いた統合失調症の病態予測のバイオマーカー開発	科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 特設分野研究	日本学術振興会
	橋本亮太	研究分担者	「発達障害に関わる神経生物学的機構の霊長類基盤の解明」内「発達障害のリスク遺伝子の同定」	科学研究費助成事業 特別推進研究	日本学術振興会
	橋本亮太 安田由華	研究分担者	「精神科領域におけるより適切な向精神薬長期使用等の出口戦略の実践に資する研究」内「EGUIDEでの調査研究」(橋本)「実践マニュアルの資料作成と利活用に関する研究」(安田)	厚生労働科学研究費 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)	厚生労働省
	橋本亮太	研究代表者	精神医療分野における治療の質を評価するQIとその向上をもたらす介入技法の開発と実用性の検証	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究分担者	「縦断的MRIデータに基づく成人期気分障害と関連疾患の神経回路の解明」内「気分障害と統合失調症の疾患連続性に関する脳画像等の総合的解析研究」	戦略的国際脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究分担者	統合失調症の眼球運動による診断法と治療法の開発	AMED橋渡し研究戦略的推進プログラム補助事業 大阪大学拠点 研究シーズ (2019年度橋渡し事業シーズA)「戦略的TR推進による自立循環型新規医療創出拠点の実現」	日本医療研究開発機構

精神疾患病態研究部	橋本亮太	研究分担者	「精神疾患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究」内「レジストリの構築（評価項目の品質管理）」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究分担者	「血液メタボローム解析による精神疾患の層別化可能な客観的評価法の確立と治療最適化への応用」内「うつ症状に関する精神疾患横断的な血漿を用いたバイオマーカー開発」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	「双方向トランスレーショナルアプローチによる精神疾患の脳予測性障害機序に関する研究開発」内「眼球運動の状況予測性解析法の研究開発と疾患横断的理解」	革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト	日本医療研究開発機構
	松本純弥	研究代表者	心因性疼痛の治療と認知機能障害の関連	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
睡眠・覚醒障害研究部	栗山健一	主任研究者	社会機能／QOL改善と出口戦略を見据えた睡眠障害のクリニカルパスの開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	栗山健一	主任研究者	睡眠障害センター	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	栗山健一	代表研究者	「健康づくりのための睡眠指針2014」のブラッシュアップ・アップデートを目指した「睡眠の質」の評価及び向上手法確立のための研究	厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省
	栗山健一	研究代表者	大脳深部皮質下白質病変が不眠症病態に及ぼす影響の検討	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	栗山健一	研究分担者	「恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明」内「PTSD治療の生理的指標研究」	科学研究費助成事業（基盤研究A）	日本学術振興会
	栗山健一	研究代表者	遠赤外線加工繊維ベッドパッドが体温および睡眠へ及ぼす影響	受託・共同研究	株式会社PMC
	肥田昌子	研究代表者	概日リズム睡眠覚醒障害の遺伝要因とその発症分子メカニズム	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	北村真吾	研究代表者	子どもの睡眠調節に対する睡眠恒常性機能と概日リズム機能の寄与	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	「子どものメラトニン分泌パターン改善に直結するシンプル・ストラテジーの提案と実践検証」内「睡眠脳波分析、質問紙作成」	科学研究費助成事業（基盤研究B）	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	「地域の自律的発展を目指した睡眠教育プログラムの開発」内「調査、教材・開発プログラムの開発」	科学研究費助成事業（挑戦的研究（萌芽））	日本学術振興会
	北村真吾	研究代表者	睡眠状態を在宅で客観評価するためのリストバンド型活動量・睡眠測定ウェアラブル「VIXOOL（仮型番）」の解析アルゴリズムの作成	受託・共同研究	株式会社ヴェルト
	北村真吾	研究代表者	ガンマ帯域フリッカーバイオレット光曝露による睡眠および認知機能への影響	受託・共同研究	株式会社坪田ラボ
知的・発達障害研究部	北村真吾	研究代表者	睡眠評価オンラインシステムの開発	受託・共同研究	国立大学法人筑波大学、株式会社S' UIMIN
	綾部直子	研究代表者	睡眠・覚醒相後退障害に対する認知行動的アプローチに基づく治療プログラムの構築	科学研究費助成事業（若手研究）	日本学術振興会
	稲垣真澄	研究代表者	「漢字書字障害特異的脳内機能ネットワークの解明と治療法開発」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	稲垣真澄	分担研究者	「自閉スペクトラム症における学習困難の神経科学的解明と介入法の提案」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	稲垣真澄	分担研究者	「適応的歩行障害におかえる神経制御メカニズムの解明」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	稲垣真澄	分担研究者	「発達障害児者の初診待機等の医療的な課題と対応に関する調査」内「発達障害児者の医療的課題の把握と対応策の構築に関する調査研究」	障害者総合福祉推進事業	厚生労働省
知的・発達障害研究部	稲垣真澄	分担研究者	「吃音、トゥレット、場面緘黙の実態把握と支援のための調査研究」内「吃音、トゥレット、場面緘黙の早期発見尺度の検証及び併存症の調査研究」	厚生労働行政推進調査事業	厚生労働省

Ⅳ 令和元年度委託および受託研究課題

知的・発達障害研究部	稲垣真澄	分担研究者	「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」内「衝動性・多動性の診断と治療メニュー作成：ASD併存の特徴」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	加賀佳美	研究代表者	「自閉スペクトラム症における学習困難の神経科学的解明と介入法の提案」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	加賀佳美	分担研究者	「漢字書字障害特異的脳内機能ネットワークの解明と治療法開発」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	加賀佳美	分担研究者	「文化言語の多様な子どもの発達障害症状の実態把握と認知特性に基づく支援法の確立」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	加賀佳美	分担研究者	「ADHDに関わる神経心理学的指標を包括的に取り入れたアセスメントバッテリーの開発」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	加賀佳美	研究代表者	「限局性学習症児におけるワーキングメモリ障害の病態解明とその支援プログラムの開発」	三菱財団 研究助成	三菱財団 研究助成
	加賀佳美	分担研究者	「国立機関・専門家の連携と地域研修の実態調査による発達障害児者支援の効果的な研修の開発」内「（医師に必要な研修プログラムの提案に関する研究）」	障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	加賀佳美	分担研究者	「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」内「うち、実行機能・社会性機能障害の診断と治療メニュー作成：ASD併存の特徴」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	加賀佳美	分担研究者	「てんかんの病態解明と併存症を含めた先駆的・包括的診断と治療方法の開発」内「てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	北 洋輔	研究代表者	「文化言語の多様な子どもの発達障害症状の実態把握と認知特性に基づく支援法の確立」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	北 洋輔	分担研究者	「ヒト適応的歩行における視覚神経基盤の解明」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	北 洋輔	分担研究者	「ADHDに関わる神経心理学的指標を包括的に取り入れたアセスメントバッテリーの開発」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	北 洋輔	分担研究者	「認知神経学に基づく英読字障害学習リハビリテーション開発」	科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）	日本学術振興会
	江頭優佳	研究代表者	「日本人の集団維持戦略と向社会的行動に関連する遺伝子多型の関係の解明」	科学研究費助成事業（若手研究B）	日本学術振興会
	江頭優佳	分担研究者	「漢字書字障害特異的脳内機能ネットワークの解明と治療法開発」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	奥村安寿子	研究代表者	「未就学児における文字認識の解明と読み困難に対する早期支援システムの社会実装」	特別研究員奨励費	日本学術振興会
	奥村安寿子	研究代表者	「音韻意識検査に基づく英語読み書き困難リスク児の検出および介入法開発」	科学研究費助成事業（若手研究）	日本学術振興会
	奥村安寿子	分担研究者	「文化言語の多様な子どもの発達障害症状の実態把握と認知特性に基づく支援法の確立」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	奥村安寿子	分担研究者	「限局性学習症（発達性ディスレクシア）の発達軌跡の解明」	科学研究費助成事業（基盤研究B）	日本学術振興会
地域・司法精神医療研究部	軍司敦子	分担研究者	「漢字書字障害特異的脳内機能ネットワークの解明と治療法開発」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	崎原ことえ	研究代表者	「適応的歩行障害におかえる神経制御メカニズムの解明」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	藤井千代	研究代表者	地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「地域特性に対応した精神保健医療サービスにおける早期相談・介入の方法と実施システム開発についての研究」内「都市近郊アウトリーチモデル」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に係る講師を担える人材の養成及び普及のための研究」内「ピアサポートの専門性を高めるための研修プログラムの実施とモニタリング」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省

地域・司法精神医療研究部	藤井千代	研究分担者	「入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究:コホート研究」内「好事例の収集と分析」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「障害者の地域移行及び地域生活支援のサービスの実態調査及び活用推進のためのガイドライン開発に資する研究」内「調査設計・分析に関する助言」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「精神保健・福祉に関するエビデンスのプラットフォーム構築及び精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関する検討のための研究」内「地域精神保健システムのステークホルダーに対するインタビュー、ニーズの集積研究全体への助言」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「オリジナルソフトによる認知機能リハビリテーションと援助付き雇用を組み合わせた精神障害者の就労や職場定着支援の効果検証と普及方法の開発」内「研究全体のモニタリングおよび助言」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	国立研究開発法人 日本医療研究開発機構
	藤井千代	研究分担者	重症精神障害者を対象としたアウトリーチ支援における認知行動療法の効果検討と普及	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	藤井千代	主任研究者	「重症精神障害者とその家族の効果的な地域生活支援体制に関する基盤的研究」内「アウトリーチによる家族支援の効果に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
	藤井千代	代表研究者	「精神障害にも対応する地域包括ケアシステム」時代に対応する自治体による多職種アウトリーチ支援のあり方に関する研究	在宅医療助成	公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団
	山口創生	研究代表者	入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究:コホート研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「精神保健・福祉に関するエビデンスのプラットフォーム構築及び精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関する検討のための研究」内「プラットフォーム構築および運用への助言」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に係る講師を担える人材の養成及び普及のための研究」内「ピアサポートの専門性を高めるための研修を担う人材育成プログラムに関する評価」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「就労継続支援B型事業所における精神障害者等に対する支援の実態と効果的な支援プログラム開発に関する研究」内「量的研究」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けた障害福祉サービス等の推進に資する研究」内「評価尺度及び障害福祉サービス利用状況に関する分析」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「オリジナルソフトによる認知機能リハビリテーションと援助付き雇用を組み合わせた精神障害者の就労や職場定着支援の効果検証と普及方法の開発」内「援助付き雇用支援のフィデリティモニタリング」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	国立研究開発法人 日本医療研究開発機構
	山口創生	分担研究者	「重症精神障害者とその家族の効果的な地域生活支援体制に関する基盤的研究」内「地域精神科医療・精神保健福祉実践におけるアウトカムについてのコンセンサスの模索」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
	佐藤さやか	研究代表者	精神保健・福祉に関するエビデンスのプラットフォーム構築及び精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関する検討のための研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	佐藤さやか	研究代表者	オリジナルソフトによる認知機能リハビリテーションと援助付き雇用を組み合わせた精神障害者の就労や職場定着支援の効果検証と普及方法の開発	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	国立研究開発法人 日本医療研究開発機構
	佐藤さやか	研究代表者	重症精神障害者を対象としたアウトリーチ支援における認知行動療法の効果検討と普及	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会

Ⅳ 令和元年度委託および受託研究課題

地域・司法精神医療研究部	菊池安希子	研究分担者	「入院中の精神障害者の円滑な早期の地域移行及び地域定着に資する研究:コホート研究」内「地域ケアにおけるリスクアセスメントの評価」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	菊池安希子	分担研究者	「重症精神障害者とその家族の効果的な地域生活支援体制に関する基盤的研究」内「医療観察法通院処遇者における暴力および自傷・自殺の予測因子に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
	菊池安希子	研究分担者	「地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究」内「精神保健医療福祉制度の国際比較」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	河野稔明	研究分担者	「医療観察法の制度対象者の治療・支援体制の整備のための研究」「指定入院医療機関データベースシステムを活用した研究」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	大隅尚広	研究代表者	行動の結果を予測する順モデルの社会的拡張性の検討:責任能力の指標の開発に向けて	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 若手研究	日本学術振興会
	松長麻美	研究分担者	「オリジナルソフトによる認知機能リハビリテーションと援助付き雇用を組み合わせた精神障害者の就労や職場定着支援の効果検証と普及方法の開発」内「RCTデザインによる“Jcores”を用いたCRとSEの組み合わせによる支援の効果検討(医療経済の評価)」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)	国立研究開発法人 日本医療研究開発機構
	小塩靖崇	研究代表者	思春期における睡眠習慣(時間・時間帯・質・環境)が精神機能に与える影響の理解	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 若手研究	日本学術振興会
	小池純子	研究代表者	精神障害者による他害行為の予防に対する精神保健医療福祉体制の整備に関する研究	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 基盤研究(C)	日本学術振興会
	小池純子	研究分担者	出所後に子育てが必要な女子受刑者への刑務所内支援モデルの開発	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
	杉山直也	研究代表者	精神科救急医療における質向上と医療提供体制の最適化に資する研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
自殺総合対策推進センター	橋本理恵子	研究代表者	統合失調症患者の再燃・再発予防に関する精神症状アセスメントツールの開発	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 若手研究(B)	日本学術振興会
	本橋 豊	研究代表者	自殺総合対策の政策輸出によるアジアの自殺問題解決へ向けた支援に関する実証的研究	文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)	文部科学省
	藤田幸司	研究分担者	高齢期におけるライフイベントのメンタルヘルスおよび外出頻度への影響に関する研究	文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)	文部科学省
	藤田幸司	研究分担者	閉じこもりの心理的バリア解消に向けた家族と共に取り組む包括的支援プログラムの開発	文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)	文部科学省
ストレス・災害時こころの情報支援センター	本橋 豊	研究代表者	地域の実情に応じた自殺対策推進のための包括的支援モデルの構築と展開方策に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金(政策科学総合研究事業(政策科学推進研究事業))	厚生労働省
	金 吉晴	研究代表者	A Study on Rights-based Self-learning Tools to Promote Mental Health, Well-being & Resilience after Disasters	日本医療研究開発機構 地球規模保健課題解決推進のための研究事業	日本医療研究開発機構
	金 吉晴	研究分担者	災害対策における地域保健活動推進のための実務担当保健師の能力向上に係わる研修ガイドラインの作成と検証	厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業)	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	複雑性PTSDに対する認知行動療法の有効性の検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
	金 吉晴	研究代表者	恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	金 吉晴	分担研究者	実装科学推進のための基盤構築事業	運I研究基盤経費(横断的研究推進)	厚生労働省
	金 吉晴	実務担当者	令和元年度こころの健康づくり対策事業 PTSD対策専門研修事業	補助金	厚生労働省
	関口 敦	研究代表者	中枢性摂食異常症および中枢神経感作病態を呈する疾患群の脳科学的な病態解明と、エビデンスに基づく患者ケア法の開発	厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患等政策研究事業)	厚生労働省
	関口 敦	研究代表者	シナプス可塑性の個人差評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会

こころのストレス・災害シタ	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究奨励（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	関口 敦	研究分担者	心身症・摂食障害の治療プログラムと臨床マーカーの検証：心身症・摂食障害の脳画像の検討	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	関口 敦	研究代表者	疼痛性障害の新規治療プログラムの脳科学的エビデンスの構築	公益財団法人 中富健康科学振興財団	中富健康科学振興財団
	関口 敦	研究分担者	恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出	日本医療研究開発機構 戦略的国際脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構

精神保健研究所年報No.33（通号No.66）2020

令和2年12月18日発行

編集責任者 金 吉晴

発行所 国立研究開発法人

国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所

〒187-8553

東京都小平市小川東町4-1-1

（非売品） 電話 042（341）2711

印刷：有限会社 太平印刷

©2020, All rights reserved, Printed in Japan